

各時代の希望

下 卷

エレン・G・ホワイト著

福 音 社

THE DESIRE OF AGES
by
ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan

目次

第六章	「あなたの王がおいでになる」	1
第六章	滅ぶべき民	17
第五章	ふたたびきよめられた宮	28
第六章	論争	47
第七章	「パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである」	61
第八章	外庭で	79
第九章	オリブ山上で	91

第七〇章	「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者」	107
第七一章	しもべの中のしもべ	115
第七二章	「わたしを記念するため」	130
第七三章	「あなたがたは心を騒がせないがよい」	143
第七四章	ゲッセマネ	173
第七五章	アンナスの前とカヤパの邸で	191
第七六章	ユダ	215
第七七章	ピラトの法廷で	227
第七八章	カルバリ	257
第七九章	「すべてが終った」	282
第八〇章	ヨセフの墓の中に	293
第八一章	「主はよみがえられた」	309
第八二章	「なぜ泣いているのか」	320
第八三章	エマオへの道	330

第八章	「安かれ」・・・・・・・・・・	339
第八章	もう一度海辺で・・・・・・・・	349
第八章	行つてすべての国民に教えよ・・・・・・・・	361
第八章	「わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ」・・・・・・・・	379
聖句索引		

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」

「あなたの王がおいでになる」

本章はマタイ二一ノ一一、マルコ一ノ一〇、ルカ
一九ノ二九―四四、ヨハネ二一ノ二―九にもとづく。

「シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であつて勝利を得、柔和であつて、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る」(ゼカリヤ書九ノ九)。

キリストがお生まれになる五百年前に、預言者ゼカリヤは、イスラエルの王がおいでになることをこのように予告した。いまこの預言が成就されるのである。長い間王としての栄誉をこぼんでこられたおかたが、いまダビデの王位の約束された後継者として、エルサレムにおいでになるのである。

キリストがエルサレムに勝利の入城をされたのは週の第一日であつた。キリストを見ようとベタニヤに集まつた群衆は、キリストが歓迎を受けられるのを見ようと熱望して、いまそのあとに従つた。過越節を守るために多くの人たちが都へのぼる途中だったので、彼らはイエスについて歩いている群衆に加わつた。自然界の万物もよるこんでいるように見えた。木々は緑につつまれ、その花はかぐわしい香りを空中にただよわせた。新しい生命

とよろこびが人々に生気を与えた。新しい王国の望みがふたたびめばえつつあった。

イエスは、エルサレムに乗り入れるために、ろばと子ろばを引いてくるように、二人の弟子をおつかわしになった。救い主は、誕生の時には、見知らぬ人たちの好意にたよられた。イエスがおやすみになった馬ぶねは借りた休み場所であった。「丘の上の千々の家畜」はイエスのものであるのに(詩篇五〇ノ一〇)、いま彼は、王としてエルサレムに入城するためにお乗りになる家畜を手に入れるのに見知らぬ人の親切にたよられる。しかしこの用事のために弟子たちにお与えになったこまかい指示の中にさえ、ふたたびイエスの神性があらわされる。イエスが予告されたように、「主がお入り用なのです」というたのみはすぐに聞かれた(マタイ二一ノ三)。イエスは、人が乗ったことのない小馬を、ご自分の用にえらばれた。弟子たちは、よろこびいさんと、この家畜の上に自分たちの上着をひろげ、それに主をお乗せした。これまでイエスはいつも徒歩で旅行されたので、弟子たちは、主がいまご自分からろばに乘られることをはじめはふしぎに思った。しかし主がいま首都にはいられ、王であることを宣言し、ご自分の王権を主張されるのだというよろこばしい思いで、彼らの胸は希望に燃えた。使いに行く途中、彼らはこの輝かしい期待をイエスの友人たちに伝えたので、興奮は遠近にひろがり、人々の期待は最高潮に達した。

キリストは、王の入城について、ユダヤ人の慣例に従っておられた。キリストが乗られた動物はイスラエルの王たちが乗った動物であって、預言には、このようにしてメシヤが王国にこられるということが予告されていた。キリストが小馬にお乗りになるやいなや、勝利の叫びが大気をふるわせた。群衆は、キリストをメシヤ、彼らの

王として歓呼した。イエスはいま、以前には決しておゆるしにならなかった敬意をお受けになったので、弟子たちはこのことを、イエスが王位につかれるのを見ることによって自分たちのうれしい望みが実現される証拠として受けとった。群衆は、彼らの解放の時が近づいたことを確信した。彼らは、ローマの軍隊がエルサレムから追われ、イスラエルがもう一度独立国家になるときのことを胸にえがいた。だれもがよろこび、興奮した。人々は先を争ってキリストに敬意をささげた。彼らは、外面的なはなやかさやきらびやかさを示すことはできなかったが、楽しい心からの礼拝を主にささげた。彼らは高価な贈物をささげることはできなかったが、主の道に彼らの上着をひろげて敷物とし、葉のしげったオリーブの枝やしゅろの枝を道にまきちらした。彼らは、勝利の行列を王家の旗でみちびくことはできなかったが、自然界の勝利の象徴であるしゅろの木ひろがった枝を切りとり、それを高らかにうちふって声高く歓呼し、ホサナと叫んだ。

進んで行くうちに、イエスのおいでを聞いて、行列に加わろうと急いでやってきた人たちが群衆はふえつづけた。見物人がひっきりなしに群衆に加わり、「これはどなただ。この騒ぎはいったい何ごとだ」とたずねた。彼らはみなイエスのことを聞いていて、イエスがエルサレムに行かれるものと期待していた。しかしイエスがこれまでご自分を王位につけようとする努力をいっさいゆるされないということを聞いていたので、これがあのイエスであることを知ってすっかり驚いてしまった。わたしの王国はこの世のものではないと宣言しておられたおかたが、いったいどうしてこのようにかわってしまったのかと、彼らはあやしんだ。

彼らの質問は勝利の叫びで沈黙させられる。勝利の叫びは、熱心な群衆によって何度も何度もくりかえされる。



イエスは大ぜいの人たちをしたがえてエルサレムに勝利の入城をされた。木々は緑をよそおい、花はかぐわしい香りを放って、自然もよろこんでいるようにみえた。よろこびが四方にあふれていた。

ずっと向こうにいる人たちも勝利の叫びをあげ、それは周囲の山々や谷にこだまする。するとこんどはエルサレムからやってきた群衆が行列に加わる。過越節に集まった群衆の中から、幾千の人たちがイエスを歓迎するために出かけてくる。彼らはしゅろの枝をうちふり、聖歌をばく発させてイエスにあいさつする。宮の祭司たちは夕べの礼拝を知らせるuppを吹き鳴らす、答える者はほとんどない。役人たちは驚いて、「世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」とお互いに言う(ヨハネ二一九)。

イエスは、ご自分の地上生涯において、それまでこのようなデモンストレーションをおゆるしにならなかった。イエスははっきりと結果を予見しておられた。それはイエスを十字架につけることになるのであった。しかしこのように公然とご自身をあがない主として示されることはイエスのみこころであつた。イエスは墮落した世に対するご自分の使命の最後の仕上げとなる犠牲に人々の注意を引こうと望まれた。人々は過越節を守るためにエルサレムに集まってきたが、小羊の本体であられるイエスが、自発的な行為によつて、ご自身を供え物として聖別された。これにつづく、すべての時代のキリスト教会は、世の罪のためのイエスの死を、深い思想と研究の主題にすることが必要であつた。これに関係のあるひとつひとつの事実が、疑いの余地がないまでに証明されねばならないのであつた。だからいますべての人の目をイエスに向ける必要があつた。イエスの大いなる犠牲に先立ついろいろな出来事は、人々の注意を犠牲そのものにひきつけるようなものでなければならぬ。イエスのエルサレム入城に伴うこのようなデモンストレーションのあとで、すべての人々の目は、イエスの最後の場面への急速な進展を追うのであつた。

この凱旋（がいせん）式に関連した出来事はすべての人々の話題になり、どの人の心にもイエスを思わせるのであった。イエスが十字架につけられたのち、多くの人たちが、イエスの裁判と死に関連してこれらの出来事を思い起こすのであった。彼らは預言を調べるようになり、イエスがメシヤであることをさとののであった。そして全地において、この信仰に改宗する者がふえるのであった。

キリストの地上生涯におけるこの一つの凱旋的場面において、救い主は、天使たちに護衛され、神のラッパに先導されて現われることもおできになった。しかしそのようなデモンストレーションは、イエスの使命の目的に反し、イエスの一生を支配していた原則に反するものであった。イエスはご自分がお受けになったいやしい身分に忠実であられた。世の人々の生命のためにご自分の生命がさげられるまで、イエスは、人性という重荷をお負いにならねばならないのであった。

もしこのよるこびの場面が主の苦難と死の前奏曲にすぎないことを知ったなら、弟子たちにとって生涯の最良の日のように思えたこの日は、暗雲にとざされたであろう。主はご自分の避けられない犠牲についてたびたび彼らにお語りになっていたのであるが、彼らは目の前のよろこばしい勝利によって主の悲しいことばを忘れ、ダビデの位につかれた主の輝かしい統治を待ち望んだ。

行列にはひっきりなしに新しい人たちが加わり、少数の人たちをのぞいて、これに加わった人々はみなその場の靈感を受けてホサナの叫び声を高め、丘から丘へ、谷から谷へこだまを反響させた。「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」と、叫び声はたえまなくあげられた（マタイ

二一ノ九。

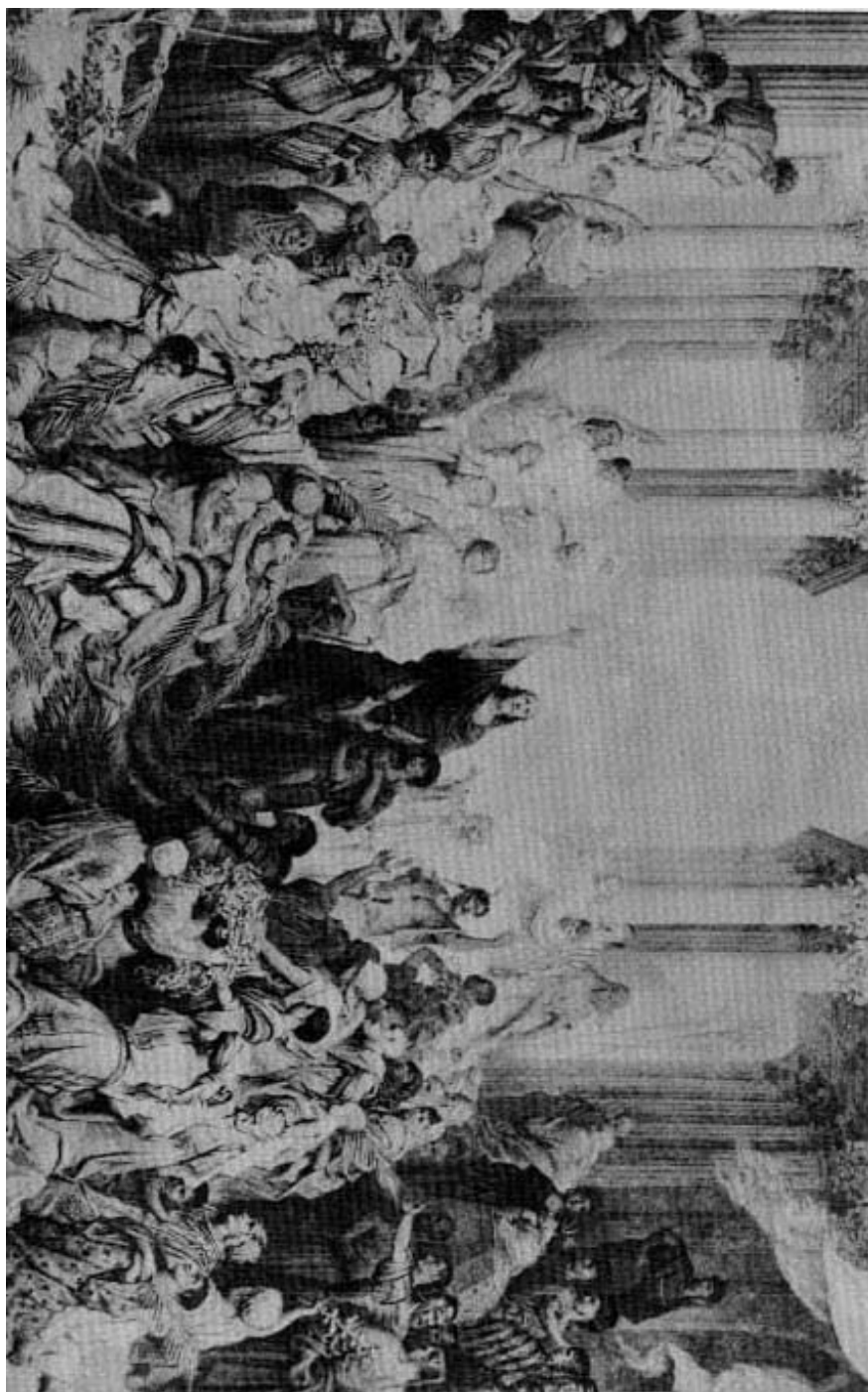
世界はこのような凱旋式をかつて見たことがなかった。それは世の有名な征服者たちの凱旋式のようなものではなかった。そこには、こうした場面の呼び物となる王の武勇を記念する捕虜たちの悲嘆に暮れた行列はなかった。救い主のまわりには、罪人に対する主の愛の働きによる輝かしい戦勝記念となる人たちがいた。主がサタンの権力から救い出された捕虜たちが、彼らの救いについて神を賛美していた。主が視力を回復しておやりになった盲人たちが先頭に立っていた。主が舌を動くようにしておやりになったおしたちが一番大きな声でホサナと叫んだ。主がなおしておやりになった足なえたちがよろこびで足どりも軽く、一番元気よく、しゅろの枝を折って救い主の前でうち振っていた。やもめたちとみなし子たちが自分たちに対するイエスのいつくしみ深いみわざについて、み名をあがめていた。主がきよめておやりになったらい病人たちがそのけがれていない衣を道にひろげ、栄光の王としてイエスに歓呼した。主のみ声によって死の眠りからよびさまされた人たちがその群れの中にいた。墓の中で肉体が腐敗していたラザロが、いますばらしい人間としての力をよろこびながら、救い主の乗っておられる動物をみちびいた。

多くのパリサイ人たちが、この光景を見て、ねたみと敵意に燃え、民衆の人気の流れを変えようとした。彼らは、あらゆる権威をもって、人々を沈黙させようと試みた。しかし彼らの訴えとおどかしは熱心さを増したにすぎなかった。彼らはこの大群衆が、数の力で、イエスを王にすることを恐れた。最後の手段として、彼らは群衆を押しわけて救い主のおられるところへ近づき、非難と脅迫のことばで、「先生、あなたの弟子たちをおしかり

下さい」とイエスに呼びかけた（ルカ一九ノ三九）。彼らは、こんな騒がしいデモンストレーションは不法であり、当局から許可されないだろうと断言した。しかし彼らは、「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」というイエスの答えに沈黙させられた（ルカ一九ノ四〇）。この勝利の光景は、神ご自身がお定めになったものであった。それは預言者によって予告されていて、人間には神の目的をそらす力はなかった。もし人間が神のご計画を実行しなかったら、神はいのちのない石に声を与え、石が賛美の叫びをもってみ子を歓呼したのである。沈黙させられたパリサイ人たちが引きさがると、幾百の人々の声がゼカリヤのことばをとりあげた。「シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であつて勝利を得、柔和であつて、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る」（ゼカリヤ書九ノ九）。

行列が丘のはずれにきて、ちょうど町へ向かつてくだろうとしたとき、イエスが立ちどまれたので、いっしょにいたあおぜいの者たちもみな立ちどまった。彼らの目の前には、いま沈んでいく太陽の光を浴びて輝かしいエルサレムがひろがっていた。みんなの目は宮にひきつけられた。それは堂々たる威厳をそなえて、他のすべてのものの上にそびえ立ち、ただひとりの真の生ける神を民に示すかのように天を指さしているようにみえた。宮は長い間ユダヤ国民の誇りであり、栄光であった。ローマ人もまた宮の壮麗さを誇りにした。ローマ人によって任命された王が、ユダヤ人と協力して宮を再建してこれを飾り、ローマ皇帝が献げ物によって宮を富ませた。宮は、その力と富と壮麗さのゆえに世界の驚異の一つとなっていた。

第 63 章 「あなたの王がおいでになる」



世人はこのような勝利の行進をいまだかつて見たことがなかった。群衆の中には、病気をいやされた人だちや不具をいやされて歩くことができるようになった人だちがいた。

西に傾いた太陽が空を色どって輝かせると、そのまばゆい輝きが宮の純白な大理石の壁を照らし、黄金をかぶせた柱をきらめかせた。イエスとそのあとに従っている者たちが立っている山の頂から見ると、宮は黄金の尖塔をもった巨大な雪の建物のようにみえた。宮の入口には、最もすぐれた芸術家たちによって製作された金銀のぶどうの木があつて、それには緑の葉とたくさんぶどうのふさがついていて、このデザインは、イスラエルを繁栄するぶどうの木として象徴していた。金銀と新鮮な緑とが、すぐれた趣向と精巧な細工と一つになっていた。それは、白く輝く柱に優美にまきつき、光るまきひげが柱頭の金の飾りにまつわりついて、夕日の輝きを受け、天から借りた栄光のように光っていた。

イエスはそのながめにじっと目をそそがれ、大群衆はこの突然の美しい光景にうっとりなつて叫び声を静める。すべての人の目が救い主に向けられ、自分たちの感じている感嘆が主の顔付きにも見られることを期待する。ところが彼らは、感嘆ではなくて、悲しみの暗い影を見る。主の目に涙がたまっており、主のおからだは嵐の前の木のように前後に揺れ、あたかも傷心の奥底からつきあげてくるような苦悩のうめきが主のふるえる唇からもれるのを見て、彼らは驚き、失望する。これはまた天使たちが見ても何という光景であつたことだろう。彼らの愛する主が苦悩の涙をためておられるのである。勝利の叫びをあげ、しゅろの枝をうちふりながら主につき従って栄光の都へ行き、主はいまにも統治されるのだと勝手な望みによるこんでいた群衆にとって、これは何という光景だつたことだろう。イエスはラザロの墓で泣かれたが、それは人間の悲しみに対する神の同情であつた。しかしこの突然の悲しみは、偉大な勝利の合唱のさなかにおける悲嘆の調べのようであつた。すべての人々が敬意を

ささげているよろこびの場面のさなかで、イスラエルの王が涙を流しておられる。それはよろこびの無言の涙ではなく、おさえきれない苦悩の涙とうめきであった。群衆は突然暗い気持ちになった。歓呼の叫び声が沈黙した。多くの者が理解のできない悲しみに同情して泣いた。

イエスの涙は、ご自分の苦難を予想されたためではなかった。イエスのすぐ前にはゲッセマネがあつて、そこではまもなく非常な暗黒の恐怖が主をおおうのであった。羊の門も見えたが、それは幾世紀もの間いけにえとしてささげられる動物がそこを通って行った門であった。これらのすべての献げ物は、世の罪のためのいけにえであられるイエスを本体としてさし示していたが、その大いなる本体であられるイエスのために、まもなくこの門が開かれるのであった。近くにカルバリーがあつたが、それは迫りつつあるイエスの苦悶の場所となるのであった。しかし救い主が泣かれ、心の苦しみにうめき声を出されたのは、主がご自分の残酷な死を思い出させるこうしたものをごらんになったからではなかった。イエスの悲しみは決して利己的な悲しみではなかった。ご自身の苦悩についての思いは、主の高貴な、自己犠牲的な魂をおびやかさなかった。イエスの心を刺し通したのは、エルサレムの光景であつた。神のみ子をこばみ、その愛をあざけり、その大いなる奇跡を見ても罪を自覚しようとなしないで、主の生命をとろうとしているエルサレムであつた。あがない主をこばむ罪のうちにあるエルサレムの現状と、エルサレムが、その傷をいやすことのできるただひとりのおかたであるイエスを受け入れていたらどうなっていたかということ、イエスはご存じであつた。主は、エルサレムを救うためにおいでになったのである。どうしてこの都をあきらめることができよう。

イスラエルは恵まれた民であった。神は彼らの宮をご自分の住居とされた。それは「うるわしく、全地の喜び」であった（詩篇四八ノ二）。父親がひとり子に対するようなキリストの守りとやさしい愛について一千年以上の記録がそこにあった。この宮の中で、預言者たちは厳粛な警告を語った。そこでは、燃える香炉が揺れ、香煙が礼拝者の祈りにまじって、神のみもとへのほって行つた。そこでは、キリストの血を象徴して、動物の血が流された。そこでは、エホバが贖罪所の上でご自身の栄光をあらわされた。そこでは、祭司たちが職務をとり行ない、長年にわたってきらびやかな象徴と儀式が続けられた。しかしこうしたことのすべては終わらねばならない。

イエスは、これまでたびたび病める者と苦しむ者とを祝福されたそのみ手をあげ、滅ぶべき運命に定められた都の方を指さして、とだえがちな悲しい口調で、「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……」と叫ばれた（ルカ一九ノ四二）。救い主は、ここでことばをきり、もしエルサレムが、神が与えようと望まれた助け、すなわち神の愛するみ子を受け入れていたら、どういう状態になっていたかについては何も言われなかった。もしエルサレムが知る特権のあった事गरらを知って、天の神が送られた光に心をとめていたら、それは輝かしい繁栄のうちに、国々の女王として、神から与えられた豊かな力をもつて続いていたかもしれない。武装した兵士たちがエルサレムの門に立つことも、ローマの旗が城壁にひるがえることもなかったであろう。もしエルサレムが救い主を受け入れていたら、エルサレムのものとなったかもしれない輝かしい運命が、神のみ子の前に浮かんた。エルサレムは、救い主を通して、その悲しむべき病気をいやされ、束縛から解放されて、地上の偉大な首都として固く立ったかもしれないということを、イエスはごらんになった。エルサレムの城壁から平

和のはとがすべての国々に飛んで行ったであろう。エルサレムは、世界の栄光の王冠となったであろう。

しかしエルサレムがそうになっていたかもしれない輝かしい光景は、救い主の視界から消える。主は、エルサレムがいま□ーマのくびきの下にあって、神の不興を招き、神の報いの刑罰を受ける運命にあることに気がつかれる。主は切れた嘆きの糸をとりあげられる。「しかし、それは今おまえの目に隠されている。いつかは、敵が周囲に壘を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」(ルカ一九ノ四二―四四)。

キリストは、エルサレムをその民とともに救うためにおいでになった。しかしパリサイ人の誇り、偽善、ねたみ、敵意が主の目的の達成をさまたげていた。イエスはこの滅ぶべき運命に定められた都をおとずれる恐るべき報復を知っておられた。エルサレムが軍隊にとりかこまれ、包囲された住民が飢えと死に追いこまれ、母親たちが自分自身の子供たちの死体を食べ、親も子も互いに最後の一口の食物を奪い合い、激しい飢えの苦しみによって自然の愛情が滅ぼされる事をお知りになった。主の救いをこぼんだことにあらわれたユダヤ人の頑固さは、侵入軍への降伏をこぼよようになることを、イエスはごらんになった。イエスは、ご自分があげられるカルバリーに、十字架が林の木々のようにたくさん立つのをごらんになった。主は、あわれな住民が拷問台や十字架で苦しめられ、美しい場所が荒され、宮が破壊され、その巨大な壁が一つの石もほかの石の上に残されず、都は烟のうにたがやされるのをごらんになった。この恐るべき光景をごらんになって、救い主が苦悩のうちに泣かれたの

は当然である。

それまでエルサレムは、主の保護の下にある子供であつた。やさしい父親がわがままな息子のことを嘆くように、イエスは愛する都について泣かれた。どうしてわたしはあなたをあきらめることができよう。あなたが破壊されるままになるのをどうして見ていられよう。あなたが不義のさかずきを満たすのをそのまましておかねばならないのか。一つの魂は、それにくらべればもうもの世界もとるにたりないものとなるほど価値があるのに、ここに全国民が滅びようとしている。急速に西に沈む太陽が天から姿を消せば、エルサレムの恵みの日は終わるのであつた。行列がオリブ山のはしにたちどまっている間に、エルサレムが悔い改めてもまだ遅すぎないのであつた。恵みの天使はその時まさに翼をたんで、正義と急速にのぞみつつあるさばきに座をゆずるために、黄金の座からおりようとしていた。しかしキリストの大きな愛の心は、ご自分のなさをあざけり、その警告を軽んじ、まさに主の血に手を染めようとしていたエルサレムのためにまだ弁護していた。もしエルサレムが悔い改めさえすれば、まだ手おくれではなかつた。沈んで行く太陽の最後の光が宮と塔と、尖塔のあたりにまだ消えやらないでいるうちに、だれかよい天使がエルサレムを救い主の愛にみちびいて、滅びの運命を避けさせないであろうか。預言者たちを石で打ち、神のみ子をこばみ、その頑固さのために束縛の足かせに身をしばっている美しくそしてけがれた都。その恵みの日はほとんど暮れかけていた。

しかしふたたび神のみたまはエルサレムに語る。日が暮れる前に、キリストについてもう一つのあかしがたてられる。預言に示された過去からの呼び声に応じて、あかしの声があげられる。もしエルサレムがその呼び声を

きくならば、もしエルサレムがその都にはいるうとしておられる救い主を受け入れるならば、エルサレムはまだ救われるのである。

イエスが大群衆とともに都へ近づいておられるという知らせがエルサレムの役人たちにとどいた。しかし彼らには神のみ子を歓迎する気持はない。彼らは群衆を追い払いたいと望みながら、恐る恐るイエスに会いに出かける。ちょうどオリブ山をくだろうとするところで、行列は役人たちにさえぎられる。彼らはこのさわがしいよるこびの理由をたずねる。彼らが、「これは、いったい、どなただろう」とたずねると、弟子たちは靈感に満たされて、その質問に答える。彼らは雄弁な口調で、キリストに関する預言をくりかえす。

アダムはあなたがたに告げるであろう、彼は蛇の頭をくだく女のすえであると。

アブラハムにたずねるならば、彼はあなたがたに告げるであろう、それは「サレムの王メルキゼデク」平和の王であると(創世記一四ノ一八)。

ヤコブは告げるであろう、彼はユダの族のシロであると。

イザヤは告げるであろう、「インマヌエル」「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」であると(イザヤ書七ノ一四、九ノ六)。

エレミヤは告げるであろう、彼はダビデのわかれ、「主はわれわれの正義」と(エレミヤ書二三ノ六)。

ダニエルは告げるであろう、彼はメシヤであると。

ホセアは告げるであろう、「主は万軍の神、その名は主である」と(ホセア書一二ノ五)。

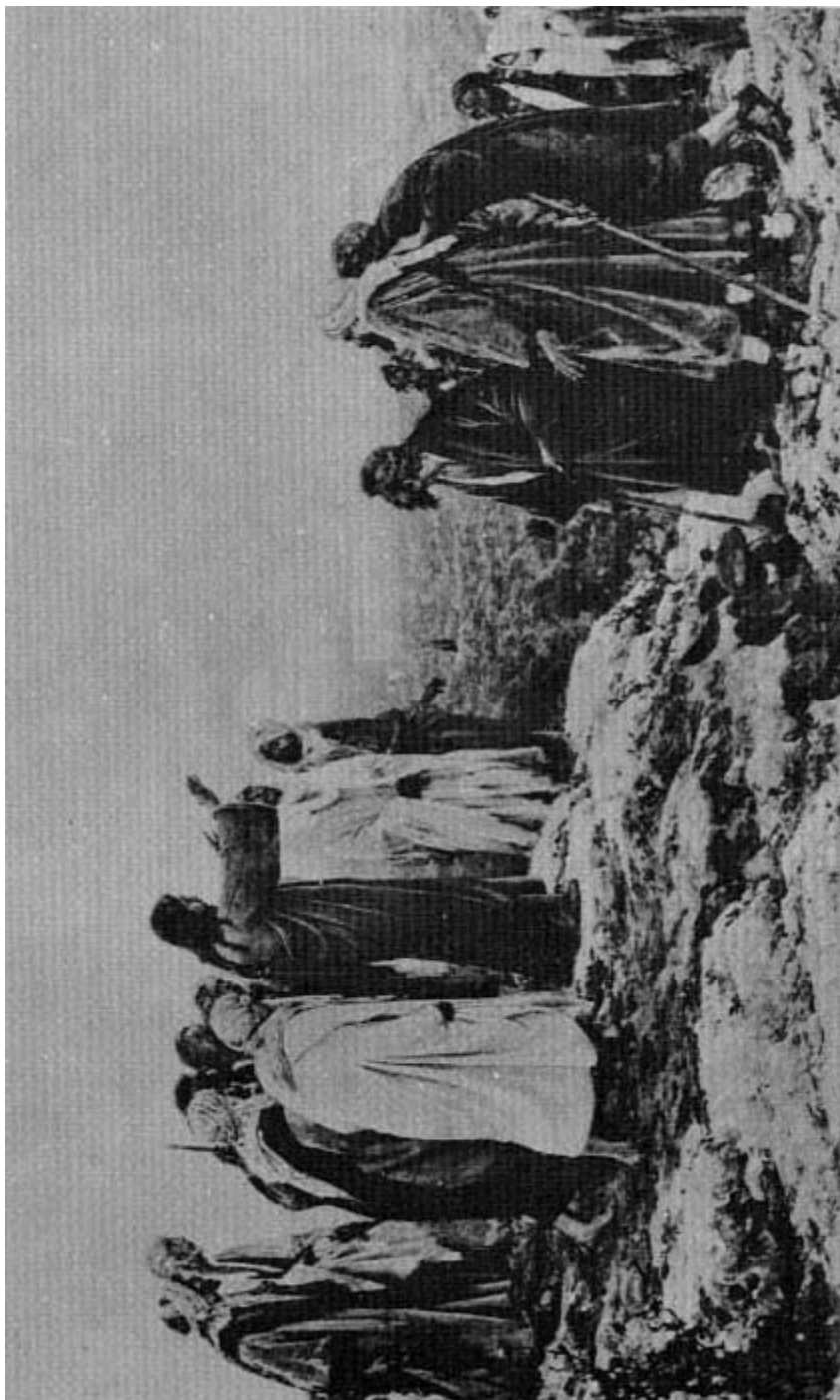
バプテスマのヨハネは告げるであろう、彼は「世の罪を取り除く神の小羊」であると(ヨハネ一ノ二九)。大いなる神エホバはそのみ座から宣告された、「これはわたしの愛する子」であると(マタイ三ノ一七)。キリストの弟子であるわれわれは宣言する、これはイエス、メシヤ、いのちの君、世の救い主であると。しかも暗黒の勢力の君でさえ、イエスをみとめて言う、「あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」と(マルコ一ノ二四)。

滅ぶべき民

本章はマルコ一四、二〇、二一、マタイ
二一、二七、二九にもとづく

キリストの凱旋的なエルサレム入城は、天使たちの勝ち歌と聖徒たちのよろこびのうちにキリストが力と栄光をもって天の雲に乗ってこられるありさまをかすかに予表していた。キリストが祭司たちとパリサイ人たちに、『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』とおまえたちが言う時までは、今後ふたたび、わたしに会うことはないであろう』と言われたことは、その時成就するのである(マタイ二三ノ三九)。ゼカリヤは、預言のまぼろしの中で、その最後の勝利の日を示された。彼はキリストの初臨のときに主をこぼんだ人々の滅びを見た。「彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういごのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ」(ゼカリヤ書一一ノ一〇)。キリストは、都をこらんになってこの町のために泣かれた時、この場面を予見された。エルサレムの一時的滅亡のうちに、キリストは、神のみ子の血について罪のある私たちの最後の滅亡をこらんになった。

弟子たちは、キリストに対するユダヤ人の憎しみを知っていたが、しかしそれがどういふことになるかはまだ



何度も何度もイエスはエルサレムとその指導者たちに悔い改めを呼びかけられたが、拒絶されただけであった。彼らは神の愛をこぼんで自ら破滅した。

わかっていなかった。彼らはまだイスラエルの真の状態を理解してもいなければ、エルサレムにのぞもうとしている刑罰についてもわかっていなかった。このことを、キリストは、意味の深い実物教訓によって彼らにお示しになった。

エルサレムに対する最後の訴えはむだであった。祭司たちと役人たちは、「これは、いったい、どなただろう」という質問に対する答として、過去の預言の声が群衆によってくりかえされるのを聞いたが、彼らはそれを神の声として受けなかった。怒りと驚きのうちに、彼らは人々を沈黙させようとした。群衆の中にはローマの役人たちがいたので、キリストの反対者たちは役人たちに向かって、イエスは反乱の指導者であると告発した。反対者たちはキリストが宮を占領し、王としてエルサレムを統治しようとしておられると主張した。

しかしイエスが、自分はこの世の支配権を確立するためにきたのではないと、ふたたび断言されたとき、イエスの落ちついたお声は、一瞬間、騒々しい群衆をだまらせた。イエスはまもなく天父のもとにのぼられ、イエスを非難する者たちは、主が栄光のうちにふたたびこられるまでもう主を見ることはないのである。そのときになって主をみとめても、彼らの救いはすでに手遅れである。そうしたことばを、イエスは悲しみとふしぎな力をもってお語りになった。ローマ人の役人たちは威圧されて沈黙した。彼らは天来の感化力というものを知らなかったが、これまでかつてなかったほど心を動かされた。イエスの落ち着いた、おごそかな顔から、彼らは愛と慈悲と静かな威厳とを読みとった。彼らは、理解できない同情に心を動かされた。イエスを捕えるどころか、彼らはむしろイエスに敬意をささげたかった。彼らは、祭司たちと役人たちに向かって、騒ぎをひき起したのはあなた

たちだと非難した。これらの指導者たちは、敗北してくやしがり、その不満を民衆に向け、怒って互いに議論し合った。

その間にイエスは、気づかれないで、宮へはいつて行かれた。そこではすべてが静かであった。オリブ山の騒ぎに人々はみな行ってしまったからである。しばらくの間イエスは宮にいて、悲しそうな目つきで宮をながめておられた。それから弟子たちといっしょに退いて、ベタニヤへ帰られた。人々がイエスを王座につけるためにさがし求めたとき、イエスはみつからなかった。

一晩じゅうイエスは祈りのうちに過ごされ、朝になってふたたび宮にこられた。途中、イエスはいちじくの園を通りかかられた。主はおながすいておられたので、「葉の茂ったいちじくの木を遠くからごらんになって、その木に何かありはしないかと近寄られたが、葉のほかは何も見当らなかった。いちじくの季節でなかったからである」(マルコ一ノ二三)。

その時は、ある場所を除けば、いちじくの熟する季節ではなかった。エルサレム周辺の高地では、当然「いちじくの季節でなかった。」しかしイエスがおいでになった果樹園の中では、一本の木がほかのすべての木よりも早いようにみえた。その木はすでに葉におおわれていた。葉が開く前に実がみえるのがいちじくの木の性質である。だから葉の茂ったこの木にはよく熟した実がありそうにみえた。しかしそれは見かけ倒しであった。木の枝を一番下からてっぺんの小枝までさがしても、「葉のほかは何も見当らなかった」(マルコ一ノ二三)。見かけだけたくさん葉が茂っていたが、それ以外には何もなかった。

キリストは、その木が枯れるようにというのろいのことを出された。「今から後いつまでも、おまえの實を食べる者がないように」と主は言われた(マルコ一ノ一四)。次の朝、救い主が弟子たちともう一度都へ行かれる途中、枯れた枝としおれた葉が彼らの注意をひいた。ペテロが、「先生、ごらんなさい。あなたがのろわれたいちじくが枯れています」と言った(マルコ一ノ二一)。

キリストがいちじくの木をのろわれた行為は、弟子たちを驚かせた。それはキリストの方法やみわざにふさわしくないものと思えた。これまでしばしば彼らは、わたしは世を罪に定めるためではなくわたしを通して世が救われるためにきたのだと、キリストが宣言されるのをきいた。彼らは、「人の子は人の生命を滅ぼすためではなく、これを救うためにきたのである」と言われたキリストのことを思い出した(ルカ九ノ五六、英語訳聖書)。

これまでキリストのふしぎなみわざは、決して滅ぼすためではなく、回復するためになされた。弟子たちは回復してくださるおかた、いやしてくださるおかたとしてしかキリストを知らなかった。しかしこの行為だけは目立っていた。その目的は何であろうと、彼らはたずねた。

「神はいつくしみを喜ばれ」「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない」(ミカ書七ノ一八、エゼキエル書三三ノ一一)。神にとって滅ぼすわざと刑罰の宣言とは、「異なつたものである」(イザヤ書二八ノ二一)。しかし神が未来の幕を開いて、罪の行為の結果を人々に示されるのは、あわれみと愛によるのである。

いちじくの木がのろわれたのは、実地に示された譬であつた。キリストの面前で、見せかけの葉をひらひらさ

せている実のならないこの木は、ユダヤ国民の象徴であつた。救い主は、イスラエル滅亡の原因と必然性を弟子たちにはつきり示したいと望まれた。この目的のために、主はこの木に道徳的性質をさづけ、これを天来の真理の解説者とされた。ユダヤ人はほかのすべての国民とは異なっていて、神への忠誠を公言していた。彼らは神から特別に恵まれ、ほかのどんな民にもまさる義を主張していた。しかし彼らは世俗への愛着と利欲によって墮落していた。彼らは知識を誇つたが、神のご要求については無知であり、偽善に満ちていた。実のならないいちじくの木のように、彼らはみせかけの枝を高くひろげて外観を誇り、目に美しかったが、「葉のほかは何も」生じなかつた(マルコ一ノ二三)。ユダヤ人の宗教は、壮麗な神殿、その聖なる祭壇、帽子をかぶつた祭司たちと印象的な儀式があつて、外観はまことに美しかったが、謙遜、愛、慈悲に欠けていた。

いちじくの園の木には全部実がなかつた。しかし葉のない木は期待をいだかせず、したがって失望を与えなかつた。このような木によって異邦人が象徴されていた。彼らはユダヤ人と同じように信心に欠けていた。しかし彼らは神に仕えるとは告白していなかつた。彼らはみせかけの善を誇っていなかつた。彼らは神のみわざと道がわからなかつた。彼らにとって、いちじくの実のなる時はまだきていなかつた。彼らは、光と望みが与えられる日をまだ待っていた。ユダヤ人は、彼らよりも大きな祝福を神から受けていたので、そうした賜物の悪用に責任があつた。ユダヤ人が自慢していた特権は彼らの不義を増しただけであつた。

イエスは、おなががすいて、食物をみつけるためにいちじくの木のところへこられたのだった。同様に主は、イスラエル人の中に義の実をみつけようと熱望して、彼らのところにこられたのであつた。主は彼らが世の祝福

のために実をむすぶように、惜しげもなく賜物を彼らにお与えになった。あらゆる機会と特権が彼らに与えられたが、こんどは主が、ご自分の恵みの働きに、彼らの共鳴と協力とを求められた。主は彼らのうちに自己犠牲、同情、神への熱意、同胞の救いに対する魂の底からの熱意を見たいと望まれた。もし彼らが神の律法を守っていたら、彼らはキリストと同じに無我の働きをしたのである。しかし神と人に対する愛は、誇りと自己満足によっておおわれていた。彼らは人に奉仕することをこばんで自らの上に滅びを招いた。彼らは、神が彼らに委託された真理の宝を世に与えなかった。実のなっていないいちじくの木を通して、彼らは自分たちの罪とその刑罰とを読みとることができたはずである。救い主ののろいの下にしおれ、枯れしなびて立ち、根のかわいたこのいちじくの木は、神の恵みが取り去られた時にユダヤ民族がどうなるかを示していた。祝福を与えようとしなかったために、彼らはもはや祝福を受けられないのであった。「イスラエルよ、あなたはあなたを滅ぼした」と主は言われる(ホセア書一三ノ九英語訳)。

この警告はどの時代にもあてはまる。キリストがご自分の力でつくられた木をのろわれたこの行為は、すべての教会とすべてのクリスチャンにとって一つの警告である。人に奉仕しないならば、だれも神の律法を生活に実行しているとはいえない。ところがキリストのあわれみ深い、無我の生活を実行していない人が多い。自分はいっぱなクリスチャンであると考えている人々が、神に奉仕することがどんなことであるかをわかっていない。彼らは自分自身をよるこぼせるために計画し、学ぶ。彼らは自分自身に関してのみ行動する。時間は自分の利益になるときだけ値うちがある。生活のすべての点において、これが彼らの目的である。人のためではなく、自分自

身のために、彼らは奉仕するのである。神は、無我の奉仕を行なわねばならない世界に住まわせるために、彼らをつくられた。神は、彼らがあらゆる方法で同胞を助けるように計画された。しかし自我があまりに大きいために、彼らはほかのものは何も見ることができない。彼らは人間と接触していない。このように自我のために生きる者は、すべてがみせかけだけで実のならないいちじくの木と同じである。彼らは礼拝の形式を守っているが、悔い改めもなければ信仰もない。□先では神の律法を敬っているが、服従が欠けている。彼らは□では言うが、行なわない。いちじくの木に対する宣告の中に、キリストは、このようなおなしのいみせかけがキリストの御目にどんなに憎むべきものであるかを実際に示しておられる。神に仕えると告白しながら神のみ栄えのために実をおすばない人間よりは、公然たる罪人の方がまだ罪が軽いということをキリストは宣言しておられる。

キリストのエルサレム訪問の前に語られたいちじくの木は、実のならない木をのろうことによって教えられた教訓と直接に関係があった。譬の中の実のならない木について園丁はこう懇願した、「ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから。それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」(ルカ二三ノ八、九)。実をおすばない木にもっと手入れを施すことになった。これにあらゆる利点を与えることになった。しかしそれでも実がならなかったら、どんなこともそれを破滅から救うことはできない。この譬の中には、園丁の働きの結果は予告されなかった。それはキリストがこのことを語られた人々の態度にかかっていた。彼らは実のならない木によって象徴されていた。彼らの運命を決定するのは彼ら自身であった。天の神がお与えになることのできるあらゆる利点が彼らに与えられたが、

彼らは増し加えられた祝福から益を受けなかった。その結果は、実のならないいちじくの木をのろわれたキリストの行為によって示された。彼らは自分自身の破滅を決定したのであった。

一千年以上にわたってユダヤ国民は神の恵みを悪用し、神の刑罰を招いた。彼らは神の警告をこぼみ、その預言者たちを殺した。キリストの時代の人々も同じ道に歩むことによって、こうした罪に責任があった。この世代の不義は、その時の恵みと警告をこぼむことにあった。幾世紀にわたってこの国民が作ってきた足かせを、キリストの時代の民は自らの身にむすびつけつつあった。

どの時代にも、光と特権の日、すなわち神と和解する恩恵の時が人々に与えられている。しかしこの恵みには限度がある。何年間人々に訴えても、恵みは軽んじられ、こぼまれるかも知れない。しかし恵みが最後の訴えをする時が来る。心はかたくなになって、神のみたまに答えなくなる。すると、人をひきつけるやさしいみ声もはや罪人の心に訴えなくなり、譴責と警告はやむ。

その日がエルサレムにきていた。イエスは滅ぶべき都のために苦しんで泣かれたが、エルサレムを救うことがあできにならなかった。主はありとあらゆる手段をつくされた。神のみたまの警告をこぼむことによって、イスラエルは、唯一の助けの方法をこぼんだ。彼らを救うことができる力はほかになかった。

ユダヤ国民は、限らない愛の神の訴えをあざける各時代の人々を象徴していた。キリストがエルサレムについて泣かれた時の涙は、すべての時代の罪のためであった。神の聖霊の譴責と警告をこぼむ者は、イスラエルに宣告された刑罰のうちに、自分自身の罪の宣告を読むことができる。

いまの世代に、不信のユダヤ人と同じ道を歩んでいる者が多い。彼らは神の力のあらわれを目に見た。聖霊は彼らの心に語った。しかし彼らは不信と抵抗をあくまでもやめない。神は彼らに警告と譴責を送られるが、彼らは自分の誤りを告白したがないで、神の使命と使者をこばむ。彼らの回復のために神が用いられる方法までが、彼らにとってはつまずきの石となる。

神の預言者たちは、かかれた罪を明るみに出すので、背信のイスラエルから憎まれた。預言者エリヤは、アハブ王の秘密の不義を忠実に責めたので、彼はアハブ王から敵とみなされた。同様に、今日キリストのしもべ、すなわち罪を責める者は、嘲笑と拒絶に出会う。聖書の真理、すなわちキリストの宗教は、道徳的不純という強い風潮にさからって戦う。今日、人々の心の中の偏見は、キリストの時代よりも強い。キリストは人々の期待を實現されなかった。主の生活は彼らの罪にとって一つの譴責であつたので、彼らは主をこばんだ。そのようにいまも、神のみことばの真理は人々の習慣や生来の傾向と調和しないので、幾千の人々がその光をこばむ。サタンにそそのかされる人々は神のみことばに疑いを投げかけ、独自の判断を働かせることをえらぶ。彼らは光よりも暗黒をえらぶが、彼らは自分の魂の危険をかけてそうするのである。キリストのみことばのあらさがしをした者たちは、あらさがしのもとをますます多く発見し、ついには真理でありいのちであるおからだから離れて行った。今日も同様である。神は、肉の心が神の真理にさからって生じさせる障害の一つ一つを取り除こうとは言っておられない。暗黒を照らすとうとい光をこばむ者には、神のみことばの神秘は永遠に神秘である。真理は彼らの目からかくされている。彼らはめくらのままに歩むので、目の前にある滅びを知らない。

キリストは、オリブ山の高いところから、世界と各時代を見渡された。彼のみことばは神の恵みの訴えを軽んじるすべての魂にあてはまる。キリストの愛をあざける者よ、主はきょうあなたに語られる。平和をもたらす道を知っているべき者は「あなた」である(ルカ一九ノ四二参照)。キリストはあなたのために涙を流しておられるのに、あなたは自分自身のために流す涙がない。パリサイ人たちを破滅させたあの致命的な頑固な心はすでにあなたのうちにあらわれている。神の恵みの一つ一つの証拠、天来の光の一すじ一すじは、魂をとがして従わせるか、絶望的な頑迷さを一層固くするかのどちらかである。

キリストは、エルサレムがいつまでも頑固に悔い改めないことを予見された。しかしすべての不義、しりぞけられたあわれみのすべての結果は、エルサレム自身の門口にあった。同じ道を歩むすべての魂にとっても同様である。主はこう宣告しておられる。「イスラエルよ、あなたはあなたを滅ぼす」。「地よ、聞け。見よ、わたしはこの民に災をくだす。それは彼らのたくらみの実である。彼らがわたしの言葉に気をつけず、わたしのおきてを捨てたからである」(ホセア書一三ノ九英訳、エレミヤ書六ノ一九)。

第 65 章

ふたたびきよめられた宮

本章はマタイ二一ノ二一―二六、二三―四六、マルコ一
ノ五一―九、二七―三二、一二ノ一―二、ルカ一九ノ
四五―四八、二〇ノ一―一九にもとづく

キリストは、公生涯の始めに、けがれた商売によつて宮をけがしていた者たちを宮から追い出された。そのきびしい、威厳のある態度はずい商人たちの心に恐怖を与えた。公生涯のおわりに、主はもう一度宮にこられて、そこが前と同じようにけがされているのをごらんになった。事態は前よりもひどかった。宮の外庭は広い家畜置場のようであつた。動物の鳴き声と貨幣のかん高い音に商人たちの怒った口論の声がまじり、その中に聖職者たちの声がきかれた。宮の当局者たちが自ら売り買いと金銭の両替をやつていた。彼らはまったく利欲に動かされていたので、神の御目にはどろぼうとかわらなかつた。

祭司たちと役人たちは、自分たちが果たさねばならない厳肅な任務にすこしも気づいていなかった。過越節と仮庵の祭のたびに、幾千の動物が殺され、その血が祭司たちの手によつて祭壇にそそがれた。ユダヤ人は血をささげることに慣れてしまつて、動物の血をこのように流さねばならないのは罪のためであるという事実をほとんど忘れていた。彼らは、それが神のいとし子の血を予表するものであつて、それは世の人々のいのちのために流さ

れるのだということ、人はいけにえをささげることによって、十字架につけられた救い主に心を向けるのであるということをもとめていなかった。

イエスは、けがれのない犠牲の動物をgoranになって、ユダヤ人がこうした大きな集会を流血と残酷の場としているのをgoranになった。へりくだって罪を悔い改めることをしないで、彼らは、心のこもらない奉仕によって神をあがめることができたかのように、動物のいけにえの数を増していた。祭司たちと役人たちは、利己心と貪欲心のために心がたくなっていた。彼らは、神の子羊イエスをさし示している象徴さえ、金もつけの手段としていた。こうして、人々の目の前で、犠牲制度の神聖さは大部分失われていた。イエスの憤激がわき起こった。イエスは、もうすぐ世の罪のために流されるご自分の血が、たえず流されている動物の血と同じように、祭司たちと長老たちからすこしも理解されないことをご存じであった。

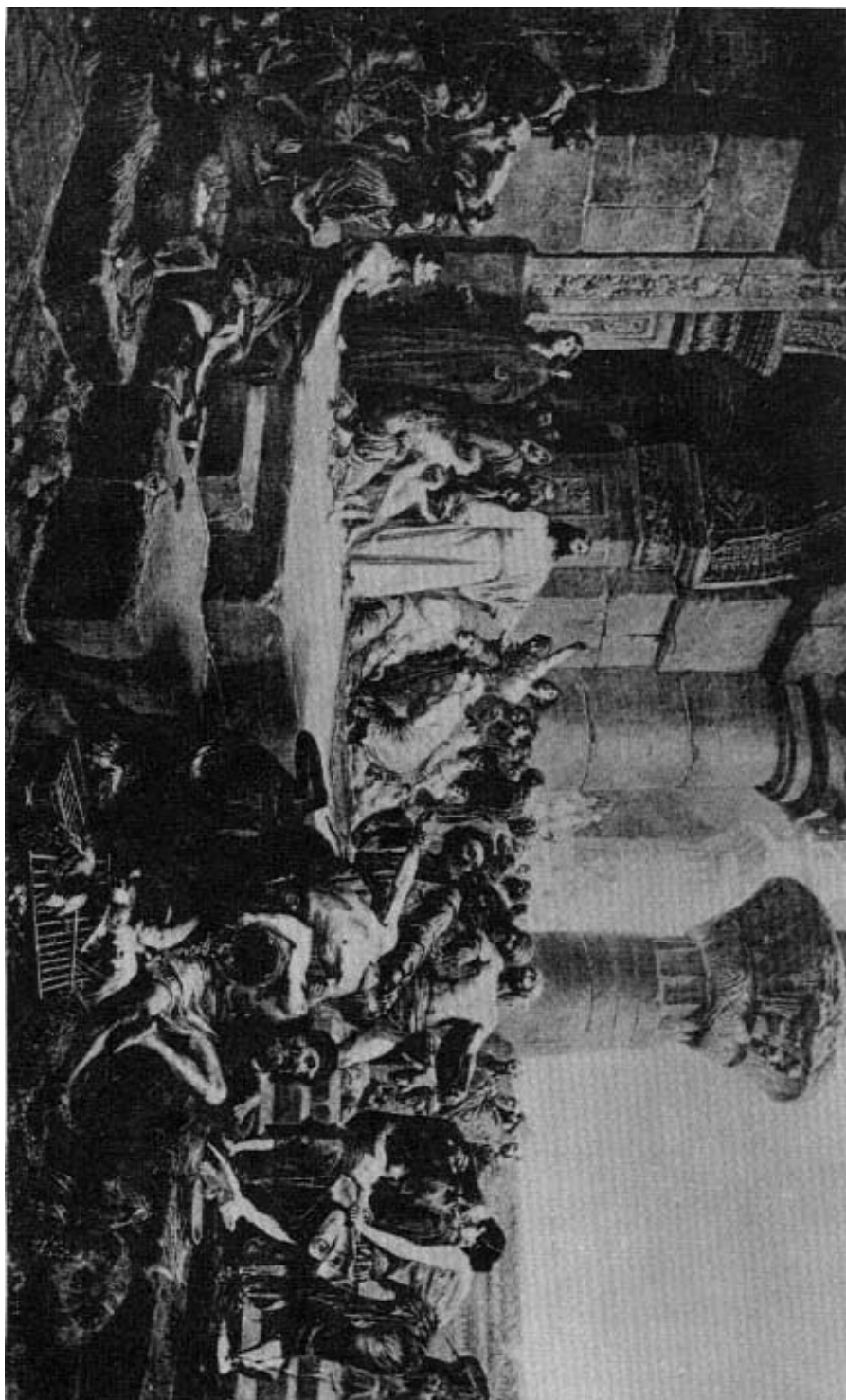
こうした習慣に対して、キリストは預言者たちを通して語っておられた。サムエルは、「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる」と言った(サムエル記上一五ノ二二)。またイザヤは、預言のまぼろしの中でユダヤ人の背信を見て、ソドムとゴモラの統治者としての彼らに告げた、「あなたがたソドムのつかさたちよ、主の言葉を聞け。あなたがたゴモラの民よ、われわれの神の教に耳を傾けよ。主は言われる、『あなたがたがささげる多くの犠牲は、わたしになんの益があるか。わたしは雄羊の燔祭と、肥えた獣の脂肪とに飽いている。わたしは雄牛あるいは小羊、あるいは雄やぎの血を喜ばない。あなたがたは、わたしにまみえようとして来るが、だれが、わたしの庭を

踏み荒すことを求めたか」(イザヤ書一ノ〇―一二)。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ書一ノ一六、一七)。

こうした預言を自らお与えになったキリストが、いま最後にもう一度この警告をくり返された。預言の成就として、民は、イエスをイスラエルの王として宣言していた。イエスは彼らの敬意を受け、王位を受けられた。王としてイエスは行動されなければならない。主は墮落した祭司制度を改革しようとするご自分の努力がむだであることを知っておられた。それにもかかわらず、主の働きはなされなければならない。信じない民に、主の天来の使命について証拠を与えねばならない。

ふたたびイエスの鋭い視線がけがされた宮の庭にそがれた。すべての目がイエスの方へ向けられた。祭司も役人も、パリサイ人も異邦人も、天の王の威厳をもって目の前に立つておられるイエスを驚きとおそれの念をもつて見た。神性が人性を通してひらめき、キリストは、これまでかつてあらわされたことのなかった威厳と栄光を帯びられた。主の一番近くに立っていた人たちは、できるだけ群衆の方へ遠ざかった。少数の弟子たちのほかには、イエスはひとりで立つておられた。あらゆる音がしずまった。深い沈黙は耐えがたいように思われた。キリストは、すさまじい嵐のように民をゆすぶる力をもって語られた、『わたしの家は、すべての国民の祈の家となえらるべきである』と書いてあるではないか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巢にしまった」(マルコ一ノ一七)。イエスの声はラッパのように宮じゅうに響きわたった。主のみ顔の不興は焼きつくす火の

ふたたびイエスはさし通すような眼でけがされた宮の庭を見わたされた。どの人の眼もイエスに向けられた。祭司たちと役人たちは、驚き恐れて救い主を見あげた。



ようにみえた。權威をもって、主は、「これらのものを持って、ここから出て行け」と命じられた（ヨハネ二ノ一六）。

三年前に、宮の役人たちは、イエスの命令に逃げ出して恥をかいた。それ以来彼らは、自分たちが恐れを感じたことと、ただひとりのいやしい人間に無条件に従ったことをふしぎに思っていた。こんな不面目な屈服をふたたびくりかえしてはならないと彼らは思っていた。ところが彼らは、今度は前よりももっと恐ろしくなり、もつとあわててイエスの命令に従ったのである。イエスの權威を疑う者はだれもなかった。祭司たちと商人たちは家畜を追いつてながら、イエスの前から逃げ出した。

宮から逃げる途中、彼らは、大医師イエスをたずねながら病人を連れてきた一群の人たちに出会った。逃げて行く人たちから話を聞いて、中には引き返す者たちもいた。彼らは、祭司たちと役人たちをひとりで目の前から追い払われたほどの力のあるおかたに会ったのがこわかった。しかし大ぜいの者たちが彼らの唯一の望みであるイエスのもとに行こうと熱望して、あわただしく逃げて行く群衆の中を押し進んだ。群衆が宮から逃げ出したあとには、まだ多くの者が残っていた。この人たちと新しくやってきた人たちがいっしょになり、宮の庭はもう一度病人や死にかけている人たちでいっぱいになった。そこでもう一度イエスはこれらの人々に奉仕された。しばらくして、祭司たちと役人たちは思いきつて宮へもどってきた。あわてふためいた気持ちがあつち落ちついてくると、彼らはイエスが次にどんな行動をとられるかを知りたいという思いにとりつかれた。彼らはきつとイエスがダビデの位につかれるのだと思った。そつと宮へもどつてくると、彼らは、男や女や子供たちが神を賛美

している声を聞いた。中へはいってみて、彼らは驚くべき光景の前にぼうぜんと立ちすくんだ。彼らは、病人がいやされ、盲人が視力を回復し、つんぼがきこえるようになり、足なえがよろこびにおどりあがっているのを見た。子供たちがまっさきによるこんでいた。イエスが彼らの病気をいやされたのである。主は、彼らを両腕にいだき、彼らの感謝と愛情の接吻をお受けになった。子供たちの中には、人々に教えておられるイエスの胸によりかかって眠っている者もあった。いまよろこびの声をあげて、子供たちは主を賛美した。彼らは前の日のホサナをくりかえし、救い主の前に意気揚々としゅろの枝をふった。「主のみ名によつてはいる者はさいわいである。」

「見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であつて勝利を得」、「ダビデの子に、ホサナ」と叫ぶ彼らの歡呼に、宮は反響をくりかえした(詩篇一一八ノ二六、ゼカリヤ書九ノ九、マタイ二二ノ九)。

このようなよろこばしい、遠慮のない声の響きは宮の役人たちにとって不快であつた。彼らはこのようなデモンストレーションをやめさせようとしはじめた。そして神の家が子供たちの足とよろこびの叫び声にけがされたと人々に言った。自分たちのことばが人々の心を動かさないことを知ると、役人たちは、キリストに訴えて言った、「『あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか』。イエスは彼らに言われた、『そうだ、聞いている。』

あなたがたは「幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた」とあるのを讀んだことがないのか」(マタイ二二ノ一六)。キリストが王として宣言されるといふことが預言に予告されていたが、このことばは成就しなければならぬ。イスラエルの祭司たちと役人たちが、キリストの栄光を先き触れることをこぼんだので、神は子供たちの心に働いて、彼らをキリストの証人とされた。もし子供たちの声が沈黙させられたら、宮の柱が救い主

の賛美をひびかせたであろう。

パリサイ人たちはすっかりまごつき、混乱した。彼らがおどかすことのできないおかたが指揮してあられた。イエスは宮の保護者としての立場をとられた。主はこれまでこのように堂々たる権威のある態度をとられたことがなかった。主のことばとわざにこれほど大きな力があつたことはこれまでになかった。主はエルサレムのいたるところでふしぎなわざを行なわれたが、これほど厳肅で印象的な態度をとられたことはなかった。主のふしぎなみわざを目撃した人々の前では、祭司たちと役人たちは、あえて主に公然たる敵意を見せようとしなかった。イエスの答に怒り、まごつきながらも、彼らはその日はそれ以上どうすることもできなかった。

次の朝、サンヒドリンは、イエスに対してとるべき手段についてもう一度考慮した。三年前に、彼らは、イエスにメシヤであることの証拠を要求した。その時から、イエスは全国で偉大なわざを行なわれた。主は病人をいやし、数千人の人たちを奇跡的に養い、波の上を歩き、波立つ海をみことばでしずめられた。主は、人々の心をあたかも開かれた本を読むかのように何度も読まれた。主は悪鬼を追い出し、死人をよみがえらせられた。イエスがメシヤであるという証拠は、役人たちの目の前にあつた。そこで彼らは、イエスの権威のしるしを求めないで、イエスから何らかの告白か宣言を引き出し、それによってイエスを罪に定めようと決心した。

イエスが教えてあられる宮へはいつて行って、彼らはイエスに、「何の権威によって、これらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」と質問しはじめた(マタイ二二ノ二三)。彼らは、イエスが自分の権威は神からさづけられたのだと主張されるものと期待した。このような主張をされたら、彼らはそれを否定

するつもりであった。しかしイエスは、ほかの問題に関連しているようにみえる質問で彼らに応じられた。そしてイエスは、この質問に彼らが答えたらわたしも答えようと言われた。「ヨハネのバプテスマはどこからきたのであったか。天からであったか、人からであったか」とイエスは言われた(マタイ二ノ二五)。

祭司たちは、自分たちがどんな理屈を並べても、のがれることのできないジレンマに陥ったことを知った。もしヨハネのバプテスマは天からだと言え、彼らの矛盾が明らかになる。ではなぜあなたがたはヨハネを信じなかったのかとキリストは言われるだろう。ヨハネはキリストについて、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」とあかしした(ヨハネ一ノ二九)。もし祭司たちが、ヨハネのあかしを信じるなら、どうしてキリストがメシヤであることを否定することができよう。もし彼らが本当の信念、すなわちヨハネの使命は人からだと言えれば、彼らは怒りの嵐を招くであろう。なぜなら人々はヨハネを預言者と信じていたからである。

熱心な興味をもって、群衆は決定を待った。彼らは、祭司たちがヨハネの使命を受け入れると告白したのを知っていたので、ヨハネが神からつかわれたということを問題なくみとめるだろうと期待した。ところがひそひそと相談し合ってから、祭司たちは何にも言わないことにきめた。偽善的に無知をよそおいながら、彼らは、「わたしたちにはわかりません」と言った(マタイ二ノ二七)。するとキリストは、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい」と言われた(マタイ二ノ二七)。

学者たち、祭司たち、役人たちはみなだまった。彼らは、どうしてよいかわからず、失望し、それ以上キリストに質問を浴びせる元気もなく、まゆをよせて立ったままであった。臆病と優柔不断のために、彼らは人々の尊

敬を大部分失った。人々はいまそばに立って、これらの高慢な、自らを義とする人たちが敗北するのを見ておもしろがった。

キリストのこうしたすべての言行は重要であって、その影響は、キリストが十字架につけられ、昇天されてから一層強くみられるのであった。イエスに対する質問の結果を熱心に待った人々のうちの多くは、はじめはこの出来事の多かった一日におけるイエスのみことばによってイエスにひかれ、最後にはその弟子になることになった。宮の庭の光景は彼らの心から決して消えなかった。イエスが大祭司と語られたとき、ふたりの対照はきわだっていた。宮の最高位にあるいばった大祭司は、豪華で高価な衣服を身につけていた。その頭にはきらめくテアラ（宝冠）がのつていた。彼の挙動には威厳があつて、その髪の毛と長くなびているあごひげは老齢のために銀色をしていた。彼の外観は見る者を恐れさせた。この威風堂々たる人物の前に、天の大君が何の飾りもみえもなく立ってあられた。主の衣は旅によぐれ、その顔は青くてがまん強い悲しみがあらわれていた。しかしそこには、高慢で自信満々として、恐ろしい様子をしている大祭司と奇妙な対照をなしている尊厳と慈悲が書かれていた。宮の中でイエスのことばと行ないを見聞きした者たちの多くは、その時から、イエスが神の預言者であることを、心の中に秘めていた。しかし人々の心がイエスに傾くにつれて、イエスに対する祭司たちの憎しみがました。イエスが自分の足にしかけられたわなをのがれた知恵は、イエスの神性についての新しい証拠となったので、彼らの怒りに油がそそがれた。

ラビたちとの論争において、相手に恥をかかせることがキリストの目的ではなかった。主は彼らの苦境を見る

ことをよるこばれなかった。キリストはたいせつな教訓を教えようとされたのであった。主は、敵どもが主の前にかけたわなに彼ら自身が落ち込むままにして恥ずかしい思いを彼らにさせられた。ヨハネのバプテスマの性格について彼らが無知を告白したことによって、主は語る機会をつかみ、その機会を利用して彼らの真の状態を示し、これまでもで与えられた多くの警告にさらにもう一つを加えられた。

イエスは言われた、「あなたがたはどう思うか。ある人にふたりの子があつたが、兄のところに行つて言った、『子よ、きょう、ぶどう園へ行つて働いてくれ』。すると彼は『おとうさん、参ります』と答えたが、行かなかつた。また弟のところに来て同じように言った。彼は『いやです』と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか」(マタイ二ノ二八―三二)。

この不意の質問は、聞いている者たちに警戒心を忘れさせた。彼らはこの譬を注意深く聞いていたので、すぐに「あとの者です」と答えた(マタイ二ノ三二)。イエスは彼らにじつと目をそそいで、きびしくおごそかな調子でこれに応じられた。「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。というのは、ヨハネがあなたがたのところに来て、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになつても、心はいれ変えて彼を信じようとしなかった」(マタイ二ノ三二、三三)。

祭司たちと役人たちはキリストの質問に対して正しい答をしないわけに行かなかつた。こうして主は、弟の立場を支持する彼らの意見をはっきりさせられた。この息子は、パリサイ人たちから軽べつされ憎まれてゐる取税

人たちを代表していた。取税人たちはひどく不道德であった。彼らは實際神の律法の違反者たちであり、神の要求に対する頑固な抵抗をその生活に表わしていた。彼らは感謝することを知らず、けがれていた。主のぶどう園に行つて働くように命じられた時、彼らは軽べつしてことわつた。しかしヨハネがきて、悔い改めとバプテスマを説いたとき、取税人たちは、ヨハネのことばを信じてバプテスマを受けた。

兄の方はユダヤ国民の指導的な人々を代表していた。パリサイ人の中には悔い改めてヨハネのバプテスマを受けた者もあった。しかし指導者たちは、ヨハネが神からつかわれたことをみとめようとしなかった。ヨハネの警告と告発は、彼らを改革するにいたらなかった。彼らは、「彼からバプテスマを受けないで、自分たちに対する神のみこころを無にした」(ルカ七ノ三〇)。彼らはヨハネのことばを軽べつ的にあしらつた。呼ばれた時に、「おとうさん、参ります」と言いながら行かなかつた兄のように、祭司たちと役人たちは、口では従いますと言いながら、行為においては従っていなかった。彼らは神を敬っていると大きな口をきき、また神の律法に従っていると主張したが、それは偽りの従順にすぎなかった。取税人たちはパリサイ人から不信心者として非難され、のろわれていた。しかし彼らは、大きな光を与えられていながらその行ないが敬神の告白に一致しないで、しかも自らを義としているそうした人たちよりも先にみ国にはいることを、その信仰と行ないによって示した。

祭司たちと役人たちは、こうした鋭い真理をがまんしなくなかつた。しかしイエスを攻撃する手がかりとなるようなことを何かイエスが言われるだろうと思つて、だまつていた。しかし彼らはもっとがまんしなければならなかつた。

「もう一つの譬を聞きなさい。ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を堀り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、その分け前を受け取るうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子らを彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」(マタイ二ノ三三―四〇)。

イエスは居合わせたすべての人に語りかけておられた。しかし祭司たちと役人たちが答えた、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」(マタイ二ノ四一)。こう言った人たちは、この譬の適用が最初わかっていなかったが、しかしいま彼らは、自分自身の罪の宣告をくださったことに気がついた。この譬の中で、家の主人は神を、ぶどう園はユダや国民を、かきは彼らの保護となっている神の律法をあらわしていた。やぐらは宮の象徴であった。ぶどう園の主人は、その繁栄のために必要ないっさいのことをした。「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか」と彼は言っている(イザヤ書五ノ四)。このように、イスラエルに対する神のたゆまない守りがあらわされた。そして、農夫たちがぶどう園の収穫のきまった一部を主人に返すべきであったように、神の民はその聖なる特権にふさわし

い生活を送ることによって神をあがめるべきであった。しかし、わけ前を受け取るために主人からつかわれたしもべたちを農夫たちが殺してしまったように、ユダヤ人は、神が彼らに悔い改めを呼びかけるためにつかわされた預言者たちを殺してしまった。使者たちは次々に殺された。ここまでは譬の適用に疑問はなかったが、つく話の中でもその適用はこれにおとらないほど明らかであった。ぶどう園の主人が不従順なしもべたちに最後につかわし、しかもしもべたちにとらえられて殺された愛する子のうちに、祭司たちと役人たちはイエスとそのさし迫った運命についてはっきりした描写を見たのであった。すでに彼らは天父が最後の訴えとして彼らに送られたおかたを殺す計画をたてていた。忘恩的な農夫たちの上に加えられた報復のうちに、キリストを死刑にする者たちの運命がえがかれていた。

あわれみの思いをこめて彼らを見わたしながら、救い主は続けて言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」(マタイ二ノ四二―四四)。

この預言をユダヤ人はしばしば会堂でくり返し、それをきたるべきメシヤにあてはめていた。キリストはユダヤ人の制度と救いの計画全体の隅のかしら石であった。この土台石を、ユダヤ人の建築家、すなわちイスラエルの祭司たちと役人たちはいま捨てようとしていた。救い主は、彼らの危険が示されている預言に彼らの注意を呼

び起こされた。主は、可能なかぎりあらゆる手段をつくして、彼らがしようとしている行為の性格を明らかにしようとした。

主のみにとってはほかの目的もあった。「このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」と質問することによって、キリストはパリサイ人たちがあのような答え方をするようにはかられた（マタイ二ノ四〇）。主は彼らが自分自身の上に罪の宣告をくだすようにはかられたのであった。主の警告が彼らのうちに悔い改めを起こさないときに、それは彼らの運命を決定的なものとするのであった。そこで主は、彼ら自身が自分たちの上に破滅を招いたことをみとめるように望まれた。主は、彼らの国家的な特権が取り去られることに含まれている神の公義を彼らに示すように計画された。この特権の喪失はすでに始まっていて、その結果は彼らの宮と都との破滅ばかりでなく、国民の離散となるのであった。

聞いている人たちはこの警告に気づいた。しかし祭司たちと役人たちは、彼ら自身宣告をくだしたにもかかわらず、「あれはあと取りだ。さあ、これを殺」そうと言うことによって、その場面を実現しようとしていた（マタイ二ノ三八）。彼らは「イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた」。なぜなら世論がイエスを支持していたからである（マタイ二ノ四六）。

捨てられた石についての預言を引用されたとき、キリストは、イスラエルの歴史に実際に起こったことを語られた。この出来事は最初の宮の建築と関係があった。それは特にキリストの初臨の時代にあってはまり、ユダヤ人に特別な力をもって訴えるはずであったが、同時にまた、われわれのためにも教訓となっている。ソロモンの神

殿が建てられた時、壁と土台のための巨大な石は全部石切場で用意された。それらの石が建築場へはこんでこられると、手を加えないでそのまま用いられ、職人たちはその場所にすえつけさえすればよかった。ところがここに土台として用いるために、異常に大きく特殊な形をした一つの石がはこばれてきた。しかし職人たちはその石の場所をみつけることができないので、これを受け入れようとしなかった。それが用いられないでじまになっているのは、彼らにとって迷惑であつた。長い間それは捨てられた石であつた。しかし建築家たちが隅のおや石を据える段になると、この特別な場所を占め、その上にかかる巨大な重みに耐えるのに十分な大きさと力と独特な形をした石をみつけるために、彼らは長い間さがした。この重要な場所のために選択を誤れば、建物全体の安全がおよびかされるのであつた。彼らは、太陽や霜や嵐の作用に耐えることのできる石をさがし出さねばならなかった。何度かいくつかの石が選ばれたが、巨大な重さの圧力の下にこなごなにくだけた。またほかのものは大気の突然の変化のテストに耐えられなかった。しかし最後に、長い間捨てられていたあの石に注意が向けられた。それは空気と太陽と嵐にさらされながら、すこしの割れ目もみせていなかった。建築家たちはこの石を検査した。それはあらゆるテストに合格し、ただ一つのテストが残った。もしこの石が激しい圧力のテストに耐えることができたら隅のおや石として受け入れようと、彼らはきめた。テストが行なわれた。石は受け入れられ、指定された場所へはこばれ、ぴつたりと合った。預言のまぼろしの中で、イザヤは、この石がキリストの象徴であることを示された。彼はこう言っている、

「あなたがたは、ただ万軍の主を聖として、彼をかしこみ、彼を恐れなければならぬ。主はイスラエルの二

つの家には聖所となり、またさまたげの石、つまりきの岩となり、エルサレムの住民には網となり、わなとなる。多くの者はこれにつまりき、かつ倒れ、破られ、わなにかけられ、捕えられる」（イザヤ書八ノ二三―二五）。イザヤは、預言のまぼろしの中で初臨の時までつれて行かれ、キリストが、ソロモンの神殿における隅のいや石の取り扱いに象徴されていたような試みとテストに耐えられることを示される。「それゆえ、主なる神はこう言われる、『見よ、わたしはシオンに一つの石をすえて基とした。これは試みを経た石、堅くすえた尊い隅の石である。』」信ずる者はあわてることはない」（イザヤ書二八ノ一六）。

神は、限らない知恵をもって、隅のいや石をえらび、それをご自分で据えられた。神はそれを「堅くすえた隅の石」と呼ばれた。全世界の人々が彼らの重荷と不幸をその上にのせても、この石はそれらの全部にもちこたえるのである。彼らがその上に築いても絶対に安全である。キリストは「試みを経た石」である。主は、ご自分に信頼する者を決して失望させられない。主はどのテストにも耐えられた。主は、アダムの不義と、その子孫の不義の圧力に耐え、悪の勢力に打ち勝って余りある者となられた。主はすべての悔い改める罪人がのせる重荷に耐えられた。不義の心は、キリストのうちに救いをみいだした。主は「堅くすえた隅の石」である。主によりたのむ者はみな絶対に安全である。

イザヤの預言の中に、キリストのことが「堅くすえた隅の石」とも「つまりきの岩」とも宣言されている。使徒ペテロは、聖霊の感動によって書いたとき、キリストがだれにとつては堅くすえられた石であり、だれにとつてはつまりきの岩となるかはつきり示している。

「あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知ったはずである。主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となつて、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となつて、イエス・キリストにより、神によるこばれる霊のいけにえを、ささげなさい。聖書にこう書いてある、『見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い石、隅のかしら石を置く。それにより頼む者は、決して、失望に終ることがない』。この石は、より頼んでいるあなたがたには尊いものであるが、不信仰な人々には『家造りらの捨てた石で、隅のかしら石となつたもの』、また『つまずきの石、妨げの岩』である。しかし、彼らがつまずくのは、御言に従わないからであつて、彼らは、実は、そつなるように定められていたのである」(ペテロ第一・二ノ三一―八)。

信じる者には、キリストは堅くすえられた隅のかしら石である。これらの人々は、岩なるキリストの上に落ちて碎ける人たちである。ここにキリストへの服従とキリストを信じる信仰があらわされている。岩なるキリストの上に落ちて碎けることは、自らを義とする思いを捨てて、子供のようなへりくだりをもってキリストのみもとに行き、罪とがを悔い改め、キリストのゆるしの愛を信じることである。われわれが隅のかしら石であられるキリストの上に築くのも、信仰と服従によつてである。

この生ける石の上に、ユダヤ人も異邦人も同様に築くことができる。それはわれわれがその上に安全に築くことのできる唯一の隅のかしら石である。それはすべての者のために十分な広さがあり、全世界の重さと重荷を支えるのに十分な強さがある。そして、生ける石であられるキリストにつながることによつて、この隅のかしら石

の上に築く者はみな生ける石となるのである。多くの人々が自分自身の努力によって切られ、磨かれ、美しくされる。しかし彼らは、キリストとつながっていないので、生ける石となることはできない。このつながりがなければ、だれも救われない。われわれのうちにキリストのいのちがないならば、試みの嵐に耐えることができない。われわれの永遠の安全は、堅くすえられた隅のかしら石に築くことにかかっている。今日多くの者が試みを経ない土台の上に築いている。雨が降り、嵐が吹き荒れ、洪水になると、彼らの家は倒れる。なぜなら、それは永遠の岩、隅のかしら石であられるイエス・キリストの上に建てられていないからである。

「彼らがつまりずくのは、御言に従わないからである（ペテロ第一・二ノ八）。キリストはつまりずきの岩である。しかし「家造りらの捨てた石で、隅のかしら石となったもの」である（ペテロ第一・二ノ七）。捨てられた石と同じように、キリストは、地上の公生涯において、無視され、侮辱を受けられた。「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で…侮られた。われわれも彼を尊ばなかった」（イザヤ書五三ノ三）。しかし主が栄光を受けられる時が近づいていた。死からよみがえることによって、主は「御力をもって神の御子」と宣言されるのであった（ローマーノ四）。イエスは、再臨の時に、天と地の主としてあらわされるのであった。主をいま十字架につけようとしている人々は、主の偉大さをみとめるのであった。捨てられた石は、宇宙の面前で隅のかしら石となるのであった。

また「それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」（マタイ二ノ四四）。キリストをこぼんだ民は、まもなく彼らの都と国が滅ぼされるのを見るのであった。彼らの栄光はうち砕かれ、風

の前のちりのように吹き散らされるのであった。ではいったいユダヤ人を滅ぼしたものは何であつたのだろうか。それは、もし彼らがその上に築いていたら彼らの安全となつたはずの岩であつた。それはあざけられた神の恵み、拒絶された義、軽んじられたいつくしみであつた。人々は神に反対したので、彼らの救いとなるはずだったものがすべて滅亡とかわつた。神がいのちにいたるように定められたものが死にいたるものとなったことを彼らは知つた。ユダヤ人がキリストを十字架につけたことの中に、エルサレムの滅亡が含まれていた。カルバリーで流された血は、ユダヤ人をこの世ときたるべき世において滅亡へ沈めた重さであつた。神の恵みをこぼんだ者に対してさばきがのぞむ大いなる最後の日もこれと同じである。彼らにとってはつまずきの石であるキリストは、その時彼らには復讐の山とみえるのである。主の顔の輝きは、義人にはいのちであるが、悪人には焼きつくす火となるのである。愛をこぼみ、恵みをあなごつたために、罪人は滅ぼされるのである。

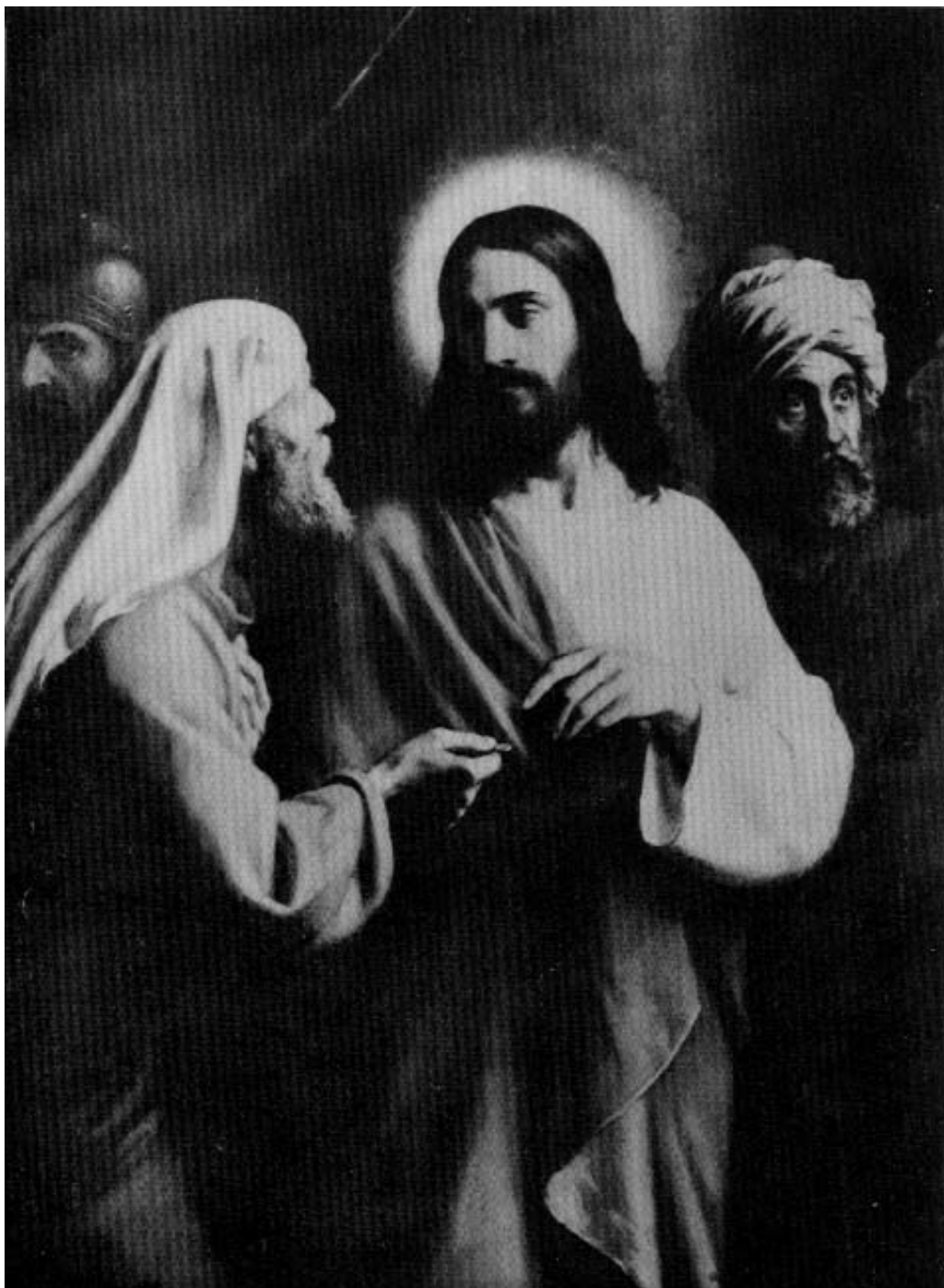
多くの例をあげ警告をくりかえして、イエスは、ユダヤ人が神のみ子をこぼす結果がどんなものであるかを示された。これらのみことばを通して、キリストはまた、彼をあがない主として受け入れようとしないう各時代のすべての人々に語りかけておられた。ひとつひとつの警告は彼らのためである。けがされた宮、不従順な息子、いつわりの農夫、侮べつ的な建築者などはみなひとりびとりの罪人の経験に反映している。罪人は悔い改めないかぎり、そうしたものに予表されていた運命が彼のものとなるのである。

論争

本章はマタイ二二ノ一五―四六、マルコ二二ノ一三―四〇、ルカ二〇ノ二〇―四七にもとづく

祭司たちと役人たちはキリストの鋭い譴責をだまって聞いた。彼らはキリストの非難に反ばくすることができなかった。そこで彼らは、キリストをわなにかける決心を一層固めたにすぎなかった。この目的をもって、彼らはキリストのところへスパイを送った。すなわち「義人を装うまわし者どもを送って、イエスを総督の支配と権威とに引き渡すため、その言葉じりを捕えさせようとした」(ルカ二〇ノ二〇)。彼らはこれまでイエスがしばしば会われたような年とったパリサイ人でなく、熱烈で、熱狂的で、キリストが知っておられないと彼らの考えた若者たちを送った。この人たちにヘロデ党の人々が何人かついて行った。それは、裁判の時に、キリストに不利な証言をたてられるように、キリストのことを聞いておくためであった。パリサイ人たちとヘロデ党の人たちとはこれまで激しく敵対していたが、いまはキリストに対する敵意で一つになっていた。

パリサイ人は、ローマ人から税金を取りたてられることにいつもいらだっていた。税金を払うことは神の律法に反すると、彼らは主張した。いま彼らはイエスをわなにかける機会を発見した。スパイたちがイエスのもとに



この問題でイエスをわなにかけようとした祭司たちと役人たちに対するイエスの宣告は、「それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」であった。

やってきて、あたかも自分たちの義務を知りたいと望んでいるかのようには、誠実さをよそおいながら、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています。あなたは人に分け隔てをなさらないで、真理に基いて神の道を教えてくださいます。ところで、カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」と言った(マルコ二ノ一四)。

もし彼らが誠実だったら、「わたしたちはあなたが真実なかたで、だれをも、はばかられないことを知っています」ということは、すばらしい告白であっただろう。しかしこのことは、あざむくために語られたのであった。それにもかかわらず彼らのあかしは事実であった。パリサイ人たちはキリストが言われたこと、教えられたことが正しいということを知っていた。だから彼らは、彼ら自身のあかしによつてさばかれるのである。

イエスに質問した人たちは、彼らの目的を十分かくしたつもりであつたが、イエスは、開かれた本を読むように、彼らの心を読み、彼らの偽善をばくろされた。「なぜわたしをためそうとするのか」とイエスは言われた(マルコ二ノ一五)。こうしてイエスは、彼らのかくれた目的を見抜いておられることを示すことによって、彼らの求めなかったしるしをお与えになった。イエスが、「デナリを持ってきて見せなさい」とつけ加えられたとき、彼らはますます困惑した(マルコ二ノ一五)。彼らがそれを持ってくる、イエスは、「これは、だれの肖像、だれの記号か」と言われた。彼らは「カイザルのです」と答えた(マルコ二ノ一六)。イエスは、貨幣の記号を指さしながら、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」と言われた(マルコ二ノ一七)。スパイたちは、イエスが彼らの質問に対して、よいとか、いけないとか端的に答えられるものと思っていた。

もしイエスが、カイザルに税を納めるのは不当だと言われたら、ローマ当局に通報され、反逆を煽動したというので捕えられるであろう。もしイエスが税を納めるのが正当だと宣言されたら、彼らは、神の律法に反していると言ってイエスを民の前に告発するつもりであった。しかしいま彼らは、どうしてよいかわからないほど敗北したことを感じた。彼らの計画は狂った。彼らの質問がその場で簡単に片づけられてしまったので、もはやそれ以上言すべきことがなかった。

キリストの答は言いのがれではなく、質問に対する率直な答であった。カイザルの名前と肖像がぎざまれているローマの貨幣を手持ちながら、イエスは、彼らがローマの権力下に生活しているのだから、神に対する義務と矛盾しない限り、ローマの求める支持を与えるべきであると宣言された。しかしその国の法律に柔順に従う一方では、いつでも神への忠誠を第一としなければならなかった。

「神のものは神に返しなさい」という救い主のことばは、陰謀をめぐらしているユダヤ人にとってきびしい譴責であった。もし彼らが神に対する義務を忠実に果たしていたら、彼らは敗北した国民となつて外国の権力に従うようなことにはならなかったのである。ローマの旗がエルサレムにひるがえることも、ローマの衛兵が城門に立つことも、ローマ総督が城内にいて統治することもなかったのである。ユダヤ国民は、当時、神から離反した罰金を払っていたのであった。

パリサイ人たちはキリストの答を聞いたとき、「驚嘆し、イエスを残して立ち去った」(マタイ二二ノ二二)。イエスは彼らの偽善と独断を責められたが、そうすることによって、彼は、一つの大原則、すなわち一国の政府

に対する人の義務の限界と神に対する人の義務とをはっきり定めている一つの原則を述べられたのであった。多くの人々の心の中で悩みの種であった問題が解決した。それからのちずっと、彼らはその正しい原則に従った。多くの者が満足しないまま立ち去ったけれども、彼らはその問題の根底となっている原則がはっきり示されたことを知って、キリストの深い洞察力に感嘆した。

パリサイ人たちが沈黙したとたんサドカイ人たちが巧妙な質問をもって進み出た。サドカイ人とパリサイ人は互いに激しく対立していた。パリサイ人は言い伝えを厳格に守る人たちであつた。彼らは外面的な儀式に厳格で、手足を洗うことや、断食や、長い祈りを励行し、施しを見せびらかした。しかしキリストは、彼らが人間の戒めを教理として教えることによつて、神の律法をおなしくしていると言言された。彼らは階級としては頑迷であり、偽善的であつた。しかし彼らの中には真に敬虔な人たちがいて、その人たちはキリストの教えを受け入れて弟子となつた。サドカイ人はパリサイ人の言い伝えを否定していた。彼らは、口では聖書の大部分を信じ、それを行為の原則とみなすと言っていたが、実際には懷疑主義者であり、物質主義者であつた。

サドカイ人は天使の存在や死人の復活や、報いと刑罰を伴う来世についての教えを否定した。そうしたすべての点において、彼らはパリサイ人と異なっていた。特に両者の間の論争のまとは復活についてであつた。パリサイ人は復活をかたく信じていたが、こうした議論になると、来世の状態について彼らの見解は混乱するのであつた。死は不可解な神秘となるのであつた。サドカイ人の議論に応ずることができないので、彼らはいつもいらだちを感じた。両者の議論はたいてい怒りの口論に終わり、彼らはこれまでよりも一層遠く離れるのであつた。

数においては、サドカイ人はその対抗者よりはるかに劣り、また一般民衆に対する勢力もそれほど強くなかった。しかし彼らの多くは富裕であり、したがって富が与える勢力を持っていた。たいていの祭司たちはサドカイ人の階級に属しており、大祭司もたいてい彼らの中から選ばれた。しかしこのことには、彼らが懐疑的な意見を公表しないということがはっきり規定されていた。パリサイ人が数と人気においてまさっていたために、サドカイ人は祭司職につくとき、外面的にはパリサイ人の教えに譲歩しなければならなかった。しかし彼らがこのような職務につく資格があるということが彼らの誤りに力を与えた。

サドカイ人はイエスの教えを拒否した。イエスは一つの目的に動かされておられたが、サドカイ人はそれがこのようにあらわれることをみとめようとしなかった。神と来世についてのイエスの教えは、彼らの理論と矛盾した。彼らは神が人間よりもすぐれた唯一の存在であることは信じたが、支配的な摂理と神の先見性は人間から道徳的自由意志を奪い、人間を奴隷の地位に墮落させるものであると論じた。神は人間をおつくりになって、これを上からの力に左右されない独立した者とされたというのが、彼らの信念であった。人間は自由に自分自身の生活を支配し、世の出来事を形成し、自分の運命を自分自身の手ににぎっているのだと、彼らは主張した。彼らは神のみたまが人間の努力すなわち生来の手段を通して働くことを否定した。それでも彼らは、人間は自分の生まれつきの能力を正しく用いることによって、高められ、啓発される、またきびしくはげしい苦行によって生活をきよめることができると主張した。

神についての彼らの考え方によって、彼ら自身の品性が形成された。彼らは神が人間に何の関心も示されない

と考えていたが、そのように彼らもお互いに対してすこしの関心も持たなかった。彼らの間には一致というものがほとんどなかった。人間の行為に及ぼす聖霊の働きをまとめようとしなかったために、彼らの生活にはみたまの力が欠けていた。ほかのユダヤ人たちと同じように、彼らはアブラハムの子としての家督権を持っていることと、律法の要求を厳格に守っていることを非常に自慢にしていた。しかし彼らは、律法の真の精神とアブラハムの信仰といつくしみに欠けていた。彼らの自然な同情心は狭い範囲に限られていた。彼らは、人はみな生活の慰安と祝福を手に入れることができると信じていた。だから彼らの心は、他人の欠乏や苦しみに動かされなかった。彼らは自分のためだけに生活した。

キリストは、みことばとみわざによって、超自然的な結果を生じる神の力、現在のかなたにある未来の生活、人の子らの父としてたえず彼らの真の利害を見守っていてくださる神についてあかしされた。主は、サドカイ人の利己的な排他心が責められるようないつくしみとあわれみの中に天来の力のわざをあらわされた。主は、神がこの世における人間の幸福のためにも永遠の幸福のためにも聖霊によって人の心に働かれることをお教えになった。品性を生れ変らせることを人間の力にたよることはまちがっている。それは神のみたまによってのみ行なわれるのだということを主はお示しになった。

この教えを、サドカイ人は信用しないことに心をきめていた。イエスと論争することによって、彼らは、イエスを罪に定めることはできないまでも、不評判に陥れることができることを確信していた。彼らがイエスに質問するために選んだ主題は復活の問題であつた。もしイエスが自分たちに同意されたら、パリサイ人をますます怒らせ

ることになる。もし自分たちと意見がちがったら、その教えを嘲笑するつもりであった。

サドカイ人の議論によれば、もし肉体が来世においても現世の時と同じ物質の分子で構成されるとすれば、死からよみがえった時、それは肉と血(肉体)をそなえていなくてはならない。そしてこの地上で中断された生活を永遠の国において続けるべきであるというのである。その場合、地上の関係が続き、夫と妻は再会し、結婚が行なわれ、すべてのことが死ぬ前と同じように続けられ、この世の弱さと欲望が来世においてもそのまま続くと彼らは結論した。

彼らの質問に答えて、イエスは来世の生活の幕を開かれた。「復活の時には、彼らはめとつたり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである」と主は言われた(マタイ二二ノ三〇)。主はサドカイ人の信念がまちがっていることをお示しになった。彼らの前提がまちがっているのであった。「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか」と、主はつけ加えられた(マルコ二ノ二四)。主は、パリサイ人を非難された時のようにサドカイ人を偽善者呼ばわりしないで、彼らの信念のまちがいを示された。

サドカイ人は、すべての人たちの中で自分たちが一番聖書に忠実であるとうめばれていた。しかしイエスは、彼らが聖書の真の意味を知っていないということを示された。聖書の知識は聖霊の光によって心にぎざまれねばならない。聖書と神の力について知らないことが、彼らの信仰の混乱と心の暗さの原因であると、イエスは言明された。彼らは神の奥義を彼らの限られた考え方では理解しようと努力していた。キリストは、理解力を広くそし

て強くするような聖なる真理に、彼らの心を開くように呼びかけられた。限りある頭脳で神の奥義をさること
 ができないために、幾千の人たちが無神論者になる。彼らは神の摂理のうちにあらわされているふしぎな神の力
 を説明することができない。そこで彼らは、このような力の証拠をこばみ、それをもっと理解することのできな
 い自然の力のせいにする。われわれをとりまいている神秘を解く唯一の鍵は、それらのすべての中に神の存在と
 力とをみつめることである。人は神を宇宙の創造者、すべてのことを命令し実行されるお方としてみとめなけ
 ればならない。彼らは、神のご品性と神の力の神秘についてもっと広い見解を持つ必要がある。

もし死人の復活がなければ、彼らが信じると告白している聖書は何の役にも立たないであろうと、キリストは
 聴衆に言明された。「また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を讀んだことがないのか。

『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と書いてある。神は死んだ者の神ではなく、生き
 ている者の神である」と主は言われた(マタイ二二ノ三一、三二)。神は無いものを有るかのようにごらんになる。
 神は始めから終わりをごらんになり、ご自分の働きの結果をあたかもいま完成されているかのようにごらんにな
 る。アダムを始めとして、死んだ最後の聖徒にいたるまで、とうとい死人たちは神のみ子の声を聞き、墓から現
 れて永遠の生命をうけるのである。神は彼らの神となり、彼らは神の民となる。神とよみがえった聖徒たちとの
 間には密接で親しい関係がある。神の御目的の中に予期されているこの状態を、神はそれが現在の状態であるか
 のようにごらんになる。死んだ者は神に生きるのである。

キリストのことばでサドカイ人は沈黙させられた。彼らはキリストに答えることができなかった。キリストを

罪に定めるためにすこしでも乗ずることのできるようなことはひとことも語られなかった。キリストの敵どもは民衆の軽べつ以外に何も得るところがなかった。

しかしながらパリサイ人たちは、イエスを不利におとしいるために用いることのできることをイエスに語らせることをあきらめなかった。彼らはある学識のある律法学者を説き伏せて、律法の十の戒めの中でどれが最も重要かということイエスに質問させた。

パリサイ人は、創造主に対する人の義務が示されている最初の四つの戒めを、人間同胞に対する人の義務を規定している他の六つの戒めよりもはるかに重要なものとしてとんでいた。その結果、彼らは実際の信心に非常に欠けていた。イエスは人々に彼らの大きな欠点を示し、木はそれの実によって知られるのだと説明して、よいわざが必要であることを教えられた。そのためイエスは、はじめの四つの戒めよりもあとの六つの戒めをとつとんであられるという非難を受けてあられた。

律法学者は、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」との率直な質問をもってイエスに話をもちかけた(マルコ二ノ二八)。キリストの答は率直で説得力のあるものであった。「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』(マルコ二ノ二九)。第二の戒めも、第一の戒めと同じである、なぜならそれは第一の戒めから出るものだからであると、キリストは言われた。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない。」「これらの二つのいましめに、律法全

体と預言者とが、かかっている」(マルコ二ノ三一、マタイ二ノ四〇)。

十戒のはじめの四つは、「心をつくして主なるあなたの神を愛せよ」という一つの大きな戒めに要約される。あとの六つは、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というもう一つの戒めに含まれる。これらの戒めは二つとも、愛の原則の表現である。第二の戒めを破りながら第一の戒めを守ることができないし、また第一の戒めを破りながら第二の戒めを守ることができない。神が心の王座に正当な座を占められるときに、正当な場所がわれわれの隣人に与えられる。われわれは自分自身と同じように神を愛するようになる。こうして神を最高に愛するときのみ、隣人を公平に愛することができるのである。

すべての戒めは神と人に対する愛に要約されるので、一つの戒めを破ればこの原則を犯すことになる。こうしてキリストは、聴衆に、神の律法は、あるものは非常に重要であるが、あるものはそれほど重要ではないから無視してもさしつかえないといったような、多くの別々な戒めではないということをお教えになった。主ははじめの四つとあとの六つの戒めを聖なる全体として示し、神への愛は神のすべての戒めに従うことによって示されることをお教えになっている。

イエスに質問した律法学者は、律法について博学だったので、イエスのことばに驚いた。彼は、イエスが聖書についてこんなに深く完全な知識を表明されるとは予期していなかった。彼は聖なる戒めの根底となっている原則についてもっと広い見方をするようになった。彼は祭司たちと役人たちが集まっている前で、キリストが律法の正しい解釈をくだされたことを正直にみとめてこう言った。

「先生、仰せのとおりです、『神はひとりであつて、そのほかに神はない』と言われたのは、ほんとうです。また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する』ということとは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです」(マルコ二ノ三三、三三三)。

キリストの賢明な答が律法学者を心服させたのであつた。律法学者は、ユダヤ人の宗教が内部の信心にはなくて、外面的な儀式にあることがわかつた。彼は単なる儀式的なさげ物や、罪のあがないとして信仰もなく血を流すことが無益であることにいくらか気づいた。神への愛と服従、人に対する無我の関心が、そうしたすべての儀式よりもとうといものと思えた。この男がキリストの議論の正しさをすぐにみとめ、人々の前ではつきりとただちに応答したことは、祭司たちや役人たちとまったく異なつた精神をあらわしていた。自分の心の確信を語るために、祭司たちの不興と役人たちのおどかしにあえて直面したこの正直な律法学者に、イエスの心は同情となつてそそがれた。「イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた、『あなたは神の国から遠くない』」(マルコ二ノ三四)。

この律法学者は、正しい行為は燔祭や犠牲よりも神に受け入れられるということのみとめた点において、神の国に近かつた。しかし彼は、キリストの神性をみとめ、イエスを信じる信仰によって義のわざを行なう力を受ける必要があつた。儀式は、生きた信仰によつてキリストとつながっていないかぎり、何の価値もなかった。道徳律でさえ、それが救い主との関連において理解されないかぎり、その目的を達しない。天父の律法には単に權威のある命令よりもっと深い何ものかが含まれているということを、キリストはくりかえし示された。律法には、

福音にあらわされているのと同じ原則が具体的にあらわされている。律法は人の義務を指摘し、その不義を示す。人は罪のゆるしと、律法に命じられていることを行なう力をキリストに求めなければならない。

キリストが律法学者の質問に答えられたとき、パリサイ人たちがイエスのすぐそばに集まっていた。そこでイエスは、彼らに向かって、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」とおたずねになった（マタイ二二ノ四二）。この質問は、メシヤについて彼らの信念をためすため、すなわち彼らがイエスを単に人間として見ているのか、それとも神の子として見ているのかをはっきりさせるためであった。彼らは□をそろえて、「ダビデの子です」と答えた（マタイ二二ノ四二）。これは預言の中でメシヤについていわれた肩書きであった。イエスがその偉大な奇跡によって神性をあらわされたとき、また病人をいやし、死人をよみがえらせられたとき、人はお互いに、「この方はダビデの子ではないか」とたずねた。スロ・フェニキヤの女や、盲人のバルテマイや、その他の多くの者も、イエスに助けを求めて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください」と叫んだ（マタイ一五ノ二二）。イエスがエルサレムへ乗りこまれるときにも、人々はよろこびの叫びをあげて、「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ」と歓呼した（マタイ二一ノ九）。宮の中にいた子供たちも、その日、よろこばしい賛美をひびかせた。しかしイエスをダビデの子と呼んだ多くの者は、イエスの神性をみとめなかった。彼らはダビデのみ子が神のみ子でもあることをさとらなかった。

ダビデの子であると彼らがのべたことばに答えて、「イエスは言われた、『それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち「主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もと

に置くときまでは、わたしの右に座していなさい」。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか。イエスにひと言でも答える者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなつた」(マタイ二二ノ四三―四六)。

第 67 章

「パリサイ人たちよ。あなたがたは、

わざわざである。」

本章はマタイ二三章、マルコ二二ノ四一―四四、
ルカ二〇ノ四五―四七、二一ノ一―四にもとづく。

キリストが宮で教えられる最後の日であつた。エルサレムに集まつたおびただしい群衆の全部の注意がイエスに引きつけられていた。人々は宮の庭におしよせて、論争の進行を見守り、イエスの口から出る一言一言に熱心に聞き入った。このような光景はこれまでかつて見られないことであつた。この若いガリラヤ人は、この世の榮譽も王のしるしも身につけないで立つておられた。そのまわりを、豪華な服装をした祭司たち、高い地位をあらわす記章のついた服を着た役人たち、しばしば引用する巻物を手に持った律法学者たちがとりかこんでいた。イエスは、王の威厳をそなえて、彼らの前に冷静に立つておられた。天の権威をさずけられたおかたとして、イエスは、彼の教えをあざけてこばみ、その生命をねらっている反対者たちを、ひるむ気配もなく見渡された。彼らは、これまで太ぜいでイエスを攻撃したが、イエスを陥れて罪に定めようとする彼らの計略はむだであつた。イエスは次から次へと挑戦に応じ、祭司たちパリサイ人たちの暗黒と誤謬と対照的に、純潔な輝かしい真理を示された。イエスは、これらの指導者たちの前に、彼らの真の状態と、彼らがあくまでも悪い行為を改めない場合

にかならず伴う報いを示された。警告は忠実に与えられてきた。しかしキリストがなさねばならない一つの働きが残っていた。もう一つの目的がまだ達成されていなかった。

キリストとその働きに対する民衆の関心は着実に高まってきた。彼らはキリストの教えに魅力を感じたが、同時にまた非常に困惑した。人々は、祭司たちとラビたちが知識があつて信心深くみえるので、彼らを尊敬していた。どんな宗教上の事からにおいても、民衆は彼らの権威にいつも絶対的に服従していた。それなのに人々は、攻撃されるたびにますます徳と知識が輝き出る教師イエスに、彼らが不信を投げかけようとしているのをいま見た。彼らは祭司たちと長老たちのしかめづらをながめ、そこにろばいと混乱を見た。彼らは、キリストの教えが明白でわかりやすいにもかかわらず、役人たちがイエスを信じようとしないのに驚いた。人々は自分たちがどんな道をとつたらよいかわからなかった。彼らは、これまで自分たちがいつもその忠告に従ってきた人たちの行動を、熱心な心配のうちに、見守った。

キリストがお語りになった譬を通して、役人たちに警告することと、よろこんで教えを受ける民衆に教えることとが、キリストの目的であつた。しかしもつとはっきり語る必要があつた。言い伝えに対する尊敬と、墮落した祭司制度に対する盲目的な信仰によって、人々はとりこにされていた。そのような鎖をキリストはたち切っておしまひにならねばならない。祭司たち、役人たち、パリサイ人たちの性格をもっと十分にばくろしななければならない。

「律法学者とパリサイ人とは、モーセの座にすわっている。だから、彼らがあなたがたに言うことは、みな守

って実行しなさい。しかし、彼らのすることには、ならうな。彼らは言うだけで、実行しないから」と、イエスは言われた(マタイ二三ノ二、三)。律法学者とパリサイ人は、自分たちにはモーセと同等の権威がさづけられていると主張した。彼らは自分勝手にモーセに代って、律法の解釈者また民をさばく者となった。このような者として、彼らは民から最高の尊敬と服従を受けることを要求した。イエスは聴衆に、ラビたちが律法に従って教えたことを行なうように、しかし彼らの手本にならわないようにと命じられた。彼らは自分たちが教えたことを自ら実行しなかった。

彼らはまた聖書に反した多くのことを教えていた。彼らは「重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない」と、イエスは言われた(マタイ二三ノ四)。パリサイ人は、言い伝えをもとにしてたくさんの規則を強要し、個人の自由を不当に制限した。彼らはまた律法のある部分を、民に遵守をおしつけるような説明をしながら、自分たちはひそかにその遵守を怠り、都合次第で、自分たちはその遵守を免除されているのだと実際に主張した。

彼らはいつも自分たちの信心を見せびらかすように心がけていた。この目的のためにはどんな神聖なものも利用された。神は、ご自分の戒めについて、モーセに「あなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし」なさいと、言われた(申命記六ノ八)。このことばには深い意味がある。神のみことばを瞑想し、実行するとき、人は身心ともに高められる。正しく、あわれみのある行為をとおして、手は、印として、神の律法の原則をあらわす。その手はわいろをとらず、墮落的なこと欺瞞的なことを何一つしない。その手

は愛とあわれみのわざに活動的である。目は、とうとい目的に向けられ、澄んでいて、真実である。顔の表情、もの言う目は、神のみことばを愛しようとぶ者の欠点のない品性をあかししている。しかしキリスト時代のユダヤ人は、そうしたことをすこしも認識しなかった。モーセに与えられた命令について、人々は、聖書のいましめをからだにつけるようにという命令に解釈した。そこで彼らは、その戒めを羊皮紙の一片に書きつけ、それを目立つように頭と腕首にしばりつけた。しかしそうしたからといって、神の律法が心と思いに一層固くぎざみこまれたわけではなかった。そうした羊皮紙は人々の注意をひくために、記章としてからだにつけているにすぎなかった。これをつけていると、信心深く見え、人々から尊敬されると思われるていた。イエスはこのおなし見せかけに一撃を加えられた。

「そのすることは、すべて人に見せるためである。すなわち、彼らは経札を幅広くつくり、その衣のふさを大きくし、また、宴会の上座、会堂の上席を好み、広場であいさつされることや、人々から先生と呼ばれることを好んでいる。しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはならない。あなたがたの先生は、ただひとりであって、あなたがたはみな兄弟なのだから。また、地上のだれをも、父と呼んではならない。あなたがたの父はただひとり、すなわち、天にいます父である。また、あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである」(マタイ二三ノ五—一〇)。心は貪欲とねたみに満たされているのに、いつわりの謙遜をみせびらかしながら、たえず地位と権力を求めている利己的な野心を、救い主はこのようにはっきりしたことばでばくろされた。人々が宴会に招かれると、お客はそれぞれの階級にしたがって席をとったが、最も名

誉のある席を与えられた人たちが一番先にもてなされ、特別な好意を受けた。パリサイ人は、こうした名誉を受けるようにたえずたくらんでいた。この習慣をイエスは責められたのである。

主はまた、ラビとか師とかいう名称をほしがることに示されている虚栄心を責められた。このような名称は人に属するものではなく、キリストに属するものであると、主は言明された。律法の解説者であり施行者である祭司たち、律法学者たち、役人たちはみな兄弟であり、同じ天父の子らであった。自分たちの良心や信仰に対する支配をあらわしているという名称をだれにも与えてはならないということを、イエスは人々に印象づけられた。もしキリストが今日地上にあられて、「師」とか「尊師」とかいうような名称をもった人たちにかこまれておられたら、「あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわちキリストである」とのことはをくりかえされはしないだろうか(マタイ二三ノ一〇)。聖書には神について「そのみ名は聖にして、おそれおあい」と宣言されている(詩篇一一ノ九)。どんな人間にこのような名称がふさわしいだろうか。この名称に示されている知恵と義をあらわしている人がどんなに少ないことだろう。この名称を帯びている者の中には、神のみ名と品性について誤った印象を与えている者がどんなに多いことだろう。ああ、高位の聖職者の縫い取りされた衣の下には、世俗的な野心と専制と最も卑劣な罪がかくされていることがどんなにしばしばあることだろう。救い主はつづけて言われた。

「そこで、あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」(マタイ二三ノ一一、一二)。真の偉大さは道徳的な価値

によつてはかられるということ、キリストは、これまでくりかえしくりかえし教えられた。天の評価によれば、品性の偉大さは人類同胞の幸福のために生きること、すなわち愛とあわれみのわざをなすことにある。栄光の王キリストは墮落した人類のしもべであられた。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいるうとする人をはいらせもしない」(マタイ二三ノ二三)。聖書を曲解することによつて、祭司たちと律法学者たちは、人々の心をめくらにした。そうでなかったら、人々は、キリストのみ国についての知識と真の聖潔になくしてはならない内面的なきよい生活を受け入れていたのである。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。だから、もつときびしいさばきを受けるに違いない」(マタイ二三ノ一四)。

パリサイ人は民の間に大きな勢力を持っていたので、彼らはそのことを利用して、自分たちの利益に役立たせた。彼らは、信心深いやもめたちの信頼を受けると、彼女たちがその財産を宗教上の目的にささげることが義務として教えた。やもめたちの金を自由にすることができるようになると、このずるい策略者たちはそれを自分たちの利益のために用いた。彼らは、自分たちの不正直をかくすために、人前で長い祈りをささげ、非常に信心ぶつた様子をした。この偽善のゆえに、彼らはもつときびしいさばきを受けるとキリストは断言された。今日も、口先だけで信心ぶつたことを言う多くの者に、同じ譴責がくだるのである。彼らの生活は利己心と貪欲にけがれているが、彼らはそれらのすべてを見せかけの信心という衣であつて、しばらくは人々の目をごまかす。しかし神

をだますことはできない。神は心の意図をどれも見抜かれ、各人をその行為にしたがってさばかれる。

キリストは、悪用を容赦なく非難されたが、しかし義務を軽くしないように用心された。主はやもめのささげ物を強要したり、それをまちがったことに用いたりすることを責められた。同時に主は、神の庫にささげ物を持参したやもめをおほめになった。人がささげ物を悪用しても、それをささげた人から神の祝福を取り去ることはできなかった。

イエスは、さいせん箱がおいである庭にいて、献金を入れにやってくる人たちを見守っておられた。多くの金持が多額の金を持参しては、それを見せつけながらささげた。イエスは彼らを悲しげに見ておられたが、その多額な献金については何も言われなかった。ひとりの貧しいやもめが、人に見られるのを恐れるかのように、おずおずと近よってくるのを見られたとき、イエスのお顔は、たちまち明るくなった。高慢な金持たちが、献金を箱に入れるために、風をきって通り過ぎると、彼女はもう前へ進む勇氣もないかのようにしりぞみした。それでも彼女は、自分の愛するみわざのために、どんなに小さくても、何かをしたいと熱望した。彼女は手に持っている献金を見た。まわりの人たちの献金にくらべれば、わずかなものであったが、それは彼女の全部であった。機会を見て、彼女は急いで二枚のレプタを投げ入れ、いそいで引きかえそうとした。しかしそうしているときに、彼女はイエスの御目にとまり、それは彼女の上にじっとそそがれていた。

救い主は弟子たちをみもとに呼んで、このやもめの貧しさに注目するようにお命じになった。そのとき、主のおほめのことばが彼女の耳にきこえた。「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている



ささげ物をもってきた人たちの中に貧しいやもめがいて、献金箱にレブタ二つを入れた。イエスは彼女をほめて、「あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ」と言われた。

人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ」(マルコ二ノ四三)。自分の行為が理解され、認められたことを感じたとき、彼女の目によるこびの涙が浮かんた。多くの者は、そんなわずかな収入は自分自身の用にとっておきなさい、あの食物の満ち足りた祭司たちの手にささげても、庫に持ってこられる多くの高価なささげ物にまじって見落されてしまうと彼女に忠告しただろう。しかしイエスは、彼女の動機を理解された。彼女は宮の奉仕が神に定められたものであることを信じていたので、それをささえるために全力をつくそうと願った。彼女は自分のできることをした。彼女のこの行為は、各時代を通じて彼女の思い出の記念となり、また永遠にわたって彼女のよろこびとなるのであった。彼女はささげ物といっしょに心をささげた。そのささげ物の価値は、貨幣の価値によってではなく、彼女の行為の動機となった神への愛とそのみわざに対する関心によってはかられた。

イエスは、この貧しいやもめについて、彼女が「だれよりもたくさん入れた」と言われた(マルコ二ノ四三)。金持たちは豊富な中からささげ、しかもその多くの者が、人々から見られ、あがめられるためにささげた。彼らは多額の寄付をしても、そのために安楽な生活あるいはぜいたくな生活がでなくなるといふのではなかった。その寄付は、犠牲の必要がなく、価値においてもやもめのレプタと比較することはできなかった。

われわれの行為に性格を与え、これに不名誉もしくは高い道德的価値の印をおすものは動機である。神は、すべての人の目が見、すべての人の口が称賛する偉大な事ならを、最もとうとうといものとしてごらんにならない。快活に果たした小さな義務、何の見せびらかしもなく、人間の目には無価値に見えるような小さなささげ物が、神の御目には最高に見えることがしばしばある。信仰と愛の心は、神にとって、最も高価なささげ物よりもとうと

いのである。この貧しいやもめのしたことは小さなことであつたが、彼女はそのために自分の生活費をささげた。彼女は、愛するみわざにあの二枚のレプタをささげるために食物を節約した。しかも彼女はそのことを信仰をもつて、天父が自分の大きな必要を見のがされないことを信じてやつたのである。救い主からおほめのことはをいただいたのは、この無我の精神、子供のような信仰であつた。

貧しい人々の中には、神の恩恵と真理に対して神に感謝を示したいと願う人々が大ぜいいる。彼らは、神のみわざをささえるためにもっと富んでいる兄弟たちと力をあわせたいと熱望する。このような魂をこつとわつてはならない。彼らのレプタを天の銀行に積ませよう。神に対する愛に満たされた心からささげられるならば、見たところとるに足りないようなこれらのものが、きよめられたささげ物、はかり知れない価値のあるささげ物となり、神はよろこんでこれを祝福される。

イエスがやもめのことを、彼女は「だれよりもたくさん入れた」と言われたとき、そのみことばは、彼女の献金の動機についてはかりでなく、その結果についても事実であつた。一コドラントに当るレプタ二枚によつて、これらの富裕なユダヤ人の寄付よりもずっと大きな金額が神の庫に入れられた。このわずかな献金の影響は、川の流れのように、はじめは小さかつたが、各時代を流れくだるにしたがつて、広く深くなつた。それは、多くの方法によつて、貧しい者の救助と福音の宣伝に役立った。彼女の自己犠牲の模範は各国、各時代の幾千幾万の人の心に働きかけた。それは金持にも貧乏人にも訴え、彼らの献金は、彼女の献金額をまし加えた。やもめのレプタは、神の祝福によつて大いなる結果を生じるみなもとなつた。神の栄えをあらわしたいとの真心からの願

いによってささげられる献金や、なされる行為はみなこれと同じである。それは全能者の目的につながっている。それが善に及ぼす結果はだれもはかり知ることができない。

救い主は、律法学者とパリサイ人に対する攻撃をつづけられた。「盲目な案内者たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは言う、『神殿をさして誓うなら、そのままでよいが、神殿の黄金をさして誓うなら、果す責任がある』と。愚かな盲目の人たちよ。黄金と、黄金を神聖にする神殿と、どちらが大事なのか。また、あなたがたは言う、『祭壇をさして誓うなら、そのままでよいが、その上の供え物をさして誓うなら、果す責任がある』と。盲目な人たちよ。供え物と供え物を神聖にする祭壇とどちらが大事なのか」(マタイ二三ノ一六―一九)。祭司たちは神のご要求を自分たちのまちがった狭い標準にしたがって解釈した。彼らは、僭越(せんえつ)にもいろいろな罪の軽重についてこまかい区別をつけ、あるものは軽く見過ごし、それほど重大でもない罪を、ゆるすことのできない罪として扱ったりした。彼らは、お金の心付けをもらえば、人々をその誓いから免除してやった。多額の金をもらうと、重大な犯罪を見のがすことさえあった。同時に、これらの祭司たちと役人たちは、他の場合には、ちょっとした違反にもきびしい刑罰を宣告するのであった。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を宮に納めておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のがしている。それもしなければならぬが、これも見のがしてはならない」(マタイ二三ノ二三)。こうしたことばで、キリストはふたたび聖なる義務の悪用を非難しておられる。キリストは、義務そのものを廃しておられるのではない。

十分の一制度は神によって定められたもので、最古の時代から守られてきた。信仰の父アブラハムは、所有しているすべてのものの十分の一を納めた。ユダヤの役人たちは、十分の一の義務をみとめたが、そのことは正しかった。しかし彼らは、民がそれぞれの確信にもとづいてこの義務を果たすのにまかせなかった。一つ一つの場合について、独断的な規則が定められた。要求があまりにも複雑になったため、それを果たすことは不可能だった。だれもいつ自分が義務を果たしたかわからなかった。神がお与えになったとき、この制度は正しく道理にかなっていた。しかし祭司たちとレビたちがそれをうんざりするような重荷にしまっていた。

神が命じられることはすべて重要である。キリストは、十分の一を納めることを義務としてみとめられた。しかし主は、そのことがほかの義務を怠ることの言い訳にならないことを示された。パリサイ人は非常にきちょうめんに、はつか、いのんど、うん香など畑の薬草の十分の一を納めた。これは彼らにとって大した犠牲ではなく、しかもそのために彼らはきちょうめんで高潔であるという評判をとった。同時に彼らの無用な制限は民の重荷となり、神ご自身がお定めになった聖なる制度に対する尊敬を失わせた。彼らは人々の頭をとるにたりないような区別でいっばいにし、人々の注意を重要な真理からそらした。律法の中でもっと重要な公平とあわれみと真実が見のがされた。「それもしなければならぬが、これも見のがしてはならない」と、キリストは言われた（マタイ二三ノ二三）。

ほかの律法も同じように、ラビたちによってゆがめられていた。モーセを通して与えられた戒めの中に、けがれたものを食べることが禁じられていた。豚肉、その他ある種の動物の肉を用いることは、血液を不純にし、寿

命をちぢめるといので、禁じられていた。しかしパリサイ人は、こうした制度を神が命じられたままにしておかなかった。彼らは是認されていない極端に走った。中でも民は、水を全部こして使うように要求されたが、それはけがれた動物と同類の微小な虫が水の中にはいっているといけないからというのであった。イエスはそうしたつまらない要求を彼らの実際の罪の大きさと比較して、パリサイ人に「盲目的案内者たちよ。あなたがたは、ぶよはこしているが、らくだはのみこんでいる」と言われた(マタイ二三ノ二四)。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである」(マタイ二三ノ二七)。白く塗られ、美しく飾られた墓が、その内側に腐敗する死体をかくしているように、祭司たちや役人たちの外面的な聖潔は不義をかくしていた。イエスは続けて言われた。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っている、『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。このようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫であることを、自分で証明している」(マタイ二三ノ二九―三一)。死んだ預言者たちに対する尊敬を示すために、ユダヤ人は彼らの墓を飾るのに熱心だった。しかし彼らは、預言者たちの教えから益を受けず、その譴責に注意を払わなかった。

キリストの時代には、死人の休み場所に対して迷信的な尊敬心がいだかれ、その場所を飾ることに莫大な額の

お金が気前よく使われた。このことは神の御目には偶像礼拝であつた。死人に対する過度の尊敬によって、人々は、神を最高に愛しているのではないということ、また自分と同じように隣人を愛しているのではないということを示した。今日も同じ偶像礼拝が広く行なわれている。多くの者は、死人のために高価な記念碑をつくるために、やもめ、みなし子、病人、貧しい者をかえりみないという罪を犯している。この目的のために、時間と金銭と労力が惜しげなく使われているのに、生きている者に対する義務——キリストがはっきりお命じになつた義務は実行されていない。

パリサイ人は預言者たちの墓をたて、その墓所を飾つて、もしわれわれが父祖たちの時代に生存していたら、神のしもべたちの血を流すことに加わるようなことはしなかつたであろうと、互いに言った。同時に彼らは、神のみ子の生命をとろうと計画しているのであつた。このことはわれわれにとって教訓とならねばならない。このことによつて、われわれの目は、真理の光にそむく者を欺くサタンの力に対して開かれねばならない。多くの者がパリサイ人と同じことをしている。彼らは信仰のために死んだ人たちを尊敬する。彼らはキリストをこぼんだユダヤ人の盲目をふしぎに思う。もしキリストの時代に生存していたら、われわれはよるこんでその教えを受け入れたであろう。われわれは救い主をこぼんだ人々の罪にあずかるような者とは決してならなかつたであろうと、彼らは断言する。しかし神に従うために、克己と屈辱が要求されると、当の本人たちがその確信を押えつけて、従うことをこぼむ。こうして彼らは、キリストが非難されたパリサイ人と同じ精神をあらわすのである。

ユダヤ人は、キリストをこぼむことがどんなに恐るべき責任を意味しているかにほとんど気づいていなかった。

罪のない血がはじめて流された時、すなわち義人アベルがカインの手に倒れた時から、同じ歴史がくりかえされ、不義が増大してきた。どの時代においても、預言者たちは、神が彼らにお与えになったことばを語り、生命の危険をおかして神のみこころに従いながら、王たちや役人たちや民衆の罪を警告した。世代をかさねるにしたがつて、光と真理をこぼむ者たちに対する恐るべき刑罰がつみあげられてきた。キリストの反対者たちは、いま自身自身の頭上にそれを招こうとしていた。祭司たちと役人たちの罪は、前のどの世代の罪よりも大きかった。救い主をこぼむことによって、彼らはアベルからキリストにいたるまで、殺されたすべての義人たちの血に対して責任のある者になろうとしていた。彼らは不義のさかずきをあふれるところまでいっばいにしようとしていた。しかもそれはまもなく正義の報復として彼らの頭上にそそがれるのであった。このことについて、イエスは彼らにこう警告された。

「こうして義人アベルの血から、聖所と祭壇との間であなたがたが殺したバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上に流された義人の血の報いが、ことごとくあなたがたに及ぶであろう。よく言うておく。これらのことの報いは、みな今の時代に及ぶであろう」(マタイ二三ノ三五、三六)。

イエスのことばを聞いていた学者たちとパリサイ人たちは、そのことばが真実であることを知っていた。彼らはザカリヤが殺された事情を知っていた。ザカリヤが神からの警告のことばを告げていた時に、背信の王は悪魔のように激怒し、その命令によってこの預言者は殺されたのであった。彼の血は宮の庭石を染め、それを消し去ることはできなかった。それはいつまでも背信のイスラエルに対してあかしをたてていた。宮が立っているかぎ

り、あの義人の血のしみは、神に報いを求めて叫びつつけるであろう。イエスがこのような恐るべき罪のことを言われると、群衆の中に恐怖の身ぶるいが伝わった。

これから先のことをお考えになって、イエスは、ユダヤ人の頑迷さと、神のしもべたちに対する彼らの偏狭さは、将来も昔と同じであろうと断言された。

「それだから、わたしは、預言者、知者、律法学者たちをあなたがたにつかわすが、そのうちのある者を殺し、また十字架につけ、そのある者を会堂でむち打ち、また町から町へと迫害して行くであろう」(マタイ二三ノ三四)。信仰と聖霊に満たされた預言者たちと知者たち——ステパノ、ヤコブ、その他の人々が有罪の宣告を受けて殺されるのであった。手を天に挙げ、おからだのまわりを天来の光にかこまれて、キリストは、目の前にいる人に裁判官のように語られた。イエスのお声は、これまでたびたびやさしく嘆願するような調子にきこえていたが、いまは譴責と罪の宣告にきこえた。聴衆は身ぶるいした。キリストのことばと顔つきから受けた印象は決して消え去ることがなかった。

キリストの憤激は、偽善という卑劣な罪に向けられた。人々はそのために自分自身の魂を滅ぼし、人々をあざむき、神をけがしていた。祭司たちと役人たちのもっともらしい欺瞞的な議論の中に、イエスは、サタンの勢力の働きをみわけられた。罪に対するキリストの攻撃はするどかった。しかし主は報復的なことばを語られなかった。主は、暗黒の君に対して聖なる怒りをおぼえられた。しかしかんしゃくを破裂させるようなことをなさらなかった。同様に、神との調和のうちに生きているクリスチャンも、愛といつくしみという美しい特性を備えているが、

罪に対しては憤激をおぼえるのである。しかし彼は、自分をそしめる者に対して怒りのあまりののしり返すようなことをしない。暗黒の勢力に動かされて虚偽を主張する者に対しても、彼はキリストのうちにあって、冷静と沈着を保つのである。

神のみ子が神殿に、それから聴衆にためらいがちな一べつを投げかけられたとき、その顔には天来のあわれみがみられた。心の深い苦悩にとぎれる声とにがい涙のうちに、主は叫ばれた、「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった」(マタイ二三ノ三七)。これは別れの苦しみである。キリストの嘆きのうちに、神の心がそそぎ出されている。それは神の長く耐え忍ぶ愛の神秘的な別れである。

パリサイ人もサドカイ人も何も言えなくなってしまった。イエスは弟子たちを呼んで、宮を去るしたくをされた。それは敗北して敵の前から逃げ出さねばならない者としてではなく、働きをなしとげた者としてであった。主は勝利者として、論争から退かれた。

この重大な日にキリストの口から出た真理の宝石は、多くの人々の心にたくわえられた。彼らにとって、新しい思想が生まれ、新しい抱負がめざめ、新しい歴史が始まった。キリストの十字架とよみがえりのあとで、これらの人々は前線に現われて、この働きの偉大さにふさわしい知恵と熱意とをもって神からの任命を達成した。彼らは人々の心に訴えるメッセージを伝え、長年の間幾千の人々の生活をいじけさせていた古い迷信を弱めた。彼

らのあかしの前に、人間の理論と哲学はむなしいおとぎ話になった。エルサレムの宮で、驚きとおその思いにうたれた群衆に語られた救い主のことばから生じた結果は偉大であった。

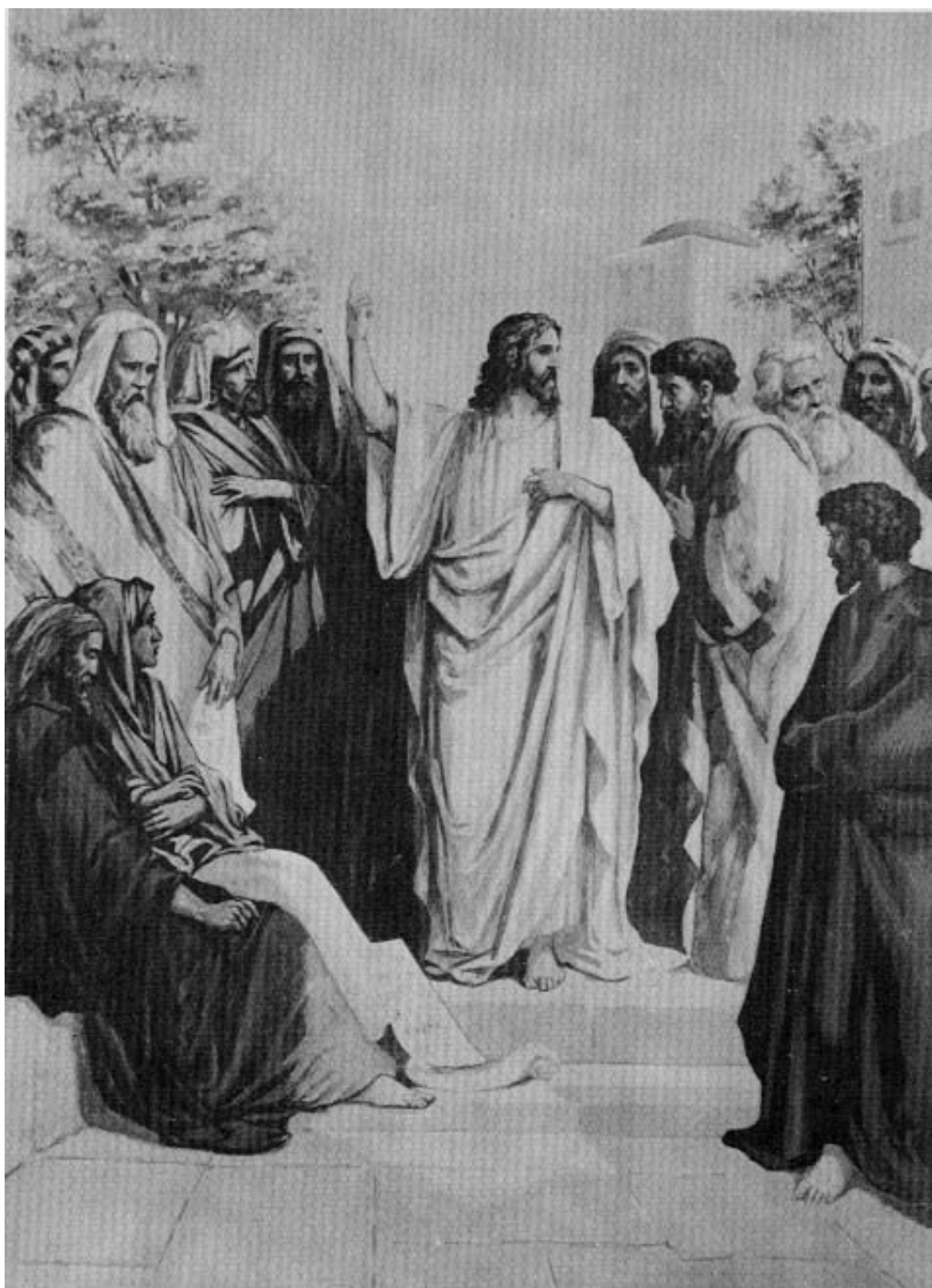
しかしイスラエルは、国家として、神から離れた。オリーブの木の自然の枝は折りとられた。宮の内部を見おさめにして、イエスは悲しい調子で言われた、「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまふ。わたしは言っておく、『主の御名によつてきたる者に、祝福あれ』とおまえたちが言つ時まで、今後ふたび、わたしに会うことはないであろう」(マタイ二三ノ三八、三九)。これまで主は宮を父の家と呼ばれた。しかしいま神のみ子が宮から離れるとともに、神のご臨在は、み栄えのために建てられたこの宮から永久に離れるのであった。これからは宮の儀式は無意味となり、その奉仕は物笑いとなるのであった。

外 庭 で

本章はヨハネ一ノ二〇―四三にもとづく

「祭で礼拝するために上ってきた人々のうちに、数人のギリシヤ人がいた。彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところに来て、『君よ、イエスにお目にかかりたいのですが』と言って頼んだ。ピリポはアンデレのところに行つてそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行つて伝えた」(ヨハネ一ノ二〇―二二)。

この時、キリストの働きは残酷な敗北の様子を示していた。キリストは、祭司たちやパリサイ人たちとの論争に勝利されたが、彼らからメシヤとして受け入れられないことは明らかであつた。最後の分離がきていた。弟子たちにはこの問題が絶望的に思えた。しかしキリストはご自分の働きを完成しようとしておられた。ユダや国民ばかりでなく、全世界にとって関係のある大事件がまさに起ころうとしていた。キリストは、世の人々の飢えた叫びを反響している「イエスにお目にかかりたいのですが」という熱心な願いを聞かれると、お顔が明るく輝き、「人の子が栄光を受ける時がきた」と言われた。ギリシヤ人たちの願いの中に、主はご自分の大いなる犠牲の結



数人のギリシャ人がピリポのところに来て、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言った。この訪問者たちは過越節にエルサレムにきていたのであるが、み国とメシヤについてもっと知りたいと願ったのであった。

果についての保証をもらなった。

キリストの生涯の初めに東方から博士たちがやってきたように、キリストの生涯の終わりに、このギリシヤ人たちは救い主をみいだすために西方からやってきた。キリストがお生まれになった時、ユダヤ人は自分たちの野心的な計画に夢中になっていたので、キリストの来臨を知らなかった。異教国のマギたちは、救い主を拝するために献げ物をたずさえてうまぶねへやってきた。同様に、ギリシヤ人たちは、世の諸国諸族諸民を代表してイエスに会いにやってきた。同じように全地の各時代の人々は、救い主の十字架に引きよせられるのである。同じように「多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく」のである（マタイ八ノ一）。

ギリシヤ人たちは、キリストがエルサレムに凱旋的な入城をされたことを聞いていた。一部の人たちが、キリストは祭司たちと役人たちを宮から追い出されたということ、またキリストがダビデの位を占め、イスラエルの王として支配されるということを想像して、そのうわさをひろめた。ギリシヤ人たちはキリストの使命について真相を知りたがった。「イエスにお目にかかりたいのですが」と彼らは言った。彼らの願いはかなえられた。このたのみがイエスに伝えられた時、イエスはユダヤ人以外の者はだれもはいれない宮の内部におられたが、外庭のギリシヤ人たちのところへ出てこられて、彼らに自ら面接された。

キリストが栄光を受けられる時がきていた。主は十字架の影に立っておられたが、ギリシヤ人たちの問い合わせは、主がまさに払おうとしておられる犠牲によって多くの息子娘たちが神へみちびかれることをイエスに示し

た。主は、ギリシヤ人たちがその時には夢にも思わなかった立場におられる主をまもなく見ることを知っておられた。彼らは、主が強盗殺人のバラバと並んで立たれ、しかも神のみ子よりもバラバがえらばれて釈放されるのを見るのであった。彼らは人々が、祭司たちと役人たちに吹込まれて選択するのを耳にするのであった。「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか」という問いに、「彼らはいっせいに『十字架につけよ』と言った」(マタイ二七ノ二三)。人々の罪のためにこのあがないの供え物をすることによって、キリストはご自分のみ国が完成され、それが世界中にひろがることをご存じであった。主は回復者として働かれ、そのみたまは勝利するのであった。一瞬間、主は将来をごらんになって、全地のすみずみまで、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」とのべつたえている声をお聞きになった(ヨハネ一ノ一九)。この見知らぬ人たちの中に、主は、ユダヤ人と異邦人との間の隔ての壁がとりこわされ、諸国諸族諸民が救いのおとずれを聞く時の大収穫の保証をごらんになった。このこと、すなわち主の望みが完成されることについての予想は、「人の子が栄光を受ける時がきた」というみことばに表現されている(ヨハネ一ノ二三)。しかし栄光を受けるためにはどのような道を通らねばならないかということが、キリストの頭から決して離れなかった。異邦人がかり集められることは、近づきつつあったキリストの死に続くのであった。主の死によってのみ、世は救われるのであった。一粒の麦のように、人の子は地に投げられて死に、目に見えないところに葬られねばならなかった。しかし主はふたたび生きられるのであった。

キリストは、弟子たちにわかるように、自然の事物を例にとってご自分の将来をお示しになった。キリストの



小麦の種は、土の中にうめられて実を生じ、実はふたたびまかれる。このようにして収穫は何倍にもふえ、いのちのかてであるパンのために穀物がとれる。

使命の真の結果はその死によつて到達されるのであった。「よくよくあなたがたに言つておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」と主は言われた（ヨハネ二ノ二四）。麦の粒が地に落ちて死ぬ時に、それは芽生えて実を結ぶ。そのように、キリストの死は、神の国のために実を結ぶのであった。植物界の法

則にしたがって、キリストの死の結果は生命であった。

土地をたがやす者は、この実例をしじゅうまのあたりに見ている。人は、最も上等の部分を受け捨てるようにみえる行為によって、年々穀物の補給を維持しているのである。それはしばらく畑のうねの下にかくれて、主から見守ってもらわねばならない。それから葉が現われ、次に穂が現われ、その穂の中に実がみえる。しかしその穀物が目に見えないところに埋もれ、かくされ、どう見ても失われたようになるまでは、このような発育は行なわれないのである。

地中に埋もれた種は実を生じ、こんどはその実が播かれる。こうして収穫は増大する。同様に、カルバリーの十字架上におけるキリストの死は、永遠の生命にいたる実を結ぶのである。この犠牲について瞑想することは、その実として永遠の時代にわたって生きる者の輝かしいよろこびである。

自分自身の生命を保存する穀物は実を生ずることができない。それは一粒のままである。キリストは、もしその気になれたら、ご自分が死ななくてもよかったのである。しかし、もし死ななかつたら、キリストはひとりのままでなければならない。息子娘たちを神につれて行くことはおできにならない。ご自分の生命を放棄することによってのみ、キリストは人類に生命を与えることがおできになる。死ぬために地に落ちることによってのみ、キリストはあの大収穫、すなわち諸国諸族諸民の中から神のみもとにあがなわれた大群衆の種となることがおできになるのである。

キリストはこの真理にすべての人が学ばねばならない自己犠牲の教訓を結びつけてあられる。「自分の命を愛

する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう」(ヨハネ一ノ二五)。キリストとともに働く者として実を生じさせたい者は、みなまず地に落ちて死なねばならない。生命はこの世の必要というねの中に投げ込まねばならない。自己を愛する思い、自己中心の思いは滅びなければならぬ。自己犠牲の法則は、自己保存の法則である。農夫は穀物を投げ捨てることによってそれを保存する。人間の生命も同様である。与えることは生きることである。保存される生命は神と人との奉仕に惜し気なく与えられる生命である。キリストのためにこの世の生命を犠牲にする者は永遠にいたる生命としてこれを保つのである。

自分のために費やされる人生は食べてしまった穀物のようなものである。それは消えて無くなり、何の増加もない。人はできるだけ自分のために集めるかもしれない。自分のために生き、考え、計画するかもしれない。しかし彼のいのちは過ぎ去って、何もかも残らない。自分に仕える法則は自分を滅ぼす法則である。

「もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのある所に、わたしに仕える者もまた、あるであろう。もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて下さるであろう」(ヨハネ一ノ二六)。イエスとともに犠牲の十字架を負った者はキリストとともにその栄光にあずかる者となる。ご自分の弟子たちがキリストとともに栄光を受けるということが、屈辱と苦痛の中にあつてキリストのよろこびであつた。彼らはキリストの自己犠牲の実である。彼らのうちにキリストご自身の品性と精神が完成されることがキリストにとって報いであり、永遠にわたるよろこびである。彼らは自分たちの骨折と犠牲の実がほかの人たちの心と生活にみられるとき、キリストのこのよろこびにあずかるのである。彼らはキリ

ストとともに働く者であって、天父はみ子をあがめられるのと同じに、彼らをあがめられる。

ギリシヤ人たちのことは、異邦人が集められる前兆であったが、イエスの心にその使命の全体を思わせた。あがないの働きが、天で計画された時から、死が迫った今にいたるまで、イエスの前を通り過ぎた。神秘の雲が神のみ子をおおっているようであった。その暗さがイエスの近くににいる人々に感じられた。イエスは物思いにふけておられた。ついにその沈黙はイエスの悲しみに沈んだ声によって破られた。「今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい」(ヨハネ二二ノ二七)。事前にキリストはすでににがいさかずきから飲んでおられた。キリストの人性は、ご自分が捨てられる時を思って、たじろいでいた。その時には、どう見ても、キリストは神からさえ捨てられ、キリストが神から打たれ、たたかれ、苦しめられるのをすべての者が見るのであった。キリストは、人目にさらされ、極悪の罪人のように取り扱われ、恥ずかしい不名誉な死に会うことをちゅうちよされた。暗黒の勢力との戦いについての予感、人類の罪とがについての恐るべき重荷の思い、罪のゆえの天父の怒りが、イエスの精神をめいらせ、死の青白さをイエスの顔にひるがらせた。その時、天父のみこころに対する気高い服従がみられた。「わたしはこのために、この時に至ったのです。父よ、み名があがめられますように」(ヨハネ二二ノ二七)。キリストの死によってのみ、サタンの王国は打ち倒されるのである。そうすることによってのみ、人があがなわれ、神はあがめられるのである。イエスは苦悩に同意され、犠牲を受け入れられた。天の大君イエスが罪を負う者として苦難を受けることに同意された。「父よ、み名があがめられますように」と、イエスは言われた(ヨハネ二二ノ二八)。キリストがこれらのことばを語られる

と、頭上にただよっていた雲の中から、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」という応答があった(ヨハネー二ノ二八)。キリストの全生涯は、かいばおけの時からこのことばが語られた時まで、神の栄光をあらわしていた。そしてきたるべき試練に、神および人としてのキリストの苦難によって、実に天父のみ名があがめられるのであった。

この声がきこえると、光が雲からさして、あたかも無限な力の神の両腕が火の壁のようにキリストをかこむかのように、キリストをとりまいた。人々は恐れと驚きの念でこの光景を見た。だれもあえて口を開こうとしなかった。だまって息をこらしたまま、みんなはイエスを見つめて立っていた。天父のあかしが与えられると、雲は晴れて天に散った。天父とみ子との目に見えるまじわりはその時やんだ。

「すると、そこに立っていた群衆がこれを聞いて、『雷がなったのだ』と言い、ほかの人たちは、『御使が彼に話しかけたのだ』と言った」(ヨハネー二ノ二九)。しかしたずねてきたギリシヤ人たちは、その雲を見、その声をきき、その意味をさとって、実際にキリストをみとめた。彼らには、キリストが神からつかわれたおかたとしてあらわされた。

公生涯の初めにイエスがバプテスマを受けられた時に、神のみ声がきこえ、それは山上の変貌の時にふたたびきこえた。いま公生涯の終わりに、それはもっと大ぜいの人々によって、特殊な事情のもとに三度聞かれた。イエスはユダヤ人の状態について最も厳粛な事実を語られたばかりであった。主は最後の訴えをなし、ユダヤ人の滅亡を宣告されたのだった。いま神はふたたびみ子の使命に印をおされた。神はイスラエルがこぼんだおかたを

みとめられた。「この声があったのは、わたしのためではなく、あなたがたのためである」とイエスは言われた（ヨハネ一―ノ三〇）。それはイエスがメシヤであられることについての最高の証拠、すなわちイエスが事実を語られ、神のみ子であられるという天父のしるしであった。

イエスは続けて言われた、『今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう。』イエスはこう言って、自分がどんな死に方で死のうとしていたかを、お示しになったのである」（ヨハネ一―ノ三一―三三）。いまは世界の危機である。もしわたしが人類の罪のためにあがないの供え物となれば、世は明るくなるであろう。人の魂をとらえているサタンの束縛はたちきられるであろう。けがされた神のみかたちは人性のうちに回復され、信じる聖徒たちの家族はついには天国を嗣ぐであろう。これがキリストの死の結果である。救い主は、目の前に浮かぶ勝利の光景について瞑想にふけられる。主は十字架が、それも残酷で不名誉な十字架が、あらゆる恐怖を伴っているにもかかわらず、栄光に輝いているのをごらんになる。

しかし人類のあがないの働きが十字架によってなしとげられる全部ではない。神の愛が宇宙にあらわされる。この世の君が追い出される。サタンが神に向けた非難が反ばくされる。サタンが天に投げかけた非難は永遠に除かれる。人類はもちろん天使たちもあがない主に引きよせられる。「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」と、イエスは言われた（ヨハネ一―ノ三二）。

キリストがこれらのことばを語られた時、周囲に多くの人々がいたが、そのひとりと言った、『わたしたちは

律法によって、キリストはいつまでも生きておいでになるのだ、と聞いていました。それなのに、どうして人の子は上げられねばならないと、言われるのですか。その人の子とは、だれのことですか』。そこでイエスは彼らに言われた、『もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかないようにしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい』(ヨハネ一ノ三四―三六)。

「このように多くのしるしを彼らの前でなしたが、彼らはイエスを信じなかった」(ヨハネ一ノ三七)。彼らはかつて救い主に「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか」とたずねたことがあった(ヨハネ六ノ三〇)。無数のしるしが与えられたが、彼らは目をとじ、その心はかたくなであった。いま天父がご自身で語られ、彼らはそれ以上のしるしを求めることができないのに、それでも彼らは信じようとしなかった。

「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである」(ヨハネ一ノ四二)。彼らは神の承認よりも人の称賛を好んだ。非難と恥をまめかれるために彼らはキリストをこぼみ、さし出された永遠の生命をこぼんだ。それ以来幾世紀の間、これと同じことをしている者がどんなに多いことだろう。「自分の命を愛する者はそれを失い」という救い主の警告のことばは、このようなすべての者にあてはまるのである(ヨハネ一ノ二五)。イエスは言われた、「わたしを捨てて、わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、

終りの日にその人をさばくであろう」(ヨハネ二二ノ四八)。

おとずれの時がわからない人たちは気の毒である。ゆつくりと悲しそうに、キリストは宮の境内を永久に去られた。

オリーブ山上で

本章はマタイ二四章マルコ一三章ルカ二一ノ五一
三八にもとづく

「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と祭司たちと役人たちに言われたキリストのことばは、彼の心に恐怖を生じさせた。彼らは無関心をよそおっていたが、このことばの意味についてたえず疑問が心のうちにわきあがってくるのであった。目に見えない危険が彼らに迫っているように思えた。国民の誇りである壮麗な宮がまもなく廃虚になるということだろうか。弟子たちもまた悪い予感をいだいて、イエスが何かもつとはつきりした説明をされるのを熱心に待った。イエスといっしよに宮から出て行くとき、彼らはその強さと美しさにイエスの注意を向けた。宮の石はまじりけのない純白の大理石で、中には信じられないほど巨大なものもあった。壁の一部は、ネブカデネザルの軍隊の包囲にも耐えたものであった。完全な石工技術によって、それはあたかも石切場からそっくり切り出された一つのどっしりした石のように見えた。このような偉大な壁がどうしてこわされようかと、弟子たちは理解できなかった。

キリストの注意が宮の壮麗さにひきつけられた時、こぼれたこのおかたの無言の思いはどんなであつたらう。

なるほど主の目の前の景色は美しかったが、主は、悲しみをこめて、わたしには何もかもわかっているとわられた。なるほど建物はすばらしい。あなたがたはこの壁をさして、破壊されそうにみえないと言うが、わたしのことは聞きなさい。「その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなる」日がくるのである(マタイ二四ノ二)。

キリストのことは多くの人々が聞いているところで語られた。しかしイエスがひとりになられて、オリブ山にすわってあられると、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレがみもとにやってきて、「どうぞお話してください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」と言った(マタイ二四ノ三)。イエスは弟子たちに答えるにあたって、エルサレムの滅亡とご自分がおいでになる大いなる日とを別々にとりあげられなかった。主はこの二つの出来事をいっしょにまげて描写された。イエスがご自分のごらんになった通りに未来の諸事件を弟子たちに示されたら、彼らはその光景に耐えることができなかったであろう。彼らに対する思いやりから、主は二つの大きな危機をまげて描写し、その意味を弟子たちが自分で学ぶようにされた。主がエルサレムの滅亡のことを言われたとき、その預言のことばはエルサレムの滅亡という事件を超えて最後の大火の日にまで及んでいた。その日には、「主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやあうことがない」(イザヤ書二六ノ二一)。この話の全体は、ただ弟子たちのためだけでなく、地上歴史の最後の場面に住む者たちのために語られたのであった。

弟子たちの方を向いて、キリストは、「人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう」と言われた(マタイ二四ノ四、五)。多くのいつわりのメシヤたちが現われて、奇跡を行なうと称し、ユダヤ国民の救済の時が来たと宣言する。これらの者は多くの人々をまちがった道へ導くのである。キリストのこのことは成就した。キリストの死とエルサレム包囲との間に、多くのいつわりのメシヤたちが現われた。しかしこの警告は現代の世に住んでいる者たちのためにも与えられたのである。エルサレムの滅亡に先立って行なわれたのと同じ欺瞞が、各時代を通じて行なわれてきたが、それはふたたび行なわれるであろう。

「また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない」(マタイ二四ノ六)。エルサレム滅亡の前に、人々は主権を争った。皇帝たちは殺害された。王の近臣と思われる人たちが殺された。戦争と戦争のうわさがあつた。「それは起らねばならないが、まだ(一国家としてユダヤ国家の)終りではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである」(マタイ二四ノ六―八)。ラビたちがこれらのしるしを見ると、彼らはそれが神の選民を束縛したために諸国にくだる神の刑罰であると宣言するであろうと、キリストは言われた。こうしたしるしはメシヤ来臨のしるしであると、彼らは宣告するであろう。あざむかれてはならない。それらは神の刑罰のはじまりである。人々は自分自身に満足してきた。彼らは悔い改めていやされることがなかった。彼らが束縛からの解放のしるしと言っているしるし

は、彼らの滅亡のしるしである。

「そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう」(マタイ二四ノ九、一〇)。これらのすべてのことをクリスチャンは経験した。父親と母親は子供たちを裏切った。子供たちは親を裏切った。友人は友人をサンヒドリンに引き渡した。迫害者たちはステパノ、ヤコブその他のクリスチャンたちを殺すことによってその目的を達成した。

神は、ご自分のしもべたちを通して、ユダヤ人に最後の悔い改めの機会をお与えになった。神の証人たちが捕えられたり、裁判を受けたり、投獄されたりしたときに、神はご自身をあらわされた。それでも裁判官たちは彼らに死刑を宣告した。「この世は彼らの住む所ではなかった」(ヘブル一ノ三八)。ユダヤ人たちは、彼らを殺したことによって、神のみ子を新たに十字架につけた。同じことがふたたび起るであろう。当局は宗教の自由を制限する法律を作るであろう。彼らは神だけのものである権利を自分たちのものにするであろう。彼らは神のみが支配されるべき良心を自分たちが強制することができると考えるであろう。今でさえそれが始まっている。この働きはあし進められて、ついには越えることのできない限界にまで達するであろう。そのとき神は、戒めを守る忠誠な民のために手を出されるのである。

迫害が起こるたびに、それを目撃する者たちは、キリストの側に立つかそれとも反対の側に立つかを決定する。不正な宣告を受ける人たちに同情を示す者たちはキリストへの愛着を示しているのである。ほかの者たちは真理

の原則が彼らの習慣をたち切るのでつまずいてしまう。多くの者がつまずき倒れ、かつて擁護していた信仰をすてる。試みの時に自分自身の安全を求めて背信する者たちは、偽りのあかしをたて、兄弟たちを裏切る。キリストは、光をこぼむ者たちが異常で冷酷な行動をとってもわれわれが驚かないように、このことについて警告された。

キリストはエルサレムにのぞむ滅亡のしるしを弟子たちに与え、のされる方法を彼らに語られた。「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたときとみなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい。また、いなかにいる者は市内にはいってはいけない。それは、聖書にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ」(ルカ二二・二〇―二二)。この警告は、四十年のちすなわちエルサレムの滅亡の時に注意するように与えられたのであった。クリスチャンはこの警告に従ったので、エルサレムの陥落のときには、クリスチャンはひとりも死ななかった。

「あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ」とキリストは言われた(マタイ二四・二〇)。安息日をつくられたおかたは、それを廃してご自分の十字架につけるようなことをされなかった。安息日はキリストの死によって無効とされなかった。キリストが十字架につけられてから四十年のちにも、それは依然として聖なるものとみなされるのであった。弟子たちは逃げるのが安息日に起こらないように、四十年の間祈るのであった。

キリストの話は、エルサレムの滅亡から、この地上歴史の鎖の最後の環であるもっと大きな事件、すなわち神

のみ子が威厳と栄光のうちに来臨されることに急速に移って行った。この二つの事件の間に、長い暗黒の世紀、キリストの教会に血と涙と苦悩のみられる幾世紀が、キリストの目の前に開かれていた。弟子たちはその時このような光景を見るのに耐えられなかったので、イエスは短いことばを述べただけでこの光景を通り抜けられた。「その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである。もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められるであろう」(マタイ二四ノ二一、一二)。千年以上にわたって、かつて世に知られなかったような迫害が、キリストに従う者たちにのぞむのであった。キリストの忠実な証人たちが幾百万となく殺されるのであった。神がご自分の民を保存するために手をさしのべられなかったら、全部滅びたであろう。「しかし選民のためには、その期間が縮められるであろう」と主は言われた(マタイ二四ノ二二)。

いま主は、まちがう余地のないことばをもって、主の再臨についてお語りになり、その来臨に先立つ危険について警告を世にお与えになる。「そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。見よ、あなたがたに前もって言っておく。だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。ちようど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」(マタイ二四ノ二三―二七)。エルサレム滅亡のしるしの一つとして、キリストは、「多くのにせ預言者たちが起って、多くの人々を惑わ

すであろう」と言われた。事実にせ預言者たちが起こって、民をあざむき、多数の者を荒野へ連れて行った。魔術士たちと占い師たちは奇跡を行なう力があると言って、民を引きよせ、山の淋しいところへ連れて行った。しかしこの預言は、末の世のためにも語られたのである。このしるしは再臨のしるしとして与えられている。今でさえもにせキリストたちやにせ預言者たちが主の弟子たちを迷わすためにしるしやふしぎを見せている。「見よ、彼は荒野にいる」という叫びをわれわれは聞かないだろうか。幾千の人々がキリストをみいだそうと望んで荒野へ行かなかただろうか。人々が死んだ靈魂とまじわるのだと称している幾千の集会から、「見よ、彼はへやの中にいる」という叫びがいま聞こえないだろうか。これは降神術が叫んでいる主張である。しかしキリストは何と言ってあられるだろうか。「信じるな。ちよつど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」(マタイ二四ノ二六、二七)。

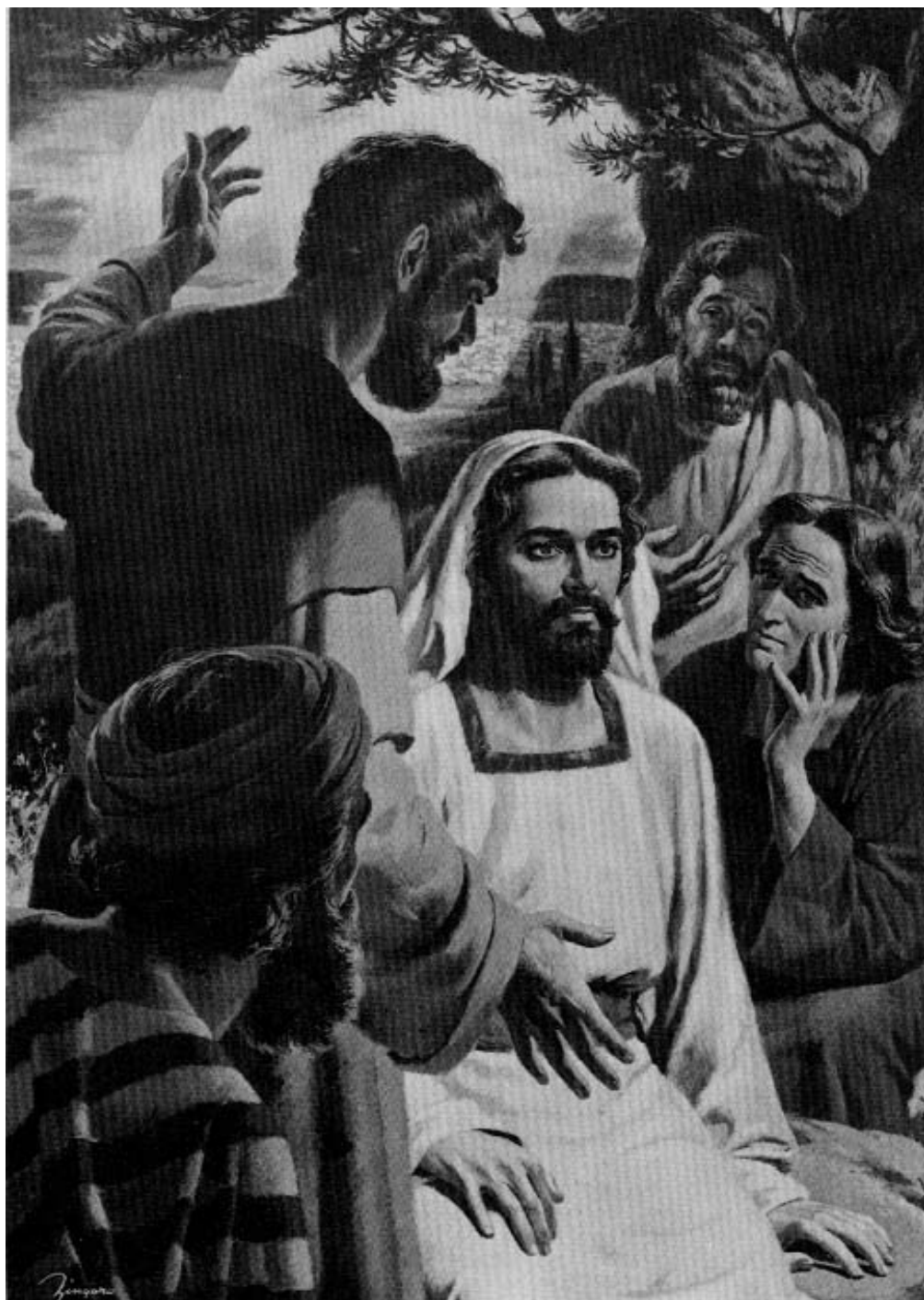
救い主は来臨のしるしをお与えになっている。のみならず、主はこれらの最初のしるしが現われる時を定めてあられる。「しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。また、彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」(マタイ二四ノ二九―三二)。

法王による大迫害が終わると、日は暗く月はその光を放つことをやめると、キリストは言明された。次に星が

天から落ちるのである。そして主は言われる、「いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」(マタイ二四ノ三二、三三)。

キリストはご自分の来臨についてしるしをお与えになった。われわれはキリストが戸口まで近づいておられる時を知ることができると、主は言明しておられる。主はこれらのしるしを見る人々について、「これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない」と言われる(マタイ二四ノ三四)。これらのしるしは、すでに現われた。いまや主の来臨が迫っていることをわれわれは確実に知っている。「天地は滅びるであらう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」と主は言われる(マタイ二四ノ三五)。

キリストは雲に乗って大いなる栄光のうちにこられる。多くの輝く天使たちがキリストにつき従う。主は、死人をよみがえらせ、生ける聖徒たちを栄光から栄光へ変えるためにこられる。主を愛し、その戒めを守った者たちに栄光を与え、彼らをみもとに連れて行くために、主はおいでになる。主は、彼らを、またご自分の約束をお忘れにならなかった。家族はふたたびいっしょになる。死者を見ると、神のラッパが鳴りわたる朝のことを思うことができる。その時、「死人は朽ちない者によみがえらせられ、わたしたちは変えられるのである」(コリント第一・一五ノ五二)。もうしばらくすれば、「麗しく飾った王」にお会いするのである(イザヤ書三三ノ一七)。もうしばらくすれば、主はわれらの目から涙を全くぬぐいとってください。もうしばらくすれば、主はわれらを「その栄光のまえに傷なき者として、喜びのうちに立たせて下さる」(ユダ二四)。だから主は、来臨のしるしを



弟子たちはイエスの再臨について尋ねた。主は、救い主の再臨が迫っていることを全地の人々が知ることができるような特別なしるしを示された。

お与えになった時に、「これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」と言われた(ルカ二二ノ二八)。

しかしキリストは、来臨の日時をお示しにならなかった。主ご自身も再臨の日時を知らせることができないとはつきり弟子たちに言われた。もしこのことを自由に示すことがおできになったら、たえず期待して待つ態度を持ちつつけるように弟子たちに勧める必要はなかったであろう。主の来臨の日時を知っていると主張する人たちがいる。彼らは熱心に将来を描く。しかし主は彼らにそうした立場をとらないようにと警告された。人の子がふたたびおいでになる正確な日時は神の奥義である。

キリストはことばをつづけて、来臨される時の世の状態を指摘される。「人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう」(マタイ二四ノ三七―三九)。キリストはここに、この世の千年期、すなわち、すべての人が永遠のために備えをする千年間についての考え方を示してはおられない。人の子がふたたびおいでになる日は、ノアの日と同じようであろうと、主は言っておられる。

ノアの時代はどうだっただろうか。「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪いことばかりであるのを見られた」(創世記六ノ五)。洪水前の世界の住民は、エホバから離れ、その聖なるみところを行なうことをこぼんだ。彼らは自分自身のきよくない想像とゆがめられた考え方に従った。彼らが滅ぼ

されたのはその悪のためであった。今日、世は同じ道をたどっている。千年期の栄光についてのうれしがらせるようなしるしはどこにもない。神の律法を犯している者たちは地を悪で満たしている。かけごと、競馬、ばくち、放とう、好色的な行為、抑制のない情欲などのために、世は非常な勢で暴虐に満たされている。

エルサレムの滅亡の預言の中に、キリストは、「また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」と言われた(マタイ二四ノ二―一四)。この預言はふたたび成就するのである。当時はびこっていた不義は今の時代にもそのまま見られる。福音の宣伝についての預言も同様である。エルサレムの陥落前に、パウロは、聖霊に感じて書き、「この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられた」と、宣言した(コロサイ一ノ二三)。同じように、いまの子がこられる前に、この永遠の福音は、「あらゆる国民、部族、国語、民族」に宣べ伝えられるのである(黙示録一四ノ六)。神は「世界をさばくためその日を定め」られた(使徒行伝一七ノ三一)。キリストはその日がいっぱいまるかをお告げになっている。主は世のすべての人が悔い改めるとは言われないで、「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」と言っておられる(マタイ二四ノ一四)。世に福音を伝えることによって、主の再臨を早めることが、われわれの力できる。われわれは神の日の到来を待っているだけでなく、これを早めるのである。キリストの教会が命じられた働きを主がお定めになった通りにしていたら、全世界に対する警告はすでに終わって、主イエスは力と大

いなる栄光をもってこの地上においでになっていたのである。

キリストは、来臨についてのしるしをお与えになってから、「このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。…絶えず目をさまして祈っていなさい」と言われた（ルカ二一ノ三一、三六）。神はきたるべきさばきについていつも警告をお与えになってきた。自分たちの時代に対する神のみことばを信じ、神の戒めに従って信仰を实践した人たちは、従わない者たちや、信じない者たちの上に落ちかかったさばきをまぬかれた。「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわたしは認めただからである」ということばがノアに与えられた（創世記七ノ一）。ノアは従い、そして救われた。ロトに、「立つてこの所から出なさい。主がこの町を滅ぼされます」ということばが与えられた（創世記一九ノ一四）。ロトは天の使者たちの守りに身をゆだね、そして救われた。そのようにキリストの弟子たちは、エルサレムの滅亡について警告を与えられた。きたるべき滅亡のしるしを見守っていた人たちは都をのがれて、滅亡をまぬかれた。そのようにいまわれわれは、キリストの再臨と世にのぞもうとしている滅亡について警告が与えられている。この警告に注意する者は救われるのである。

キリスト来臨の正確な時はわからないのだから、目をさましているようにと命じられている。「主人が帰ってきたとき、目を覚めているのを見られる僕たちは、さいわいである」（ルカ二一ノ三七）。主の来臨を待ち望んでいる者たちは、何もしないでただ期待して待っているのではない。キリストの来臨を期待することによって、人は主を恐れ、不義に対する主のさばきを恐れるのである。彼らは主がさし出されたあわれみをこばむ大きな罪

を自覚するのである。主を待ち望んでいる者たちは真理に従うことによって自らの魂をきよめる。彼らは油断のない警戒に熱心な働きを結合する。彼らは、主が戸口におられることを知っているので、魂の救いのために天使たちと協力して働くように熱意をよび起こされる。こういう人たちが主の家族に、「時に応じて定め of 食事をそなえさせる忠実な思慮深い」しもべたちである(ルカ二二ノ四二)。彼らはいま特にあてはまる真理を宣べ伝えていく。エノク、ノア、アブラハム、モーセがそれぞれの時代のために真理を宣べ伝えたように、キリストのしもべたちはいまこの世代に対する特別の警告を与えるのである。

ところがキリストはもう一つの階級の人々をお示しになった。「もしその僕が、主人の帰りがおそいと心の中で思い、男女の召使たちを打ちたたき、そして食べたり、飲んだりして酔いはじめるならば、その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰って来るであろう」(ルカ二二ノ四五、四六)。

この悪いしもべは、「主人の帰りがおそい」と心の中で思っている。彼は、キリストがあいでにならないとは言わない。彼は主の再臨という考えを嘲笑しない。しかし心の中で、またその行為とことばによって、主の来臨が遅いと宣言する。彼は、ほかの人たちの心から、主はすみやかにこられるという確信を追い出す。彼の影響で、人々の間に独断的で不注意な遅れが生じる。人々の世俗心とまひ状態がますますひどくなる。世俗的な欲望、墮落した思いが心を占領する。悪いしもべは、酔っぱらいといっしよに飲み食いし、世の人々といっしよになって快楽を求める。彼は仲間のしもべたちを打ちたたいて、主人に忠実な者たちを責め、非難する。彼は世俗の人たちにまじる。彼は世俗の人々と同じように罪を犯す。それは恐るべき同化作用である。世俗の人たちといっしよ

に彼はわなに捕えられる。「その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰ってきて、彼を厳罰に処し、偽善者たちと同じ目にあわせるであろう」(マタイ二四ノ五〇、五一)。

「もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない」(黙示録三ノ三)。キリストの来臨はにせ教師たちの不意を襲つ。彼らは、「平和だ無事だ」と言っている(テサロニケ第一・五ノ三)。エルサレムが陥落する前の祭司たちと教師たちのように、彼らは教会が世俗的な繁栄とほまれを受けることを期待する。彼らは時のしるしをこの事の予表として解釈する。しかし靈感のことばには何と言われているだろうか。「突如として滅びが彼らをおそつて来る」(テサロニケ第一・五ノ三)。全地に住んでいるすべての者たちに、この世をわが家としているすべての者たちに、神の日はわなのようにやってくる。それは忍び足の盗人のように彼らにやってくる。

世は放とうに満ち、邪悪な快樂に満ちて、現世的安全の中に眠っている。人々は主の来臨をずっとこのちのこにしている。彼らは警告をあざ笑つ。「すべてのものは天地創造の初めからそのままであつて、変つてはいない」。「あすも、きょうのようであるだろう、すばらしい日だ」という高慢な誇りが表明される(ペテロ第二・三ノ四、イザヤ書五六ノ一二)。もっと大いに楽しもうというのである。しかしキリストは、「見よ、わたしは盗人のように来る」と言われる(黙示録一六ノ一五)。世の人々が嘲笑して、「主の来臨の約束はどうなったのか」とたずねているその時に、しるしは成就しつつある(ペテロ第二・三ノ四)。彼らが「平和だ無事だ」と叫んでいる時に、突然の滅びがのぞみつである(テサロニケ第一・五ノ三)。嘲笑する者、すなわち真理をこばむ者が僭越

になった時、各方面の金もうけ仕事が原則を無視してくりかえされている時、研究者が聖書以外のあらゆる知識を熱心に求めている時、キリストは盗人のようにこられる。

世のすべてのものが激動している。時のしるしは険悪な兆候を示している。きたるべき事件が影を前方に投げている。神のみたまは地から引き上げつつあり、海と陸に次々と災害が起こっている。嵐、地震、火事、洪水、あらゆる種類の殺人が起こっている。だれが将来を読むことがきよう。どこに安全があるだろう。人についても、この世についても保証は何もない。人々は自分の選んだ旗の下に急いで参加している。落ちつかないで彼らは自分たちの指導者たちの動きを待ち、見守っている。主の現われを待ち、見守り、そのために働いている人たちがいる。もう一方の種類の人たちは最初の大背信者の統率下に参加している。避けるべき地獄と獲得すべき天国とがあることを全心全霊から信じている人は少ない。

危機は徐々にわれわれに及びよっている。太陽は空に輝き、いつもの軌道を通り、天はいまも神の栄光をあらわしている。人々はいいかかわらず飲み食い、植え、建て、めとり、とついでいる。商人たちはあいかわらず売り買いしている。人々は最高の地位を争ってお互いにおしのけ合っている。快樂を愛する者たちがあいかわらず劇場や、競馬や、ばくち場におしかけている。最高の興奮が行き渡っているが、恩恵の時は急速に閉じられつつあり、各人の運命が永遠に決定されようとしている。サタンは自分の時が短いことを知っている。サタンは人々が欺かれ、惑わされ、心を占領され、夢中になって、ついには恩恵の日が終わり、恵みの戸が永遠に閉ざされるように、すべての手下を働かせてきた。

オリブ山での主の警告のことは、幾世紀を経て今日のわれわれに厳粛にひびいてくる。「あなたがたが放縱や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。…これらの起るうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」(ルカ二一ノ三四、三六)。

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者」

本章はマタイ二五ノ三一―四六にもとづく

「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて……彼らをより分け」るであろう（マタイ二五ノ三一）。このようにキリストは、オリブ山で、大いなるさばきの日の光景を、弟子たちに描写された。しかもこの決定は、一つの点にかかっていると、主は言われた。国民が主の前に集められる時、そこには二つの階級しかないのであって、彼らの永遠の運命は、貧しい者や悩める者を通して主のためにつくしたか、それともつくすことを怠ったかによってきまるのである。

その日には、キリストは、ご自分が人々のあがないのために生命をささげて彼らのためにつくされた大いなるみわざを彼らの前にお示しにならない。主は、人々が主のためになした忠実な働きをお示しになる。主はその右手を置かれる人々にこう言われる、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であつたときに宿を貸し、裸であつたときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてく

れたからである」(マタイ二五ノ三四―三六)。しかしキリストからほめられる人たちは、自分がキリストに奉仕していたことを知らない。彼らのとまどった質問に、主はこう答えられる、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ二五ノ四〇)。

イエスは、弟子たちに、あなたがたはすべての人々に憎まれ、迫害され、苦しめられると言われた。多くの者が家から追われ、貧乏になるだろう。多くの者が病氣と欠乏に苦しめられるだろう。多くの者が獄に入れられるだろう。キリストのために友人や家庭を捨てるすべての者に、主は、この世で百倍を約束された。いま主は兄弟たちに奉仕するすべての者に、特別な祝福を保証された。わたしの名のために苦しみを受けるすべての者のうちにあなたがたはわたしを認めるのであると、イエスは言われた。わたしに奉仕するように、あなたがたは彼らに奉仕すべきである。これがあなたがたがわたしの弟子である証拠である。

天の家族に生まれた者はみな、特別な意味において主の兄弟である。キリストの愛が主の家族を結びつけ、この愛があらわされるところにはどこにでも天の関係があらわされる。「すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている」(ヨハネ第一・四ノ七)。

さばきのときに、キリストからほめられる者たちは、神学についてはほとんど知っていなかったかも知れないが、彼らはキリストの原則を心に宿していた。天来のみたまの感化を通して、彼らはまわりの人たちの祝福になっていた。異教徒の中にさえ、親切心のある人たちがいる。いのちのみことばを聞かないうちから、彼らは宣教師たちと親しくなり、自分自身の生命の危険をおかしてまで宣教師たちに奉仕した。異教徒の中には、知らない

で真の神を礼拝している人たち、すなわち人を通して光を与えられたことのない人たちがいるが、それでも彼らは滅びないのである。彼らは書かれた神の律法については無知であるが、自然を通して語りかける神のみ声を聞き、律法に要求されていることを実行した。彼らのわざは聖霊が彼らの心に触れた証拠であって、彼らは神の子らとして認められる。

諸国民や異教徒の中のへりくだる者たちは、救い主の口から、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」ということばを聞いて、どんなに驚き、よろこぶことだろう（マタイ二五ノ四〇）。限りない愛であられる主の心は、主に従う者たちがその嘉納のことばを聞いて驚きとよろこびの思いで見上げるとき、どんなにかよろこばれることだろう。

しかしキリストの愛は、ある種類の人たちに限られているのではない。主は人類のひとりびとりと一体になれる。われわれが天の家族の一員となるために、主は地の家族の一員となられた。主は人の子であり、したがってアダムのすべての息子娘にとって兄弟である。主に従う者たちは、滅びつつあるまわりの世の人々と無関係だと思つてはならない。彼らは人類という大きな網の一部である。天の神は、彼らを聖徒の兄弟であると同時にまた罪人の兄弟として見ておられる。キリストの愛は、墮落した者、まちがっている者、罪深い者を包む。墮落した魂をひきあげるためになされたすべての親切な行為、すべての愛の行為は、主に対してなされたものとして受けとられる。

天のみ使たちは救いを継ぐ者たちに仕えるために送られる。救いを継ぐ者たちがだれであるかはいまわから

ない。だれが勝利し、光のうちにある聖徒の嗣業にだれがあずかるかはまだ明らかでない。しかし天のみ使たちは地の果てから果てまで行きめぐって、悲しんでいる者たちを慰め、危険に陥っている者たちを保護し、人々の心をキリストにみちびいている。ひとりとしておろそかにされたり、見過ごされたりしない。神は人をかたより見られるおかたではなく、ご自分がつくられたすべての魂を同じように守られる。

困り苦しんでいるクリスチャンたちに戸を開く時、あなたは目に見えない天使たちを迎え入れているのである。あなたは天使たちとのまじわりを招いているのである。彼らはよろこびと平和のきよい雰囲気をもってくる。彼らが口に賛美をもってやってくるとき、天ではそれに応ずる歌の調べが聞かれる。愛の行為の一つ一つに天では音楽がかなでられる。天父はそのみ座から、無我の働き人をご自分の最もうまい宝にかぞえられる。

キリストの左側にいる者たち、すなわち貧しい者や苦しんでいる者を通してキリストをおろそかにした人たちは、自分の罪を意識しない。サタンが彼らを盲目にしたのである。彼らは兄弟たちに対してどうすべきであったかを認めなかった。彼らは自分のことばかり考えていて、他人の必要をかまわなかった。

神は金持の人たちが神の苦しんでいる子らを助け慰めるように、彼らに富をお与えになった。ところが彼らは、他人の欠乏に対して無関心であることが多い。彼らは貧しい兄弟たちよりも自分はえらいのだと思っている。彼らは貧しい人の立場になってみない。貧しい人たちの試みや戦いがわからないので、彼らの心から同情が消えてなくなる。高価な住居やすばらしい教会堂の中にいて、富める人たちは貧しい人たちをよせつけない。困っている人たちを恵むために神がお与えになった金銭が、わがままな高慢心と利己心のために費やされる。貧しい人たち

は神のやさしいあわれみについて与えられるはずの教訓を毎日奪われている。神は、生活の必需品を与えて楽しく暮せるように十分な備えをされたのである。彼らは生活を窮屈にする貧乏を否応なしに感じさせられて、ねたみ、うらやみ、悪い憶測に満たされるように誘惑されることがしばしばある。自分で欠乏の重荷に耐えたことのない人たちは、しばしば貧しい人たちに侮蔑的な態度をとり、彼らに自分たちは貧民のようにみられているという気持ちを起こさせる。

しかしキリストはすべてそうしたことを見ておられ、飢えかわいていたのはわたしだったのだと言われる。見知らぬ人はわたしだったのだ。病んでいたのはわたしだったのだ。獄にはいつていたのはわたしだったのだ。あなたがごちそうのいっぱい並んだテーブルについて食べていた時に、わたしはあばらや人通りのない街路で飢えていた。あなたがぜいたくな家で安楽に暮していた時に、わたしは頭を横たえる場所もなかった。あなたのたすきの中にぜいたくな衣服がいっぱいつまっていた時に、わたしは着るものが何もなかった。あなたが快楽を追いかけていた時に、わたしは獄の中で弱りはてていたのだ。

あなたが飢えている貧しい人たちにほんの少しのパンをしびしび分け与えた時に、また身を切るような寒さから彼らをおおつために薄っぺらな衣服を彼らに与えた時に、あなたはそれを栄光の主に与えていたのだということを知っていただろうか。あなたの一生の間、わたしはそうした苦しむ者の姿をとってあなたのそばにいたのだ。しかしあなたはわたしを求めなかった。あなたはわたしとのまじわりにはいるうとしなかった。わたしはあなたを知らない。

キリストが地上で生活された場所をおとずれ、キリストが歩まれた場所を歩き、キリストが好んでお教えになった湖のほとりや、キリストがたびたび目をとめられた丘や谷を眺めることができた大きな特権だろうと思う人が多い。しかし、イエスの足跡を歩むために、ナザレやカペナウムやベタニヤに行く必要はない。病床のかたわらや、貧しいあばらやや、大都会の雑踏する横町や、人の心が慰めを必要としている場所ならどこにでも、イエスの足跡がみいだされる。イエスが地上におられた時にされた通りのことをすることによって、われわれはイエスの足跡を歩むのである。

だれでもみな何かすることを見つけることができる。「貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいる」とイエスは言われた(ヨハネ一ノ八)。だからだれでも、自分は主のために働くことのできる場所がないと思うには及ばない。無知と罪の鎖につながれて滅びようとしている幾百千万の魂が、彼らに対するキリストの愛を聞いたこととさえないのである。もしわれわれと彼らの立場が入れかわったとしたら、われわれは彼らにどうしてもらいたいと望むだろうか。われわれは自分の力の及ぶ限り、そうしたことをすべて彼らのためにする最も厳粛な義務がある。われわれはひとりびとりみなキリストの一生の原則によって、さばきの時に立つか倒れるかなければならないのであるが、その原則とは、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりになせよ」である(マタイ七ノ一二)。

救い主は、悲しみに満ち、試みられている魂を世話することのできる教会を建てるために、ご自分のとうとい生命をお与えになった。信者の群れは、貧しく、無教育で、無名の人たちかも知れない。しかしキリストのうち

にあるとき、彼らは、家庭において、近隣において、教会において、また遠い地方において働くことができ、その結果は永遠と同じように遠大なものとなる。

多くの若い弟子たちが、クリスチャン経験のほんの初歩から一步も前進しないのは、この働きがあるそかにされているからである。イエスから「あなたの罪はゆるされた」と告げられたときに、彼ら自身の心のうちに燃えた火は、困っている人たちを助けることによって燃えつつけることができたのである。若い人たちにとって危険の原因となり易い不安定な精力は、祝福の流れとなって流れ出る水路へとみちびくことができたのである。他人のためによいことをする働きによって自我が忘れられるのである。

他人に奉仕する人たちは、大牧者イエスから奉仕される。彼らは自ら生ける水を飲み、そして満足する。彼らは興奮させられる娯楽や、生活上の何らかの変化を熱望しない。興味をひく大きな話題は、滅びようとしている魂をどうやって救うかである。社交的なまじわりは有益であろう。あがない主の愛が人々の心を一つに結びつけるのである。

われわれは、神と共に働く者であることを認めるとき、神の約束について無関心な語りかたをしない。それはわれわれの心のうちに燃え、われわれのくちびるを熱する。無知で、しつげがなく、反逆してばかりいる民に奉仕するためにモーセが召された時、神は彼に、「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう」と約束された(出エジプト記二三ノ一四)。神はまた「わたしは必ずあなたと共にいる」と言われた(出エジプト記二三ノ一二)。この約束は、苦しみ悩む人たちのためにキリストに代って働くすべての者に対する約

束である。

人に対する愛は、神の愛がこの地上にあらわされたものである。栄光の王キリストがわれわれと一つになられたのは、この愛を植えつけ、われわれを一つの家族の子らにするためであった。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」とのキリストの別れのことばが成就されるとき、またキリストが世の人々を愛されたようにわれわれも彼らを愛するとき、その時われわれにとってキリストの使命は達成されるのである(ヨハネ一五ノ一二)。われわれは天国にふさわしい者となる。なぜならわれわれの心のうちには天国があるからである。

「死地にひかれゆく者を助け出せ、滅びによるめきゆく者を救え。あなたが、われわれはこれを知らなかったといっても、心をはかる者はそれを悟らないであろうか。あなたの魂を守る者はそれを知らないであろうか。彼はおのおのの行いにより、人に報いないであろうか」(箴言二四ノ一、一二)。大いなるさばきの日には、キリストのために働かなかった人たち、自分のことばかりを考え、自分のことのために暮していた人たちは、全地の審判者なる神から悪をなした者たちと同列におかれるであろう。彼らは同じ罪の宣告を受けるのである。

どの魂にも責任が負わされている。大牧者イエスは、ひとりびとりに、「あなたに賜わった群れ、あなたの麗しい群れはどこにいるのか」と要求される(エレミヤ書二三ノ二〇)。「主があなたを罰されるときあなたは何と云うであろうか」(エレミヤ書二三ノ二一、英訳)。

しもべの中のしもべ

本章はルカ二二ノ七一八、二四、
ヨハネ一三ノ一一七にもとづく

エルサレムの住宅の二階座敷で、キリストは弟子たちと食卓についておられた。彼らは過越節を守るために集まったのであった。救い主は、十二人の弟子たちとだけで、この過越の食事を守りたいと望まれた。主はご自分の時がきていることを知っておられた。イエスご自身が真の過越の小羊であって、過越の食事の日にいけにえとしてささげられるのであった。主は怒りのさかずきを飲もうとしておられた。まもなく主は最後の苦難のバプテスマをお受けにならねばならなかった。しかし主にとってまだ静かな数時間が残っていたので、愛する弟子たちのためにその時間をすごされるのであった。

キリストの一生は無我の奉仕の一生であった。「仕えられるためではなく、仕えるため」というのが、主のひとつびとつの行為の教えであった(マタイ二〇ノ二八)。しかし弟子たちは、この教えをまだ学んでいなかった。この最後の過越の晩さんの時に、イエスは、実際の例を通してその教えをくりかえされ、それが彼らの頭と心にいつまでも残る印象を与えたのであった。

イエスと弟子たちとの対談は、たいてい静かなよろこびの時間となったので、彼らはみなこれを非常に大切にしていた。過越の晩さんは特別に興味のある場面であったが、イエスはこの時心に悩んでおられた。イエスの心は苦しみ、その顔はくもっていた。イエスが二階の広間で弟子たちと会われたとき、彼らは、何かが主の心に重くのしかかっていることに気がつき、その原因はわからなかったけれども、イエスの悲しみに同情した。

彼らが食卓のまわりに集まると、主は、心を動かされるような悲しい口調で言われた、『わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた。あなたがたに言って置くが、神の国で過越が成就する時までは、わたしは二度と、この過越の食事をすることはしない』。そして杯を取り、感謝して言われた、『これを取って、互に分けて飲め。あなたがたに言うておくが、今からのち神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったものを、いっさい飲まない』(ルカ二二ノ一五―一八)。

キリストは、「この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された」(ヨハネ一三ノ一)。主はいま十字架の影の中におられ、その心に苦しみ悩んでおられた。主は、ご自分が裏切られるときに捨てられることを知っておられた。主は、犯罪者が受ける最も屈辱的な方法でご自分が死刑にされることをご存じであった。主は、ご自分が救うためにこられた人々の忘恩と残酷さを知っておられた。主はご自分がどんなに大きな犠牲を払わねばならないか、しかもまたそれがどれほど多くの人たちにとってむだであるかをご存じであった。主は、目の前にあるすべてのことを知っておられたのだから、ご自身の屈辱と苦難についての思いに当然圧倒されたかもしれない。しかし主は、これまで主ご自身

のものとして共にいて、主のはずかしめと悲しみと虐待とが過ぎ去ってからは、世に残されて戦わねばならない十二人の弟子たちをござんになった。主はご自身の苦難を思われるとき、その思いはいつも弟子たちと関連していた。主はご自分のことをお考えにならなかった。主の心の中では弟子たちについての心配が一番大きいのであった。

弟子たちといっしょのこの最後の夜、イエスには彼らに話したいことがたくさんあった。主が与えたいと願っておられることを受ける備えができていたら、彼らは、胸の張り裂けそうな苦悩や、失望と不信に陥らないですんだのである。しかしイエスは、ご自分が語らねばならないことに弟子たちが耐えることができないことをお知らせになった。主が彼らの顔をじっとござんになったとき、警告と慰めのことは口の中でとまってしまった。沈黙のうちにしばらくの時が過ぎた。イエスは待つておられるようにみえた。弟子たちの心は平静ではなかった。キリストの悲しみによってめざめさせられた同情心とやさしさは消えてしまっているようにみえた。ご自身の苦難をさし示している主の悲しみに満ちたことは、ほとんど印象に残っていなかった。彼らがお互いにかわす目つきは嫉妬と争いを物語っていた。

「自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうかと言って、争論が彼らの間に、起った」(ルカ二二ノ二四)。キリストの面前で行なわれたこの争いは主を悲しませ、傷つけた。弟子たちは、キリストがご自分の権力を主張されてダビデの位を占められるのだという好き勝手な考えに執着していた。そしてそれぞれに心の中で依然として王国の最高の地位にあこがれていた。彼らは、自分自身にまたお互いの上に勝手な評価をくだし、兄弟たちを自分

よりもりっぱな人としてみないで、自分自身をまず最高とした。ヤコブとヨハネがキリストの王座の右と左にすわりたいと願ったことが、ほかの弟子たちの憤激をひき起こしていた。二人の兄弟があつかましくも最高の地位を求めたことから、十人の弟子たちが怒って、離反の恐れがあった。自分たちはまちがって判断されている、自分たちの忠誠心や才能は認められていないのだと彼らは思った。ヤコブとヨハネに対して最も手きびしかったのはユダだった。

弟子たちが晩さんのへやにはいつて行った時、彼らの心は憤然とした気持ちで一ぱいだった。ユダはキリストのすぐ左側に割りこんだ。ヨハネは右側にいた。もし最高の位置というものがあるなら、ユダはそれを占めようと決心していたが、その位置はキリストの隣であるように思われた。しかもユダは裏切り者であった。

不和の原因がほかにも起こっていた。食事の時には、しもべが客の足を洗うのが習慣だったので、この場合も足を洗う準備ができていた。足を洗うために水差しもたらいも手ぬぐいも用意されていた。ところがしもべがいなかったで、弟子たちがその役を果たす立場にあった。しかし弟子たちはそれぞれ誇りを傷つけられたという思いに負けて、だれもしもべの役割を果たすまいと決心していた。みんなは平然とした無関心さをよそおい、自分たちがすることがあることに気がつかないふりをしていた。沈黙することによって、彼らは自分を低くすることとをこぼんだ。

キリストは、このようにあわれな魂を、サタンが彼らに決定的に勝利することのできないところへどうやってみちびかれるだろう。ただ口先だけで弟子であると言うことが弟子となることではなく、また天国にはいること

を保証するものでもないことを、キリストはどうやってお示しになることができるだろう。真の偉大さは愛の奉仕、真の謙遜にあるということを、キリストはどうやってお示しになることができるだろう。キリストはどのようにして彼らの心に愛を燃やし、また主が彼らに話したいと熱望しておられることをどのようにして彼らにわからせることがおできになるだろう。

弟子たちはお互いに仕えるために動こうとしなかった。イエスは彼らがどうするかを見るためにしばらく待っておられた。それから、天来の教師であられるイエスが、食卓から立ちあがられた。主は動作のじやまになる上着をぬぎ、タオルをとって腰にまかれた。弟子たちは、驚きと興味の念をもって、何事が起こるのかだまって見ている。主は「それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた」(ヨハネ一三ノ五)。この行為が弟子たちの目を開いた。彼らの心は激しい恥ずかしさと不面目な思いに満たされた。彼らは無言の譴責を理解し、自分たちの姿をまったく新しい光のうちに見た。

このようにキリストは、弟子たちに対する愛をあらわされた。彼らの利己的な精神をごろんになって、主の心は悲しみに満たされたが、主は彼らの問題について議論されなかった。その代わりに、主は、彼らが決して忘れることのできない模範をお与えになった。弟子たちに対する主の愛は、簡単にさまたげられたり、消えたりしなかった。主は、「父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを」わかっておられた(ヨハネ一三ノ三)。主はご自分の神性を十分に意識しておられた。しかし主は、王冠と王衣をぬいで、しもべの姿をとられたのであった。地上における主の最後の行為の一つは、

しもべのしたくをしてしもべの役割を果たされることであった。

過越の前に、ユダは祭司たち、律法学者たちともう一度出会って、イエスを彼らの手に引き渡す契約を取りきめていた。それなのに彼は、そのあとで、何の悪いこともしなかったかのように弟子たちの中にまじって過越の食事を用意する働きに関心を示していた。弟子たちはユダの意図について何も知らなかった。彼の秘密を見ぬくことがあできになったのはイエスだけだった。しかし主はユダを暴露されなかった。イエスは彼の魂を求めておられた。主は、滅ぶべき都エルサレムについて泣かれたときこの都に対して感じられたような重荷を、ユダに対して感じておられた。主は、どうしておまえをあきらめることができようと、心の中で泣いておられた。この迫る愛の力をユダは感じた。救い主がご自分の手で彼のよごれた足を洗い、手ぬぐいでふかれたとき、ユダの心はいまこの場で自分の罪を告白してしまおうという衝動に何度もかられた。しかし彼はへりくだるうとしなかった。彼は悔い改めに対して心をかたくなにし、一瞬間おしのけられていたもとの衝動がふたたび彼を支配した。ユダは、今度は、弟子たちの足を洗っておられるキリストの行為につまずいた。イエスがこんなに自らを低くされるのだったら、とてもイスラエルの王になれることはできないと彼は思った。現世の王国における世俗的栄誉に対するいっさいの希望が失われた。キリストに従うことからやはり何の利益も得られないのだとユダは納得した。ユダは、主がご自分を低くされたと思ったので、それを見てから、主を否認し、自分はだまされていたのだと告白しようという考えをいっそう固めた。彼は悪魔に占領されていたので、主を裏切ることによって、自分が同意した働きをやりとげようと決心した。

ユダは、食卓にすわる場所をえらぶときに、一番先にすわろうとしたが、キリストはしもべとして一番先に彼に奉仕された。ユダはヨハネに対して非常ににがにがしい感情をいだいていたが、そのヨハネは一番あとまわしになった。しかしヨハネは、そうされたからといって譴責されたとも、あるいは軽んじられたとも思わなかった。キリストの行爲を見たとき、弟子たちは非常に心を動かされた。ペテロの番になると、彼は驚いて、「主よ、あなたがおわしの足をお洗になるのですか」と叫んだ(ヨハネ一三ノ六)。キリストのへりくだりが、彼の心をつち砕いた。彼はこの奉仕をする者が弟子たちの中にひとりもいなかったことを思って、恥ずかしい思いに満たされた。キリストは、「わたしをしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」と言われた(ヨハネ一三ノ七)。ペテロは、神のみ子と信じている主が、しもべの役割を果たしておられるのを見るにしのびなかった。彼は全心全霊でこの屈辱感と戦った。キリストがこのためにこられたのであることに彼は気がつかなかった。彼は非常な力をこめて、「わたしのお足を洗わないで下さい」と叫んだ(ヨハネ一三ノ八)。キリストはペテロに向かっておごそかに言われた「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」(ヨハネ一三ノ八)。ペテロがこぼんだ奉仕は、もっと高いきよめの型であった。キリストは心から罪のけがれを洗い落とすためにこられたのであった。キリストに足を洗ってもらうのをこぼおこによつて、ペテロは低いきよめの中に含まれている高いきよめをこぼんでいるのであった。彼は事実上主をこぼんでいるのであった。われわれのきよめのためにキリストに働いていただくことは、主にとっていやしいことではない。最も真実な謙遜は、われわれのために備えられているどんなことでも感謝の心をもって受け入れ、キ

リストのために熱心に奉仕をすることである。

「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」とのイエスのことばを聞いて、ペテロは、自分の高慢とわがままに打ち勝った(ヨハネ一三ノ八)。彼はキリストとなんの係わりもなくなるという思いに耐えられなかった。それは彼にとって死であった。「シモン・ペテロはイエスに言った、『主よ、では、足だけではなく、どうぞ、手も頭も』。イエスは彼に言われた、『すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなだから』(ヨハネ一三ノ九、一〇)。

このことばには身体のきよめよりもっと深い意味がある。キリストはまだ低いきよめに例示されている高いきよめについて語っておられる。入浴した者は清潔であるが、サンダルをはいた足はすぐによごれるので、また洗わねばならない。そのように、ペテロと兄弟たちは、罪と汚れとをきよめる大いなる泉で洗われていた。キリストは彼らをご自分のものとしてみとめられた。しかし、試みのために彼らは悪に陥っていたので、依然として主のきよめの恩恵が必要だった。イエスが彼らの足のほこりを洗うためにタオルを腰にまかれた時、主はその行為によって、彼らの心から不和、嫉妬、高慢を洗い流したいと望まれた。このことは、彼らのほこりまみれの足を洗うことよりもずっと重大なのであった。そのときの彼らの精神では、キリストとまじわる用意のできている者はひとりもなかった。謙遜と愛の状態に達するまでは、過越の食事にあずかる用意、すなわちキリストが制定しようとしておられる記念式にあずかる用意ができていないのであった。彼らの心はきよめられねばならない。高慢心と利己心は不和と憎しみをつくり出すが、イエスは、彼らの足を洗うことによって、そのすべてを洗い流



キリストがペテロの前に来て彼の足を洗おうとされると、この漁夫は、「わたしの足を決して洗わないで下さい」と叫んだ。しかしイエスが、これは弟子として必要な霊的ぎよめの象徴であると説明されると、ペテロは同意した。

された。気持ちの変化が生じた。イエスは、彼らをごらんになって、「あなたがたはきれいなのだ」と言うことがあできになった（ヨハネ一三ノ一〇）。いまや心の一致があり、お互いに対する愛があった。彼らはへりくだり、教えを受け入れる気持ちになっていた。ユダのほかは、ひとりびとりが最高の地位を互いにゆずり合う気持ちになった。いま彼らはあだやかな、感謝の思いをもってキリストのみことばを受け入れることができた。

ペテロとその兄弟たちのように、われわれもまたキリストの血によって洗われたのであるが、悪との接触によってしばしば心の純潔がけがされる。キリストのきよめの恩恵を求めて、みもとに行かねばならない。ペテロは自分のよれた足が主のみ手にふれることをちゅうちよした。しかし、われわれの罪深い、けがれた心がキリストの心にふれることがどんなに多いことだろう。われわれの悪い性質、虚栄心、高慢な心は、キリストにとってどんなに悲しむべきものだろう。それでもなおわれわれは、自分のすべての弱さとけがれとを主のみもとに持つて行かねばならない。キリストだけがわれわれを洗いきよめてくださることができるのである。われわれは、主のきよめの力によってきよめていただかねば、主とまじわる用意ができていないのである。

イエスは、弟子たちに「あなたがたはきれいなのだ。しかし、みんながそうなのではない」と言われた（ヨハネ一三ノ一〇）。主はユダの足を洗われたが、彼の心は主に屈服していなかった。その心はきよめられなかった。ユダは自分自身をキリストに屈服させていなかった。

キリストは弟子たちの足を洗ってから、上着を取り、ふたたび腰をおろして、彼らにこう言われた。「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。

わたしはそのとおりである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。よくよくあなたがたに言うておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない」(ヨハネ一三ノ二―一六)。

キリストは、ご自分が弟子たちの足を洗われたけれども、それは主の威厳をすこしもそこなうものではないということに彼らにわからせたいとお思いになった。「あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである」(ヨハネ一三ノ二三)。主は、無限にすぐれたおかたであられたが、この奉仕に恩恵と意義を与えられた。キリストほど高い地位にある者はだれもないのに、主は、身をかがめて最もいやしいつとめをされた。人の生まれつきの心に住みつき、自分自身に仕えることによってますます強くなる利己心のために、主の民が道をまちがえないようにキリストご自身が謙遜の模範を示されたのである。主はこの大きな問題を人の責任にまかせておかれなかった。神と等しいおかたであるキリストご自身が、弟子たちに対してしもべとしてふるまわれたほど、主はこの問題を重視された。彼らが最高の地位を争っている間に、すべての人がひざまずく主、栄光の天使も仕えることを名譽としている主が、ご自分を主と呼んでいるこれらの人たちの足を、ひざまずいて洗われた。主はご自分を裏切る者の足を洗われた。

その生活と教訓を通して、キリストは、神にみなもとがある無我の奉仕について完全な実例をお与えになった。神はご自分のために生活されない。世界を創造することによって、また万物をささえることによって、神はたえ

ずほかのもののために奉仕しておられる。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」(マタイ五ノ四五)。この奉仕の理想を、神はみ子に託されたのである。イエスが人類のかしらに立つために与えられたのは、奉仕することがどういうことであるかをご自分の模範によって教えるためであつた。イエスの一生は奉仕の法則の下にあつた。主はすべての人に仕え、すべての人に奉仕された。こうして主は、神の律法を生活し、ご自分の模範によって、われわれが神の律法にどのように従うべきかを示された。

イエスは、この原則を弟子たちのうちに確立しようと幾度も試みられた。ヤコブとヨハネが高い地位を願つたとき、主は、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人と…：ならねばならない」と言われた(マタイ二〇ノ二六、二七)。わたしの王国では優先と優越は許されない。唯一の偉大さは謙遜の偉大さである。唯一の卓越は他人への奉仕に献身することにある。

いま、弟子たちの足を洗ってしまったと、主は、「わたしがあなたがたにしたとありに、あなたがたもするよう、わたしは手本を示したのだ」と言われた(ヨハネ一三ノ一五)。このことばによって、キリストはもてなしの慣習を命じられただけではなかつた。旅のほこりを除くために客の足を洗うことよりもっと深い意味があつた。キリストはここに一つの宗教的行事を制定しておられたのである。主の行為によって、この謙遜式は、聖別された儀式となつた。それは、謙遜と奉仕についてのキリストの教訓をいつも心におぼえているように、弟子たちによって守られるのであつた。

この儀式は、聖さん式のためにキリストがお定めになった準備である。高慢、不和、権力争いが宿っているあいだは、心はキリストとのまじわりにはいることができない。われわれは、キリストのからだと血との聖さんを受ける用意ができていない。そこでイエスは、ご自分の謙遜を記念するものを最初を守るようにお定めになったのである。

神の子らがこの儀式にあずかる時、彼らは生命と栄光の主のみことを思い出さねばならない。「わたしがあなたにしたことかわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたらとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。よくよくあなたがたに言うておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない。もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである」(ヨハネ一三ノ一一七)。人のうちには、自分を兄弟よりも高く評価し、自我のために働き、最高の地位を求める傾向がある。そしてこのことから、しばしば悪い憶測と冷酷な精神が生じる。聖さん式に先立つ洗足式は、こうした誤解を一掃し、人を利己心から引き離し、高慢というたけうまからおろして、兄弟に仕えるへりくだった心を与えるのである。

天の聖なる監視者であられる聖霊は、この式の間、臨在されて、これを魂をさぐる時、罪を自覚する時、罪がゆるされたというありがたい確証の時としてくださる。恵みに満ちておられるキリストはそこにおられて、利己

的な水路を流れていた心の思いの流れを変えてくださる。聖霊は、主の模範に従う者たちの感受性を鋭くしてくださる。われわれのための救い主の屈辱を思い出すとき、思いは思いとつながり、記憶の鎖、すなわち神の大きな恵みと地上の友の好意とやさしさの記憶が呼び起こされる。祝福を忘れ、恵みを悪用し、親切を軽んじたことが心に思い出される。愛というとうとい植物を追い出していた冷酷という根があらわれる。品性の欠点、義務の怠慢、神への忘恩、兄弟たちに対する冷淡さが思い出される。罪は、神がそれをごらんになる光をとおして見られる。われわれの思いは自己満足の思いではなくて、きびしく自己を責める思いと謙遜な思いである。不和を生じさせたあらゆる障害を打破する力が心に与えられる。悪意と悪口は捨て去られる。罪は告白され、ゆるされる。心をやわらげるキリストの恩恵が魂にはいり、キリストの愛が人びとの心を引きよせて、祝福された一致を生じさせる。

準備の式についての教訓をこのように学ぶとき、もっと高い霊的な生活を望む思いが燃やされる。この望みに天の証人イエスが答えてくださるのである。魂が高められる。われわれは、罪がゆるされたことを意識して聖さんにあずかることができる。キリストの義という日光が心の部屋と魂の宮を満たす。われわれは、「世の罪を取り除く神の小羊」を見るのである(ヨハネ一ノ二九)。

この儀式の精神を受け入れる者には、それは決してただの儀式とはならない。それは「愛をもって互に仕えなさい」という教訓をいつも教えている(ガラテヤ五ノ一二)。弟子たちの足を洗うことによって、キリストは、彼らをご自分と共に天の宝という永遠の富を継ぐ者とならせるためなら、どんなにいやしい奉仕でもなさるとい

証拠をお示しになった。キリストの弟子たちは、同じ儀式を行なうことによって、兄弟たちに仕えることを同じように誓うのである。この儀式が正しく守られるときにはいつでも、神の子らは、互いに助け祝福するために聖なる関係にはいる。彼らは一生を無我の奉仕にささげることが誓うのである。しかもそれは、お互いのためだけではない。彼らの働きの分野は主の働きの分野と同じように広いのである。世はわれわれの奉仕を必要としている人々で満ちている。貧しい人たち、無力な人たち、無知な人たちが四方にいる。二階の広間でキリストとまじわった人たちは、キリストと同じように奉仕するために出て行くのである。

すべての者から仕えられるおかたであつたイエスが、すべての者のしもべとなられるためにこられた。そして主はすべての者にお仕えになったので、またすべての者から仕えられ、あがめられるのである。だから、主の聖なるご性質にあずかり、魂があがなわれるのを見るよろこびに、主とともにあずかりたい者は、無我の奉仕という主の模範に従わねばならない。

このことはすべて、「わたしがあなたがたにしたとありに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ」というイエスのことばに含まれていた(ヨハネ一三ノ一五)。これこそ主がこの儀式を定められた目的であった。主はまたこう言っておられる、「もしこれらのことがわかつていて、」すなわち主の教訓の目的がわかっていて、「それを行うなら、あなたがたはさいわいである」と(ヨハネ一三ノ一七)。

第 72 章

「わたしを記念するため」

本章はマタイ二六ノ二〇―二九、マルコ一四ノ一七―二五、
ルカ二二ノ一四―二三、ヨハネ一三ノ一八―三〇にもとづく

「主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、『これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい』。食事ののち、杯をも同じように言われた、『この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい』。だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」（コリント第一・一一ノ二三―二六）。

キリストは、二つの制度とその二大儀式の転換期に立っておられた。神のきずなき小羊であられるキリストは、罪祭としてご自分をささげようとしておられた。こうしてキリストは、四千年の間キリストの死をさし示してきた型と儀式の制度に終止符をうたれるのであった。弟子たちと過越の食事をされたとき、主は、過越節の代りに、主のたいなる犠牲の記念となる式をお定めになった。ユダヤ人の国民的祭典は永久に過ぎ去るのであった。そしてキリストがお定めになった式が、どの国どの時代においても弟子たちによって守られるのであった。

過越節は、イスラエルがエジプトの奴隷状態から救済された記念として定められた。毎年、子供たちがこの儀式の意味をたずねるときに、その歴史をくりかえして聞かせるようにと、神は指示された。こうしてあのふしぎな救済がすべての人たちの心に生きつつけるのであった。聖さん式は、キリストの死の結果達成された大いなる救済を記念するために与えられたのであった。主が力と栄光のうちにふたたびおいでになるまで、この儀式は守られる。それは、われわれのためのキリストの大いなるみわざがわれわれの心のうちに生きつつけるための手段である。

エジプトからの救済の時、イスラエルの民は、腰をからげ、つえを手にとり、旅の用意をして、立ちながら過越の食事を食べた。このような式の守り方は、彼らの状態にふさわしかった。というのは、彼らはまさにエジプトの国から追い出され、苦痛と困難に満ちた荒野の旅を始めようとしていたからである。しかしキリストの時代には事態は変わっていた。彼らはいまよその国から追い出されようとしているのではなく、自分自身の国に住んでいる民であった。与えられた休息にふさわしく、人々は、当時、食卓によりかかった姿勢で過越の食事をした。食卓のまわりに寝いすが置かれていて、客たちはその上に横になり、左手でからだをささえ、右手を自由に使うて食事をとった。この姿勢では、客は隣に腰かけている人の胸に頭をもたせかけることができた。そして足が寝いすの外側の端に出ていたので、一座の外側を通る人から足を洗ってもらうことができた。

キリストは、過越の食事が並べられた食卓にまだついておられる。過越の時に用いられるたねいれぬパンがその前にある。発酵していない過越のぶどう酒が食卓の上にある。これらの象徴を用いて、キリストは、きずのな

いご自身の犠牲をお示しになる。罪と死の象徴である発酵によってけがされているものは「きずも、しみもない小羊」を象徴することはできない(ペテロ第一・一ノ一九)。

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『取って食べよ、これはわたしのからだである』。また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、『みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなたがたに言っておく。わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日まで、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない』(マタイ二六ノ二六―二九)。

裏切り者のユダがこの聖さんに出席していた。彼は、イエスの裂かれたからだと流された血の象徴を、イエスから受け取った。彼は、「わたしを記念するため、このように行いなさい」と言われたことを聞いた。神の小羊イエスの目の前にすわりながら、この裏切り者は、自分自身の暗い意図について思いをめぐらし、陰つつな復讐の思いを心にいだいていた。

足を洗うときに、キリストは、ユダの性格をわかっておられるということを確信させるような証拠を示された。「みんながきれいなのではない」と主は言われた(ヨハネ一三ノ一)。このことばは、キリストがユダの秘密な意図を読んでおられるということ、この偽りの弟子に確信させた。いまキリストはもっとはっきり口に出された。弟子たちが食卓にすわっていたとき、主は、彼らを見渡して、「あなたがた全部の者について、こう言っているのではない。わたしは自分が選んだ人たちを知っている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わた

しにむかつてそのかかとをあげた』とある聖書は成就されなければならない』と言われた(ヨハネ一三ノ一八)。それでもなお弟子たちは、ユダを疑わなかった。しかし彼らは、キリストが非常に苦しんでおられるようにみえることに気がついた。暗い影、こういうものはわからないが、何か恐ろしいわざわいの予感が一同をおおった。彼らがだまって食べていると、イエスは、「特にあなたがたに言うておくが、あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」と言われた(マタイ二六ノ一二)。このことばに、彼らは肝をつぶすほど驚いた。自分たちの中のだれかがこの天来の教師イエスを裏切るなどということは考えられもしなかった。一体何のために、そしてだれのために、主を裏切ろうというのか。一体だれの心がそんな計画を思いついたというのか。主の教えをほかのだれにもまさって聞く特権を与えられ、主のすばらしい愛を共に受け、ご自身との密接なまじわりに入れられるほど主から信頼され、愛された十二人の中のひとりではまさかあるまい。

彼らは、主のことばの意味に気がつき、主の言われることがいつも真実であることを思い出したとき、恐れと自信のない思いにとりつかれた。そして、主を裏切るような気持が一つでも宿ってはいないかと、自分自身の心をさぐり始めた。最も苦痛な思いをもって、彼らは次々に「主よ、まさか、わたしではないでしょう」とたずねた(マタイ二六ノ二二)。しかしユダはだまってすわっていた。心配でたまらないヨハネがついに、「主よ、だれのことですか」とたずねた(ヨハネ一三ノ二五)。するとイエスは答えて言われた。「わたしと一緒に同じ鉢に手を入れてゐる者が、わたしを裏切ろうとしている。たしかに人の子は、自分について書いてあるとおり去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったで

あるう」(マタイ二六ノ二三、二四)。弟子たちはお互いの顔つきを綿密にさべって、「主よ、まさか、わたしではないでしょう」とたずねた。そしていま、ユダの沈黙がすべての目を彼に引きつけた。混乱した質問と驚きの表現のさなかに、ユダはヨハネの質問に答えられたイエスのことを聞いていなかった。しかしいま、弟子たちのせんさくを避けるために、ユダは、彼らと同じように、「先生、まさか、わたしではないでしょう」とたずねた。するとイエスはおごそかに、「いや、あなただ」と答えられた(マタイ二六ノ二五)。

自分の意図をばくろされて驚きあわてたユダは、部屋から出て行こうと、急いで立ち上がった。「そこでイエスは彼に言われた、『しよつとしていることを、今すぐするがよい』。…ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった」(ヨハネ一三ノ二七、三〇)。キリストから離れて外の暗がりへ出て行ったとき、この裏切り者にとってそれは夜であった。

この一歩がふみ出されるまでは、ユダは悔い改めの可能性を越えてはいなかった。しかし彼が主と仲間の弟子たちの前から立ち去ったとき、最後の決定がなされ、彼は境界線を越えた。

試みられているこの魂に対するイエスの忍耐深い態度は驚くばかりであった。ユダを救うためにできることはどんなこともなされた。ユダが主を売り渡すことを二度も契約したあとも、イエスはなお悔い改めの機会を彼にお与えになった。裏切り者の心の中の秘密の意図を読むことによって、キリストはご自分の神性について確信を与える最後の証拠をユダにお示しになった。これは偽りの弟子にとって、悔い改めへの最後の呼びかけであった。キリストの神としてまた人としての心からあらんかぎりの訴えがなされた。恵みの波は、かたくなな高慢心に打

ち返されると、心をやわらげる愛というもっと強い潮流となってよせ返した。しかしユダは、自分の不義が発覚したことに驚きあわてたが、ますます決心を固めたにすぎなかった。裏切りの行為をやりぬくために、彼は聖さん式から出て行ったのである。

ユダにわざわいを宣告することを通して、キリストはまた、弟子たちに対して恵みの目的をもっておられた。主はこうしてご自身がメシヤであることについて最高の証拠を彼らにお与えになった。「そのことがまだ起らない今のうちに、あなたがたに言うておく。いよいよ事が起ったとき、わたしがそれであることを、あなたがたが信じるためである」と、主は言われた(ヨハネ一三ノ一九)。もしイエスがご自分の身に起ころうとしていることを知らないふりをしてだまっておられたら、弟子たちは、主が天来の見通しを持っておられなかったので、残忍な暴徒たちの手に売り渡されて驚かれたと思うかも知れなかった。一年前に、イエスは弟子たちにわたしは十二人を選んだが、ひとりには悪魔であると語られた。いまユダに対することばは、主がユダの裏切りを十分承知しておられることをあらわしていたので、それは主の屈辱の時に、キリストに真に従っている者たちの信仰を強めるのであった。そして、ユダが恐ろしい最後をとげたときに、彼らはイエスがこの裏切り者の上に宣告されたわざわいを思い出すのであった。

救い主はまた別な目的を持っておられた。主は、裏切り者とわかっている相手に仕えることをおやめにならなかった。主が、足を洗うときに、「みんながきれいなのではない」と言われたことばや、食卓についていた時に、「わたしのパンを食べている者が、わたしにむかってそのかかとをあげた」と宣言されたことばを、弟子たちは

わからなかった(ヨハネ一三ノ一一、一八)。しかしのちになってその意味がはっきりした時、彼らは、最も悲しむべきあやまちを犯している者に対する神の忍耐と慈悲について深く考えさせられた。

イエスは、ユダをはじめから知っておられたが、彼の足を洗われた。しかもこの裏切り者は、キリストといっしよに聖さんにあずかる特権が与えられた。寛容な救い主は、この罪人が、キリストを受け入れ、悔い改めて罪のけがれからきよめられるように、あらゆるさそいの手をのばされた。この模範はわれわれのためである。ある人が過失と罪を犯していると思われるとき、われわれはその人と絶縁してはならない。心ない離別によって、彼を試みの犠牲にしたり、サタンの陣地に追いやったりしてはならない。これはキリストの方法ではない。弟子たちがまちがいをしており、欠点があつたからこそ、主は彼らの足を洗われたのである。そのことによって、二人のうち一人を除いて全部が悔い改めにみちびかれたのであつた。

キリストの模範は聖さん式における排他心を禁じている。公然たる罪がある場合には、その罪人を加えてはならないことは事実である。このことは聖霊によつてはつきり教えられている(コリント第一・五ノ一一参照)。しかしそれ以外には、だれも宣告をくだすべきではない。神は、このような式にだれを出席させるかを人が口にすることをあゆるしにならなかつた。なぜなら、だれが心を読むことができるだろう。毒麦と麦の区別がだれにできるだろう。「だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである」。なぜなら「ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだを血とを犯すのである。…主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによつて自分にさばきを招くからである」(コリント第一・一一ノ二八、二七、

二九)。

信者たちがこの儀式を守るために集まるとき、そこには人の目に見えない使者たちが出席しているのである。会衆の中にはユダがいるかも知れない。もしそうなら、暗黒の君からつかわれた使者たちもそこにいる。なぜなら、彼らは聖霊によって支配されることをこぼすすべての者につきそっているからである。天のみ使たちもそこにいる。こうした目に見えない訪問者たちが、このような式にはかならず出席しているのである。心の中では真理と聖潔のしもべではないが、それでも式に加わりたいと望む人たちが、この会衆の中にはいつてくるかも知れない。このような人びとをこぼんではならない。イエスが弟子たちとユダの足を洗われたときに出席していた証人たちが出席している。人間の目以上のものがこの光景をながめたのであった。

キリストは、ご自身の式に印をおすために、聖霊によってそこにあられる。主は、罪を自覚させ、心をやわげるためにそこにあられる。罪を悔いる表情と思いを、一つとして主は見のがされない。主は、悔い改めて心のかだける者を待つてあられる。その魂を受け入れるために、すべてのことが用意されている。ユダの足を洗われたあかたが、ひとりびとりの心から罪のけがれを洗いたいと待ちこがれてあられる。

ふさわしくない人が出席しているからといって、聖さん式にあずからないようなことがあってはならない。弟子たちはひとり残らず公然と参加し、そうすることによって、キリストを自分自身の救い主として受け入れているというあかしをたてるように求められている。キリストがご自分の民に会い、その臨在によって彼らを力づけられるのは、主が自らお定めになったこのような式においてである。ふさわしくない心や手によってこの式がと

り行なわれることさえあるかも知れないが、それでもキリストがそこにあられて、ご自分の民に奉仕されるのである。主に固い信仰を置いてこれにあずかる者はみな大いに祝福される。このような天来の特権の時をおろそかにする者はみな損失をこうゐる。このような人たちについては、「みんながきれいなのではない」と言うことがふさわしいのである(ヨハネ一三ノ一一)。

弟子たちといっしょにパンとぶどう酒にあずかることによって、キリストは、ご自分が彼らのあがない主となられることを彼らに契約された。主は彼らと新しい契約をされたが、その契約によって主を受け入れる者はみな神の子となり、キリストと共同の相続人となるのである。この契約によって、天がこの世と来世でお与えになることのできるあらゆる祝福が彼らのものであった。この契約書はキリストの血によって批准されるのであった。そしてこの聖さん式をとり行なうことは、墮落した人類という大きな全体の一部として弟子たちひとりびとりのために個人的に払われた無限の犠牲をたえず彼らの目の前に示すことになった。

しかし聖さん式は悲しみの時となるのではなかった。これはその目的ではなかった。主の弟子たちは、主の食卓に集まるとき、自分の欠点を思い出して、嘆き悲しむのではない。彼らは、過去の信仰経験が向上してようと低下してようと、それに思いを集中するのではない。兄弟たちとの間の不和を思い出すのではない。すべてこうしたことは洗足式に含まれていたのである。自分を吟味することや、罪を告白することや、不和を解消することはすべてもうすんだのである。いまは彼らはキリストと会うために来ているのである。彼らは、十字架の影ではなくて、救いの光の中に立っている。彼らは、義なる太陽キリストの輝かしい光に向かって魂を開くのであ

る。彼らはキリストのとうとい血潮によってきよめられた心をもち、目に見えなくてもキリストの臨在を十分に意識して、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる」と言われる主のみことばを聞くのである(ヨハネ一四ノ二七)。

罪を自覚するときに、わたしがあなたのために死んだのだということを思い出しなさいと、主は言われる。わたしと福音のために圧迫され、迫害され、苦しめられるときに、わたしがあなたのために生命をささげたほどの大きな愛を思い出しなさい。あなたの義務がきびしく、つらく思われ、あなたの重荷が負いきれないほど重く感じられるときに、わたしがあなたのために、恥をいとわないうで、十字架に耐えたことを思い出しなさい。あなたの心がきびしい試練にたじろぐときに、あなたのあがない主が生きてあなたのために執り成しておられることを思い出しなさい。

聖さんはキリストの再臨をさし示している。それはこの望みを弟子たちの心に生き生きと保つためであった。キリストの死を記念するために共に集まったときにはいつでも、彼らは、主が「杯を取り、感謝して彼らに与え…、『みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなたがたに言うておく。わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日まで、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない』と言われたあの時のことを語り合うのであった(マタイ二六ノ二七―二九)。苦難のうちにあるとき、彼らは主の再臨という望みに慰めを見いだした。「だからあなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告

げ知らせるのである」との思いは、彼らにとって口に言い表わせないほどとうといのであった(コリント第一・一一ノ二六)。こうしたことは、決して忘れてならない事からである。迫る力をもったイエスの愛が、われわれの記憶の中にたえず新たにされなければならない。キリストは、この儀式が、われわれのためにあらわされた神の愛についてわれわれの感覚に語りかけるように、これをお定めになった。キリストによる以外には、われわれの魂と神とを結びつけるものはない。兄弟と兄弟との間の一致と愛は、イエスの愛によって固められ、永遠なものとされなければならない。キリストの死より以下のものでは、主の愛をわれわれのために効力のあるものとすることができない。われわれが主の再臨をよろこびをもって期待できるのは、キリストが死んでくださったからにほかならない。キリストの犠牲はわれわれの望みの中心である。この上に、われわれの信仰をすえなければならない。

主の屈辱と苦難をさし示しているこの儀式が、あまりにも形式的なものにみなされている。この儀式は一つの目的をもって定められたのである。われわれの感覚は、敬神の奥義を把握するために、呼びさまされねばならない。罪を償うために払われたキリストの苦難をいまよりもっとよく理解することが、すべての者の特権である。「ちよつとモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」(ヨハネ三ノ一四、一五)。死に臨まれた救い主がかかっておられるカルバリーの十字架をわれわれは見あげなくてはならない。われわれの永遠の利益は、キリストに対する信仰をわれわれが示すように要求している。

「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。…わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である」と主は言われた(ヨハネ六ノ五三、五五)。このことは肉体的な面において事実である。この世の生命さえキリストの死のおかげである。われわれの食べるパンは、キリストの裂かれたからだをもって買われたものである。われわれの飲む水は、キリストの流された血によって買われたのである。聖徒であろうと罪人であろうと、日ごとの食物を食べる者はだれでも、キリストのからだと血によって養われているのである。どのパンにもカルバリーの十字架の印がおされている。どの泉にもカルバリーの十字架が反映している。キリストはご自分の大いなる犠牲をさし示して、こうしたすべてのことをお教えになった。あの二階座敷の聖さん式から輝き出ている光は、われわれの日常生活の飲食物を神聖なものとしている。家族の食卓は、主の食卓となり、毎度の食事は聖さんとなる。

キリストのことはまたわれわれの霊的な面において一層真実である。主は、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命がある」と宣言しておられる(ヨハネ六ノ五四)。われわれが聖潔な生活を送ることができるのは、カルバリーの十字架上でそそぎ出された生命を自分のために受けることによってである。そしてこの生命は、キリストのみことばを信受し、キリストが命じられたことをなすことによって、受けられるのである。こうしてわれわれは、キリストと一つになる。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにあり、わたしもまたその人にある。生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう」(ヨハネ六ノ五六、五七)。この聖句は、特別な意味において、聖

さん式にあてはまる。信仰によって主の大いなる犠牲を瞑想するとき、魂はキリストの霊的生命に同化する。その魂は聖さん式のたびに霊的な力を受ける。この式は、信者をキリストにおすびつけ、さらに天父とおすびつける生きたつながりとなる。それは、特別な意味において、神とたよっている人間との間のつながりとなる。

キリストの裂かれたからだと流された血潮を象徴するパンとぶどう酒をいただくときに、われわれは、想像を通して、あの二階座敷の聖さんの場面に加わるのである。われわれは、世の罪を負われたキリストの苦悩によって神聖なものとされたあの園を通して行くような気がする。神に対するわれわれの和解が達成されたあの戦いが目に見える。キリストはわれわれの中に十字架につけられた姿で示される。

十字架につけられたあがない主をみつめるときに、われわれは、天の大君によって払われた犠牲の大きさと意味をもっと十分に理解するようになる。救いの計画はわれわれの前に輝き、カルバリーの思いはわれわれの心に生き生きとした聖なる感情をよびさます。神と小羊への賛美がわれわれの心とくちびるに宿る。なぜならカルバリーの光景をいつも生き生きと記憶している魂のうちには、高慢と自己崇拜の思いは栄えることができないからである。

救い主の比類のない愛に目をそそぐ人は思いが高められ、心がきよめられ、品性が一変する。彼は出て行って、世の光となり、このふしぎな愛の幾分かを反映する。キリストの十字架を熟視すればするほど、「わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあつてはならない」と言った使徒パウロのことが一層深くわれわれのものとなるのである(ガラテヤ六ノ一四)。

「あなたがたは心を騒がせないがよい」

本章はヨハネ一三ノ三一―三八、一四章一―七章にもとづく

天来の愛とこの上なくやさしい同情の思いをもって弟子たちをみわたしながら、キリストは、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった」と言われた(ヨハネ一三ノ三一)。ユダは二階の広間から出て行って、キリストは十一人の弟子たちとだけおられた。主は彼らとの別離が近づいていることについて語ろうとしておられた。しかしそうする前に、主はご自分の使命の大きな目的をさし示された。主がいつも目の前に見つけておられたのはこの目的であつた。ご自分の屈辱と苦難のすべてを通して天父のみ名の栄光をあらわすことが主のよろこびであつた。主は弟子たちの思いをまずこのことに向けられる。

それから主は、親しみをこめたことばで「子たちよ」と呼びかけ、「わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』と言われた(ヨハネ一三ノ三三)。

弟子たちはこれを聞いてよろこぶことができなかった。恐れが彼らをおそつた。彼らは救い主のまわりにより

そつた。彼らの主、愛する教師であり友人であられるおかた、それは彼らにとっていのちよりも大事なおかたであつた。このおかたに、彼らは困難のたびに助けを、悲しみと失望の時に慰めを求めてきた。いまこのおかたが孤独な、たよっている群れである彼らから去ろうとしておられる。彼らの心は暗い予感に満たされた。

しかし彼らに対する救い主のことばは望みに満ちていた。主は、彼らが敵に攻撃されることも、困難のために落胆している者たちに対してサタンの策略が非常に効果的であることも知つておられた。そこで主は、「見えるもの」から離れて、「見えないもの」を彼らにさし示された(コリント第二・四ノ一八)。主はまた、地上のさすらいから、天の故郷へと彼らの思いを向けられた。

主は言われた、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言つておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行つて、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」(ヨハネ一四ノ一―四)。あなたがたのためにわたしは世に來た。わたしはあなたがたのために働いている。わたしは去つても、わたしはあなたがたのために熱心に働くのである。わたしは、あなたがたが信じるようにわたし自身をあなたがたにあらわすために世に來た。わたしは、あなたがたのために天父と協力するためにみもとに行くのである。キリストが去られる目的は、弟子たちが恐れていることとは反対であつた。それは最後の別離を意味しなかつた。主はもう一度來て、彼らをみもとに受け入れるように、彼らのた

めに場所を用意しようとしておられた。主が彼らのために住居を作っておられる間に、彼らは天の型にかたどって品性を築くのであった。

それでも弟子たちは当惑していた。いつも疑いに悩まされるトマスは言った、『主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう』。イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである』(ヨハネ一四ノ五―七)。

天への道はたくさんあるのではない。それぞれが自分自身の道を選ぶというわけにいかない。キリストは、「わたしは道であり…だれでもわたしによらないでは、父のもとに行くことはできない」と言われる(ヨハネ一四ノ六)。女のすえがへびのかしらを砕くということがエデンで宣告された時に最初の福音が説かれて以来、キリストは道、真理、生命としてかかげられてきた。アダムが生存していたときに、またアベルがあがない主の血を象徴する殺された小羊の血を神にささげたときに、キリストは道であった。キリストは父祖たちと預言者たちが救われる道であった。キリストはわれわれが神に近づくことのできる唯一の道である。

「もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」と、キリストは言われた(ヨハネ一四ノ七)。それでもなお弟子たちは理解しなかった。「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下さいれば、わたしたちは満足します」と、ピリポ

は叫んだ(ヨハネ一四ノ八)。

ピリポの理解のにぶさにびっくりされたキリストは、苦痛に満ちた驚きで、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか」とたずねられた(ヨハネ一四ノ九)。わたしによって父がなさるみわざのうちにあなたは一体父を見ないのか。わたしは父についてあかしをするためにきたことをあなたは信じないのか。「どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言つのか。」「わたしを見た者は、父を見たのである」(ヨハネ一四ノ九)。キリストは人となられたとき神でなくなれたのではなかった。ご自分を低くされて人となられたが、神の位はやはりキリストご自身のものであった。キリストだけが人類に天父をあらわすことがおできになったのであるが、弟子たちはこのあらわれを三年以上にわたって目に見る特権を与えられていた。

「わたしが父にあり、父がわたしにあられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい」(ヨハネ一四ノ一二)。彼らの信仰は、キリストのみわざに示されている証拠におかれるとき安全である。それはだれも自分でしたこともなければ、することもできないみわざである。キリストの働きは彼の神性を証拠だてた。キリストを通して、天父があらわされた。

弟子たちが父とみ子との間のこの重大な関係を信じるならば、滅びつつある世を救うためのキリストの苦難と死を見ると、彼らの信仰は失われないのであった。キリストは彼らをその低い信仰状態から、キリストがどんなおかたであるかということ、すなわちキリストが人の肉体をとられた神であるということに彼らが真に気づいたときに受け入れるような経験へみちびこうとしてあられた。主は、彼らの信仰が当然神へみちびかれて行って、

そこにいかりをおろすようになるのを見たいと望まれた。まもなく弟子たちの上におそいかかるうとしている試みの嵐に対して、あわれみ深い救い主はどんなに熱心に忍耐強く彼らに準備させようとされたことだろう。主は彼らをご自分と一緒に神のうちにかくれさせたいと望まれた。

キリストがこうしたことばを語っておられると、神の栄光がそのみ顔から輝いたので、そこにいる者たちはみな、みことばを夢中になって聞きながら、聖なるおそれにうたれた。彼らの心は一層はつきりキリストの方へ引かれた。そして大きな愛のうちにキリストへ引きつけられるにしたがって、彼らは一層お互いに引きつけられた。彼らは天が近いことを感じ、自分たちの聞いたことばは天の父から彼らに与えられたメッセージであると感じた。

キリストはことばを続けて、「よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう」と言われた(ヨハネ一四ノ一二)。救い主は、何のためにご自分の神性が人性と結合しているかを弟子たちが理解するように熱望された。キリストは、神の栄光を示し、その回復力によって人が高められるようにこの世にこられた。神はキリストのうちにあらわされたが、それはキリストを通して神が人々のうちにあらわされるためであった。イエスは、人がイエスに対する信仰を通して持つことのできないような特性をあらわしたり、能力を働かせたりされなかった。キリストの完全な人性は、キリストに従うすべての者が、キリストと同じように神に服従するときに所有することのできるものである。

「そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしは父のみもとに行くからである」(ヨハネ一四ノ一二)。このことによって、キリストは、弟子たちのわざがキリストのみわざよりもっと崇高な性質のものにな

ると言われたのではなく、もっと広い範囲のものになると言われたのである。主は奇跡を行なうことだけを言われたのではなく、聖霊の働きのもとに起こるすべてのことを言われたのである。

主の昇天後、弟子たちは、主のみ約束の成就に気がついた。キリストの十字架と復活と昇天の場面は彼らにとって生きた現実であった。彼らは預言が文字通りに成就したことを知った。彼らは聖書を調べ、かつてないほどの信仰と確信をもってその教えを受け入れた。彼らは天来の教師イエスが、かつてご自分について言われた通りのおかたであったことを知った。彼らが自分たちの経験について語り、神の愛をあげたとき、人々の心はとけ、やわらげられ、多くの人たちがイエスを信じた。

弟子たちに対する救い主の約束は、世の終わりにいたるまで教会に対する約束である。神は人類をあげなうすばらしい計画がとるに足りない結果しか生じないようには計画されなかった。自分自身ができることをあてにしないで、神が自分のためにまた自分を通してくださることをあてにして、働きに出て行く者は、キリストの約束の成就を確実にみとめるのである。「もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」と、主は断言しておられる(ヨハネ一四ノ一二)。

その時にはまだ弟子たちは救い主の無限の方法と能力について知っていなかった。主は彼らに、「今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった」と言われた(ヨハネ一六ノ二四)。彼らの成功の秘訣は、主のみ名によって力と恵みを求めることにあることを主は説明された。主は、彼らのために願いをするために父の前に出られるのであった。謙遜な嘆願者の祈りを、主は、その人に代って、ご自身の願いとしてささげられ

る。真心からの祈りはどれも天に聞かれる。それはなめらかなことばではないかも知れないが、その中に心がこもっているとき、イエスが奉仕しておられる聖所へのほって行き、イエスはそれをぎごちないどもることばが一つもなく、ご自身の完全という香で美しくかぐわしいものとして、父にささげてくださるのである。

真心と誠実の道は障害物のない道ではない。しかしわれわれは、あらゆる困難の中に祈りへの呼びかけをみとめるのである。神から受けなかった能力を持っている人はだれもないのであって、その能力のみなもととはどんなに弱い人のためにも開かれている。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう」とイエスは言われた(ヨハネ一四ノ二三、一四)。

「わたしの名によって」祈りなさいと、キリストは弟子たちに言われた。キリストに従う者たちは、キリストのみ名によって神の前に立つのである。彼らのために払われた犠牲の価値によって、彼らは神の御目に価値があるのである。キリストの着せられた義によって、彼らはとうとい者とみなされる。神は神をおそれる者たちを、キリストのためにおゆるしになる。神は彼らのうちに罪人のけがれをgoranにならない。神は彼らのうちに、彼らが信じている神のみ子のみかたちをみとめられるのである。

神の民が自分自身を低く評価するときには神は失望される。神はご自分の選民が、彼らの上に神がおかれた価値にしたがって自らを評価するように望まれる。神が彼らを所望されたのである。そうでなければ、神は彼らをあがなうために、ご自分のみ子をあのように高価な使命におつかわしにはならなかったのである。神は彼らに用が

あるのであつて、彼らが神のみ名の栄えをあらわすために、神に最高の要求をするときに神はよろこばれる。神の約束に対して信仰を持つときに、大きなことを期待できるのである。

しかしキリストのみ名によつて祈ることには多くの意味がある。それはわれわれがキリストの品性を受け入れ、キリストの精神をあらわし、キリストのみわざをなすことを意味する。救い主の約束は条件つきで与えられている。主は、「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」と主は言われる(ヨハネ一四ノ一五)。主は人を罪のうちにあつて救われるのではなく、罪から救われるのである。そして、主を愛する者たちは、従うことによつて彼らの愛を示すのである。

すべての真の服従は心から生れる。キリストにとつてはそれは心の働きであつた。もしわれわれが承知するなら、キリストはわれわれの思いやこころざしと一体となり、われわれの心と思いとを一つにしてご自分のみこころに一致させてくださるので、キリストに従うときに、われわれは自分自身の衝動を実行しているにすぎない。意志は洗練され、きよめられて、主のご用をなすことに最高のよろこびをみいだす。神を知ることがわれわれの特権であるが、このように神を知るときに、われわれの生活は変わることのない服従の生活となる。キリストのご品性の真価を認めることによつて、神とまじわるることによつて、罪はわれわれにとって憎むべきものとなる。

キリストが人性のうちにあつて律法を生活されたように、われわれも、キリストに力を求めてよりすぐるときに、それができるのである。しかし自分の義務についての責任を他人におしつけて、彼らがわれわれにすべきことを告げてくれるのを待つてはならない。われわれは人の助言にたよることはできない。主はほかの人にお教え

第 73 章 「あなたがたは心を騒がせないがよい」

最後の晩さんが終ると、イエスは弟子たちに平安と慰めのことばを語って、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、まだわたしを信じなさい。……またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」と言われた。



になるのと同じようによろこんでわれわれの義務をお教えになる。もし信仰をもって主のみもとに行くならば、主はご自分の奥義をわれわれに個人的に語ってください。神がエノクにそうされたように、われわれとまじわるために近づかれるときに、われわれの心はしばしばうちに燃える。神をよるこばせないようなことは何もしないと決心する者は、自分の問題を神の前に持ち出したあとで、とるべき道を知るであろう。そして彼らは、知恵ばかりでなくまた力を受けるのである。服従と奉仕の力は、キリストが約束されたように彼らにさづけられる。キリストに与えられたものは何であっても、――墮落した人類の必要を満たすためのものは何でも――人類のかしらまた代表者としてキリストに与えられた。「そして、願ひ求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを、行っているからである」(ヨハネ第一・三ノ二二)。

キリストは、ご自身をいけにえの供え物としてささげられる前に、ご自分に従う者たちに与える最も重要な賜物をお求めになった。それは無限の恵みの資源を彼らの手のとどくところにもたらす賜物であった。キリストはこう言われた、「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共にあらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようとせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共にあり、またあなたがたのうちにいるからである。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない、あなたがたのところに帰って来る」(ヨハネ一四ノ一六―一八)。

これより前に、みたまは世にあられた。あがないの働きの最初から、みたまは人々の心に働きかけてあられた。

しかしキリストが世にあられる間は、弟子たちはほかの助け手を望まなかった。キリストの存在が取り去られてはじめて彼らはみたまの必要を感じるようになり、そのときみたまがこられるのであった。

聖霊はキリストの代表者であるが、人間の個性を備えておられないので、これに拘束されない。キリストは、人性の制約を受けておられたので、どこへでもみずから行かれるわけにいかなかった。だから、キリストが父のみもとに行かれて、地上におけるご自分の後継者として聖霊をお送りになることは彼らの利益であった。そうすれば、場所やキリストとの個人的接触などによる特典はだれにもないのであった。みたまによって、救い主はだれにでも近づかれるのであった。この意味において、主は、天にのぼられなかったとした場合よりも一層近く彼らのそばにあられるのであった。

「わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであらう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであらう」(ヨハネ一四ノ一二)。イエスは弟子たちの将来を見通された。ある者は処刑台に立たされ、ある者は十字架につけられ、ある者は海のさびしい岩の間に島流しにされ、またほかの者たちは迫害と死に会うことを、イエスはご存じであった。主はどの試みにもご自分が一緒にあられるという約束をもって弟子たちを励まされた。この約束は少しも効力を失っていない。主のために牢獄に横たわり、あるいはさびしい島に追放されている忠実なしもべたちのことを、主は全部知っておられる。主は自らそこにいて彼らを慰められる。真理のために信者が不正な裁判の座に立つとき、キリストは彼のかたわらに立っておられる。彼の上に浴びせられるすべての非難はキリストの上に落ちかかるのである。キリストがその弟子の身代りとなってふたたび有罪の宣告を受けら

れるのである。人が牢獄の壁の中に閉じこめられるとき、キリストはご自分の愛をもって心をよるこばせてくださる。人が主のために死に会うとき、キリストは、わたしは「生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている」と言われる（黙示録一ノ一八）。**わたしのために犠牲となる生命は、永遠の栄光へと生きながらえるのである。**

どんな時にも、どんな場所でも、どんな悲しみにも、どんな苦しみにも、前途が暗く将来が困難に見えて無力と孤独を感じるときにも、信仰の祈りに答えて、助け主が送られる。この世のすべての友から離れるような事情が起こるかもしれない。しかしどんな事情もどんな距離もわれわれを天の助け主から離れさせることはできない。どこにいようと、どこへ行こうとも、主はいつもわれわれの右にあつて、力づけ、助け、ささえ、励まされる。弟子たちはそれでもキリストのことばの霊的な意味を理解しなかったので、主はもう一度その意味を説明された。みたまによつて、わたしはあなたがたにわたし自身をあらわすであろうと、主は言われた（ヨハネ一四ノ二一参照）。「助け主、すなわち、父がわたしの名によつてつかわれる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教える（ヨハネ一四ノ二六）。もうあなたがたは、理解できないと言わないだろう。もうあなたがたは鏡にうつして見るようにおぼろげに見ることはないであろう。あなたがたは、「すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知」ることができるであろう（エペソ三ノ一八、一九）。

弟子たちはキリストの生涯とその働きについてあかしをたてるのであった。彼らのことばを通して、キリスト

は地上のすべての民に語られるのであった。しかしキリストの屈辱と死によって、彼らは大きな試みと失望に会ったのであった。この経験のちに、彼らのことばが正確なものとなるために、イエスは、助け主が「わたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」と約束された(ヨハネ一四ノ二六)。

イエスはことばをつづけて言われた、「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今それに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。御霊はわたしに栄光を得させるであろう。わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ一六ノ二一―二四)。イエスは弟子たちの前に広大な真理の道をお示しになった。しかし彼らはキリストの教えを律法学者やパリサイ人の言い伝えや格言と区別することは非常に困難であった。彼らはラビたちの教えを神の声として受け入れるように教育されていたので、それはいまだに彼らの心を支配する力もち、彼らの意見を形づくっていた。世俗的な考えやこの世の事物がいまだに彼らの思いの中に大きな場所を占めていた。キリストはご自分のみ国の霊的な性質についてたびたび彼らに説明されたが、彼らはそれを理解しなかった。彼らの頭は混乱していた。彼らはキリストが示された聖句の価値を理解しなかった。キリストの教えの多くは彼らにほとんど益を与えていないように思われた。イエスは、彼らがイエスのことばの真の意味をとらえていないことをお知りになった。主は、聖霊がそうしたことを彼らの心に思い出させてくださるということを、あわれみ深くも約束された。また主は、弟子たちが理解できない多くのことをこれまで言わないでおかれた。そうしたことも

みたまによって彼らに教えられるのであった。みたまは彼らが天の事物を理解するように彼らのさとりを開いてくださるのであった。「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」(ヨハネ一六ノ一三)。

助け主は「真理の御霊」と呼ばれている。助け主の働きは真理を明らかにし、これを守ることである。助け主はまず真理のみたまとして心に住み、こうして助け主となられる。真理には慰めと平安があるが、虚偽には真の平安も慰めもない。サタンが人の心を支配する力を入れるのは偽りの説や言い伝えを通してである。サタンは人々を偽りの標準へ向けることによって、まちがった品性を形成する。聖霊は、聖書を通して心に語り、真理を心に印象づける。こうしてみたまは誤りをばくろし、それを魂から追い出される。キリストが選民をご自身に心服させられるのは、真理のみたまが神のみことばを通して働くことによってである。

イエスは、弟子たちに聖霊の任務をくわしく説明されたときに、ご自身の心に靈感を与えたよろこびと望みを彼らに吹きこもつとされた。主はご自分が教会に十分な助けをお与えになったことをよるこばれた。聖霊は主がご自分の民を高めるために天父に嘆願することがおできになるすべての賜物の中の最高のものであった。みたまは人を生れかわらせる働きをするものとして与えられるのであって、これがなければ、キリストの犠牲は何の役にも立たなかったであろう。悪の力は幾世紀にわたって強められ、人々がこのサタンのとりことして屈服していることは驚くばかりであった。罪に抵抗してこれに打ち勝つ唯一の道は、制限された力ではなく天来の満ち足りた力をもってこられる第三位の神、聖霊の偉大な働きを通してである。世のあがない主によって達成されたこと

に効果を与えるのはみたまである。心が清くされるのはみたまによってである。みたまによって、信者は神の性質にあずかる者となる。すべての先天的後天的な悪の傾向に打ち勝つ天来の力として、またご自身の品性を教会に印象づける天来の力として、キリストはみたまをお与えになった。

みたまについて、イエスは、「御霊はわたしに栄光を得させるであろう」と言われた(ヨハネ一六ノ一四)。救い主は父の愛を実際に示すことによって父の栄光をあらわすためにこられた。そのようにみたまも、キリストの恵みを世にあらわすことによってキリストの栄光をあらわすのであった。神のみかたちが人間のうちに再現されるのである。神の栄え、キリストの栄光は、神の民の品性の完成に含まれている。

「それ(真理のみたま)がきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう」(ヨハネ一六ノ八)。みことばを説くことは、聖霊のたえまない臨在と助けがなければ何の効果もない。これが天来の真理の唯一の効果的な教師である。真理が聖霊に伴われて心にはいるときにのみ、それは良心をめざめさせ、あるいは生活を一変させる。人は神のみことばの字句を示すことができ、そのすべての命令と約束とをよく知っているかもしれない。しかし聖霊によって真理がはつきり頭にはいらないならば、魂は岩なるキリストの上に落ちてくだけないのである。どんなに教育があっても、どんなに大きな特典をもっているても、神のみたまの協力がなければ、人は光のうつわとなることができない。種子が、天の露によって芽を出すのでなければ、福音の種子をまくことは効果がない。新約聖書の一巻が書かれる前に、キリストの昇天後一つの福音の説教がなされる前に、聖霊が祈っている使徒たちの上にのぞんだのであった。そのとき彼らの反対者たちのあかしは、「エルサレム中にあなた

がたの教を、はらんさせている」というのであった(使徒行伝五ノ二八)。

キリストは聖霊の賜物をご自分の教会に約束されたが、その約束は、最初の弟子たちと同じようにまたわれわれのものである。しかしほかのすべての約束と同じように、それは条件つきで与えられている。主の約束を信じ、これをわがものと主張する人は多い。彼らはキリストについて語り、聖霊について語るが、何の益も受けない。彼らは天来の力によってみちびかれ、支配してもらったために魂をあげたそうとしない。われわれが聖霊を用いることはできない。みたまがわれわれを用いてくださるのである。みたまを通して、神は民のうちに働き、「その願いを起させ、かつ実現に至らせ」てくださるのである(ペリピ二ノ一二)。しかし多くの者はこれに従おうとしない。彼らは自分で自分を支配したいのである。これが、彼らが天の賜物を受けない理由である。みたまは、へりくだった心で神に仕え、そのみちびきと恵みを待ち望む者にだけ与えられる。神の力は彼らが求め、受けるのを待っている。この約束された祝福を信仰によって求めるときに、ほかのすべての祝福は次々と与えられる。それはキリストの恵みの富にしたがって与えられるのであって、主はどの魂にもその受け入れる能力にしたがっていつでも与えてくださる。

弟子たちへの談話の中で、イエスは、ご自身の苦難と死を暗示する悲しいことばはすこしも言われなかった。彼らに対するキリストの最後の遺産は、平安という遺産であった。主は言われた、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」(ヨハネ一四ノ二七)。

二階の広間を去られる前に、救い主は弟子たちを促して賛美の歌をうたわれた。主のみ声は、悲嘆の調べではなく、過越節の賛美の楽しい調べにきこえた。

「もろもろの国よ、主をほめたたえよ。

もろもろの民よ、主をたたえまつれ。

われらに賜わるそのいつくしみは大きいからである。

主のまことはとこしえに絶えることがない。

主をほめたたえよ」(詩篇一一七篇)。

賛美歌をうたってから、彼らは外へ出て行った。雑踏する通りを進んで行き、町の門を過ぎて、彼らはオリブ山の方へ行った。彼らはそれぞれの思いにふけりながら、ゆっくり進んで行った。山の方へ向かって下り始めたとき、イエスは最も悲しい口調で、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼いを打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである」と言われた(マタイ二六ノ三二)。弟子たちは悲しみと驚きにうたれて耳を傾けた。カペナウムの会堂で、キリストがご自分のことを生命のパンであると言われた時に、多くの者がつまずき、主から離れ去ったことを彼らは思い出した。しかしその時十二人は不忠実ではなかった。ペテロはその時、兄弟たちに代って語り、キリストに対する忠誠心を表明した。その時キリストは、「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それなのに、あなたがたのうちのひとりとは悪魔である」と言われた(ヨハネ六ノ七〇)。二階の広間では、イエスは、十二人の中の一人がわたしを裏切り、また

ペテロがわたしを知らないと言うだろうと言われた。しかしこんどは、主のことばには彼らの全部が含まれていた。

するとペテロが、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」と激しく抗議の声をあげた(マルコ一四ノ二九)。二階の広間で彼は「あなたのためには、命も捨てます」と断言したのであった(ヨハネ一三ノ三七)。イエスは、ペテロがその晩救い主を知らないと言うであろうと警告された。いまキリストはその警告をくりかえして、「あなたによく言っておく。きょう、今夜、にわとりが二度鳴く前に、そつ言つあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた(マルコ一四ノ三〇)。しかし「ペテロは力をこめて言った、『たとあなたと一緒に死なねばならなくても、あなたを知らないなどは、決して申しません』。みんなの者もまた、同じようなことを言った」(マルコ一四ノ三一)。自信のあるままに、彼らは、知っておられる主の再度のことばを否定した。彼らは試練に対する備えができていなかった。試みが彼らを襲うときに、彼らは自分自身の弱さをさとりのであった。

ペテロが牢獄までも死にいたるまでも主について行くと言ったとき、そのことばにうそはなかった。しかし彼は自分自身を知らなかった。彼の心の中には、周囲の事情に扇動されると芽を出す悪の要素がかくれていた。彼がその危険に気づかなければ、それは彼を永遠に滅ぼすものとなるのであった。救い主は彼のうちに、キリストに対する愛さえ圧倒してしまうような自分を愛する思いと自信とがあるのをごらんになった。弱さ、克服されていない罪、軽率な精神、きよめられていない性質、試みにとびこんで行く無頓着さなどといったものが多分に彼

の経験にあらわれていた。キリストの厳粛な警告は、心をさぐるようにとの呼びかけであった。ペテロは自分を信頼しないで、キリストに対するもっと深い信仰を持つ必要があった。もし彼がけんそんにこの警告を受け入れていたら、彼は群れの牧者であられるイエスにその羊の群れを守ってくださるように嘆願したであろう。ガリラヤの海で沈みかけたときに、彼は、「主よ、お助けください」と叫んだ(マタイ一四ノ三〇)。するとキリストのみ手がさし出されて彼の手をつかんだ。そのようにいま、彼がイエスに向かって、わたしを自分自身から救ってくださいと叫んでいたら、彼は守られたのである。しかしペテロは、自分が信頼されていないと感じ、そのことを情けないと思った。彼はすでにつまずいていた。そしてますますかたくなに自信をもった。

イエスはあわれみの目で弟子たちをのぞくことになる。主は彼らを試みから救うことがおできにならないが、慰めのないままにはしておかない。主はご自分がよみの鎖をたちきられること、また彼らに対するご自分の愛が変わらないことを保証される。「わたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」と主は言われる(マタイ一六ノ三二)。こぼむ前に、彼らはゆるしの保証を与えられる。キリストの死とよみがえりののちに、彼らは自分たちがゆるされ、キリストの心にいとしい者であることを知った。

イエスは弟子たちとオリブ山のふもとにあるゲッセマネへ行かれる途中であった。そこは人里離れた場所で、主がたびたび祈りと瞑想のために行かれたところである。救い主は、世に対するご自分の使命について、また弟子たちとご自分との間の霊的な関係について、彼らに説明してこられた。いま主はその教えを例示される。月が明るく輝いて、イエスの前に繁茂したぶどうの木が現われる。主は弟子たちの注意をそのぶどうの木へ向けて、

それを一つの象徴としてお用いになる。

「わたしはまことのぶどうの木……である」とイエスが言われる(ヨハネ一五ノ二)。イエスはご自分を象徴されるのに、優美なしゅろの木や高い杉の木やたくましいかしの木を選ばないで、巻きひげのまつわりついたぶどうの木を例にとられる。しゅろの木も杉の木もかしの木も一本立ちである。それはささえを必要としない。しかしぶどうの木はたなにからみついて、天の方へのぼって行く。そのように、人性をとられたキリストは神の力にたよられた。「わたしは、自分からは何事もすることができない」とイエスは言明された(ヨハネ五ノ三〇)。

「わたしはまことのぶどうの木……である」(ヨハネ一五ノ二)。ユダヤ人はいつもぶどうの木を植物の中で最も高貴なもの、また力があり、すぐれていて、実をむすぶすべてのものの型とみなしていた。イスラエルは神が約束の地に植えられたぶどうの木として象徴されていた。ユダヤ人は、自分たちがイスラエルとつながっていることに救いの望みを置いていた。しかしイエスは、わたしがまことのぶどうの木であると言われる。イスラエルとつながっていることによって神の生命にあずかる者、神の約束を継ぐ者となれると思ってはならない。わたしを通してのみ霊的生命が受けられるのだ。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」(ヨハネ一五ノ二)。パレスチナの丘に、天の父がこのよいぶどうの木を植えられ、父ご自身が農夫であった。多くの人たちがこのぶどうの木の美しさにひきつけられ、それが天から出たものであることを宣言した。しかしイスラエルの指導者たちには、それはかわいた土から出た根のように見えた。彼らはその木を引き抜いてこれを傷つけ、けがれた足の下にふみつけた。彼らはそれ

を永久に滅ぼそうと考えた。しかし天の農夫はご自分の木を決して見すごしにされなかった。人々がその木を殺してしまつたと考えたあとで、天の農夫はそれを取りあげ、壁の向こう側に移植された。ぶどうの木はもう見られなくなった。それは人々の乱暴な攻撃からかくされた。しかしまことのぶどうの木の枝は壁をこえてたれさがつた。その枝はまことのぶどうの木を代表するのであつた。その枝によつて、まだまことのぶどうの木にすぎ木をすることができた。その枝から実が得られた。それは通りかかる人がもいで収穫となつた。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」とキリストは弟子たちに言われた(ヨハネ一五ノ五)。キリストは弟子たちから引き離されようとしておられたが、彼らとキリストの靈的結合は変わらないのであつた。枝とぶどうの木とのつながりは、あなたがたとわたしとの間の関係を表わしていると、キリストは言われた。若枝が生きたぶどうの木につがれて、せんいはせんいと、木目は木目とつながつて、木の幹へと生長するのである。ぶどうの木の生命は枝の生命となる。そのように、罪とがのうちに死んだも同様の魂は、キリストにつながるこゝによつて生命を受けるのである。キリストを自分自身の救い主として信じる信仰によつて、この結合がなされる。罪人は自分の弱さをキリストの強さに、自分のむなしさをキリストの充実に、自分のもろさをキリストの耐久力に結合させる。そのとき彼は、キリストの心を持つのである。キリストの人性はわれわれの人性に触れ、われわれの人性は神性に触れたのである。こうして聖靈の働きを通して、人は神の性質にあずかる者となる。彼は愛するみ子のうちに受け入れられる。

キリストとのこのつながりは、一度できたら、持続しなければならない。キリストは、「わたしにつながつて

いなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない」と言われた(ヨハネ一五ノ四)。これは気まぐれな接触でもなければ、ついたり離れたりする関係でもない。枝は生きたぶどうの木の一部となるのである。根から枝への生命と力と実りの伝達はさまたげられることなく、たえまなく行なわれる。ぶどうの木から離れると、枝は生きることができない。あなたがたはわたしを離れては生きることができないと、イエスは言われた。あなたがたがわたしから受けた生命は、たえまないまじわりによってのみ持続されるのだ。わたしなしでは、あなたがたは一つの罪にうち勝つことも、一つの試みに抵抗することもできない。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう」(ヨハネ一五ノ四)。キリストにつながっているということは、そのみたまをたえず受けること、すなわちキリストの奉仕に無条件に服従する生活である。人と神との間に伝達のチャネルがたえず開かれていなければならない。ぶどうの枝が生きた木の幹からたえず樹液を吸うように、われわれもイエスにすがりつき、信仰によって主から力と主ご自身の完全な品性を受けるのである。

根は枝を通して小枝の先端にまで栄養を送る。同様にキリストは、霊的な力の流れを信者のひとりびとりに送られる。魂がキリストにつながっているかぎり、しばらく枯れたりする危険はない。

ぶどうの木の生命は枝になる香り高い実にあらわれる。「もし人がわたしにつながっており、またわたしがそ

の人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」とイエスは言われた(ヨハネ一五ノ五)。信仰によって神のみ子を常食とするとき、みたまの実はわれわれの生活の中に見られ、一つとして失われることはない。

「わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりぞかれる(ヨハネ一五ノ一、二)。外面的にはぶどうの木につき木されていながら、生命のつながりがなくないかもしれない。すると成長もなければ、実りもない。同じように、信仰によってキリストとほんとうにつながっていないで、表面的な関係しかないかもしれない。信仰の告白によって人は教会に加わるが、その品性と行為は彼らがキリストにつながっているかどうかを示している。もし実をむすばなければ、彼らは偽りの枝である。彼らがキリストから離れていることは、枯れた枝によって表わされているのとまったく同じ滅亡を意味する。「人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである」とキリストは言われた(ヨハネ一五ノ六)。

「実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである」(ヨハネ一五ノ二)。イエスに従ってきた選ばれた十二人のうち、一人は枯れた枝としてとりのぞかれようとしており、ほかの者たちは激しい試みという刈り込みのナイフを受けるのであった。イエスは厳粛にやさしく農夫の目的を説明された。刈り込みは苦痛を生ずるが、ナイフを使われるのは天父である。天父は気まぐれな手や無頓着な心で働かない。地面をはって行く枝がある。そうした枝は、巻きひげがからみついている地面のささえから切り離さね

ばならない。それは天へ向かつて伸び、神にささえを見いだすのである。生命の流れをぶどうの実から奪ってしまうほど葉が多ければ、その葉を刈り込まねばならない。繁茂し過ぎているのは切り落して、義の太陽のいやしの光線のはいる余地をつくらねばならない。農夫は、もっとみごとな、もっとたくさんの実がなるように、有害な成長を刈り込むのである。

「あなたがたが実を豊かに結（ぶ）ならば……それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」とイエスは言われた（ヨハネ一五ノ八）。神は、あなたを通して、ご自身の品性の聖潔、慈愛、あわれみをあらわそうと望まれる。しかし救い主は、弟子たちに、実を結ぶために骨折るようには命じられない。主はわたしにながっていないさいと彼らに言われる。「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と主は言われる（ヨハネ一五ノ七）。キリストがご自分に従う者たちの中に住まれるのはみことばを通してである。これは、キリストの肉を食べ、その血を飲むことによってあらわされているのと同じに生命のつながりである。キリストのみことばは霊であり生命である。みことばを受けることによって、あなたはぶどうの木であられるキリストの生命を受けるのである。あなたは、「神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ四ノ四）。あなたのうちにあるキリストの生命は、キリストのうちにあるのと同じ実を生ずる。キリストのうちに生き、キリストに固着し、キリストにささえられ、キリストから栄養分をとるときに、キリストと同じ実を結ぶのである。

弟子たちとのこの最後の集りにおいて、キリストが彼らのために表明された大きな願いは、キリストが彼らを

愛されたように彼らが互いに相愛することであつた。いく度もキリストはこのことを語られた。「これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである」と、イエスはくりかえして言われた(ヨハネ一五ノ一七)。イエスが二階の広間で弟子たちとだけおられたときの最初の命令は、「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」であつた(ヨハネ一三ノ三四)。弟子たちにとつて、このいましめは新しいものであつた。彼らは、キリストが彼らを愛されたように互に愛していなかつたからである。新しい考えと動機が彼らを支配しなければならないということ、新しい原則を彼らが実行しなければならないということ、主の生涯と死を通して彼らが愛について新しい觀念を受け入れるということ、キリストはお知りになつた。互いに愛し合いなさいという命令は、主の自己犠牲の光に照らしてみると、新しい意味を持っていた。恵みの全体の働きは、愛と克己と自己犠牲的努力のたえまない一つの奉仕である。キリストが地上に滞在しておられた一刻一刻に神の愛はおさえることのできない流れとなつてキリストから流れていた。キリストのみたまを吹きこまれる者はみなキリストが愛されたように愛するのである。キリストを動かした原則がお互いの間における彼らの態度の動機となるのである。

この愛は彼らが弟子であることの証拠である。「互に愛し合うならば、それによつて、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであらう」とイエスは言われた(ヨハネ一三ノ三五)。人が強制や利己心によつてではなく、愛によつておすばれるとき、彼らは人間の力にまさる力が働いていることを示すのである。この一致があるとき、それは神のみかたちが人のうちに回復され、新しい生命の原則がうえつけられた証拠であ

る。それはまた超自然的な悪の力に抵抗するのに神の性質には力があるということ、神の恵みは生れつきの心に固有の利己心を征服するということを示している。

この愛が教会内であらわされるとき、かならずサタンの怒りがひき起こされる。キリストは弟子たちに安楽な道をお示しにならなかった。キリストは言われた、「もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう。彼らはわたしの名のゆえに、あなたがたに対してすべてそれらのことをするであろう。それは、わたしをつかわされたかたを彼らが知らないからである」(ヨハネ一五ノ一八―二二)。福音は、反対、危険、損害、苦難の中を攻勢的な戦いによって前進するのである。しかしこの働きをする者は、主の足跡に従っているにすぎない。

世のあがない主として、キリストは失敗とみえるようなことにたえず直面された。この世界へのあわれみの使者であられるキリストは、人々を高め、救うためにご自分がなしたいと熱望されたような働きをあまりなさらないようにみえた。サタンの勢力がキリストの道に反対するためにたえず働いていた。しかしキリストは落胆しよ

うとされなかった。イザヤの預言を通して、主はこう宣言しておられる、「わたしはいたずらに働き、益なく、むなしく力を費した。しかもなお、まことにわが正しきは主と共にあり、わが報いはわが神と共にある。…イスラエルをおのれのもとに集めるために、…（わたしは主の前に尊ばれ、わが神はわが力となられた）」（イザヤ書四九ノ四、五）。次の約束はキリストに与えられているのである。「イスラエルのあがない主、イスラエルの聖者なる主は、人に侮られる者、民に忌みきらわれる者…にむかつてこう言われる、…『わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。わたしは捕えられた人に「出よ」と言い、暗きにおる者に「あらわれよ」と言う。…彼らは飢えることがなく、かわくこともない。また熱い風も、太陽も彼らを撃つことはない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれるからだ』（イザヤ者四九ノ七一〇）。

イエスは、このことばに信頼し、サタンが優勢になるのをあゆるしにならなかった。キリストの屈辱の最後の歩みが踏み出されようとしていた時に、最も深い悲しみが主の魂をとりかこもうとしていた時に、主は弟子たちに「この世の君が来る…だが、彼はわたしに対して、なんの力もない。」「この世の君がさばかれる。」「今こそこの世の君は追い出されるであろう」と言われた（ヨハネ一四ノ三〇、一六ノ一一、一一ノ三二）。預言の目をもつて、キリストはご自分の最後の大争闘に起こる場面をたどられた。キリストは、ご自分が「すべてが終った」と叫ばれる時に、全天が勝利することを知っておられた（ヨハネ一九ノ三〇）。主の耳は、天の宮廷における遠くの音楽と勝利の叫びをとらえた。その時サタンの王国では葬式の鐘が鳴らされ、一方キリストのみ名は宇宙の世

界から世界へと告げ知らされることを、主はご存じであつた。

キリストは、弟子たちが求めたり思つたりすることができより多くのことを彼らのためにすることがおできになることをよろこばれた。世界がつくられる前から神のご命令が出されていることをご存じだったので、キリストは、確信をもって語られた。キリストは、真理が、聖霊の全知全能によって武装されて悪との戦いに勝利し、キリストに従う者たちの上に血に染まつた旗が高らかにひるがえることを知つておられた。信頼している弟子たちの一生は、キリストの一生と同じにたえまない勝利の連続となり、それはこの地上では勝利とは見えないが、大いなる来世においてその勝利がみとめられるということを、主は知つておられた。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ一六ノ三三)。キリストは衰えも、落胆もされなかつた。キリストに従う者たちはこれと同じ持久力のある信仰をあらわすのである。彼らはキリストが生活されたように生活し、キリストが働かれたように働くのである。なぜなら彼らは、キリストを大いなる監督としてたよっているからである。彼らは勇気、精力、不屈の精神を持たねばならない。不可能にみえることが彼らの道をさまたげて、キリストの恩恵によつて彼らは前進するのである。困難を嘆かないで、それを乗り越えるように命じられている。どんなことにも失望することなく、どんなことにも望みを持つのである。キリストは、ご自分の比類のない愛という黄金の鎖で、彼らを神のみ座にむすびつけられた。すべての力のみなもとから発する宇宙の最高の力を彼らに与えることが神の御目的である。彼らは、悪に抵抗する力、この世

も、死も、よみも征服することのできない力、キリストが勝利されたように彼らにも勝利させる力を与えられるのである。

キリストは、天の秩序、天の統治制度、天のきよい調和を地上のご自分の教会にあらわすように意図しておられる。このようにして、キリストはご自分の民によって栄光を受けられるのである。彼らを通して義の太陽はくもりのない光輝をもって世を照らすのである。キリストはご自分があがない、買われた所有物である民から、栄光という大きな収入が受けられるように、教会に十分な便宜をお与えになった。キリストは、ご自分の民がキリストご自身の満ち足りた力をあらわすように、彼らに能力と祝福をおさずけになった。キリストの義をさずけられている教会は、キリストの宝庫であって、そこではキリストのあわれみ、恵み、愛という富が十分にあますところなくあらわされる。キリストは、ご自分の屈辱の報い、またご自分の栄光を補足するものとして、ご自分の民の純潔と完全をごらんになる。キリストは、大いなる中心であって、そこからすべての栄光が放射される。

望みに満ちた強いことばをもって救い主はその教えを終えられた。それから、弟子たちのための祈りに魂の重荷をそそぎ出された。目を天に向けて、キリストは、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがたかわされたイエス・キリストとを知ることであります」と祈られた(ヨハネ一七ノ一一三)。

キリストはご自分に与えられたわざをなしとげられた。キリストは地上で神の栄光をあらわされた。主は父の

み名をあらわされた。キリストは、人々の中に自分の働きを続けて行く者たちをお集めになった。そして主はこう言われた。「わたしは彼らによつて栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によつて彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。…わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは…みんなの者が一つとなるためであります。…わたしが彼らにあり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」(ヨハネ一七ノ一〇、一一、二〇、二一、二三)。

こうして天来の権威を持っているおかたのことばで、キリストは、ご自分の選ばれた教会を父の腕におまかせになる。聖別された大祭司として、キリストはご自分の民のためにとりなされる。忠実な羊飼として、キリストはご自分の群れを大能のかげ、じょうぶで安全なかこいの中にお集めになる。サタンとの最後の戦いがキリストを待っている。主はその戦いに応ずるために出て行かれる。

第 74 章

ゲッセマネ

本章はマタイ二六ノ三六―五六、マルコ一四ノ三二―五〇、
ルカ二二ノ三九―五三、ヨハネ一八ノ一―二にもとづく

救い主は弟子たちとつれだって、ゆっくりゲッセマネの園の方へ進んで行かれた。雲のない空には過越の満月が輝いていた。旅人たちが天幕を張った町はひっそりと静まっていた。

イエスは弟子たちと熱心に語り、彼らを教えておられた。しかしゲッセマネに近づかれると、主は妙にだまっ
てしまわれた。イエスは瞑想と祈りのためにこの場所にたびたびこられた。しかし最後の苦悩のこの夜ほど、イ
エスの心が悲しみに満ちていたことはなかった。地上での一生のあいだ、イエスは神のご臨在の光のうちを歩ま
れた。サタンの精神を吹き込まれている人たちとの戦いに、イエスは、「わたしをつかわされたかたは、わたし
と一緒にあられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりにな
さることはない」と言うことがあできになった(ヨハネ八ノ二九)。しかしいまイエスは、神のささえの臨在とい
う光からしめ出されているようにみえた。いまイエスは「とがある者と共に数えられた」(イザヤ書五三ノ一二)。
墮落した人類の罪をイエスがお負いにならねばならない。罪を知らなかったおかたの上にわれわれの全部の罪と

ががあかれねばならない。罪が非常に恐るべきものに見え、イエスの負われねばならない不義の重荷があまりに大きいので、イエスは、そのため天父の愛から永遠に締め出されるのではないかという恐れにさそわれる。罪とがに対する神の怒りがどんなに恐るべきものであるかを感じて、イエスは、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」と叫ばれる(マタイ二六ノ三八)。

園に近づくと、弟子たちは、主にあらわれた変化に気がついた。イエスがこんなにひどく悲しみ、だまっておられるのを、彼らはこれまで見たことがなかった。イエスが進んで行かれるにつれて、このふしぎな悲しみは一層深くなった。しかし彼らはその原因について、イエスにあえてたずねようとしなかった。イエスのおからだはいまにも倒れるかのように揺れた。園に着くと、弟子たちは、主が休まれるように、いつものひっこんだ場所を気づかわしそうにさがした。主がいま歩まれる一步一步は、苦しい努力であった。主は、恐るべき重荷の重圧に苦しまれるかのように、声をあげてうめかれた。つきそっている者たちが二度イエスのおからだをささえたが、そうしなかったら地面に倒れておしまいになったであろう。

園の入口の近くで、イエスは三人の弟子たちのほかは全部残して、彼らに、あなたがた自身のために、またわたしのために祈るようにとお命じになった。主はペテロ、ヤコブ、ヨハネといっしょに、人目につかない奥まった場所へはいつて行かれた。この三人の弟子たちは、キリストの一番親密な友であった。彼らは変貌の山でキリストの栄光を目撃し、モーセとエリヤがキリストと語っているのを見、天からの声を聞いた。いまキリストは非常な苦しみのうちにあつて、この三人がそばにいてお望みになった。このかくれた場所で、彼らはたびた



ゲッセマネの園で、救い主は、天父の前にご自分の苦悩を訴えられた。イエスは、弟子たちがご自分と心をつつにして、大いなる任務を果たすために天来の力を受けるようにと熱望された。

びイエスと夜を明かしたのだった。そのような時には、しばらく目をさまして祈ったあとに、彼らは主からすこし離れたところで邪魔されないままによく眠ってしまい、朝になってもう一度働きに出て行くために、イエスが彼らをおこされたものであった。しかしいま主は、彼らに自分といっしょに祈りのうちに夜を明かしてくれるように願われた。それでも主は、ご自分が耐えられねばならない苦悩を彼らにさえ見せるのにしのびない気持ちになられた。

主は、「ここに待っていて、目をさましていなさい」と言われた(マルコ一四ノ三四)。

キリストは、彼らからすこし離れたところ——そんなに遠くではなく、彼らが主を見たりその声を聞いたりできるほどのところへ行って、地面にひれふされた。キリストは、罪のためにご自分が天父から隔離されつつあることを感じられた。深淵は広く、暗く、深かったので、キリストの精神はその前でおののいた。この苦悩からのがれるために、キリストは、神としての力を働かせてはならないのである。人間として、キリストは、人の罪の結果をお受けにならねばならない。人間として、キリストは、罪とがに対する神の怒りに耐えたまわねばならない。

キリストはいま、これまでとちがった態度をとってあられた。主の苦難は、預言者ゼカリヤのことばによって最もよくえがかれている。「万軍の主は言われる、『つるぎよ、立ち上がってわが牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ』(ゼカリヤ書一三ノ七)。罪深い人間の身代りまた保証人として、キリストは神の正義の下に苦難を受けてあられた。主は、正義が何であるかがおわかりになった。これまでキリストは、他人のために執り成

すおかたであつたが、いま主はご自分のために執り成してくれる者がほしいと望まれた。

キリストは、天父とのつながりが切れたと感じられたとき、人としてのご自分の性質では、きたるべき暗黒の勢力との戦いに耐えることができないと心配された。試みの荒野では人類の運命がかけられていた。その時キリストは勝利者となられた。いま誘惑者は、最後の恐るべき戦いのためにやってきていた。このために、サタンは、キリストの三年の公生涯のあいだ準備してきた。サタンはすべてをかけていた。もしここで失敗すれば、支配への望みは失われるのである。この世の王国はついにキリストのものとなり、彼自身は敗北して追い出されるのである。しかし、もしキリストに打ち勝つことができれば、地はサタンの王国となり、人類は永遠に彼の権力下におかれるのである。この戦いの結果を目の前にして、キリストの魂は、神からの隔離という恐れに満たされた。もしキリストが罪の世の保証人となれるならば、隔離は永遠のものとなり、キリストは、サタンの王国と一体となり、ふたたび神と一つになることがおできにならないであろうと、サタンはキリストに告げた。

しかもこの犠牲によって、何の益があるのだろうか。人間の不義と忘恩は何と絶望的にみえることだろう。サタンは、事態の最悪の面をあがない主に強調した。現世的な特権と霊的な特権において、ほかのどんな民よりもまさっていると主張している民があなたをこぼんだのだ。特選の民として彼らに与えられた約束の基であり、中心であり、印であるあなたを、彼らは殺そうとしている。あなた自身の弟子のひとり、あなたの教えをきき、教会活動の先頭に立っていたのに、あなたを裏切るだろう。あなたの最も熱心な弟子のひとりがあなたを知らないと言つだろう。全部の者があなたを見捨てるだろう。こうした思いに、キリストは身も心も嫌悪をおぼえられ

た。主が救おうと試みられた人たち、主がこれほど愛された人たちが、サタンの陰謀に加わるのだということがキリストの魂を刺し通した。戦いは激しかった。その激しさは、キリストの国民の不義、告発者や裏切り者の不義、悪のうちにある世の不義であった。人の罪がキリストの上に重くのしかかり、罪に対する神の怒りの意識がキリストの生命をすりへらしていた。

キリストが、人の魂のために払われる価について思いをめぐらしておられる姿を見なさい。苦悩のあまり、主は、神から遠くへ引き離されまいとするかのように、冷たい大地にすがりつかれる。冷たい夜露がそのひれふしたおからだにおりるが、主は気にされない。その青ざめたくちびるから、「わが父よ、もしできることでしたら、どうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」とのいたいたい叫びがもれる。それでもなお主は、「しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」とつけ加えられる(マタイ二六ノ三九)。

人の心は苦難のうちにあって同情を求める。このような熱望をキリストは全心全霊の奥底まで感じられた。キリストは、悲しみと苦しみのおきにしばしば祝福し、慰め、保護しておやりになった者たちから何か慰めのことを聞きたいと心の底から望んで、魂の最高の苦悩をいだいて、弟子たちのところへこられた。彼らにいつも同情のこぼをかけてこられたおかたが、いま超人的な苦悩を経験し、弟子たちが主のために、また自分自身のために祈っていることを知りたいと熱望された。罪の邪悪さがどんなに暗くみえたことだろう。ご自分は神の前に罪のないおかたのままでいて、人類の不義の結果は彼ら自身に負わせたらよいではないかという誘惑が激しかった。

た。弟子たちがこのことを理解し、感謝しているということを知ることさえできたら、キリストは力づけられるのであった。

キリストはいたいたい努力をもって立ちあがり、連れの者たちを残しておかれた場所へよるめきながらもどってこられた。しかし彼らは「眠っていた」(マタイ二六ノ四〇)。彼らが祈っているということがわかったら、主の心は救われたであろう。彼らがサタンの勢力に打ち負かされることがないように神に保護を求めていたら、主は彼らの固い信仰に慰められたであろう。しかし彼らは、「目をさまして祈っていないさい」と何度も言われた警告を心にとめていなかった(マタイ二六ノ四一)。最初彼らは、いつもは冷静で威厳のある主が、理解できないほどの悲しみと戦っておられるのを見て非常に心配した。苦しんでおられる主の強い叫びを聞いて、彼らは祈った。彼らは、主を見捨てる気持はなかったが、神に祈りつづけていたら払い落とせば済むのもうろうとしたまひ状態に陥っているようだった。試みに耐えるためには目をさまして熱心に祈ることが必要であるということに、彼らは気がついていなかった。

イエスは、園の方へ足を向けられる直前に、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう」と弟子たちに言われた(マタイ二六ノ三二)。彼らは牢獄にでも、死にいたるまでも主と共にいきますと最大限の保証をしていた。そして気の毒にも自信の強いペテロは、「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」とつけ加えた(マルコ一四ノ二九)。しかし弟子たちは自分自身にたよっていた。彼らはキリストにすすめられたように大いなる助け主を見ていなかった。だから救い主が彼らの同情と祈りを最も必要とされたときに、彼らは

眠っていた。ペテロさえ眠っていた。

イエスの胸によりかかっていた愛する弟子ヨハネも眠っていた。実際、ヨハネは、主に対する愛から目をさましているべきであった。主の最高の悲しみの時に、ヨハネの熱心な祈りが愛する救い主の祈りに加えられるべきであった。あがない主は、弟子たちの信仰が衰えないように、彼らのために夜通し祈られたことが何度もあった。もしイエスが前に一度やコブとヨハネにたずねられたことのある質問、すなわち「あなたがたは、…わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」という質問をいまされるとしたら、彼らはあえて「できます」とは答えなかったであろう(マタイ二〇ノ二二)。

弟子たちはイエスの声で目をさしましたが、彼らはそれがイエスであることがほとんどわからなかった。主の顔は苦悩のために変りはてていた。イエスはペテロに語りかけて、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかったのか。誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていないさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」と言われた(マルコ一四ノ三七、三八)。弟子たちの弱さにイエスの同情心がめざめた。主は、ご自分が売りわたされて殺される時に弟子たちへのぞむ試みに彼らが耐えることができないだろうと心配された。主は彼らを責めないで、「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていないさい」と言われた。この大きな苦悩の中にあってもなお主は、彼らの弱さをゆるそうとされた。「心は熱しているが、肉体が弱いのである」と、主は言われた(マタイ二六ノ四一)。

ふたたび神のみ子は、超人的な苦悩に陥り、気を失いそうに力がつき果てて、よろめきながら前の戦いの場所

へ戻って行かれた。主の苦しみは前よりも一層ひどかった。魂の苦悩がイエスにのぞくと、「その汗が血のしたりのように地に落ちた」(ルカ二二ノ四四)。いとすぎの木としゅろの木がイエスの苦悩について無言の目撃者であった。暗黒の勢力とひとりで戦っておられる創造者のために自然が泣いているかのように、葉の茂った木の枝から重いしずくがイエスの悲しいお姿の上に落ちた。

しばらく前には、イエスは、堂々たる杉の木のように立って、激しく襲いかかる反対の嵐に耐えておられた。頑固な意志や、悪意と狡猾さに満ちた心がイエスを混乱させ、圧倒しようとしてつとめてもむだだった。イエスは、神のみ子として天来の威厳をもって耐えられた。ところがいまイエスは、激しい嵐に打たれて折れた葦のようであった。イエスは、一步一步暗黒の勢力に勝利して、勝利者としてご自分の働きの完成に近づいておられた。すでに栄光を受けたおかたとして、イエスは神と一つであることを主張された。ためらうことのない調子で、イエスは賛美の歌を口から出された。イエスは弟子たちに勇気のあるやさしいことばで語られた。しかしいま暗黒の勢力の時が来ていた。いまイエスの声は、静かな夜の大気の中で、勝利の調べではなく、人間の苦悩に満ちた調べにきこえた。「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」この救い主のことばが、眠い弟子たちの耳につたわってきた(マタイ二六ノ四二)。

弟子たちの最初の衝動はみもとに行くことであつた。しかしイエスは、そこにとどまって、目をさまし祈っているように命じられた。イエスが彼らのところにこられると、彼らはまだ眠っていた。もう一度主は弟子たちとの親しいまじわり、主をほとんど圧倒している暗黒の魔力を払いのけて安心感を与えてくれるような弟子たちの

ことばを熱望された。しかし弟子たちのまぶたは重かった。「そして、彼らはどうお答えしてよいか、わからなかった」(マルコ一四ノ四〇)。主がそばにいられたので彼らは目をさました。彼らは主のみ顔が苦悩のために血の汗にぬれているのを見て、恐怖に満たされた。主の心の苦しみを彼らは理解できなかった。「彼の顔だけは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていたからである」(イザヤ書五二ノ一四)。

イエスは、引き返して、ふたたびひとりになると、大いなる暗黒の恐ろしさに圧倒されて、ぱったりうつぶせになられた。神のみ子の人性はこの試みの時にたじろいだ。主は、こんどは弟子たちの信仰が失われないうにとお祈りにならず、試みられ、苦しんでおられるご自分の魂のために祈られた。恐るべき瞬間がきていた。それは世の運命を決定する瞬間であつた。人類の運命はかりでゆれていた。キリストは、不義な人類に課せられた杯から飲むことをいまでも拒否することがおできになった。まだ遅くなかった。主はひたいの血の汗をふいて、人類を罪とがのうちに滅びるままにしておくこともおできになった。罪人にその罪の値を受けさせて、わたしは父のみもとにもどろうと言うこともおできになった。神のみ子は、屈辱と苦悩のにがい杯を飲まれるだろうか。罪なきあかたが不義な者を救うために罪の行為の結果を受けられるだろうか。イエスの青ざめたくちびるから、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」とのことばがふるえながらもれる(マタイ一六ノ四二)。

三度、イエスはその祈りを口にされた。三度、人性は最後にして最高の犠牲の前にひるんだ。しかしいま人類の歴史が世のあがない主の前に現われる。律法を犯した者たちは、放っておけば滅びなければならぬことを、

主はお知りになる。主は人類の無力をさとられる。主は罪の力をお知りになる。滅びる運命にある世のわざわざいと嘆きが主の前に現われる。主は、世のさし迫った運命を見て決心される。ご自分がどんなに犠牲を払ってでも、主は人類を救おうとされる。滅びつつある幾百万の人がイエスを通して永遠の生命を受けられるように、イエスは血のバプテスマを受け入れられる。主が純潔と幸福と栄光に満ちた天の宮廷を去られたのは、失われた一匹の羊、罪とがによって墮落した一つの世界を救うためであつた。だから主は、ご自分の使命から離れようとなさない。イエスは、罪を犯した人類のためにあがないの供え物となられるのである。いまイエスの祈りには、「この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」と、服従することだけが表明される(マタイ二六ノ四二)。

決心をされると、イエスは、それまでわずかにからだをもたげておられた地面に、いまにも死んでしまわれるかのようにばったり倒れておしまいになった。失神したようになっておられる主の頭をやさしく手でささえ、人の子と異なって見えるほどそこなわれたそのひたいをふいてさしあげるはずの弟子たちはその時どこにいたのだろう。救い主はただひとりでさかぶねを踏まれ、もろもろの民のなかに主と事を共にする者はなかった。

しかし神はみ子と共に苦しまれた。天使たちは救い主の苦悩を見守っていた。彼らは、主がサタンの大軍にとりかこまれ、その人性が身ぶるいするような、ふしぎな恐れに圧倒されるのを見た。天は沈黙していた。立琴は音をたてなかった。天父が愛するみ子からご自分の光と愛と栄光の輝きをとり去られるのを天使たちが無言の悲しみのうちに驚いて見守っている有様をもし人間が見ることができたら、彼らは罪が神の御目にどんなに恐るべ

きものであるかをもっとよくさとるであろう。

戦いが終りに近づくにしたがって、他世界の聖者たちと天のみ使たちは熱心な関心をもって見守っていた。サタンと悪天使たち、すなわち背信の大軍が、あがないの働きにおけるこの大危機を熱心に見守った。善と悪の両勢力は、キリストの三度くりかえされた祈りにどんな応答が与えられるかを見ようと待った。天使たちはこの聖なる受難者の苦しみを取り除いてさしあげたいと願ったが、そうするわけにいかなかった。神のみ子にとってのされる道はなかった。すべてのことが危険に瀕し、神秘の杯が受難者の手でふるえているこの恐るべき危機に、天が開け、一条の光が嵐の暗黒のようなこの危機の時を照らし、サタンが落ちたあとの地位を占めて神のそばに立っている大いなる天使が、キリストのかたわらにやってきた。この天使はキリストの手から杯を取り去るために来たのではなく、キリストがそれを飲まれるのを力づけるために、天父の愛の確証をもってやってきたのである。彼は、神と人であられる嘆願者イエスに力を与えるためにやってきた。彼は開いている天をキリストに指さし、キリストの受難の結果救われる魂について語った。天父がサタンよりも偉大で強力であられるということ、キリストの死の結果はサタンの完全な敗北であること、この世の王国はいと高き神の聖徒たちに与えられることをキリストに保証した。キリストはご自分の魂の苦しみを見て満足されるであろう、なぜなら多数の人類が救われ、しかも永遠に救われるのを見られるからであると、天使はキリストに語った。

キリストの苦しみはやまなかったが、しかし意気消沈と落胆はなくなった。嵐は決して衰えていかなかったが、そのまとなっておられたおかたはその激しさに耐える力が与えられた。イエスは冷静に落ちつかれた。血のつ

いたイエスのお顔に天来の平安が宿った。イエスはどんな人間もかつて耐えなかったことに耐えられたのだった。イエスはすべての人のために死の苦しみを味わわれたからである。

眠っていた弟子たちは救い主をとりまいている光で急に目がさめた。彼らは、ひれふしておられる主の上に天使がかみこんでいるのを見た。彼らは、その天使が救い主の頭を自分の胸に持ちあげて、天の方を指さしているのを見た。彼らは、その天使が、最も美しい音楽のように、慰めと希望のことばを語っている声を聞いた。弟子たちは変貌の山で見た光景を思い出した。彼らは、宮の中でイエスをとりまいた栄光と、雲の中から語られた神のみ声を思い出した。いまその同じ栄光がふたたびあらわされたので、彼らはもはや主について心配しなかった。主は神の守りのうちにおられ、偉大な天使が主を保護するためにつかわされたのだ。ふたたび弟子たちは、疲れのあまり、うち勝ちがたいふしぎなぬたさに負ける。ふたたびイエスは彼らが眠っているのに気づかれる。主は彼らを悲しそくにごらんになって、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。人の子は罪人らの手に渡されるのだ」と言われる(マタイ二六ノ四五)。

これらのことばを語っておられる時にも、イエスはご自分をさがし求めている暴徒たちの足音を聞いて、「立て、さあ行こう。見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた」と言われた(マタイ二六ノ四六)。

イエスが裏切り者に会うためにふみ出されたとき、さつきまでの苦しみの跡はすこしもみえなかった。弟子たちより先へ出て行って、主は「だれを捜しているのか」と言われた。彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは、「わたしが、それである」と応じられた(ヨハネ一八ノ四、五)。これらのことばが語られたとき、さつ

きイエスに仕えた天使がイエスと暴徒たちとの間にはいった。一条の天来の光が救い主のみ顔を照らし、鳩のよ
うな形をしたものがイエスをおおった。この天来の栄光の前に、残忍な暴徒たちは一瞬間も立っていることがで
きなかつた。彼らはよろめいてうしろへさがった。祭司たち、長老たち、兵士たちは、それにユダさえも、死人
のように地面に倒れた。

天使が退くと、光は消えた。イエスは逃げる機会があつたが、冷静に落ち着いてふみとどまっておられた。栄
光を受けたあかたとして、イエスは、いまご自分の足下に無力のままうつぶせに倒れている冷酷な一群の真ん中
に立つておられた。弟子たちは、ふしぎな思いとおそのけの思いで、だまつたままそれを眺めていた。

しかしたちまち場面は変つた。暴徒たちは立ち上がった。ローマの兵士たち、祭司たち、ユダがキリストをと
りかこんだ。彼らは自分たちの無力を恥じ、イエスがまた逃げ出されるのではないかと恐れているようだった。
あがない主はもう一度「だれを捜しているのか」と質問された(ヨハネ一八ノ七)。彼らは目の前に立っているお
かたが神のみ子であるという証拠を見たのに、まだ納得しようとしなかつた。「だれを捜しているのか」との問
いに、彼らはもう一度「ナザレのイエスを」と答えた。すると救い主は、「わたしはそれであると、言ったでは
ないか。わたしを捜しているのなら、この人たちを去らせてもらいたい」と、弟子たちを指さして言われた(ヨ
ハネ一八ノ七、八)。イエスは弟子たちの信仰が弱いことを知っておられ、彼らを試みと苦難から守ろうとされた。
彼らのために主はご自分を犠牲にする覚悟ができていた。

裏切り者のユダは自分が果たす役割を忘れていながつた。暴徒たちが園にはいつてきたとき、ユダは先頭に立

ち、すぐうしろに祭司長がつづいていた。ユダは、イエスの追跡者たちに合図して、「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえろ」と言っていた(マタイ二六ノ四八)。いま彼は、暴徒たちとは関係のない者のようなふりをしている。イエスのすぐそばまでくると、彼は親しい友としてイエスの手をとる。そして「先生、いかがですか」ということばとともに、イエスに接吻をくりかえし、危機にあるイエスに同情しているかのように、泣き出しそうにみえる(マタイ二六ノ四九)。

イエスは彼に「友よ、なんのためにきたのか」と言われた(マタイ二六ノ五〇)。そして、「ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」とつけ加えられたとき、イエスの声は悲しみにうちふるえた(ルカ二三ノ四八)。この訴えは裏切り者の良心をめざめさせ、そのかたくなな心を動かすべきだった。しかし彼は、名譽、誠実、人間的なやさしさから見放されていた。彼は心をやわらげる様子も見せないで、大胆不敵につつ立っていた。わが身をサタンに引き渡したユダは、サタンに抵抗する力をもたなかった。イエスは裏切り者の接吻をこばまれなかった。

暴徒たちは、たったいま彼らの目の前で栄光を受けられたおかたのからだにユダがさわつたのを見て大胆になった。彼らはいまイエスを捕え、これまでたえず恵みのわざをなすために用いられたそのとうとい手をしばらくとしはじめた。

弟子たちは、主が捕えられるようなことはなさらないと思っていた。なぜなら、暴徒たちを死人のよつに倒れさせた同じ力で彼らを無力にしておいて、イエスと弟子たちは逃げることでできたからである。彼らは愛するお

かたの手をしるためにひもが取り出されるのを見て失望し、憤慨した。ペテロは、怒りのあまりすばやく剣を抜き、主を防御しようとしたが、祭司長のしもべの片耳を切り落しただけだった。イエスがそれをごらんになって、ローマの兵士たちに固くおさえられている手をふりほどき、「それだけでやめなさい」と言いながら、負傷した耳に手をつけられると、それはたちまちもとどおりになった（ルカ二二ノ五一）。イエスはそれからペテロに言われた、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思ふのか」（マタイ二六ノ五二、五三）。――弟子たちのひとりびとりの代りに一軍団である。ああ、なぜ主はご自分とわれわれを救わないのかと弟子たちは思った。彼らの無言の思いに答えて、主は、「しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」。「父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」とつけ加えられた（マタイ二六ノ五四、ヨハネ一八ノ一一）。

ユダヤ人の指導者たちは、お役人の威厳をすてて、イエスの追跡に加わっていた。イエスを捕えることは重大事だったので、下役人たちにまかせておけなかった。陰険な祭司たちと長老たちは、宮守がしらや暴徒たちといっしょに、ユダのあとについてゲッセマネにきていた。要人たちが、あたかも野獣でも追跡するかのようにならゆる種類の武器を手にしてわいわい騒いでいる暴徒たちの仲間にはいっていたのである。

祭司たちと長老たちの方に向いて、キリストは、その鋭い視線を彼らにそそがれた。キリストが語られたことばを、彼らは生きているかぎり忘れないであろう。そのことばは大能の神からの鋭い矢のようであった。キリス

トは、威厳をもってこう言われた。あなたがたはどろぼうや強盗に向かうように剣や棒をもってわたしに立ち向かっている。毎日わたしは宮にすわって教えていた。あなたがたはわたしを捕える機会があつたのに何もしなかつた。あなたがたの働きのためには夜が都合がよいのだ。「今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」(ルカ二二ノ五三)。

弟子たちは、イエスが捕えられ、しばらくそのままにされるのを見て恐れた。彼らは、イエスが自分と弟子たちの上にこの屈辱をおゆるしになつたことにつまずいた。彼らはイエスの行為を理解できなかった。そしてイエスが暴徒たちに屈服されたことを非難した。憤慨と恐怖のあまり、ペテロはみんな逃げ出そうと言ひ出した。このさそいに応じて、「弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去つた」(マルコ一四ノ五〇)。しかしキリストはこの逃亡を予告しておられた。「見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであらう」と、イエスは言われたのであつた(ヨハネ一六ノ三二)。



イエスをとらえるために、やじ馬たちがゲッセマネの園へやってきた。
イエスをみつけると、ユダが進み出て、イエスに接吻したが、それは裏切りのしるしであった。

第 75 章

アンナスの前とカヤパの邸で

本章はマタイ二六ノ五七―七五、二七ノ一、マルコ一四ノ五三―七二、一五ノ一、ルカ二二ノ五四―七一、ヨハネ一八ノ一三―二七にもとづく

ケデロン川を越え、畑とオリーブの森を抜け、寝静まった町を通って、彼らはイエスをせきたてた。時は真夜中過ぎで、やじりながらイエスのあとをついて行く暴徒たちの叫びが静かな空気に鋭く反響した。救い主はしばらくして嚴重に護衛され、その足どりは重かった。しかしイエスをとらえた者たちは、懸命に急いで、前大祭司アンナスの邸にイエスをつれて行った。

アンナスは現職の祭司一族の長で、その老齡に対する敬意から、大祭司として認められていた。人々は彼の助言を求め、神の声としてそれを実行した。彼がまず第一に、祭司の権力への捕虜としてイエスを見なければならぬ。彼より経験の浅いカヤパが彼らの意図している目的を達成しそこなうことがないように、彼がこの囚人の審問に立ち会わねばならない。彼の策略、狡猾さ、陰險さがこの機会に利用されねばならない。どんなことがあっても、キリストを有罪に定めねばならないのだ。

キリストは形式上サンヒドリンで裁判されるのであった。しかしアンナスの前で、キリストは予備裁判を受け

られた。ローマの法律では、サンヒドリンは死刑の宣告を執行することができなかった。サンヒドリンは囚人を取り調べ、判決をくだしてからローマ当局の承認を受けることしかできなかった。したがって、ローマ人から犯罪者としてみなされるようにキリストを告発する必要があった。またユダヤ人の目にもキリストを有罪とみとめさせるような告発をみつけ出さねばならなかった。祭司たちと役人たちの中には、キリストの教えによって罪を悟った者たちも少なくなかったが、彼らは破門されるのがこわいばかりにキリストを告白しないのだった。祭司たちは、ニコデモが、「わたしたちの律法によれば、まずその人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばくことをしないのではないか」と言った質問をよくおぼえていた(ヨハネ七ノ五二)。この質問のためにその時の会議は解散し、彼らの計画は妨げられた。アリマタヤのヨセフとニコデモはいま召集されていなかったが、正しいことのためにはあえて口を出すかもしれないほかの者たちがいた。裁判は、サンヒドリンの議員が一致してキリストに反対するように運営されなければならない。祭司たちが主張しようと望んだ告発が二つあった。もしイエスを、神をけがす者として立証できたら、ユダヤ人によって彼を有罪に定めることができる。もし治安を妨害する者として告発できたら、ローマ人によって彼を有罪に定めることができる。アンナスはこの第二の告発をまず確定しようと試みた。彼は、この囚人が手がかりとなるような材料を何かしゃべってくれるように望みながら、弟子たちとイエスの教理について質問した。アンナスはイエスが新しい王国を建設する目的で秘密結社を組織しようとしているということを証拠だてるような陳述を引き出そうと考えた。そうすれば、祭司たちはイエスを治安妨害者また反乱扇動者としてローマ人に引き渡すことができるのだった。

キリストは、開いた本を読むように、この祭司の意図を読みとられた。イエスは質問者の心の奥底を読まれるかのように、ご自分と弟子たちとの間に何らかの秘密な結合があるとか、ご自分の計画をかくすために彼らを目につかないようにひそかに集めているなどということを否定された。イエスはご自分の目的や教えについて何の秘密もなかった。「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。何事も隠れて語ったことはない」とイエスはお答えになった(ヨハネ一八ノ二〇)。

救い主はご自分の働きの方法と告発者たちのやり方とを対照された。何か月もの間、彼らはイエスを追いまわしてわなをかけ、秘密裁判に引き出そうと努力していた。そこでは公平な手段によっては達成できないところを偽証によって達成できるかも知れないのであった。いま彼らはその目的を実行しつつあった。真夜中に暴徒たちを使ってイエスを逮捕したり、有罪が確定しないうちからあざけったり侮辱したり、あるいは責めたりなどということが彼らのやり方であって、そうしたことはイエスの方法ではなかった。彼らの行動は法律に違反していた。彼ら自身の法律には、だれでも有罪を立証されるまでは罪のない者として取り扱われねばならないことが明示されていた。彼ら自身の法律によれば、祭司たちは有罪であった。

質問者に向かって、イエスは「なぜ、わたしに尋ねるのか」と言われた(ヨハネ一八ノ二二)。祭司たちと役人たちは、イエスの動静を監視して、その一言一句を報告させるためにスパイを送ったではないか。このスパイたちは、人々が集まるたびにやってきて、イエスの言行について一々情報を祭司たちに伝えただけではないか。「わたしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから

ら」とイエスは答えられた(ヨハネ一八ノ二二)。

アンナスはこの決定的な答に沈黙させられた。彼は、かくしておきたいと思っている自分の行動についてイエスから何か言われることを恐れて、この時にはそれ以上何もイエスに言わなかった。役人の一人は、アンナスが沈黙させられたのを見て怒りに満ち、イエスの顔を打って「大祭司におかかって、そのような答をするのか」と言った(ヨハネ一八ノ二三)。

キリストは冷静に答えて、「もしわたしが何か悪いことを言ったのなら、その悪い理由を言いなさい。しかし、正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか」と言われた(ヨハネ一八ノ二三)。イエスは報復的な激しいことばを出されなかった。その冷静な答は、挑発されることのない潔白で忍耐強くやさしい心から出たのであった。

キリストは乱暴と侮辱に鋭く心を痛められた。ご自分が作られた人間、しかも無限の犠牲を払おうとしておられる相手の人間の手で、キリストはあらゆる侮辱を受けられた。キリストの苦しみは、ご自分の聖潔の完全さと罪に対する憎しみに比例していた。悪鬼のようにふるまう人たちによって裁判されることはキリストにとってたえまない苦痛であった。サタンの支配下にある人間どもにとりかこまれていることは、キリストにとって心の底から不快な思いであった。神の権力をひらめかせさえすれば、一瞬間にこの残酷な迫害者たちを打ち倒すことができることを、キリストは知っておられた。それだけに裁判は一層耐えがたいものであった。

ユダヤ人は外面的なしるしをもって現われるメシヤを待ち望んでいた。彼らは、キリストが、ちょっとした威

圧的な意思だけで人々の思想の流れを変え、いやおうなしにご自分の主権を認めさせられるものと期待した。このように彼らは、キリストが権力を保持し、彼らの野心的な望みを満足させられるものと信じた。だからキリストが侮辱的な仕打ちを受けられたとき、神性を発揮するようにとの強い試みがイエスにのぞんだ。ひとことばで、あるいはひと目で、キリストは、ご自分が王たちと役人たち、あるいは祭司たちと宮にまसारおかたであることを、迫害者たちに告白させることがおできになるのである。しかしご自分がえらばれたその立場をひとりの人間として守ることがキリストの困難な仕事であつた。

天のみ使いたちは愛する主に対するあらゆる行為を目撃した。彼らはキリストを救いたいと熱望した。神の下にあるとき、天使たちはどんな力でももっている。ある時には、キリストの命令に従って、一晩でアッシリヤ軍の十八万五千人を殺した。天使たちは、キリストの裁判のはずかしい光景を見たとき、神の敵どもを全滅させることによってその憤りを表明することも容易にできたのである。しかし彼らはそうするように命令されなかつた。敵どもを死の運命に追いやることもおできになつたおかたが、彼らの残酷さに耐えられた。天父を愛しておられるために、また罪を負う者になることを世の初めに契約されたために、キリストは、救うためにおいでになつた相手の人たちの粗暴な仕打ちを不平も言わずに忍ばれた。人々がキリストにあびせることができるかぎりのあらゆる嘲笑と悪口を人性のままで耐え忍ぶことがキリストの使命の一部であつた。人類のただ一つの望みは、キリストが人々の手と心から受けられるすべてのことに服従されることにあつた。

キリストは、訴える者たちに乗ずるすきを与えるようなことは何も言われなかつた。それなのにキリストは有

罪のしるしとしてしばられた。しかしながら見せかけの公正がなければならなかった。法的な裁判の形式をとる必要があった。当局はこの裁判を急ごうと決心した。彼らはイエスが民衆から尊敬されていることを知っていたので、イエスの逮捕が世間のうわさになると救助が試みられるだろうと恐れた。それにまた、もし裁判と処刑と一緒にやってしまわないと、過越の祭のために一週間遅れるのであった。そうすると彼らの計画が挫折(ざせつ)するかも知れなかった。イエスを有罪に定めるために、彼らは、主として、暴徒たち、その多くはエルサレムのやじ馬連中のわめき叫ぶ声をあてにした。もし一週間遅れるようなことがあると、興奮は下火になり、反動が起こりそうであった。民衆の中の善良な人たちがキリストのために立ち上がり、多くの人たちが進んでキリストを弁護する証言をたて、キリストのされた偉大な働きを明らかにするであろう。そうなれば、サンヒドリンに対する民衆の怒りが引き起こされるであろう。彼らのやり方が非難され、イエスは釈放されて、多くの人々から新たな尊敬を受けるであろう。そこで祭司たちと役人たちは、自分たちの意図を知られないうちに、イエスをローマ人の手に引き渡そうと決心した。

しかしまず第一に、罪名をみつけれねばならなかった。彼らはまだ何の手がかりももっていなかった。アンナスは、イエスをカヤパのところへ連れて行くように命じた。カヤパは、サドカイ人に属していたが、そのある者たちはいまやイエスの最も危険な敵となっていた。カヤパ自身、性格的に迫力こそ足りなかったが、アンナスと同じように残忍で、無情で、破廉恥であった。彼はイエスを滅ぼすためなら手段をえらばなかった。時は早朝で、まだ暗かった。たいまつとあかりをつけて、武器をもった一団が、囚人をつれて大祭司の邸へやってきた。

そこで、サンヒドリンの議員たちが集まってくるまでの間、アンナスとカヤパはふたたびイエスに質問したが、効果はなかった。

法廷の広間に会議が召集されると、カヤパが議長として席を占めた。そのどちらの側にも裁判官とこの裁判に特別の関心をもっている人たちが座を占めた。大祭司の座の下の壇にローマの兵士たちが配置された。イエスは、大祭司の席の足下に立たれた。そのイエスに全部の者の視線がそがれた。興奮は強烈であった。この群衆の中にあつて、イエスだけが冷静でおだやかであった。イエスをとりまいている空気までが聖なる感化に満ちているように思えた。

カヤパはイエスを競争相手と考えていた。人々が救い主のことばを熱心に聞き、イエスの教えを受け入れそうなのが、大祭司の激しいねたみをひき起こしていた。しかしいまカヤパは、この囚人を見て、その高貴で威厳のある態度に感心させられた。この人は神と同じおかたであるという確信がひらめいた。だが次の瞬間、彼はその思いを嘲笑のうちに打ち消した。たちまち彼の声は、イエスにその偉大な奇跡をみんなの前で行なうようにと要求する侮蔑的であうへいな調子となつてひびき渡った。しかし彼の声は救い主の耳にはあたかも聞こえないようであつた。人々は、アンナスとカヤパの興奮した、悪意のある態度と、冷静で威厳のあるイエスの態度とをくらべた。かたくなな群衆の心にさえ、神々しい雰囲気をもつたこの人を犯罪者として有罪にすべきだろうかという疑問が浮かんだ。

カヤパは、そうした空気が生まれてくるのをみとめると、裁判を急いだ。イエスの反対者たちは非常に困り切

っていた。彼らはイエスを有罪に定めようとやっきになったが、どうやってこの目的を達してよいかわからなかった。会議の議員たちは、パリサイ人とサドカイ人に分れていた。彼らの間にはにがにがしい敵意と論争があった。彼らは、口論を恐れて、ある論争点にはあえてふれようとしなかった。イエスが二こと三こと言われたら、彼らの間の偏見が刺激され、そのことによって、彼らの怒りをご自身からそらすことがおできになるのだった。カヤパはそのことを知っていたので、論争を引き起こすようなことを避けたいと望んだ。キリストが祭司たちと律法学者たちを公然と非難されたことや、キリストが彼らを偽善者また人殺しと呼ばれたことなどを証明する証人はたくさんいた。しかしそうした証言をいま持ち出すことは得策ではなかった。サドカイ人がパリサイ人との激しい論争中と同じことばをパリサイ人に対して使ったことがあった。またこのような証言は、ローマ人にとつては大したことではなかった。というのは彼ら自身パリサイ人の見せかけを不快に思っていたからである。イエスがユダヤ人の言い伝えを無視し、彼らの制度の多くについて不敬なことを言われたという証拠はたくさんあった。しかし言い伝えについても、パリサイ人とサドカイ人は激しい議論をたたかわせていた。そしてこの証拠もローマ人にとってはすこしも重要ではなかった。キリストの反対者たちは、安息日の遵守についてあえてキリストを訴えようとしなかった。その問題を調べることによって、キリストの働きの性格が明らかにされることを恐れたからであった。もしキリストのいやしの奇跡が明るみに出ると、祭司たちの目的そのものがくつがえされるのであった。

イエスが反乱を扇動し、別な政府を作ろうとされたと訴えるために買収された人たちが、偽りの証人となった。

しかし彼らの証言はばく然としていて、矛盾だらけであった。取り調べが進むうちに、彼らは自分たちの陳述の偽りを立証した。

キリストは公生涯の初め頃、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」と言われた(ヨハネ二ノ一九)。イエスは預言の比喻(ひゆ)的なことばを用いて、ご自身の死とよみがえりをこのように預言されたのであった。「イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである」(ヨハネ二ノ二二)。ユダヤ人はこのことばを、エルサレムの神殿について言われたものとして、文字通りの意味に受けとった。キリストが言われたすべてのことの中で、イエスを不利な立場に陥れるために用いることのできるものは、このことば以外にないことを祭司たちは知った。彼らはこのことばを偽って陳述することによって、有利な立場を獲得しようとした。ローマ人は神殿の再建と装飾に従事したので、この宮を非常に誇りにしていた。神殿に対して少しでも輕蔑を表明したら、かならずローマ人の憤激が引き起こされるだろう。ここに、ローマ人とユダヤ人、パリサイ人とサドカイ人の一致点が見いだされた。神殿に対してはだれでもみな非常な崇敬の念をいだいていたからである。この点について二人の証人がみつかったが、彼らの証言は、ほかの証人たちのように矛盾していなかった。イエスを訴えるように買収されたこの二人のうちの一人が言った、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、三日の後に建てることができる、と言いました」(マタイ二六ノ六二)。このように、キリストのことばは偽って伝えられた。もしキリストが話されたとおりに正確にこのことばが報告されたら、たとえサンヒドリンでもキリストを有罪にするわけにはゆかなかっただろう。もしイエスが、ユダヤ人が主張するようなただの人間だっ

たら、キリストの宣言は、不合理で高慢な精神を表わしているだけで、神を冒瀆する罪とまでは解釈されなかっただろう。偽りの証人たちがまちがった陳述をしても、キリストのことばには、ローマ人から死刑に値する犯罪とみなされるようなものは何も含まれていなかった。

イエスは忍耐強く、矛盾する証言を聞かれた。イエスは自己弁護のことばを一ことも出されなかった。イエスを訴える者たちは、とうとう話をもつれ、混乱し、逆上した。裁判はすこしも進行しなかった。そして彼らの計略は失敗しそうにみえた。カヤパは必死だった。最後に一つの手手段が残っていた。キリストが自分自身に有罪の宣告をくだすように仕向けなければならない。大祭司は裁判官の席から立ち上がったが、その顔は怒りにゆがみ、その声と態度には、もし彼にその権利があつたら目の前の囚人を打ち倒すだろうということがはっきり表われていた。「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」と彼は叫んだ(マタイ二六ノ六二)。

イエスは沈黙を守られた。「彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった」(イザヤ書五三ノ七)。ついにカヤパは、右手を天に向かってあげ、厳粛な宣誓の形式で、イエスに問いかけた、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」(マタイ二六ノ六三)。

この訴えに対して、キリストはだまっていられなかった。沈黙すべき時があるとともに、語るべき時があった。イエスは直接問いかけられるまでは口を開かれなかった。いま答えることによって自分の死が確定することを

イエスは承知しておられた。しかしいま国民から最高の権威を認められた者によって、いと高き神のみ名のもとに、訴えがなされたのである。キリストは法に対して正しい尊重心を示さないようなことはされなかった。それよりも、ご自身と天父との関係が問題にされたのである。イエスはご自分の性格と使命をはっきり宣言されなければならぬ。イエスは弟子たちに「人の前でわたしを受けいれる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受けいれるであろう」と言われたことがあった(マタイ一〇ノ三二)。いまイエスは、ご自身の模範によって、この教えをくりかえされた。

イエスが、「あなたの言うとおりである」と答えられたとき、だれもがみな耳をそばだてて、目をイエスの顔にじっとそそいだ。そしてイエスが「しかし、わたしは言うておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」とつけ加えられたとき、その青ざめた顔を天の光が照らしたようにみえた(マタイ二六ノ六四)。

一瞬間、キリストの人としての姿に神性がひらめいた。大祭司は救い主の射るような眼光の前にたじろいだ。イエスの表情は彼のかくれた意図を見抜き、彼の心に焼きつくように思われた。迫害された神のみ子の鋭い眼光を彼はその後死ぬまで忘れなかった。

「あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」とイエスは言われた(マタイ二六ノ六四)。このことばの中に、キリストはその時起こっている場面と反対の場面をお示しになった。生命と栄光の主なるキリストが神の右に座しておられるというのである。キリストは全地のさばき主

となられ、その決定についてもはや訴えることはできないのである。その時すべての秘密な事がら神のみ顔の光の中に示され、各人の行為に従ってすべての人に判決が宣告されるのである。

キリストのことは大祭司を驚かせた。死人のよみがえりがあって、その時すべての者が神のさばきの座に立ち、それぞれの行為にしたがって報いを受けるという思いは、カヤパにとって恐怖すべき思いであった。将来、自分の行為にしたがって宣告を受けるということを、彼は信じたくなかった。最後のさばきの光景が彼の心の中をパノラマのように通りすぎた。一瞬間彼は、墓が永遠にかくしておきたいと望んでいるいろいろな秘密とともに死人を手離す恐るべき光景を見た。一瞬間彼は、自分が永遠のさばき主の前に立っていて、すべてのことをごらんになる神の御目が自分の魂を見抜き、死人と共に葬ってしまったと思っていた秘密が明るみに出されているような気がした。

その光景は祭司の視界から消えた。キリストのことはサドカイ人である彼の神経にさわった。カヤパは、よみがえりとさばきと来世についての教えを否定していた。彼はこんどは悪魔のような狂暴さで怒った。目の前に捕えられているこの男はわたしの一番大事な教理を攻撃しようというのか。彼は、人々が彼のよそあった恐怖心を見ることができるよう、自分の衣を裂いて、単刀直入にこの囚人を冒瀆の罪に定めるようにと要求した。「彼は神を汚した。どうしてこれ以上、証人の必要があるう。あなたがたは今このけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」と、彼は言った(マタイ二六ノ六五、六六)。そこで彼らはみなイエスを有罪と断定した。

罪の自覚が怒りとまじって、カヤパはこのような行動に出たのであった。彼はキリストのことはを信じること

に激しい怒りを覚え、真理の深い自覚のもとに自分の心を裂いてイエスがメシヤであることを告白しようとしたので、断固たる抵抗のうちに祭司の衣を裂いた。この行為には深い意味があった。カヤパはその意味にすこしも気づいていなかった。裁判官たちに影響を及ぼしてキリストを有罪に定めるためになされたこの行為によって、大祭司は自分自身を罪に定めた。神の律法によって、彼は祭司職の資格を失った。彼は自分自身に死刑の宣告をくだしたのであった。

大祭司は衣を裂くべきではなかった。レビ記の律法によると、これは死の宣告をもって禁止されていた。どんな事情があっても、どんな場合にも、祭司は衣を裂いてはならなかった。ユダヤ人の間では、友人が死ぬと衣を裂くのが慣習となっていたが、しかし祭司はこの慣習を守るべきではなかった。このことについて、キリストはモーセにはつきりした命令をお与えになっていた(レビ記一〇ノ六参照)。

祭司の着ているものはすべて完全できずのないものでなければならなかった。この美しい祭司服によって、大いなる本体であられるイエス・キリストのご品性が象徴されていた。衣服でも態度でも、ことばでも精神でも、神は完全なものしか受け入れることがおできにならない。神は聖なるおかたであるから、その栄光と完全さが地上の奉仕に表わされねばならない。天の奉仕の聖潔は完全なものしか正しく代表することはできない。有限な人間は、悔い改めた、けんそんな精神を表明することによって自分自身の心を裂くことができる。これを神は認めてください。しかし祭司の衣を裂いてはならなかった。祭司の衣を裂くことは天の事物の象徴を傷つけるからであつた。破れた衣のままあえて祭司の勤めに出て来て、聖所の奉仕にたずさわる大祭司は、自分自身を神から切

り離れた者とみなされた。衣を裂くことによって、彼は代表的な人物となることを自らたち切ったのである。彼らはもはや職務を行なう祭司として神から認められなかった。カヤパが示したようなこうした行為は、人間の激情、人間の不完全さを示した。

衣を裂くことによって、カヤパは神の律法を無効にし、人間の言い伝えに従った。人間の作った律法には、神が冒瀆された場合、祭司はその罪の恐ろしさに衣を裂いても罪とされないことが定められていた。こうして神の律法は、人間の律法によって無効にされた。

大祭司の一挙一動は人々から関心をもって見守られていた。そこでカヤパは、効果をあげるために、自分の敬虔さを示したいと思ったのである。しかしキリストを訴えるためにもくろまれたこの行為によって、カヤパは、神が、「わたしの名が彼のうちにある」と言われたおかたをののしっていた（出エジプト記二三ノ二二）。カヤパ自身が神を冒瀆していたのである。神からの断罪の下にありながら、彼はキリストの上に神の冒瀆者としての宣告をくだした。

カヤパが衣を裂いたとき、彼の行為は、ユダヤ国民が一つの民としてそののち神に対して占めるべき立場について意義をもっていた。かつては神に祝福された民が彼ら自身を神から隔離し、エホバに否認される民に急変しつつあった。キリストが十字架上で、「すべてが終った」と叫ばれ、神殿の幕が真二つに裂けたとき、聖なる監視者であられる神は、ユダヤ人が彼らのすべての型の原型であり、彼らのすべての影の本体であられるキリストを拒否したことを宣言された。イスラエルは神から離縁されたのである。カヤパが、天の大祭司キリストの代表

者であると主張していることを示している祭司服をその時裂いたのは当然であつた。その祭司服は彼にとつても民にとつてももはや何の意味もなくなつたからである。大祭司カヤパが自分自身のためにまた国民のために、恐ろしさのあまりその衣を裂いたのは当然であつた。

サンヒドリンはイエスを死刑に値する者と宣告した。しかし夜間に囚人を審問することはユダヤ人の律法に反していた。法律上の有罪は、昼間正式に會議を開く以外には宣告をくだすことができなかった。それにもかかわらず、救い主はいま罪の宣告を受けた犯罪人としてとり扱われ、最もいやしく、下等な人間どもの虐待の手に引き渡された。大祭司の邸は中庭をかこんでいて、そこに兵士たちや群衆が集まつていた。この庭を通してイエスは、番兵の詰所へ連れて行かれたが、神のみ子であるというイエスの主張に四方から嘲笑が浴びせられた。「力ある者の右に座し、天の雲に乗ってくる」と言われたイエスのおことばが、ひやかし半分にくりかえされた（マルコ一四ノ六二）。番兵の詰所で正式の裁判を待つておられる間、イエスは保護されなかつた。無知な群衆は、イエスが會議の席で残酷にとり扱われたのを見ていたので、彼らも、それにならつて、悪魔的な性質の要素を思つ存分に發揮した。キリストの気高さと神々しい態度そのものが彼らを狂氣にかりたてた。キリストの柔和、純潔、堂々たる忍耐は、彼らのうちにサタンから生ずる憎悪心を満たした。慈悲と正義はふみつけられた。神のみ子イエスの場合ほど非人間的なやり方で扱われた犯罪人はなかつた。

しかしもっと鋭い苦悩がイエスの心を裂いた。どんな敵の手もこれより深い苦痛を伴う打撃を与えることはできなかった。カヤパの前で嘲笑的な取り調べを受けておられる時に、イエスはご自身の弟子の一人から否認され

ていたのであった。

園で主を見捨ててから、弟子たちの中の二人が、イエスを引き立てて行く群衆のあとから、間隔をおいてついでに行った。この弟子たちはペテロとヨハネであった。祭司たちは、ヨハネがイエスの有名な弟子であることを知っていたので、彼が先生の屈辱を目撃したらこんな人を神のみ子として信じていたことを馬鹿らしく思うようになるだろうと希望して、法廷の中へ入れてくれた。ヨハネがペテロのために話をつけてくれたので、ペテロもまた中にはいることができた。

中庭では火を燃やしていた。ちょうど夜明け前で、夜の一番寒い時刻だったからである。一団の人々が火のまわりに集まっていたので、ペテロは無遠慮に彼らの中に加わった。彼はイエスの弟子であることに気づかれなかった。何気なく群衆の中にまじっていることによって、彼は、自分がイエスを法廷に引き連れてきた人々の仲間だと思われるように望んだ。

しかし焰の光がペテロの顔を照らすと、戸口のところにいた女がさぐるような目付で彼を見た。彼女はペテロがヨハネといっしょにはいつてきたのを見ていた。女はペテロの顔に落胆の色をみとめ、彼がイエスの弟子であるかも知れないと思った。この女はカヤパの家族の召使いの一人で、知りたがりやであった。彼女はペテロに、「あなたも、あの人の弟子のひとりではありませんか」と言った(ヨハネ一八ノ一七)。ペテロはびっくりして、まごついた。居合わせた人々の目がたちまちペテロに釘づけにされた。ペテロは女の言っていることがわからないようなふりをした。しかし女はあくまでもこの男はイエスといっしょにいたとまわりの人たちに言った。ペテ

□は返事をしないわけにいかないような気がしたので、怒って、「そんな人は知らない」と言った（マタイ二六ノ七二）。これが最初の拒否であった。するとすぐににわとりが鳴いた。ああ、ペテロよ、こんなにたちまち主を恥じるとは。こんなにたちまち主をこばむとは。

弟子のヨハネは、法廷にはいつて行つたが、自分がイエスの弟子であることをかくそうとしなかった。彼は、主をのしっている粗暴な連中のなかにまじらなかつた。彼は正体をかくして嫌疑を受けるようなことをしなかつたので、あやしまれなかつた。彼は暴徒の目のとどかない片隅に行つたが、しかしできるだけイエスの近くにいた。そこで彼は主の裁判に起こつたすべてのことを見たり聞いたりできた。

ペテロは自分の正体を知られないようにくふうしていた。彼は無関心な風をよそおつて、敵の陣地に身を置いたので、たちまち誘惑のとりこになった。もし主のために戦うように召されたのだつたら、彼は勇敢な戦士だつただろう。しかし嘲笑の指が自分に向けられた時、彼は臆病者であることをばくろした。主のために活動的に戦ふことにはしりごみしないのに、嘲笑に負けて信仰を否定する人が多い。避けねばならないものとまじわることによって、彼らは自分自身を誘惑の道に置く。彼らは誘惑するように敵を招いて、ほかの事情のもとでは決して罪を犯さないようなことを、言ったりしたりする。今日、苦難や非難を恐れて信仰を偽装するキリストの弟子は、法廷におけるペテロの場合のように、主をこばむのである。

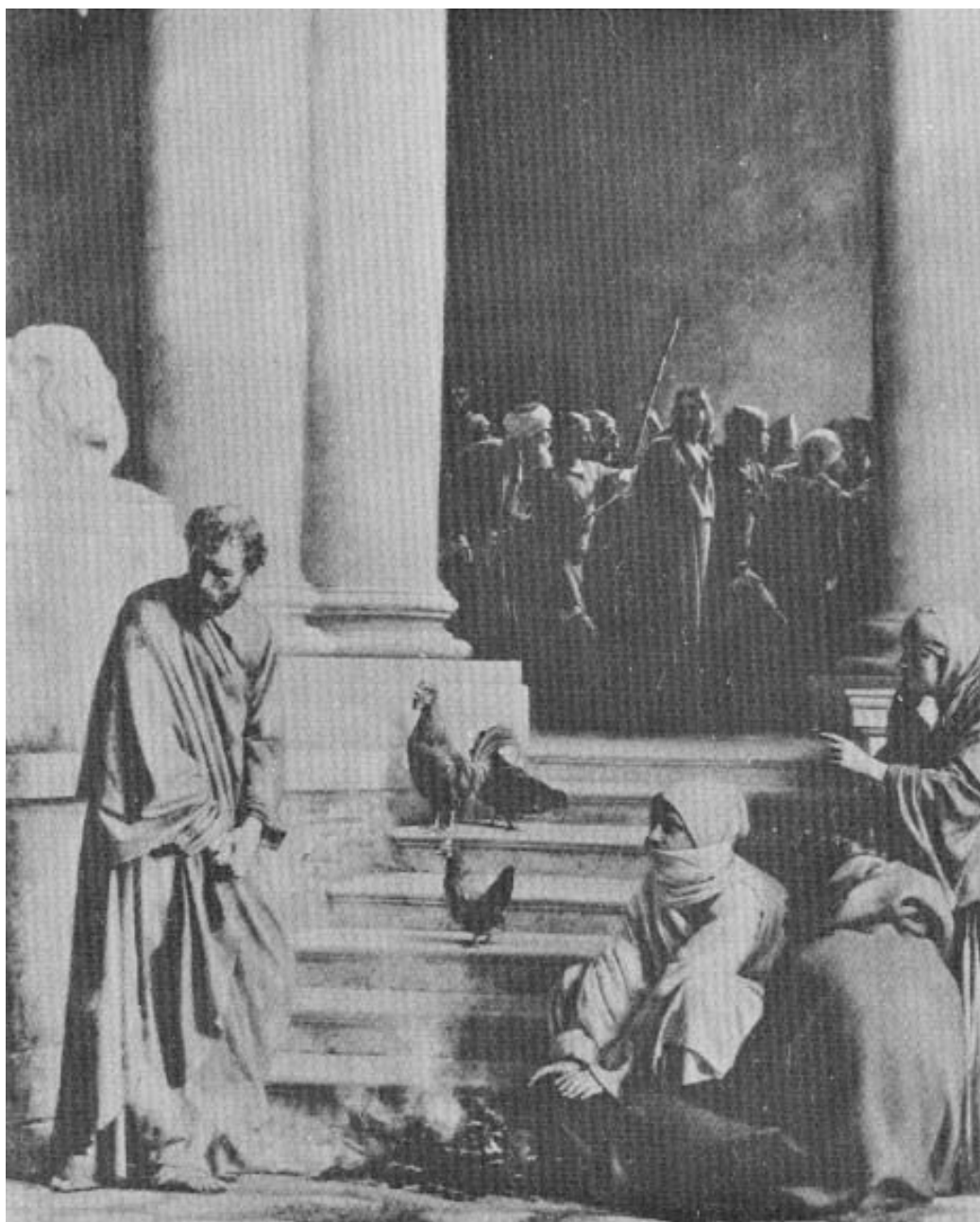
ペテロは主の裁判に何の関心もないように見せかけようとしたが、主の受けられる残酷なあざけりを聞き、虐待を見ると、心は悲しみにかきむしられるようだった。それにもまして彼が驚き怒つたことは、イエスがこのよ

うな仕打ちに身をまかせることによってご自身と弟子たちをはずかしめられることだった。自分の本心をかくすために、彼は、イエスの迫害者たちの時ならぬじょうだんにつとめて加わろうとした。しかし彼の様子は不自然だった。彼は行為によってうそをついていた。彼は、無関心にしゃべろうとつとめていたが、主の上に浴びせられる悪口に憤慨の表情をおさえることができなかった。

ふたたびペテロに注意が向けられ、彼はもう一度イエスの弟子であることがめられた。するとペテロは、こんどは誓って、「その人のことは何も知らない」と断言した(マタイ二六ノ七四)。それでも、もう一度機会が彼に与えられた。一時間が過ぎた頃、大祭司のしもべの一人で、ペテロに耳を切られた男の近親の者が、「あなたが園であの人と一緒にいるのを、わたしは見たではないか」とたずねた。そして「確かにあなたも彼らの仲間だ。

言葉づかいであなたのことがわかる」と言った(ヨハネ一八ノ二六、マタイ二六ノ七三)。これを聞いてペテロは急に怒った。イエスの弟子たちはきれいなことばを使うことで有名だった。質問者たちを完全にあざむいて、自分の偽りの正体を正当化するために、ペテロはこんどはきたないことばで主を知らないと言った。するともう一度にわとりが鳴いた。するとペテロはそれを聞いて、「にわとりが二度鳴く前に、そつ言つあなたが、三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスのことばを思い出した(マルコ一四ノ三〇)。

この下等な誓いのことばを出したペテロの舌の根がまだかわかないうちに、そしてにわとりのかん高い鳴き声がまだ彼の耳にひびいていた時に、救い主はしかめつらの裁判官たちの前からふり向いてこのあわれな弟子をまともにごらんになった。同時にペテロの目は主にひきつけられた。そのやさしい顔つきのうちにペテロは深いあ



中庭のたき火にあたっていたペテロは、イエスの弟子だろうとがめられた。ペテロはイエスを知らないと言ったが、人々は彼のことはでそうだとわかっていた。

われみと悲しみとを読んだが、怒りのかげはなかった。

青ざめた苦難の顔、ふるえる唇、あわれみとゆるしの顔つき、——そうした光景がペテロの心を矢のように刺し通した。良心がめざめ、記憶がよみがえった。ほんの二、三時間前に自分は主といっしよに獄までも死までも行きますと言った約束が思い出された。救い主が二階座敷で、彼がその夜主を三回こばおであろうと言われたときの悲しみを彼は思い出した。ペテロはイエスを知らないと言断言したばかりだったが、いま激しい悲しみのうちに、主が自分をこんなにもよく知っておられ、こんなにも正確に自分の心と、自分自身も知らなかった虚偽を読み取っておられたことに気がついた。

思い出が潮のように彼を襲った。まちがいを犯している弟子たちに対する救い主のやさしいいくしみ、その親切と寛容、そのやさしさと忍耐——何もかもが思い出された。彼は、「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくなるらないように、あなたのために祈った」との注意を思い起こした（ルカ二二ノ三一、三二）。彼は自分自身の忘恩、虚偽、偽証を恐怖の思いでふりかえった。もう一度主を見たとき、彼はそこに神聖をけがす手が主の顔を打つためにふりあげられるのを見た。それ以上その場にいらなくなつて、彼は、断腸の思いで法廷を走り出た。

ペテロは、孤独と暗黒のうちに道を急いだが、どこへ行くのかわからず、またどこへ行こうとかまわなかった。ついに彼は自分がゲッセマネにすることに気がついた。二、三時間前の光景が彼の心にまざまざとよみがえった。血の汗にまみれ、苦悩にけいれんしていた主の苦難のお顔が彼の前に浮かびあがった。彼は主がただひとりで祈

りのうちに泣き苦しんでおられた時、一方ではその試練の時間に主といっしよに苦しむべき者たちが眠っていたことを、激しい後悔とともに思い出した。そして「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていないさい」と言われた主の厳粛な命令を思い出した(マタイ二六ノ四一)。彼はもう一度法廷の場面を目撃した。救い主の屈辱と悲嘆に自分が最も重い負担を加えたことを知ることは、血の出る思いのする彼の心にとって非常な苦痛であった。イエスが苦悶のうちに天父に魂をそそぎ出されたその場所にうつぶせに倒れて、ペテロは死んでしまいたいと思った。

イエスが目をさまして祈りなさいと命じられたのに眠っていた時、ペテロはこの大きな罪に対して道を備えていた。弟子たちはみな、あの危機の時に眠ったことによつて、大きな損失をこうおつた。キリストは、彼らが経験しなければならぬ激しい試練をご存じだった。試練に対する彼らの備えができないように、サタンが彼らの感覚を麻痺させようと働くのをイエスは知っておられた。そこでイエスは彼らに警告をお与えになつたのである。園にいた時間に、目をさまして祈っていたら、ペテロは自分自身の弱い力にたよるがままに放つてはおかれなかつたであろう。彼は主をこぼよつたことをしなかつたであろう。弟子たちがキリストの苦悶に共に目をさましていたら、彼らは十字架上のイエスの苦難を仰ぎ見る備えができていたであろう。彼らはキリストの圧倒的な苦悶の性格をある程度理解したのである。彼らはご自分の苦難と死とよみがえりを予告しておられたイエスのみことばを思い出すことができたであろう。最も苦しい時の暗やみのさなかにいくらか希望の光がその暗黒を照らし、彼らの信仰をささえたであろう。

夜が明けるとすぐに、サンヒドリンはもう一度召集され、イエスはもう一度会議室へ連れて行かれた。イエスはご自分が神のみ子であることを宣言されたので、彼らはそのことばからイエスに対する告発を引き出した。しかし彼らは、そのことについてイエスを罪に定めることができなかった。彼らの多くはその夜の会議に出席していなかったので、イエスのことばを聞かなかったからである。ローマ人の法廷では、そうしたことが死刑に値するとはまったくみなされないことを、彼らは知っていた。しかしもしイエスの口から直接そうしたことをもつ一度みなが聞くことができるなら、彼らの目的は達せられるであろう。イエスがメシヤであることを主張されたら、それを治安妨害する政治上の主張と解釈できるであろう。

そこで彼らは言った、「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」（ルカ二二ノ六七）。しかしキリストはだまってあられた。彼らはイエスに質問を集中しつづけた。ついに悲哀のこもった調子で、イエスはお答えになった、「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。また、わたしがたずねても、答えないだろう」（ルカ二二ノ六七、六八）。しかし彼らに口実の余地を与えないために、イエスは「人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」と厳粛な警告をつけ加えられた（ルカ二二ノ六九）。

彼らは口をそろえて、「では、あなたは神の子なのか」とたずねた。イエスは彼らに、「あなたがたの言うとおりである」と言われた。すると彼らは、「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」と叫んだ（ルカ二二ノ七〇、七一）。

このようにして、イエスはユダヤ当局者たちから三度目の有罪の宣告を受けて死なれることになった。いま必

要なことは、ローマ人がこの有罪の宣告を裁可して、イエスを自分たちの手に引き渡してくれることだけだと、彼らは考えた。

それから侮辱と嘲笑の三度目の光景が見られたが、それは無知な暴徒たちから受けられたものより一層激しかった。それは祭司たちと役人たちのいる前で、しかも彼らの承知の下に行なわれた。同情や人情味は、彼らの心からまったく失われていた。彼らの議論が無力でイエスの声を沈黙させられなくても、各時代において異端者たちを沈黙させるために用いられてきたほかの武器、すなわち苦難と暴力と死があった。

裁判官たちがイエスの有罪を宣告すると、人々は悪魔的な狂暴さにとりつかれた。怒号する声は野獣がほえるのに似ていた。群衆は、有罪だ、死刑だと叫びながら、イエスをめがけて突進した。ローマの兵士たちが手を出さなかったら、イエスはカルバリーの十字架に釘づけられるまで生きられなかったであろう。ローマ当局が干渉し、武力によって暴徒の暴力を抑えなかったら、イエスは裁判官たちの目の前で八つ裂きにされたであろう。

異教の人たちは、まだ何も有罪の証拠のない人がこのように残虐な取り扱いを受けるのを見て怒った。ローマ人の役人たちは、ユダヤ人がイエスに有罪を宣告したことは、ローマの権力の侵害であり、また本人の証言だけによって死刑に処することはユダヤ人の律法にも反していると宣言した。この干渉は裁判の進行を一時的にゆるめたが、しかしユダヤ人の指導者たちは同情と恥に対して一様に無感覚になっていた。

祭司たちと役人たちは、職務上の威厳を忘れて、口ぎたないことばで神のみ子をののしった。彼らはイエスの生まれをあざけた。彼らは、自らをメシヤと宣言したイエスの僭越さは最も不名誉な死に値すると宣言した。最

も墮落した人たちが救い主に対する不当な侮辱に加わった。一枚の古い衣がイエスの頭にすっぽりかぶせられると、迫害者たちは、イエスの顔を打って、「キリストよ、言いあててみよ、打ったのはだれか」と言った（マタイ二六ノ六八）。衣が取りのけられると、ひとりのあわれな恥知らずがイエスの顔につばを吐きかけた。

神の天使たちは、愛する主に対する侮辱の顔つき、ことば、行為を一つももらさず忠実に記録した。嘲笑したあげく、冷静な、青ざめたキリストの顔につばを吐きかけた卑劣な人たちは、いつか太陽よりも明るく輝く栄光のうちにそのみ顔を見るのである。

ユ
ダ

ユダの歴史には、神からとうとばれたかもしれない人生が不幸な結末を告げたことが示されている。もしユダが、エルサレムへの最後の旅に出る前に死んでいたら、彼は十二弟子の一人としてふさわしい人物とみられ、非常に惜しまれただろう。彼の経歴の終りにあらわされたような特性がなかったなら、各世紀を通じて彼につきまとう嫌悪は存在しなかったであろう。しかし彼の性格が世に公表されたことには一つの目的があった。それは彼と同じように聖なる委託を裏切るすべての者に対する警告となるのであった。

過越節のちよつと前に、ユダはイエスを祭司たちの手に売り渡す契約を新たにした。その時、救い主が瞑想と祈りのためによく行かれる場所で主を捕える手はずがきめられた。シモンの家での食事の時から、ユダは自分が遂行しようと契約していた行為について反省する機会があったが、彼の意図は変わらなかった。彼は、奴隷の値段の銀三十枚で、栄光の主を恥辱と死に売り渡した。

ユダは生れつき金銭欲が強かったが、しかしかならずしもこのような行為をするほど墮落しきっていたわけで

はなかった。貪欲という悪い精神を育てたので、ついにはそれが彼の生活の支配力となっていた。富に対する愛着は、キリストに対する愛よりも比重が大きかった。一つの悪徳のとりことなることによって、彼はサタンに身をまかせ、どこまでも罪の深みに落ちこんで行ったのであった。

ユダが弟子たちに加わったのは、多くの人々がキリストに従っている時であった。救い主の教えは、会堂や海辺や山上で語られる主のことばにうつとりと聞き入っている彼らの心を動かした。ユダは病人や不具者や盲人たちが町々や都市からイエスのもとに群がり集まってくるのを見た。彼は、瀕（ひん）死の病人がイエスの足下に置かれるのを見た。彼は、救い主が病人をいやし、悪鬼を追い出し、死人をよみがえらせられた偉大なみわざを目に見た。彼は、自らキリストの力の証拠を感じた。彼は、キリストの教えがこれまで聞いたどんな教えよりもすぐれていることに気づいた。彼は、この大教師を愛し、いっしよにいたいと望んだ。彼は、品性と生活を変えたという願いを感じ、イエスと関係することによってこのような経験をもちたいと望んだ。救い主はユダを拒否されなかった。主は彼を十二人の中にお入れになった。主はユダが伝道者としての働きをするものと信頼された。主は、病人をいやし悪鬼を追い出す力をユダにおさずけになった。しかしユダはキリストにまったく従いきるところまで行かなかった。彼は世俗的な野心や金銭欲を放棄しなかった。キリストに仕える立場を受け入れながら、一方では天来の型にはまろうとしなかった。彼は自分自身の判断と意見を持ってもよいと考え、批判と非難の精神を育てた。

ユダは弟子たちから非常に尊敬され、彼らに対して大きな影響力を持っていた。彼自身も自分の資格を高く評

価し、兄弟たちが判断力においても能力においても自分よりずっと劣っているとみなしていた。この人たちは機会を見てそのチャンスを利用することのできない人たちだと、彼は考えた。見通しのきかないこんな人たちを指導者に行っていたら教会は決して繁栄しないだろうと、考えた。ペテロは、衝動的で、前後の考えなく行動する人間だった。ヨハネは、キリストの口から出る真理を大事にしているが、ユダから見れば金のやりくりはへただった。マタイは、自分の受けた訓練から万事に正確でなければならぬことを教えられていたので、正直という点に非常にやかましかった。そしてユダから見れば、彼はたえずキリストのみことを瞑想し、それに心を奪われていたので、抜け目なく先のことまで考えなくてはならない事業をまかせることはできなかった。このようにユダは弟子たちを全部かぞえあげてみて、もし事務的な才能のある自分がいなかったら、教会はしばしば困難と混乱に陥るだろうとうめばれた。ユダは自分がだれにもだまされない有能な人間であると考えた。彼は自分こそみわざにとつて誉れとなるべき人間であると自己評価し、いつもそのように言いふらしていた。

ユダは自分自身の品性の弱さに盲目だったので、キリストは、ユダが自分の欠点に気づいて直す機会のある立場に彼を置かれた。弟子たちの会計係として、彼はこの小さな群れの必要に備え、また貧しい人々が困っているのを助ける立場に召された。過越の部屋でイエスがユダに「しようとしていることを、今すぐするがよい」と言われたとき、弟子たちは、イエスが食事に必要なものを買うように命じられたか、あるいは貧しい人々に何かやるように命じられたものと思った(ヨハネ一三ノ二七)。ほかの人たちに仕えることによって、ユダは無我の精神を養うことができたのだった。しかしユダは、毎日キリストの教訓を聞き、その無我の生活を目に見ながら、貪

欲な性質をほしいままにしていた。彼の手に渡されるわずかな金銭がたえず誘惑となった。キリストのためにすこしばかり奉仕したり、宗教的な目的のために時間をささげたりすると、彼はしばしばそのとぼしい資金の中から自分自身に支払った。彼自身の目には、そうした口実が自分の行為の言いわけになった。だが神の御目には、彼はどろぼうであつた。

キリストが、わたしの王国はこの世の王国ではないとしばしばくりかえされたことばがユダをつまずかせた。彼は、キリストが働かれると思われる分野をきめていた。彼はバプテスマのヨハネが牢獄から救われるように計画した。しかし見よ、ヨハネは、首を切られてしまった。そしてイエスは、王権を主張することも、ヨハネの死に復讐することもなさらずに、弟子たちと田舎にひきこもられた。ユダはもつと攻勢的な戦いを望んだ。もしイエスが弟子たちの計画の実行を引きとめられなければ、働きはもつとうまくいくだろうと彼は考えた。彼はユダや人の指導者たちの間に高まる敵意をまとめ、彼らがキリストに天のしるしを求めたとき、その挑戦が無視されたのを見た。彼の心は不信に向かって開かれていたので、敵は疑問と反逆の思いを吹きこんだ。なぜイエスはがっかりするようなことばかり言われるのだろう。なぜ自分や弟子たちが裁判や迫害を受けることを予告されるのだろう。新しい王国で高い地位につけるという見込みから、ユダはキリストのみわざを支持するようになったのだ。彼の望みは裏切られるのだろうか。ユダは、イエスが神のみ子でないとは断定していなかった。しかし彼は疑い、キリストの偉大なみわざについて何か説明をみいだそうと求めていた。

救い主ご自身の教えにもかかわらず、ユダは、キリストがエルサレムで王として統治されるという考えをたえ

ず表明していた。五千人が養われたとき、彼は、このことを実現させようとした。その時ユダは、空腹の群衆に食物をくばるのを手伝った。彼は、自分にも人のためになることをする力があることを知る機会が与えられた。彼は、神への奉仕にかならず伴う満足感を味わった。彼は、群衆の中から病人や苦しんでいる人たちをキリストのもとに連れて行くのを手伝った。彼は、救い主のいやしの力を通して、人々の心にどんなにか安心とよろこびが与えられるのを見た。彼は、キリストの方法を理解できるはずだった。しかし彼は自分自身の利己的な欲望によつて盲目になっていた。ユダは、パンの奇跡によつてひき起こされた興奮をまっさきに利用した。キリストを無理やりにおしたてて王にしようとする計画に乗り出したのは彼だった。彼の望みは大きく、その失望は激しかった。

キリストが会堂で生命のパンについて話されたことがユダの歴史における転機であつた。「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」ということばを、彼は聞いた(ヨハネ六ノ五三)。彼はキリストが世俗的な幸福よりも霊的な幸福を提供しておられることを知った。彼は自分に先見の明があると思つていたので、イエスが栄誉を受けられることもなく、また弟子たちに高い地位をお与えになることもないということがわかつたと思つた。彼は離れることができないほど密接にイエスに結びつくことはすまいと決心した。彼は見張つていようと思つた。そしてその通り見張つていた。

その時から、彼は、弟子たちを混乱させるような疑惑を表明した。彼は議論と人をまよわせる意見を持ち込み、学者たちパリサイ人たちがキリストの主張に反対してとなえる議論をくりかえした。大小の心配や苦勞、福

音の進展にとつての困難や妨害とみえるものなどはすべて福音が真実なものではない証拠であるとユダは解釈した。彼はキリストが述べておられる真理とは何の関係もない聖句をよく持ち出した。こうした聖句は、前後関係を抜きにされると、弟子たちを困惑させ、たえず彼らを襲っている落胆を増し加えた。しかもこうしたことはすべて、自分を良心的にみせるようなやり方でなされた。そして弟子たちが大教師イエスのみことばを確認する証拠をさがしていると、ユダは彼らを気がつかないうちにほかの道へ連れ込むのだった。こうして彼は、宗教的でもしも賢明そうに見える方法で、物事をイエスがお与えになったのとはちがった光に照らして見せ、イエスが意図されなかった意味をそのみことばにつけ加えていた。彼の言うことはこの世の立身出世に対する野心的な欲望をたえずかきたて、こうして弟子たちを彼らが考慮すべきであつた重大な事から離れさせていた。彼らの中でだれが最高の地位につけられるかということについての争いは、たいていユダがひき起こしたものであつた。

イエスが富める若い役人に、弟子としての条件を示された時、ユダはよろこばなかつた。彼はイエスがまちがいをお犯されたと考えた。この役人のような人たちが信者の仲間に加えることができれば、どんなにかキリストのみわざの助けになるだろうと、彼は考えた。もし自分が助言者として受け入れられさえしたら、この小さな教会の利益になるような多くの計画を提案できるのだと、彼は考えた。自分の原則や方法は、キリストのそれよりいくらか異なっているだろうが、しかしそうしたことは、自分の方がキリストより賢明なのだと、彼は思った。キリストが弟子たちに言われたすべてのことの中には、ユダが心の中で同意できないものがあつた。彼の感化によつて不満というパン種が急速に作用していた。弟子たちはすべてこうしたことの真因が分らなかつた。しか

しイエスは、サタンが自分の特性をユダに伝え、こうして、ほかの弟子たちに感化を及ぼす道が開かれたことを見ておられた。そのことをイエスは、ご自分が裏切られる一年前に断言された。「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それなのに、あなたがたのうちのひとりとは悪魔である」と、イエスは言われた(ヨハネ六ノ七〇)。

しかしユダは公然と反対もしなければ、救い主の教えを問題にする様子もなかった。シモンの家で食事をした時まで、彼は不平を外にもさなかった。マリヤが救い主の足に油をそそいだ時、ユダはその貪欲な性質をあらわした。イエスから譴責されて、彼の精神はにがい恨みに変わったようであった。傷つけられた誇りと、復讐心が壁を打ち倒し、長い間ほしいままにしていた貪欲が彼を支配した。このことはまた罪をいつまでももてあそばせている人間の経験となる。墮落の要素に抵抗し、これに打ち勝たないならば、それは、サタンの誘惑に応じ、その魂はサタンの思いのままにとりこたなるのである。

しかしユダはまだまったくかたくなになりきってはいなかった。救い主を売り渡すことを二回約束したあとでも、悔い改める機会があった。過越の晩餐の時に、イエスは反逆者の意図をばくろすることによってご自分の神性を証明された。イエスは、弟子たちにお仕えになったときに、やさしくユダもその中に加えられた。しかし最後の愛の訴えは無視された。その時ユダの問題は決定した。そしてイエスが洗っておやりになった足は、裏切り者の仕事へと出て行ったのである。

もしイエスが十字架につけられるものなら、その事件はかならず起こるのだと、ユダは推論した。救い主を売

り渡す自分自身の行為は結果を変えないであろう。もしイエスが死なれないのなら、自分の行為はイエスが自分を救われるのを促進するにすぎないだろう。いずれにしても、自分は、裏切り行為によっていくらかもつかるのだ。彼は、主を裏切ることによってりこうな取り引きをしたと計算した。

しかしながらユダは、キリストが捕えられることを承知されるとは信じなかった。裏切ることによって、キリストに思い知らせることが彼の目的だった。今後キリストが、正当な尊敬をもって彼を取り扱うように注意されるように、ユダは自分の役割を果たすつもりだった。しかしユダは、自分がキリストを死に渡しているとは知らなかった。救い主が譬によって教えられたとき、律法学者たちとパリサイ人たちはそのきわだった例話を何度われを忘れて聞いたことだろう。何度彼らは自分自身に不利な宣告をくだしたことだろう。彼らの心に事実が思い知らされると、彼らは怒りに満たされ、石を拾ってイエスに投げつけようとしたことが何度あったことだろう。しかしイエスは何度も何度も逃げになった。これほど何回もわなをのがれたのだから、とても捕えられるがままにはならまいとユダは思った。

ユダはためしてみようと決心した。もしイエスが本当にメシヤなら、イエスに多くのことをしてもらった民衆はイエスのもとに集合して、イエスを王として宣言するだろう。そうすれば、現在もやややっている多くの人々の心が永久に決着するだろう。王をダビデの位につけた功績は自分のものとなるだろう。そしてこの行為によって自分は新しい王国でキリストに次ぐ最高の位を獲得するであろう。

この偽りの弟子はイエスを売り渡す役割を演じた。ゲッセマネの園で、ユダが暴徒のかしらたちに「わたしの



ユダは救い主を奴隷の値段の銀三〇枚で売り渡した。イエスの裁判が終りに近づく、ユダは、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」と叫び、出て行って首をつって死んだ。

接吻する者が、その人だ。その人をつかまえろ」と言ったとき、彼は、キリストが彼らの手から逃げられるものと信じきっていた（マタイ二六ノ四八）。そうしたら、もし彼らがユダを責めたら、だからすっかりつかまえなさいと言ったではないかと彼は言うことができるだろう。

ユダはキリストを捕える人たちが、ユダのことばどおりに、キリストを固くしぼるのを目に見た。彼は救い主が連れて行かれるままになれるのを見て驚いた。彼は心配して、園からユダや人の役人たちが裁判するところへイエスについて行った。彼は、イエスが彼らの前に神のみ子として現われ、彼らの計略や権力をつちくदैて、反对者たちを驚かされるだろうと、その一挙一動を見守った。しかし時々刻々過ぎて、イエスがあらゆる悪口を浴びせられるがままになっておられるのを見て、この裏切り者は、主を死に売り渡してしまったという恐怖に襲われた。

裁判が終りに近づく、ユダは罪を犯した良心の苛責（かしゃく）に耐えられなくなった。突然しゃがれ声が法廷にひびき渡り、すべての人々の心に恐怖の戦慄（せんりつ）を与えた。ああ、カヤパよ、その人に罪はありません。助けてやってください。

その時、背の高いユダの姿が、びっくりした人々の中を突進して行くのが見られた。彼の顔は青ざめ、やつれ果て、そのひたいには大粒の汗が吹き出していた。彼は裁判長の席に走りよると、主を売り渡した代価である銀三十枚を大祭司の前に投げた。そして、カヤパの衣を力いっぱいにつかみながら、イエスは死に値するようなことは何もしなかったのだと断言して、その釈放を嘆願した。カヤパは怒ってユダを払いのけたが、混乱してしま

って何と言ってよいかわからなかった。祭司たちの不信行為がばくろされた。彼らがこの弟子を買収して主を裏切らせたことが明らかとなった。

「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」とユダはまた叫んだ。大祭司は落ちつきを取り戻しながら、あざけりの色を浮かべて、「それは、われわれの知ったことか。自分で始末するがよい」と答えた(マタイ二七ノ四)。祭司たちは進んでユダを自分たちの道具にした。しかし彼らはユダの卑劣さをあざけた。ユダが彼らに向かって告白したとき、彼らははねつけた。

ユダは、こんどはイエスの足下に身を投げて、イエスが神のみ子であることを告白し、どうか自分を救ってくださいるようにと嘆願した。救い主はご自分を裏切った者を責められなかった。主はユダが悔い改めていないことを知っておられた。彼の告白は不義の魂に迫られ、自分の罪についての自覚とさばきを恐れる思いから出たものであった。彼は自分が罪のない神のみ子売り渡し、イスラエルの聖者をこぼんだことについて、心の底からの深い悲しみを感じていなかった。しかしイエスは、非難のことばを出されなかった。主は、あわれみをもってユダをごらんになり、この時のためにわたしは世にきたのだと言われた。

驚きのささやきが集まっている人々の中に起こった。彼らは、自分を裏切った者に対するキリストの寛容さを驚きの思いをもって見た。この人はただの人間ではないという確信がもう一度わき起こった。だがもし彼が神のみ子なら、どうして束縛からのがれて、告発者たちに勝利されないのだろうか、彼らは疑った。

ユダは自分の嘆願がむだなことを知ると、もうだめだ、もうだめだと叫びながら法廷から走り出た。彼はイエ

すが十字架につけられるのを見ながら生きてはいられない気がした。そして絶望のあまり、出て行って自ら首を
つって死んだ。

その同じ日の遅くに、ピラトの法廷からカルバリーへの途中、イエスを十字架の処刑場へ引っ張って行く邪悪
な群衆の喚声と嘲笑がとだえた。人目につかない寂しい場所を通り過ぎたとき、彼らは枯れた木の根もとにユダ
の死体を見たのである。それは目をそむけたくないような光景であった。ユダが木につるして首をつったひもは、
からだの重みで切れていた。彼のからだは落ちて無惨につぶれ、犬どもがいまそれをむさぼり食べていた。彼の
遺体はすぐ目に見えないところに埋められた。群衆の間にはあざけりが少なくなり、多くの青ざめた顔が内心の
思いをあらわしていた。イエスの血について罪を犯した人たちの上に、すでに報いがおとずれているように見え
た。

ピラトの法廷で

本章はマタイ二七ノ二、一―三一、マルコー五ノ一―二〇、ルカ二三ノ一―二五、ヨハネ一八ノ二八―四〇、一九ノ一―一六にもとづく

ローマ人総督ピラトの法廷に、キリストは、囚人として拘束されて立たれる。イエスのまわりには警備の兵士たちが立ち、法廷は見物人でたちまちいっぱいになる。入口のすぐ外側には、サンヒドリンの裁判官たち、祭司たち、役人たち、長老たち、それにやじ馬連中がいる。

イエスを有罪に定めてから、サンヒドリンの会議は、その判決の確認と執行をピラトに願っていた。しかしこれらのユダヤ人当局者たちは、ローマ人の法廷にはいるうとしなかった。彼らの儀式の律法によれば、そうすることによって彼らはけがれ、したがって過越の食事に加わることができないのであった。盲目的な彼らは、自分たちの心が殺人的な憎悪によってけがされていることに気づかなかった。キリストが真の過越の小羊であられるということ、そしてそのおかたをすてたからにはこの大いなる食事は彼らにとって何の意味もなさなくなっているということが、彼らにはわからなかった。

救い主が法廷に連れてこられると、ピラトは好意的な目で主を見なかった。このローマ人総督はあわただしく

寢室から呼び出されたので、できるだけ早く仕事を片づけようと決心していた。彼はこの囚人を行政長官らしいきびしさでとり扱うつもりでいた。できるだけきびしい表情を浮かべながら、彼は、休息中の自分がこんなに朝早くから呼び出されるとはいったいどんな種類の男を調べなくてはならないのだろうと思つて向き直つた。彼は、これがユダヤ人当局者たちが裁判と処刑を急いでもらいたがつている人間にちがいないとわかつた。

ピラトはイエスを護衛している人たちを見、それからさぐるような目つきをじっとイエスにそそいだ。彼はこれまであらゆる種類の犯罪人を取り扱わねばならなかつた。しかしこんなに善良で気高い様子をした人間が彼の前に引き出されたことはかつてなかつた。彼はイエスの顔に何の罪の影も、恐れ表情も、大胆不敵さもみられなかつた。彼は、その顔つきに犯罪人の特徴ではなく、天の特性があらわれているおだやかで、威厳のある態度の人を見た。

キリストの様子はピラトに好ましい印象を与えた。ピラトの性質のよい一面がめざめた。彼はこれまでイエスとその働きについて聞いていた。彼の妻は、このガリラヤの預言者がふしぎなわざを行なつて、病人をいやしたり死人をよみがえらせたりしたことなどをいくらか彼に話したことがあつた。いまそのことが夢のようにピラトの心によみがえつてきた。彼は二、三の方面から聞いたうわさを思い出した。彼はこの囚人に対する告発をユダヤ人自身にやらせようと決心した。

この男はだれか、あなたがたは何のためにこの男をつれてきたのか、この男に何の罪があると言うのか、とピラトは言った。ユダヤ人たちは当惑した。彼らはキリストに対する告発を証拠だてることのできないことがわか



ピラトは、ナザリのイエスを群衆の前に引き出して、「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバかそれともキリストといわれるイエスカ」と尋ねた。怒れる群衆は、イエスの死刑を求めて、「バラバの方を」と叫んだ。

っているので、公開の尋問を望まなかった。彼らは、この男がナザレのイエスという詐欺師であると答えた。

ふたたびピラトはたずねた、「あなたがたは、この人に対してどんな訴えを起すのか」(ヨハネ一八ノ二九)。

祭司たちはこの質問に答えないで、彼らのいらだちをあらわしていることばで、「もしこの人が悪事をはたらかなかつたなら、あなたに引き渡すようなことはしなかったでしょう」と言った(ヨハネ一八ノ三〇)。サンヒドリンを構成している人たち、すなわち国の最高の地位にある人たちが、死刑に値すると考えられる人間をあなたのところへつれてくるとき、その訴えについてどうしてたずねる必要があるうか。彼らは、自分たちの重要性についての認識をピラトに印象づけ、それによって多くの予備尋問を経ないで、彼らの依頼に応じさせようと望んだ。彼らは自分たちの宣告を裁可してもらいたいと熱心に望んだ。キリストのふしぎなみわざを目撃した人たちが、いま彼らが並べたてているつくりごととは異なった話をすることができるということを彼らは知っていたからである。

祭司たちは、気が弱くて考えのぐらぐらするピラトを通して、彼らの計画を問題なく実行できると考えた。これより前ピラトは、死刑に値しないと彼らにわかっているような人たちに死刑を宣告して、その死刑命令書に軽率に署名していた。彼の目には、囚人の生命などたいしたことではなかった。その囚人が無罪であるかそれとも有罪であるかは、何も特別重要なことではなかった。祭司たちは、ピラトがキリストの言い分を聞かないで、いまイエスに死刑を言い渡すように望んだ。このことを彼らは、彼らの国の大祭にあたっての一つの恩典として求めた。

しかしこの囚人のうちには、そうすることをピラトにちゅうちよさせる何ものかがあった。彼はあえてそうしなかった。ピラトは祭司たちの意図を見抜いた。彼は、死んでから四日もたった男ラザロをイエスがよみがえらせたのはそんなに前のことではなかったことを思い出した。そこで彼は、有罪の判決に署名する前に、イエスに対する告発が何であるか、そしてそれは証明できるかどうかを知ろうと決心した。

もしあなたがたの判決が十分であるならば、なぜこの囚人をわたしのところへ連れてきたのだと、彼は言った。「あなたがたは彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」(ヨハネ一八ノ三二)。こう迫られると、祭司たちは、イエスにすでに判決をくださったが、その有罪の宣告を有効にするにはピラトの宣告が必要なのだと言った。あなたがたはどんな宣告をくださったのだと、ピラトはたずねた。死刑の宣告です、しかし「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と彼らは答えた(ヨハネ一八ノ三二)。彼らは、キリストの有罪についてピラトが彼らのことはを信じてその宣告を執行してくれるようにとたのんだ。その結果については、自分たちが責任を負うというのだった。

ピラトは正しい、あるいは良心的な裁判官ではなかった。しかし道徳的な力は弱かったが、彼はこの願いを許可することをこわった。彼は、イエスに対する告発の理由が述べられないかぎり、有罪の宣告をくだそうしなかった。

祭司たちは苦境に陥った。彼らは自分たちの偽善を一番奥深いところへ隠さねばならないことを知っていた。キリストが宗教上の理由で捕えられたことをみせてはならなかった。これを理由として持ち出したら、彼らの訴

えはピラトに何のききめもないであろう。イエスが一般の法律に反したことを行なっているようにみせねばならない。そうしたらイエスを政治犯として処罰できるのである。ローマ人の統治に対する騒動や反乱がしじゅうユダヤ人の間に起こっていた。ローマ人は、こうした反乱をきびしく取りしまり、暴動になりそうなことはどんなことでも弾圧するようにたえず警戒していた。

これよりほんの二、三日前、パリサイ人たちは、「カイザルに貢を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか」とたずねてキリストをわなにかけようとした。しかしキリストは彼らの偽善をばくろされた。居合わせたローマ人たちは、「カイザルのものはカイザルに……返しなさい」とのイエスの返事に、陰謀家たちが完全に失敗し、ろうばいするのを見たのだった（ルカ二〇ノ二二―二五）。

そこで祭司たちはこんどは、自分たちの頭でつくりあげたことを、キリストが教えられたかのようにみせかけようと思った。彼らは、苦しまぎれに、偽りの証人たちを助けに呼び、「訴え出て言った、『わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました』（ルカ二三ノ二）。ここに三つの点について告発がなされたが、そのどれも根拠のないものだった。祭司たちはそのことを知っていたが、目的をとげることができさえすれば、偽証することをいとわないのだった。

ピラトは、彼らの意図を見抜いた。彼は、この囚人が政府に対して陰謀をくわだてたということを信じなかった。イエスの柔和なへりくだった様子はこの告発にまったく不似合いだった。ユダヤ人の高官たちの邪魔になっ

ているこの罪なき人間を滅ぼすために根深い陰謀がめぐらされているということを、ピラトは確信した。イエスに向かつて彼はたずねた、「あなたがユダヤ人の王であるか。」救い主は、「そのとおりである」とお答えになった(マルコ一五ノ二)。こう言われたとき、イエスの顔つきはあたかも太陽の光線に照らされているかのように輝いた。

イエスの答を聞くと、カヤパやいっしょにいた人々は、イエスがその告発された罪を認めたことをピラトが証言するように求めた。騒々しい叫び声をあげて、祭司たち、律法学者たち、役人たちは、イエスに死刑の宣告をくださうと要求した。その叫び声にやじ馬たちが加わって、喚声は耳もつぶれるばかりであった。ピラトは困惑した。イエスが告発者たちに何の返事もされないのを見て、ピラトはイエスに言った、「何も答えないのか。見よ、あなたに対してあんなにまで次々に訴えているではないか」(マルコ一五ノ四)。それでもイエスは、何もお答えにならなかった。

法廷の全部の人たちの前で、キリストは、ピラトのうしろに立って、そののしり声を聞かれた。しかしご自分に対してどんなに偽りの告発がなされても、主は一言もお答えにならなかった。その態度の全体はイエスが無罪を意識しておられることを示していた。イエスはご自分のまわりに打ちつける荒々しい波に動かされることなく立っておられた。それはあたかも怒りの大波が、荒れ狂う大洋の波のようにだんだん高くもりあがってイエスのまわりに碎けるが、イエスにはとどかないようなものだった。主はだまって立っておられたが、しかしその沈黙は雄弁であった。それは人の内面から外面を照らしている光のようであった。

ピラトはイエスの態度に驚いた。この人は自分のいのちを救いたくないので裁判の進行を無視しているのだからと、彼は心の中で問うてみた。報復もしないで侮辱と嘲りに耐えておられるイエスを見て、この人にはあのわめいている祭司たちのような不義や不正があるはずがないとピラトは感じた。イエスから真実を引き出し、群衆の騒ぎからのがれたいと望んで、ピラトは、イエスをかたわらに引きよせ、もう一度「あなたは、ユダヤ人の王であるか」とたずねた(ヨハネ一八ノ三三)。

イエスはこの質問に直接お答えにならなかった。イエスは、聖霊がピラトと争っているのを知っておられたので、彼が自分の確信を認める機会をお与えになった。「あなたがそつ言つのは、自分の考えからか、それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか」とイエスはあたはずねになった(ヨハネ一八ノ三四)。すなわち、ピラトにそのような質問をさせたのは、祭司たちの訴えなのか、それともキリストから光を受けたいという望みなのかというのであった。ピラトはキリストの言われた意味を理解した。しかし彼の胸中に誇りがあたまをもたげた。彼は自分のうちにわきあがった確信を認めようとしなかった。そして、「わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか。」と言った(ヨハネ一八ノ三五)。

ピラトの貴重な機会は過ぎ去った。それでもイエスは、彼にもっと光を与えないではおかれなかった。イエスはピラトの質問に直接お答えにはならなかったが、ご自分の使命をはっきり述べられた。イエスは、ご自分がこの世の王位を求めているのではないことを、ピラトに理解させられた。

イエスは言われた、『わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない』。そこでピラトはイエスに言った、『それでは、あなたは王なのだな』。イエスは答えられた、『あなた言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける』(ヨハネ一八ノ三六、三七)。

キリストは、ご自分のことばそのものが、それを受け入れる気持のある者にとっては神秘を解く鍵であることを肯定された。みことばはそれ自体にすばらしい力があつて、これがキリストの真理のみ国を發展させる秘訣であつた。イエスは、ピラトが真理を受け入れてそれを自分のものにするることによつてのみ彼の墮落した性質はつくり直されるのだということを理解するように望まれた。

ピラトは真理を知りたいと願つた。彼の心は混乱していた。彼は熱心に救い主のことばをとらえ、彼の心は、それが本当に何であるか、またどのようにしたらそれを自分のものにするかができるかを知りたいとの熱望に動かされた。「真理とは何か」とピラトはたずねた。しかし彼は返事を待たなかつた。外部の騒ぎが彼の関心を当面の問題に引きもどした。祭司たちが今すぐ判決をくだすようにわめきたてていたからである。ピラトはユダヤ人たちのところへ出て行くと、力をこめて、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない」と宣言した(ヨハネ一八ノ三八)。

異教の裁判官のこのことばは、救い主を訴えているイスラエルの役人たちの不誠実と虚偽に対する痛烈な譴責

であつた。祭司たちと長老たちがピラトのことを聞いたとき、彼らの失望と怒りはとどまるところを知らなかった。彼らは長い間陰謀をめぐらしてこの機会を待っていたのだ。イエスが釈放されそうな形勢をみると、彼らはいまにもイエスを八つ裂きにしそうな様子をみせた。彼らは大声でピラトを攻撃し、ローマ政府から譴責されるぞといつておどした。彼らは、ピラトがイエスの有罪をこばんだことを非難し、イエスはカイザルに反対して立ちあがった人間なのだと断言した。

怒った人々が口々にイエスの扇動的な感化は全国に知れ渡っていると断言するのがこんどは聞かれた。祭司たちは、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動（せんどう）しているのです」と言つた（ルカ二三ノ五）。

ピラトは、この時、イエスを有罪に定めようとは思つていなかった。ユダヤ人が憎悪と偏見からイエスを訴えたことが彼にはわかつていた。彼は自分の義務が何であるかを知っていた。正義はキリストを直ちに釈放することを要求した。しかしピラトは民衆の悪意を恐れた。イエスを彼らの手に渡すことをこばめば、騒動がもちあがるであろう。彼はそのような騒ぎにまきこまれることを恐れた。ピラトは、キリストがガリラヤの出身だと聞くと、その地方の領主ヘロデがちょうどエルサレムにきていたので、キリストを彼のもとに送ることにきめた。この手順によって、ピラトは、裁判の責任を自分からヘロデへ移そうと思った。彼はまたこのことを、自分とヘロデとの昔のけんかを和解するよい機会だと考えた。そして実際その通りになったのであつた。この二人の行政長官は救い主の裁判をめぐって親しくなった。

ピラトがイエスをふたたび兵士たちに引き渡したので、イエスは、嘲笑と侮辱の中をヘロデの法廷へ追いたてられた。「ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ」。彼はまだ救い主に会ったことがなかったが、「かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである」(ルカ二三ノ八)。このヘロデは、バプテスマのヨハネの血で手をけがしたヘロデである。ヘロデは、初めてイエスのことを聞いたとき、恐怖におそわれて、「わたしは首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」。「それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言った(マルコ六ノ一六、マタイ一四ノ二)。それでもヘロデはイエスに会いたいと望んだ。いまこの預言者のいのちを救う機会がきたのだ。そこで王は、血にまみれた首を太皿にのせて持ってこられたあの記憶を永久に心の中から追い払いたいと望んだ。彼はまた自分の好奇心を満足させたいと望み、キリストはもし釈放される見込みがあればたのまれることを何でもされるだろうと思った。

祭司たちと長老たちの大群がキリストについてヘロデのところへやってきていた。そして救い主が中へ入れられると、これらの高官たちはみな興奮してしゃべりながら、キリストに対する訴えをのべた。しかしヘロデは彼らの訴えにほとんど注意を払わなかった。彼は、キリストのなわをとくように命令し、同時にキリストの反对者たちが彼を手荒に取り扱っていることを非難した。世のあがない主の平静なお顔を同情をもって見入った彼がそこに読みとったものは知恵と純潔だけであつた。ピラトと同様にヘロデもまた、キリストが悪意とねたみから訴えられているということを確信した。

ヘ□デがキリストに多くのことばで質問したが、その間ずっと救い主は深い沈黙をつづけられた。すると、王の命令によって、よぼよぼの不具者たちが呼ばれ、キリストは奇跡を行なってその主張を証明するように命令された。人々はあなたが病人をいやすことができると言っている。広くひろがっているあなたの評判がうそでないことをわたしは見たいのだと、ヘ□デは言った。イエスはお答えにならなかった。ヘ□デはなおも言い張った。もしあなたが他人のために奇跡を行なうことができるのなら、いまそれを自分自身のために行ないなさい、そうしたらあなたのためになるだろうと。ふたたび彼は、うわさに聞く力があなたにあるという証拠を示せと命令した。しかしイエスは見聞きしていない人のようであった。神のみ子は人の性質をおとりになった。彼は同様な事情のもとで人がしなければならいようになさねばならない。だからイエスは、人が同様な立場に置かれたときに耐え忍ばねばならない苦痛と恥辱から自分がまぬかれるために奇跡を行なおうとされなかった。

ヘ□デは、もしキリストが目の前で何か奇跡を行なわれるなら、釈放しようと約束した。キリストを訴えた人たちはキリストの力で偉大なわざが行なわれたのを彼ら自身の目で見ていた。彼らは、キリストが墓に死人を解放するように命令されるのを聞いた。彼らは、その声に従って死人が出てくるのを見た。彼らはいまキリストが奇跡を行なわれないかと恐怖におそわれた。何よりも彼らが恐れたのは、キリストの力のあらわれであった。このような力のあらわれは、彼らの計画にとって致命的な打撃となり、おそらく彼らの生命さえ危いかも知れないのだった。ふたたび祭司たちと役人たちが、非常に心配しながら、キリストに対する訴えを主張した。彼らは声を張りあげて、彼は反逆者だ、彼は冒瀆者だ、彼は悪鬼の王ベルゼブルから与えられた力で奇跡を行なうのだ

と断言した。人々が□々にいろいろなことを叫んだために、法廷は混乱の場となった。

ヘ□デの良心は、ヘ□デヤからバプテスマのヨハネの首を求められて恐ろしさに身ぶるいした時ほどいまは敏感ではなくなっていた。しばらくの間彼は自分の恐ろしい行為に鋭い後悔の痛みを感じていた。しかし彼の道徳的観念はその放縦な生活のためにますます墮落した。いま彼の心は、ヨハネが自分を責めたから彼に刑罰をくだしたのだと自慢できるほどまでにかたくなになっていた。そしていま彼は、自分はイエスを釈放することも罪に定めることもできる権力を持っているのだと何度も宣言して、イエスをおどした。しかしイエスの様子には、一言でも聞かれたような証拠はみられなかった。

ヘ□デはこの沈黙にいらだった。それは彼の権威に対してまったく無関心を示しているようにみえた。虚栄心の強い、尊大な王にとって、このように無視されることは公然と譴責されるよりも不愉快だった。ふたたび彼は腹立たしげにイエスをおどかしたが、あいかわらずイエスは平静にだまっておられた。

この世におけるキリストの使命は、いたずらな好奇心を満足させることではなかった。主は、心の傷ついた者をいやすためにこられた。罪に悩む魂の傷をいやすために何かことばを語るのであったら、主はだまってはあらなかったであろう。しかしイエスは、真理をけがれた足で踏みつけることしかないような者たちに対しては、何も言われることがなかった。

キリストは、このかたくなな王の耳を刺し通すようなことばを、ヘ□デに言うこともおできになった。イエスは、ヘ□デの前に彼の生活のあらゆる不義と彼にのぞもうとしている破滅の恐怖を示すことによって、彼を恐怖

でふるえあがらせることもあできになった。しかしキリストの沈黙は、主がお与えになることのできた最もきびしい譴責であった。ヘロデは最も偉大な預言者によって彼に語られた真理をこぼんだので、もうほかのメッセージは受けられないのであった。天の大君には彼のために語られることばがなかった。人類の苦悩に対していつも開かれていた耳は、ヘロデの命令を聞く余地はなかった。悔い改めた罪人の上にいつもそそがれていたあわれみとゆるしを語るイエスの愛の目は、ヘロデに向けられる様子がなかった。最も感動的な真理を語り、この上なくやさしい願いをこめて最も罪深い者と最も墮落した者に訴えられた唇は、救い主の必要を感じない傲慢な王に対してはとざされていた。

ヘロデの顔は激怒で赤くなった。群衆の方を向くと、彼は、怒ってイエスは詐欺師だと非難した。それからキリストに彼は言った。もしあなたが主張通りの証拠を示さないならば、わたしはあなたを兵士たちと民衆の手に引き渡そう。彼らはあなたに語らせることができるかも知れない。もしあなたが詐欺師なら彼らの手にかかって死ぬのがあなたには一番ふさわしいのだ。もしまたあなたが神の子なら奇跡を行なって自分自身を救いなさいと。このことばが語られたとたんに、人々はわっとキリストめがけて押しよせた。野獣のように、群衆はその餌食に突進した。イエスはあちらこちらへ引きずられ、ヘロデもやじ馬に加わって神のみ子はずかしめようとした。ローマの兵士たちが間にはいつて、狂気の群衆を押し返さなかったら、救い主は八つ裂きにされてしまわれたであろう。

「ヘロデはその兵卒どもと一緒にあって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せ

…た」(ルカ二三ノ一)。ローマの兵士たちもこの虐待に加わった。これらの邪悪な、墮落した兵卒たちが、ヘ□デとユダヤ人の高官たちに勢いづけられて、挑発できる限りのことが救い主に対してなされた。それでもイエスの天来の忍耐は変わらなかった。

キリストの迫害者たちは、彼ら自身の品性でキリストの品性をおしはかろうとした。彼らはキリストが彼らと同じような悪い人間であるように言いふらしていた。しかし現在のあらゆる外観の奥に別な光景、すなわち彼らがいつかはあらゆる栄光のうちに見る光景が現われた。キリストの前でうちふるえた者もあった。粗暴な群衆がからかいながらキリストの前に頭をさげていたとき、同じ意図で進み出た者の中には、恐れて無言のまま引き返す者たちもいた。ヘ□デは罪を自覚した。あわれみの光の最後の光線が、罪に固まった彼の心を照らしていた。この人はただの人間ではないと、彼は感じた。人性を通して神性がひらめいていたからであった。キリストが嘲る者たちや姦通者たちや殺人者たちにとりかこまれておられたその時、ヘ□デは、み座についておられる神を見ているような気がした。

ヘ□デはかたくなではあったが、キリストの有罪を裁可しようとはしなかった。彼はこの恐るべき責任からまぬかれないと望んで、イエスをローマ人の法廷に送りかえした。

ピラトは失望し、非常に不愉快に思った。ユダヤ人たちが囚人をつれて戻ってくると、彼はいらいらして、いったいわたしにどうしてもらいたいのだとたずねた。わたしはすでにイエスを取り調べたが、彼には何の罪もみいだされなかったではないかとピラトは彼らに注意した。おまえたちはイエスについて苦情を訴えてきたが、そ

の告発をひとつも証明できなかったではないかと、彼は言った。ガリラヤの領主であり、おまえたちの同国人であるヘロデにイエスを送ったが、彼もまたイエスのうちに死刑に相当するものを何一つみいだすことができなかったのだ。「だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」と、ピラトは言った（ルカ二三ノ一六）。ここでピラトは彼の弱さをあらわした。彼はイエスの無罪を宣言しておきながら、訴える者たちをなだめるためにイエスがむち打れることに賛成した。彼は暴徒たちと妥協するために、正義と原則を犠牲にするのであった。このために彼は不利な立場に陥った。群衆は、彼の優柔不断につけこんで、囚人の生命を要求してますますわめいた。もし最初にピラトが断固とした態度をとって、無罪とわかった人間に有罪を宣告することを拒否したら、彼は、彼を一生しばりつけた悔恨と罪とがの致命的な鎖をたち切ることができたであろう。もし彼が正義についての自分の確信を実行していたら、ユダヤ人がつけあがって彼に命令するようなことはなかったであろう。キリストは死刑にされたであろうが、それでもその罪がピラトに着せられることはなかったであろう。しかしピラトは一步一步自分の良心を犯した。彼は、正義と公平をもって裁判することを言いのがれたので、いまや祭司たちと役人たちの手に陥ってほとんど無力になっている自分に気がついた。動揺と優柔不断が彼の破滅となった。それでもなおピラトは盲目的に行動することをゆるされなかった。神からのメッセージが、彼の犯そうとしている行為について警告した。キリストの祈りに答えて、ピラトの妻のもとに天からみ使があとずれ、夢の中で、彼女は救い主を見、共に語ったのであった。ピラトの妻はユダヤ人ではなかったが、夢の中でイエスを見たとき、イエスの性格や使命に疑いをもたなかった。彼女はイエスが神の君であることを知った。彼女は、イエスが法廷

でさばかれるのを見た。彼女はその手が犯罪人の手のように固くしぼられるのを見た。彼女はヘロデと兵卒たちが恐ろしい働きをしているのを見た。また祭司たちと役人たちがねたみと悪意に満ちて、気狂いのように訴えるのを聞いた。「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は……死罪に当る者です」ということを彼女は聞いた(ヨハネ一九ノ七)。彼女は、ピラトが「彼にはなんの罪も見いだせない」と言ってから、イエスをひち打ちのために引き渡すのを見た(ヨハネ一九ノ六)。彼女はピラトが有罪の宣告をくだすのを聞き、キリストを殺人者たちに引き渡すのを見た。彼女はカルバリーに十字架がたてられるのを見た。彼女は地が暗黒につつまれるのを見、「すべてが終った」という神秘的な叫びを聞いた。さらに彼女の目はもう一つの光景を見た。彼女はキリストが太いなる白い雲に乗り、一方地は空間に揺れ動き、キリストを殺した者たちがその栄光の前から逃げ出すのを見た。恐怖の叫び声をあげて目をさますと、彼女は、すぐピラトにあてて警告のことばを書いた。ピラトがどうしたらよいかためらっていると、一人の使者が群衆をおしわけて進んで来て、彼の妻からの手紙を手渡した。それにはこう書かれていた。

「あの義人には関係しないでください。わたしはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」(マタイ二七ノ一九)。

ピラトの顔は真っ青になった。彼は自分自身の矛盾する感情に困惑した。しかし彼がぐずぐずしている間に、祭司たちと役人たちは、さらに一層民衆の心をあおりたてていた。ピラトは決断を迫られた。彼はキリストの釈放に役立つかも知れない一つの慣例をいま思いついた。この祭の時に、民衆に選ばせて囚人をだれかひとり釈放

するのが慣例となっていた。この習慣は異教の発明によるもので、その中には正義の影すらなかったが、ユダヤ人はこの習慣を非常に重んじていた。この時、ローマ当局は、死刑の宣告を受けたバラバという囚人を留置していた。この男は自分がメシヤであると主張していた。彼は、これまでと異なった秩序をうちたて、世直しをする権限をもっていると主張した。悪魔的な欺瞞のもとに、彼は窃盗や強盗によって手に入れることができる物は何でも自分のものだと言張した。彼はサタンの媒介によってふしぎなわざを行ない。民衆の中から信者を獲得し、ローマ政府反対を扇動していた。宗教的な熱心さという仮面のもとに、彼は反逆と残酷なことしか考えない強情で命知らずな悪人だった。この男と、罪のない救い主とのどちらかを選ばせることによって、ピラトは、人々のうちに正義感をめざめさせようと考えた。彼は民衆が祭司たちや役人たちに反対して、イエスに同情するようにしたいと望んだ。そこで群衆の方へ向いて、非常な熱心さで、「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバか、それとも、キリストといわれるイエスカ」と言った(マタイ二七ノ一七)。

野獣がほえるように、「バラバをゆるしてくれ」という群衆の答えがあがった。「バラバ、バラバ」という叫び声がますます高まって行った。自分の質問の意味が人々にわからなかったのだろうと思って、ピラトは「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」とたずねた(マルコ一五ノ九)。しかし彼らはふたたび大声で叫んで言った、「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」(ルカ二三ノ一八)。「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか」と、ピラトはたずねた(マタイ二七ノ二二)。大波のように動いている群衆はふたたび悪鬼のようにほえた。悪鬼そのものが、人間の姿をとって群衆の中にいたのだから、「十字架につけよ」とい

う答えよりほかに何を期待することができよう。

ピラトは困惑した。彼はこんなことになるうとは考えていなかった。彼は罪のない人間をこの上ない不名誉で残酷な死に引き渡すことをちゅうちよした。わめき声はやむと、ピラトは人々に向かつて言った、「では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか」(ルカ二三ノ二二)。しかし事態はもう議論の段階を過ぎていた。彼らが求めたのはキリストの無罪の証拠ではなくて、キリストの有罪の宣告であつた。

それでもピラトはイエスを救おうと努力した。「ピラトは三度目に彼らにむかつて言った、『では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。だから、おち打ってから彼をゆるしてやることにしよう』」(ルカ二三ノ二二)。イエスの釈放を口にしたことが人々を十倍もの狂乱に駆りたてた。彼らは「十字架につけよ、十字架につけよ」と叫んだ。ピラトの優柔不断が生んだ嵐はますます高まつていった。

イエスは、疲労で弱り、からだじゅう傷ついたまま、捕えられて、群衆の見ている前でおち打たれた。「兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の内に連れて行き、全部隊を呼び集めた。そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、『ユダヤ人の王、ばんざい』と言って敬礼をしはじめた。また……つばぎをかけ、ひざまずいて拝んだりした」(マルコ一五ノ一六)。時々悪いやつがイエスの手に持たせてあつた葦の棒を引つたり、それでイエスのひたいの上の冠をたたいていばらを頭につきさしたので、血がイエスのお顔とひげをつたわってしたたり落ちた。

ああ天よ、驚嘆せよ、ああ地よ、驚け。迫害する者たちと迫害されるおかたとを見よ。狂気した群衆が世の救い主をとりかこんでいる。嘲りと冷笑が冒瀆のきたないことばに入りまじる。冷酷なやじ馬たちがイエスのいやしい生れと貧しい生活を口にする。神のみ子であるというイエスの主張がからかわれ、俗悪なじょうだんと侮辱的な冷笑が口から口へ伝わる。

残酷な暴徒たちに救い主を虐待させたのはサタンであった。できればイエスのうちに復讐心を起こさせるか、あるいはイエスがご自分の釈放のために奇跡を行なわれるようにしおけることによって、救いの計画を破壊することがサタンの目的であった。イエスの人間生活に一つでも欠点があれば、あるいはイエスの人性が恐るべき試練に一度でも耐えられなかったら、神の小羊は不完全な供え物となり、人類のあがないは失敗したのである。しかし、命令しさえすれば天の万軍をご自分の助けに呼ぶことがおできになるおかたが、天の威光をひらめかせることによって暴徒たちを恐怖のうちに目の前から追い払うことができたおかたが、最も下等な侮辱と暴行とをどこまでも平静に受けられたのであった。

キリストの反对者たちは神性の証拠として奇跡を要求した。彼らは、彼らが求めたどんな証拠よりも大きな証拠を与えられた。キリストの迫害者たちがその残酷さのために人間以下になりさがってサタンに似た者となったように、イエスはその柔和と忍耐によって人間以上に高められ、神とひとしいおかたであることを証明された。イエスの屈辱はイエスが高められることの保証であった。イエスの傷ついたこめかみから顔とひげを伝わって流れた苦悩の血のしたたりは、イエスがわれらの大祭司として「喜びのあぶら」をそそがれることの保証であった



ピラトがイエスを鞭うちと嘲笑に引き渡したとき、彼は群衆がイエスに対してあわれみの情をもつだろうと考えた。彼は人々がイエスを釈放し、この人についての決定から救ってくれるようにと期待した。

(ヘブル一ノ九)。

救い主をどんなに虐待してもその口から一言のつぶやきも出させることができなかったことを知ったとき、サタンは激しく怒った。イエスは、人の性質をとってあられたが、神のような堅固さによってささえられ、どの点においても、天父のみこころから離れたまわなかった。

ピラトがイエスをおち打ちと嘲りに引き渡したとき、彼は群衆の同情心を起こそうと考えた。彼は、人々がこのことを十分な刑罰だと決定するように望んだ。祭司たちの敵意もそれで満足させられるだろうと、彼は考えた。しかしユダヤ人たちは、鋭い目で、無罪を宣告された人間をこのように罰することの弱点を見抜いた。彼らは、ピラトが囚人のいのちを助けようとしていることがわかっていたので、イエスを釈放してはならないと決心していた。われわれをよろこばせ満足させるために、ピラトは彼をおち打たせたのだ、もし事態を決定的な結果にまで追い込めば、確実に目的を達することができると、彼らは考えた。

ピラトはいま、バラバを法廷に連れてくるように呼びにやった。それから彼は、二人の囚人を並べて、救い主の方を指さしながら、重々しい嘆願の口調で、「見よ、この人だ」。「わたしはこの人をあなたがたの前に引き出す、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」と言った(ヨハネ一九ノ五、四)。

神のみ子は、あざけりの衣といばらの冠をつけて立っておられた。腰まで衣をはがされたその背中には、残酷なおちの跡が尾を引いていて、そこから血がとめどなく流れていた。イエスのお顔は血に染み、疲労と苦痛の跡

があらわれていた。しかし、このときほどイエスのお顔が美しく見えたことはなかった。救い主の顔つきは、反對者たちの前にあって醜くならなかった。お顔のつくりのひとつひとつがやさしさと忍従と残酷な敵に対する最もやさしい同情とをあらわしていた。イエスの態度には臆病な弱さがなく、寛容の力と威厳があった。イエスのかたわらの囚人はこれとはいちじるしく対照的であった。バラバの顔つきのどの線も、彼がまさしく手に負えない悪党であることを物語っていた。その対照は見る者のひとりびとりに語りかけた。見物人の中には泣いている人たちもいた。イエスをながめて、彼らの心は同情でいっぱいになった。祭司たちと役人たちさえ、イエスがご自分の主張された通りのおかたであることを自覚した。

キリストをとりかこんでいたローマの兵士たちの全部が無慈悲だったわけではない。ある者たちは、イエスが犯罪人が危険な人物である形跡が一つでもあらわれているかどうか熱心にその顔を見守った。時々彼らはふり返ってバラバに軽蔑の視線を投げた。彼を腹の底まで見抜くには深い洞察力はいらなかった。ふたたび彼らはさばきにかかれていいるおかたに向き直るのであった。彼らは、この聖なる受難者を深い同情の思いをもってながめた。キリストの無言の服従は、彼らがこのおかたをキリストとして認めるまで、あるいはこのおかたをこばんで自分自身の運命を決定するまで、決して消し去ることのできない光景を彼らの心に焼きつけた。

ピラトは、救い主が不平も言わずに忍耐しておられるのを見て驚きの念に満たされた。彼は、ユダヤ人たちが、バラバとくらべて、この人を見れば、心を動かされて同情するだろうと信じて疑わなかった。しかし彼は、世の光として祭司たちの暗黒と誤りを明らかにされたキリストに対する彼らの熱狂的な憎しみがわからなかった。彼

らは、暴徒たちを気違いじみた激情へ駆りたて、ふたたび祭司たち、役人たち、民衆が、「十字架につけよ、十字架につけよ」と恐ろしい叫び声をあげた。ついにピラトは、彼らの道理をわきまえない残酷さにすっかり忍耐力を失いながら、絶望的な叫びをあげて言った、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」(ヨハネ一九ノ六)。

このローマ人総督は、残酷な場面を見なれていたが、有罪を宣告されておち打たれ、額と裂けた背中から血を流しながらもなお王座にある王のような態度を保っているこの受難の囚人に対する同情に心を動かされた。しかし祭司たちは、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」と言明した(ヨハネ一九ノ七)。

ピラトははっとした。彼は、キリストとその使命について正しい観念を持っていなかったが、神について、また人間よりもまさった存在についてばく然とした信仰を持っていた。前に一度彼の心を通りすぎた一つの思いが、いまもつとはつきりした形をとって現われた。嘲りの紫の衣を着、いばらの冠をかぶって目の前に立っているのは神ではないだろうかと彼は疑った。

もう一度ピラトは法廷にはいって行って、「あなたは、もともと、どこからきたのか」とイエスに言った(ヨハネ一九ノ九)。しかしイエスは返事をされなかった。救い主はすでにピラトに十分語り、真理の証人としてのご自分の使命について説明されたのだった。ピラトはその光を無視したのだった。彼は原則と権威を暴徒たちの要求に屈服させることによって、裁判官という高い職務をけがしたのだ。イエスは彼のためにそれ以上の光をお与

えにならなかった。イエスの沈黙にいらだって、ピラトは横柄(おうへい)に言った。

「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」(ヨハネ一九ノ一〇)。

イエスは答えて言われた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」(ヨハネ一九ノ一一)。

このように、あわれみ深い救い主は、激しい苦難と悲しみの最中にも、イエスを十字架につけるために引き渡したローマ人総督の行為をできるだけゆるしておやりになった。これはいつまでも世にも伝えられるべき何というとうとい光景だったことだろう。それは全地のさばき主であられるキリストの品性に何というとうとい光を放ったことだろう。

「わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」とイエスは言われた。キリストは、大祭司としてユダや国民を代表しているカヤパのことを言われたのである。彼らはローマ当局を支配している原則を知っていた。彼らはキリストをあかししている預言について、またキリストご自身の教えと奇跡について光を与えられていた。ユダヤ人の裁判官たちは、彼らが死刑を宣告したおかたの神性についてまちがう余地のない証拠を与えられていた。そこで彼らは、彼らの光にしたがってさばかれるのであった。

最も大きい罪と最も重い責任は、国民の中で最高の地位を占めている人たち、卑劣にも自ら裏切りつつあった聖なる信任の受託者たちにあった。ピラトもヘロデもローマの兵士たちも、イエスについては比較的無知だっ

た。彼らは、イエスを虐待することによって祭司たちと役人たちをよろこばせようと思った。彼らは、ユダヤ国民が豊かに受けたような光を与えられていなかった。もし兵士たちに光が与えられていたら、彼らはあんなにも残酷にキリストをとり扱うようなことはしなかったであろう。

ふたたびピラトは、救い主を釈放するようにと提案した。「しかしユダヤ人たちが叫んで言った、『もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません』」(ヨハネ一九ノ一二)。このように、これらの偽善者たちはカイザルの権威を熱心に支持しているようなふりをした。ローマ人による統治に反対する者たちの中で、ユダヤ人は最も激しかった。彼らは、安全なときには、彼ら自身の国の規則と宗教上の規則を最も圧制的に励行したが、何か残酷な目的を達成しようと望むときには、カイザルの権力を称賛した。キリストの破滅を達成するために、彼らは自分たちが憎んでいる外国の法律に対する忠誠を口にするのだった。

「自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」と彼らは言い続けた(ヨハネ一九ノ一二)。これはピラトの急所をついていた。彼はローマ政府から疑いの目で見られていたので、こんなうわさをたてられたら身の破滅になることを知っていた。もしユダヤ人を妨害すれば、その怒りが自分に向けられることを彼は知っていた。彼らは復讐をとげるためには、手段をえらばないであろう。現にピラトの目の前に、彼らが理由もなく憎悪している人間の生命をどこまでもねらっている一つの例があるのだ。

それからピラトは、裁判官席にすわり、ふたたびイエスを人々に示して、「見よ、これがあなたがたの王だ」と言った(ヨハネ一九ノ一四)。するとふたたび「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」という狂気じみた叫びがあ

がった。ピラトは遠近に聞こえるような声で、「あなたがたの王を、わたしは十字架につけるのか」とたずねた。しかし、不敬虔で冒瀆的な口から、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」ということばが出てきた(ヨハネ一九ノ一五)。

こうして異教の統治者を選ぶことによって、ユダヤ国民は神権政治から離れた。彼らは自分たちの王として神をこぼんだ。これからは彼らに救済主はないのだった。彼らにはカイザルのほかに王がなかった。民をここまで引っばってきたのは祭司たちと教師たちであった。このために、彼らは、その後起こった恐るべき結果に責任があった。国民の罪、国民の破滅は、宗教界の指導者たちに原因があった。

「ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、『この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい』」(マタイ二七ノ二四)。恐れと自責の念で、ピラトは救い主を見た。上向きのおびただしい顔の波の中で、イエスのお顔だけが平和であった。イエスの頭のあたりにはやわらかな光が輝いているようにみえた。ピラトは、心の中で、この人は神だと言った。ピラトは、群衆の方をふり向いて断言した。わたしは彼の血に責任がない。おまえたちがこの人を引き取って十字架につけるがよい。だが祭司たちと役人たちよ、よく聞け、彼は正しい人間だぞ。きょうのこのしわざについては、彼が自分の父と主張している神が、わたしではなくおまえたちをさばかれるように。次にピラトは、イエスに言った。この行為についてわたしをゆるしていただきたい、わたしはあなたを救うことができない。そして彼は、ふたたびイエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。

ピラトはイエスを救いたいと望んだ。しかしそうすれば自分の地位と名誉を保つことができないことを彼は知った。この世の権力を失うより、彼は罪のない人間を犠牲にする方を選んだ。同様に、損失と苦難とをまめかれるために原則を犠牲にする者がどんなに多いことだろう。良心と義務は一つの方向をさし示し、利己心はほかの方向をさし示す。潮流はまちがった方向へ強く流れるので悪と妥協する者は不義という深い闇へ押し流される。

ピラトは暴徒たちの要求に屈服した。彼は自分の地位を危険にさらすよりも、イエスを十字架につけるために引きわたした。しかし彼の用心にもかかわらず、彼の恐れていたことがのちになって彼の身に起こった。彼は名誉をはぎとられてその高い地位から追われ、キリストの十字架のちまもなく、悔恨と傷つけられた誇りに苦しみながら、自らのいのちをたった。このように、罪と妥協する者はみな悲哀と破滅だけしか得られないであろう。「人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」(箴言一四ノ一二)。

ピラトが、自分はキリストの血について責任がないと宣言した時、カヤパは挑戦的に「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と答えた(マタイ一七ノ二五)。この恐ろしいことばは祭司たちと役人たちにとりあげられ、それは群衆によって人間とは思えないような咆哮(ほうこう)の声となって反響した。全群衆は答えて言った、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい。」

イスラエルの民は彼らの選択をした。イエスを指さして、彼らは「その人ではなく、バラバを」と言った(ヨハネ一八ノ四〇)。強盗であり殺人者であったバラバは、サタンの代表者であった。キリストは神の代表者であった。キリストがしりぞけられ、バラバが選ばれた。彼らはバラバをもらうことになった。この選択をするに当っ

て、彼らは、始めからうそつきで人殺しだった彼を受け入れたのである。サタンが彼らの指導者であった。国民として彼らはサタンの命令を実行するのであった。サタンのわざを、彼らはするのであった。サタンの統治に彼らは服しなければならぬ。キリストの代わりにバラバを選んだ民は、時の続くかぎりバラバの残酷さを感じるのであった。

うたれた神の小羊をながめながら、ユダヤ人たちは、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってよい」と叫んだ(マタイ二七ノ二五)。その恐るべき叫びは、神のみ座にのぼって行った。彼らが自らの上にくだしたその宣告は、天に記録された。その祈りは聞かれた。神のみ子の血は、永遠ののろいとなって、彼らの子らとそのまた子らの上にあった。

それは、恐ろしくもエルサレムの滅亡に実現された。それは、恐ろしくも千八百年間にわたってユダヤ国民の状態にあらわされてきた。すなわち彼らは、ぶどうの木から切り離された枝、集められて焼かれる枯れた、実をむすばない枝であった。世界じゅうこの国でも、幾世紀にわたって、彼らは、罪とがのうちに死んだ。

その祈りは、恐ろしくも大いなるさばきの日に成就するのである。キリストが、やじ馬どもにかこまれた囚人としてではなく、ふたたびこの地上にこられる時、人々は彼を見るのである。その時彼らは、イエスを天の王として見るのである。キリストはご自身の栄光と、天父の栄光と、聖天使たちの栄光のうちに、こられる。勝ち誇った美しい神の子ら、千々万々の天使たちが、比類のない美しさと栄光とをもって、キリストの道中につき従うのである。その時キリストは、栄光の王座におすわりになり、その前に万国の民を集められる。その時すべての

目はキリストを見るが、キリストを刺した者たちもまた見るのである。いばらの冠の代わりに、キリストは、栄光の冠——冠の中の冠をつけておられる。あの古い紫の王衣の代わりに、キリストは、「どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできない」ほどの真白い衣を着ておられる(マルコ九ノ三)。「その着物にも、そのもにも、『王の王、主の主』という名がしるされている」(黙示録一九ノ一六)。キリストをあざけり、打ちたたいた人たちもそこにいる。祭司たちと役人たちは、ふたたびあの法廷の光景を見る。あらゆる出来事が、火の文字で書かれているかのように、彼らの前に現われる。「その血の責任はわれわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と祈った人たちは、この時、その祈りの答を受けるのである。その時全世界は、知り、そして理解する。彼らは、あわれな、弱々しい、有限な人間である自分たちがだれと戦い、何と戦ってきたかに気がつくのである。恐ろしい苦悩と恐怖のうちに、彼らは山と岩とに向かって叫ぶであろう、「さあ、われわれをおあって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」(黙示録六ノ一六、一七)。

カルバリー

本章はマタイ二七ノ三一―五三、マルコ一五ノ二〇―三八、
ルカ二三ノ二六―四六、ヨハネ一九ノ一六―三〇にもとづく

「されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ…た」（ルカ二三ノ三三）。

「イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである」（ヘブル一三ノ一二）。神の律法を犯したために、アダムとエバはエデンから追放された。キリストはわれわれの身代りとして、エルサレムの境界の外で苦難を受けられるのであった。主は門の外で死なれたが、そこは重罪人たちと殺人者たちが処刑される場所であった。「キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった」ということには深い意味がある（ガラテヤ三ノ一三）。

おびただしい群衆が法廷からカルバリーまでイエスのあとについて行った。イエスの有罪についての知らせがエルサレムじゅうにひろまり、あらゆる階級と地位の人々が処刑場へむらがり集まった。祭司たちと役人たちは、もしキリスト自身を自分たちの手に引き渡してもらえば、その弟子たちは苦しめないと約束していたので、弟子たちも信者たちも、エルサレムの町や周囲の地方からやって来て、救い主のあとをついて行く群衆に加わった。

イエスがピラトの邸の門を通り過ぎられると、バラバのために用意されていた十字架が、イエスの傷ついて血の流れる肩にのせられた。バラバの仲間が二人イエスと同時に処刑されることになっていて、彼らの上にも十字架が背負わされた。苦しみ弱りはてた状態にある救い主には、その荷は重すぎた。弟子たちといっしょに過越の食事をとられてから、イエスは食べることも飲むこともされなかった。イエスは、ゲッセマネの園で、サタンの勢力との戦いに苦しまれた。主は裏切られた苦悩に耐え、弟子たちがご自分を見捨てて逃げるのをごらんになった。主は、アンナスのところへ、それからカヤパのところへ、そしてピラトのところへと連れて行かれた。主は、ピラトのところからヘロデのもとへ送られ、またピラトのところへ送りかえされた。侮辱に新たな侮辱を、嘲笑に嘲笑を加えられ、むち打ちによって二度苦しめられ、——ひと晩じゅう、人間の魂を極度に試みるような性質の場面が次々に続いたのであった。キリストは失敗されなかった。主は神の栄えとなるのに役立つことばよりほかに語られなかった。恥知らずな裁判の茶番劇の間じゅうずっと、イエスはしっかりした威厳のある態度を保たれた。しかし二度目のむち打ちのあと、十字架が主に背負わされると、人性はもはや耐えられなかった。主はその重荷の下に、気を失って倒れてしまわれた。

救い主についてきた群衆は、イエスの弱々しい、よろめく足どりを見たが、何のあわれみも示さなかった。彼らは、イエスが重い十字架を運ぶことができないといって、あざけりののしった。ふたたび重荷はイエスの上におかれたが、ふたたびイエスは気を失って地面に倒れてしまわれた。迫害者たちは、これ以上イエスが重荷を運ぶことができないことを知った。彼らは、この屈辱的な荷を運んでくれる者をさがすのに困惑した。ユダヤ人自

身がそうするわけにいかなかった。けがれると過越節を守ることができなくなるのであった。イエスのあとについてきたやじ馬連中さえ、恥を忍んで自分が十字架を運ぼうという者はひとりもいなかった。

この時、いなかからやって来たクレネ人のシモンという他国人が群衆に行き会う。彼は群衆の口汚いのしりの声を耳にする。いかにも軽蔑したように、ユダヤ人の王さまのお通りだぞということばがくりかえされるのが聞こえる。彼はその場の光景に驚いて立ちどまる。シモンが同情した顔つきをしていると、人々は彼をつかまえて、その肩に十字架をのせる。

シモンはイエスのことを聞いていた。彼の息子たちは救い主の信者であったが、彼自身は弟子ではなかった。カルバリーまで十字架をかついで行ったことは、シモンにとって恵みであった。彼はその後いつもこの摂理を感じた。彼はこの経験から自ら進んでキリストの十字架を背負い、その重荷によるこんで耐えるようになった。

有罪の宣告を受けておられないイエスのあとについて行って、その残酷な死を見とだけよとする群衆の中にかなりたくさんの女たちがいる。彼女たちの注意はイエスにそそがれる。その中のある者たちは、以前イエスに会ったことがある。ある者たちは、病人や苦しんでいる人たちをイエスのもとに連れて行ったことがある。ある者たちは自分自身いやしてもらったことがある。その時に起こった出来事について物語が述べられる。彼女たちは、イエスのために自分たちの心が動かされ、いまにも張りさけそうなのに、イエスに対する群衆の憎しみを見てふしぎに思う。しかし狂気した群衆の行為と祭司たち役人たちの怒ったことばにもかかわらず、これらの女たちは、同情心を表わす。イエスが十字架の下に気を失って倒れると、彼女たちは悲しみのあまり泣き出す。

これがキリストの注意を引いたただ一つのことだった。キリストは、世の罪を負って苦難に満ちておられたが、悲しみの表現に対して無関心ではなかった。主は、やさしいあわれみをもって、この女たちをgoranになった。彼女たちはイエスの信者ではなかった。イエスは、彼女たちが、神からつかわれたおかたとしてイエスのために嘆いているのではなく、人間的な同情心に動かされたのであることを知っておられた。イエスは、彼女たちの同情心を軽蔑されなかった。それは、イエスの心に、彼女たちに対する一層深い同情心を呼び起こした。イエスは、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい」と言われた(ルカ二三ノ二八)。キリストは、目の前の光景から、エルサレム滅亡の時を予見された。その恐るべき場面において、いまキリストのために泣いている者たちの多くが子供たちと共に滅びるのであった。

イエスの思いは、エルサレムの陥落からさらにもっと大きなさばきへ移って行った。悔い改めない都の滅亡のうちに、イエスは、世界に臨むべき最後の滅亡の象徴をgoranになった。「そのとき、人々は山におかて、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘におかて、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」と、イエスは言われた(ルカ二三ノ三〇、三二)。生木によって、イエスは罪なきあがない主であるご自身を象徴された。神は、罪とがに対する怒りを、ご自分の愛するみ子の上にそがれた。イエスは人類の罪のために十字架にかかれるのであった。ましてや、罪を犯しつづけた罪人はどんな苦難を受けねばならないことだろう。悔い改めない者、信じない者はすべて、ことばに言

い表わせない悲しみと不幸を知るのであった。

カルバリーまで救い主について行った群衆の中には、イエスがエルサレムに凱旋的な入城をされた時に歓喜のホサナを叫び、しゅろの葉をうちふってそのあとに従った者たちがたくさんいた。しかし、みんながそうしているからというのでその時主を声高らかに賛美した者たちの中に、いま「十字架につけよ、十字架につけよ」との叫びを張りあげている者たちが少なくなかった。キリストがエルサレムに乗りこんで行かれた時、弟子たちの望みは頂点にまで高まった。彼らはイエスと関係があることを非常な名誉に思い、主の近くによりそっていた。いま、イエスが屈辱のうちにあられると、彼らは遠く離れてついて行った。彼らは悲しみに満たされ、失望のあまり気力を失っていた。イエスが「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼いを打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである」と言われたことばが何とよく実証されたことだろう(マタイ二六ノ三二)。

処刑場に着くと、囚人たちは、拷問道具にしばりつけられた。二人のどろぼうたちは、彼らを十字架につける人たちの手の中であばれた。しかしイエスは、抵抗されなかった。イエスの母は、愛する弟子ヨハネにささえられて、カルバリーまで息子のあとについてきていた。彼女は、イエスが十字架の重荷の下に気を失われるのを見ると、イエスの傷ついた頭の下にささえの手をさしのべたい、かつては自分の胸にいだかれたあのひたいを洗ってあげたいと心に願った。しかし彼女は、この悲しい特権をゆるされなかった。弟子たちと同じように、彼女は、イエスが力をあらわして、反対者たちの手からご自身を救い出されるだろうという望みをまだいだいていた。し

かしいま目の前に起こりつつある場面をイエスが予告された時に言われたことばを思い出すと、彼女の心はふたたび沈んでしまうのであった。どろぼうたちが十字架にしばりつけられると、彼女は、不安な思いに苦しめられながら、見ていた。死人を生きかえらせたおかたが、十字架にかけられるがままになられるだろうか。神のみ子がこんなにも残酷な殺されかたをされるがままになられるだろうか。イエスがメシヤであるという信仰をあきらめなければならぬのだろうか。苦悩のうちにあられるイエスにお仕える特権さえないままに、イエスの屈辱と悲しみを見なければならぬのだろうか。彼女はイエスの両手が十字架の上にひろげられるのを見た。金づちとくぎが持つてこられ、先のとがったくぎがやわらかい肉に打ち込まれると、悲しみに打ちひしがれた弟子たちは、失神しそうなイエスの母のからだをかかえてこの残酷な場面から連れ出した。

救い主はひとことも不平をもらさなかった。そのお顔はあいかわらず平静で落ちついていたが、大粒の汗がそのひたいにたまった。イエスのお顔から死の露をふいてさしあげる同情の手も、人間としてのイエスの心をささえる同情と変らない忠誠のことばもなかった。兵士たちが彼らの恐ろしい仕事をしていたときに、イエスは、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、敵のために祈られた（ルカ二三ノ三四）。イエスの思いは、ご自身の苦難から迫害者たちの罪と、彼らにのぞむであろう恐るべき報いへ移った。イエスをこんなにも残酷に扱っている兵士たちに対して、何ののろいのことばも出されなかった。目的の達成に満足気な祭司たちと役人たちに何の復讐も求められなかった。キリストは、彼らの無知と罪をあわれまれた。イエスは、「彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、彼らのゆるしを嘆願されただけで

あつた(ルカ二三ノ三四)。

彼らは、罪深い人類を永遠の滅亡から救うためにこられたおかたを苦しめているのだということを知っていたら、悔恨と恐怖の思いにとりつかれたであろう。しかし、知らなかったということは彼らの罪を帳消しにできなかった。イエスを救い主として知り、受け入れることは彼らの特権だったのである。彼らのうちのある者たちは、まだ自分の罪をみとめ、悔い改め、改心するであろう。ある者たちは悔い改めないで、彼らのためのキリストの祈りが答えられることを不可能にするであろう。それでも、神の御目的は、同じに達成されつつあった。イエスは天父の前で、人類の助け主となられる権利を獲得しようとしておられた。

敵のために祈られたキリストの祈りは世界を包含していた。それは、世の始めから時の終わりまで、かつて生存し、これからも生存するすべての罪人を含んでいた。すべての者の上に神のみ子を十字架につけた罪がおかれている。すべての者にゆるしが豊かにさし出されている。望む者はだれでも、神とやわらぎ、永遠の生命を継ぐことができるのである。

イエスが十字架にくぎづけられると、がんじょうな男たちがそれをもちあげ、そのために用意された場所に乱暴に落とし込んだ。これは神のみ子に最も激しい苦痛をひき起こした。ピラトはその時へブル語とギリシア語とラテン語で罪状書きを書いて、それを十字架上のイエスの頭の上部につけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書かれていた(ヨハネ一九ノ一九)。この罪状書きはユダヤ人を怒らせた。ピラトの法廷で、彼らは「彼を十字架につけよ。…わたしたちには、カイザル以外に王はありません」と叫んだ(ヨハネ一九ノ一

五）。カイザル以外の王を認める者はだれでも反逆者であると彼らは断言した。ピラトは彼らが表明した意見を書きあらわしたのである。イエスがユダヤ人の王であるということ以外に何の罪状も書かれなかった。この罪状はローマの権力に対するユダヤ人の忠誠を事実上認めるものであった。それは、イスラエルの王たることを自称する者はだれでも、死刑に値するものと彼らから判断されることを宣言していた。祭司たちはやり過ぎたのだ。彼らがキリストの死をたくらんでいた時、カヤパはひとりの人が国民を救うために死ぬのはよいことだと断言した。いま彼らの偽善がばくろされた。キリストを滅ぼすために、彼らは自分たちの国の存在さえ犠牲にしようとしていた。

祭司たちは、自分たちのやったことを見て、ピラトに罪状書きを書き直してくれるようにたのんだ。『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい』と彼らは言った（ヨハネ一九ノ二一）。しかしピラトは自分のこれまでの弱さに腹が立っていたので、ねたみ深くてこうかつな祭司たちと役人たちを完全に軽蔑した。彼は、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」と冷淡に答えた（ヨハネ一九ノ二二）。

ピラトよりも、あるいはユダヤ人よりも高い権力が、その罪状書きをイエスの頭上にかけるように命じたのだった。神の摂理によって、それは思いをめぐめさせ、聖書を調べさせるのであった。キリストが十字架につけられた場所は都に近かった。そのころ、全地から幾千の人々がエルサレムにきていたので、ナザレのイエスをメシヤと宣言している罪状書きは人々の注目のまとなるのだった。それは神がみちびかれた手によって書かれた生

きた真理であつた。

十字架上のキリストの苦難によつて、預言が成就した。十字架につけられる幾百年も前に、救い主はご自分が受けられる取り扱いを預言された。主はこう言われた、「まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行つ者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする」(詩篇二二ノ一六―一八)。イエスの衣服についての預言は、十字架につけられたおかたの味方の側もしくは敵の側の助言や干渉なしに実行された。イエスを十字架につけた兵士たちに、イエスの衣服が与えられた。キリストは、彼らが仲間のあいだで衣服を分け合うときの言い争いを聞かれた。その下着は縫い日なしに一つに織つたものであつたので、彼らは、「それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう」と言った(ヨハネ一九ノ二四)。

別な預言の中に、救い主は、こう宣言された、「そしりがわたしの心を砕いたので、わたしは望みを失いました。わたしは同情する者を求めたけれども、ひとりもなく、慰める者を求めたけれども、ひとりも見ませんでした。彼らはわたしの食物に毒を入れ、わたしのかわいた時に酢を飲ませました」(詩篇六九ノ二〇、二二)。十字架につけられて死ぬ者には、その苦痛感をなくすために麻痺薬を与えることが許されていた。これがイエスにさしだされたのであるが、イエスはなめてみてそれをこばまれた。イエスはご自分の頭をくもらせるようなものは何一つ受けようとされなかった。イエスの信仰は固く神にすがっていなければならぬ。それがイエスの唯一の力であつた。感覚を麻痺させることは、サタンの乗ずるすきを与えるのであつた。

イエスが十字架にかかっておられると、敵どもはイエスに向かって怒りをぶちまけた。祭司たち、役人たち、律法学者たちは、群衆と一緒にあって、瀕死の救い主を嘲笑した。バプテスマの時と、変貌の時に、キリストをご自分のみ子として宣言される神のみ声が聞かれた。またキリストが売り渡される直前に、天父は自らお語りになって、キリストの神性を証明された。しかしいま天からの声は沈黙していた。キリストのために語られるあかしのことは聞かれなかった。キリストはただひとりで悪人たちの虐待と嘲笑を受けられた。

彼らは、「もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら」、「十字架からおりてきて自分を救え」と言った（ルカ二三ノ三五、マルコ一五ノ三〇）。試みの荒野で、サタンは、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。…もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい」と宣言したのだった（マタイ四ノ三、六）。ところでサタンは、部下の天使たちと、人間の姿をとって、十字架のところにきていた。悪魔と悪天使たちは、祭司たちや役人たちと協力していた。民の教師たちが無知な群衆を扇動し、多くの者たちがまだ見たことのなかったおかたに死刑を宣告するように、そしてついにはイエスに不利なかしをたてないではいられないようにしたのだった。祭司たち、役人たち、パリサイ人たちと頑迷なやじ馬たちは悪魔的な狂気のうちにこの陰謀に加わっていた。宗教界の指導者たちがサタンや悪天使たちと一つになっていた。彼らはサタンの命令を実行していたのである。

イエスは、瀕死の苦しみのうちにありながら、祭司たちが、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」と宣言していること

ばをのこらず聞かれた(マルコ一五ノ三一、三二)。キリストは十字架からおりることもおできになったのである。しかし罪人が神からのゆるしと恵みについて望みをもつことができるのは、イエスがご自分を救おうとされなかったからである。

預言の解説者と自称していた人たちは、この時彼らが語ると神の靈感が預言されていたとおりのことばを、救い主をあざけることばの中にくりかえしていた。しかし彼らは、盲目だったので、自分たちが預言を成就していることがわからなかった。

「彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい。自分は神の子だと言っていたのだから」とのことばを、嘲笑的に語った人たちは、そのあかしがその後各時代にわたってなりひびくとはすこしも思っていなかった(マタイ一七ノ四三)。しかし、あざけりのうちに語られたのではあったが、それらのことばによつて、人々はこれまでになかったほどに聖書を探究するようになった。賢い者たちは、聞き、さぐり、深く考え、そして祈った。聖句と聖句をくらべて、キリストの使命の意味がわかるまでは決して満足しない人たちがいた。キリストが十字架にかかれた時ほど、イエスが広く一般に知られたことはなかった。十字架の光景を見、キリストのことばを聞いた多くの人々の心に真理の光がさしこんでいた。

十字架上で苦しんでおられるイエスにかすかな慰めの光が一すじさしてきた。それは悔い改めたどろぼうの祈りであった。イエスといっしょに十字架につけられた男たちはふたりとも、最初イエスをののしっていた。ひとり、苦しみのあまりますます絶望的な反抗を示すばかりであった。しかしもうひとりの仲間はずうではなかつ

た。この男は常習犯ではなかった。彼は悪い仲間たちにさそわれて道をふみはずしたのであったが、十字架のそばに立って救い主をのしっている人たちの多くよりも罪が軽かった。彼はかつてイエスを見、イエスのことばを聞き、その教えによって自覚させられたが、祭司たちと役人たちのためにイエスから離れてしまった。彼は、罪の自覚をおしころそうとして、ますます罪の深みにとびこみ、ついに捕えられて犯罪者としてさばかれ、十字架の死を宣告されたのであった。法廷でも、カルバリーへの途中でも、彼はイエスといっしょだった。彼はピラトが、「この人になんの罪も見いだせない」と断言するのを聞いた(ヨハネ一九ノ四)。彼はイエスの神々しい態度に目をとめ、イエスが迫害者たちをあわれんでゆるされるのを見た。十字架上で、彼は多くのえらい宗教家たちが、侮辱的なことばを浴びせ、主イエスをあざけるのを見る。彼は揺れる頭を見る。彼は仲間のどろぼうが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と非難することばを聞く(ルカ二三ノ三九)。通りかかった人々の中で、多くの人がイエスを弁護するのを、彼は耳にする。彼らがイエスのことばをくりかえし、イエスのみわざについて語るのを、彼は聞く。これがキリストだという自覚が彼の心によみがえる。仲間のどろぼうに向かって、彼は、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか」と言う(ルカ二三ノ四〇)。瀕死のどろぼうたちは、もはや人間を恐れる気持は何もない。しかしその中のひとり、恐るべき神があられることと、彼をおのかせる将来があることについて深い自覚が起こる。しかもいま、罪にけがれたままに彼の一生の経歴がとじられようとしている。彼はうめきながら言う、「お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」(ル



瀕死のどろぼうたちは、もはや人間を恐れる気持はない。しかし、その中の一人は、恐るべき神の存在を十字架の上のイエス・キリストのみ姿に見いだした。

カ二三ノ四一)。

もう問題はない。疑いもなければ、罪のとがめもない。有罪を宣告された時、このごろぼうは絶望し、自暴自棄になった。しかしいま、ふしぎな、やさしい思いがわきあがってくる。彼は、イエスが病人をいやし、罪をゆるされたことなど、イエスについて聞いたことをみな心に思い起こす。彼は、イエスを信じて泣きながらついてきた人たちのことを聞いた。彼は、救い主の頭上の罪状書きを見て読んだ。彼は、通りかかりの人たちが、あつる者は悲しみにふるえる唇で、ある者はやじとあざけりをもってその罪状書きを読むのを聞いた。聖霊は彼の心を照らし、すこしずつ証拠の鎖がつながる。打たれ、あざけられ、十字架にかけられているイエスのうちに、彼は、世の罪をとり除く神の小羊を見る。死にかけている無力な魂が、瀕死の救い主に身をまかせると、彼の声には苦悩の中に望みがまじる。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」と、彼は叫ぶ(ルカ二三ノ四二)。

すぐに応答があつた。その調子はやわらかく、音楽のようで、そのことばは愛とあわれみと力に満ちていた。きよう、よく言っておくが、あなたはわたしと一緒にパラダイスにいるであろう。

長い幾時間かの苦悩のあいだ、ののしりとあざけりがイエスの耳にひびいてきた。イエスが十字架にかかられてもまだ、やじとのろい声がもとに舞いあがってくる。待ちこがれる思いで、イエスは、弟子たちから何か信仰のことばを聞きたいと耳をすまされた。しかしイエスがお聞きになったのは、「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました」という悲しげなことばだけであつた(ルカ二四ノ二一)。

だから、この死にかかったどろぼうが口にした信仰と愛のことばは、救い主にとってどんなにうれしかったことだろう。有力なユダヤ人たちがイエスをこばみ、弟子たちさえイエスの神性を疑っているのに、このかわいそうなどろぼうは、永遠の門口に立って、イエスを主と呼んでいる。イエスが奇跡を行なわれた時や、墓からよみがえられたあとでは、多くの人たちがよくこんでイエスを主と呼んだ。しかし十字架上で死にのぞんでおられるイエスを主と認めたのは、最後のまぎわに救われたこの悔い改めたどろぼうだけであつた。

見物人たちは、このどろぼうがイエスを主と呼んだ時そのことばを聞いた。悔い改めた人間の語調が彼らの注意をひいた。十字架の下でキリストの衣服を争い、下着をとるのにくじを引いていた者たちは、動きをとめて耳をすました。彼らの怒った口調がやんだ。息をこらして彼らはキリストを見あげ、その瀕死の唇から出る答を待った。

イエスが約束のことばを語られた時、十字架をおおっているようにみえた暗雲をつらぬいて明るい新鮮な光がさした。神に受け入れられたという完全な平安が悔い改めたどろぼうにのぞんだ。キリストは屈辱のうちにあってあがめられた。ほかのすべての者の目には征服されたおかたに見えたイエスが征服者であつた。主は罪を負うおかたとして認められた。人々はイエスの人としての肉体に力を行使するだろう。彼らはいばらの冠でその聖なるこめかみを刺すだろう。彼らはイエスからその衣服をはぎとり、それを分配するのに争うだろう。しかし彼らは、イエスから罪をゆるす権利を奪うことはできない。死にのぞんで、イエスは、ご自身の神性と、天父の栄光についてあかしをたてられる。「主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもな

い」(イザヤ書五九ノ一)。彼によつて神に来る人々を、いつも救ふことがイエスの王権である(ヘブル七ノ二五参照)。

わたしはきょうあなたに告げる、あなたはわたしといっしょにパラダイスにいるであらう。キリストはどろぼうがその日にキリストといっしょにパラダイスにはいることを約束されなかった。キリストご自身その日にパラダイスに行かれなかった。主は墓に眠つて、よみがえられた朝、「わたしは、まだ父のみもとに上っていない」と言われた(ヨハネ二〇ノ一七)。しかし十字架につけられた日、すなわち敗北と暗黒にみえたその日に、この約束が与えられた。「きょう」、犯罪人として十字架上で死にのぞんでおられるが、キリストはこのかわいそうな罪人に、「あなたはわたしといっしょにパラダイスにいるであらう」と保証される。

イエスといっしょに十字架につけられたどろぼうたちは、「イエスをまん中にして、…両側に」つけられた(ヨハネ一九ノ一八)。これは祭司たちと役人たちの指図であつた。どろぼうたちの間のキリストの位置は、彼が三人の中で最も重い罪人であることを示すのであつた。このようにして、彼は「とがある者と共に数えられた」との聖句が成就した(イザヤ書五三ノ一二)。しかし祭司たちは自分たちの行為の意味が十分にわからなかった。イエスがどろぼうたちといっしょに十字架につけられて「まん中に」おかれたように、キリストの十字架は、罪のうちにある世のまん中に置かれた。そして、悔い改めたどろぼうに語られたゆるしのことばは、地の果てまで照らす光をともした。

心とからだに最も激しい苦痛を受けながら、人のことしか思わず、悔い改めた魂が信ずるように励まされたイ

イエスの限らない愛を、天使たちは驚嘆して見守った。屈辱のうちにあって、イエスは、預言者としてエルサレムの娘たちに語りかけ、祭司また助け主として殺人者たちのためのゆるしを天父に嘆願し、愛情深い救い主として悔い改めたどろぼうの罪をゆるされた。

イエスが周囲の群衆を見まわされたとき、ひとつの姿が彼の注意をひいた。十字架の足下に、イエスの母が、弟子のヨハネにささえられて立っていた。彼女は息子のそばから離れていることに耐えられなかった。そこでヨハネが、イエスの臨終が近いことを知って、彼女をもう一度十字架のところへ連れてきたのだった。臨終の際にも、キリストは母をお忘れにならなかった。悲しみにうちひしがれた母の顔をじっとごらんになってから、その目をヨハネに移し、母に「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」と言って、次にヨハネに「ごらんなさい。これはあなたの母です」と言われた(ヨハネ一九ノ二六、二七)。ヨハネはキリストのことを理解し、その責任を引き受けた。彼はすぐにマリヤを自分の家へ連れて行き、その時から彼女をやさしく世話した。ああ、何とあわれみ深く、やさしい救い主だろう。肉体の苦痛と精神の苦悩の最中に、母のために思いやりの深い心づかいを示されるとは。イエスは母を安楽にするお金がなかった。しかしヨハネはイエスを大事なおかたに思っていたので、イエスは、ご自分の母をこのヨハネにとつと遺産としてお与えになった。こうしてイエスは、母のために最も必要なものをお備えになった。それは彼女がイエスを愛するがゆえに彼女を愛する者のやさしい同情であった。こうしてヨハネは、聖なる責任として彼女を引き受けることによって、大きな祝福を受けていた。彼女は、ヨハネの愛する主をいつも思い出させてくれる存在であった。

キリストの子としての愛の完全な模範がくもりのない輝きをもって長い年月の霧の中から光を放っている。イエスは三十年近くの間、毎日の労働によって家庭の重荷を負う助けをされた。そしていま、最後の苦悩のうちにあっても、イエスは、悲しんでいるやもめの母のために道を備えることをお忘れにならない。この同じ精神が主の弟子のひとりびとりにみられるであろう。キリストに従う者たちは、親を敬い、養うことを彼らの宗教の一部と考えるであろう。父と母は、キリストの愛の宿っている心を持った子からかならず思いやりのある世話とやさしい同情とを受けるであろう。

さて栄光の主は、人類のあがないとしていま死なれるのであった。そのとうとい生命をささげるに当たって、キリストは勝利の喜びによってささえられなかった。すべてが重苦しく陰うつであった。キリストに重くのしかかっていたのは死の恐怖ではなかった。言い表わしようのないキリストの苦悩をひき起こしたのは十字架の苦痛と恥辱ではなかった。キリストは受難者たちの君であった。しかし、主の苦難は、罪の害毒についての意識、すなわち人間は罪と親しむことによってその無法さに対して盲目になったことを知られたからであった。罪が深く人の心にくいこみ、その力をたちきろうとする者が少ないのをキリストはごらんになった。キリストは、神からの助けがなければ人間は滅びなければならないことを知り、多くの者が十分な助けを目の前にしながら滅びて行くのをごらんになった。

われわれの身代りまた保証人としてキリストの上にわれわれ全部の者の不義がおかれた。律法による有罪の宣告からわれわれをあがなわんがために、キリストは、罪人にかぞえられた。アダムの子孫ひとりびとりの不義が

キリストの心に重くのしかかった。罪に対する神の怒り、不義に対する神の不興の恐るべきあらわれが、み子の魂を非常な驚きと恐れで満たした。一生の間、キリストは、天父のあわれみとゆるしの愛についてのよい知らせを墮落した世に宣伝してこられた。罪人のかしらの救いがキリストのテーマであった。しかしいま、自ら負っておられる不義の恐るべき重さで、キリストは、天父のやわらぎのみ顔を見ることがおできにならない。この最高の苦悩の時に神のみ顔が見えなくなったために、救い主の心は、人にはとうていわからない悲しみに刺し通された。この苦悩は、肉体的な苦痛などほとんど感じられないほど大きかった。

サタンは激しい試みでイエスの心を苦しめた。救い主は墓の入口から奥を見通すことがおできにならなかった。キリストが征服者として墓から出てこられることや、犠牲が天父に受け入れられることについて望みは与えられなかった。キリストは、罪が神にとって不快なものであるため、ご自分と神との間が永久に隔離されるのではないかと心配された。キリストは、不義の人類のためにあわれみのとりなしがやんだ時に罪人が感じる苦悩を感じられた。キリストが飲まれたさかずきをこんなにもにがいものとし、神のみ子を悲しませたのは、人類の身代りとしてキリストに神の怒りをもたらしている罪についての観念であった。

天使たちは救い主の絶望的な苦悩を驚きの念をもって見た。天の万軍はこの恐るべき光景に顔をおおった。あなどられて死んでいかれる創造主に非情の自然界さえ同情を表わした。太陽はその恐るべき光景を見るのをこばんだ。太陽の豊かな、明るい光線が真昼の地上を照らしていたが、突然にその光がかき消されたようにみえた。葬式の黒布のように、真の暗やみが十字架を包んだ。「地上の全面が暗くなって、三時に及んだ」(マタイ二七

ノ四五）。月も星もない真夜中のようなこの深い暗やみは、日蝕のせいでもなければ、ほかの自然現象のせいでもなかった。それは後世の人々の信仰を一層固めるために神がお与えになった超自然のあかしであった。

この深い暗やみのうちに神のご臨在がかくされた。神は暗やみを幕屋とし、その栄光を人間の目からかくされる。神と聖天使たちは、十字架のそばにおられた。天父はみ子と共におられた。しかし神のご臨在はあらわされなかった。もし神の栄光が雲からひらめきわたったら、見ている人間はみな滅ぼされたであろう。しかもキリストは、この恐るべき時に、天父のご臨在によって慰めを受けられないのであった。主はひとりで酒ぶねを踏まれ、もろもろの民のなかには彼と事を共にする者がなかった（イザヤ書六三ノ三参照）。

神は、み子の人間としての最後の苦悩を、深いやみのなかにおおいかくされた。苦難のうちにあるキリストを見た者はみな、キリストの神性を確信していた。そのお顔は、一度見た人は、決して忘れなかった。カインの顔が殺人者としての彼の罪悪を表わしていたように、キリストのお顔は、潔白、平静、慈愛——神のみかたちをあらわした。しかしキリストを訴えた者たちは、天のしるしに注意しようとしなかった。長時間にわたる苦悩の間じゅう、キリストは、嘲笑する群衆の視線を浴びておられたが、いま彼はあわれみ深くも神のマントにかくされた。

死の沈黙がカルバリーにおそってきたように思えた。十字架のまわりに集まっていた群衆は言いようのない恐怖にとらえられた。のろいとののしりは、なかば言いかけたことばのままやんだ。男も女も子供たちも地にひれふした。あざやかないはずだが時々雲からひらめいて、十字架とそこにつけられているあがない主を照らした。

祭司たち、役人たち、律法学者たち、死刑執行人たち、群衆はみな自分たちの報いの時がきたと思った。しばらくすると、ある人たちはイエスが十字架からおりてこられるだろうとささやいた。ある人たちは胸をうち、恐怖のあまり泣きながら、道を手さぐりで都の方へ引き返そうとした。

三時になって、暗やみは人々のまわりから晴れたが、まだ救い主をつつんでいた。それは主の心に重くのしかかっている苦悩と恐怖の象徴であった。だれの目も十字架をつつんでいる暗黒を見通すことができず、だれも苦しんでおられるキリストの魂をおおっている一層深い暗黒を見通すことはできなかった。十字架にかかっておられるイエスをめがけて怒りのいはずまが投げつけられるようにみえた。その時「イエスは大声で『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である」(マルコ一五ノ三四)。そこの暗やみが救い主のまわりに集まると、多くの声が叫んで言った、天の報いが彼に向けられたのだ、彼は神のみ子であると称したので、神の怒りのいはずまが彼をめがけて投げつけられたのだ。イエスを信じていた多くの者たちは、イエスの絶望的な叫びを聞いた。彼らから望みが消えた。もし神がイエスを捨てられたのだしたら、イエスに従っている者たちは何に信賴することができよう。

キリストの重苦しい心から暗やみが晴れると、肉体的な苦痛の意識がよみがえり、主は「わたしは、かわく」と言われた(ヨハネ一九ノ二八)。ローマの兵士のひとり、かわいた唇を見て同情し、ヒソプの茎につけた海綿を酢のうつつに浸して、それをイエスにさし出した。しかし祭司たちはイエスの苦悩をあざけた。暗やみが地をおおった時彼らは恐怖に満たされたが、その恐怖がしずまると、イエスが逃げはされないかという恐れがふた

たび起こった。「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」というイエスのことばを彼らはまちがって解釈した。にがにがしい軽蔑と嘲笑とをもって、彼らは「あれはエリヤを呼んでいるのだ」と言った(マタイ二七ノ四七)。イエスの苦難をやわらげる最後の機会を彼らはこぼんだ。「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と彼らは言った(マタイ二七ノ四九)。

けがれない神のみ子は、その肉体はむち打ちで裂け、しばしば祝福のうちにさし出されたその手は横木に釘づけられ、愛の奉仕に疲れを知らなかったその足は木にうちつけられ、王の頭はいばらの冠で刺され、ふるえる唇は苦悩の叫びにかたどられて、十字架にかかっておられた。しかもイエスがしのばれたすべてのこと——その頭と手と足から流れた血のしたたり、その肉体を苦しめた苦痛、天父のみ顔がかくされたときにその魂を満たした言いようない苦悩、——それらは人類の子らのひとりびとりに向かって、神のみ子がこの不義の重荷を負うのを承諾されるのはあなたのためであり、死の支配をたちきつて、パラダイスの門を開かれるのはあなたのためであると語っている。荒れ狂う波をしずめて、泡立つ大波の上をあるかれたおかた、悪鬼をふるえあがらせ、病気を追い出されたおかた、めくらの目を開き、死人をいのちによみがえらせたおかた——が、いけにえとしてご自分を十字架上にささげられる、しかもそれはあなたを愛されるからである。罪を負うおかたであるイエスが、神の正義の怒りをしのび、あなたのために罪そのものとなられる。

沈黙のうちに、目撃者たちは、この恐るべき光景の結末を見守った。太陽が輝き出たが、十字架はまだ暗黒につつまれていた。祭司たちと役人たちはエルサレムの方を見た。すると見よ、濃い雲が都とユダヤの平原のあた

りにかたまっていた。義の太陽、世の光であられるキリストは、かつてはめぐまれた都エルサレムから、その光をひきあげておられた。神の怒りのすさまじいはずだがこの滅ぶべき都に向けられた。

突然十字架のまわりの暗黒が晴れ、天地にひびきわたるようなはつきりしたラッパの調子で、イエスは「すべてが終った」「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」と叫ばれた(ヨハネ一九ノ三〇、ルカ二三ノ四六)。ひとすじの光が十字架をとりまき、救い主のお顔は太陽のような栄光に輝いた。それから主は頭を胸にたれて、息をひきとられた。

恐ろしい暗黒のさなかに、神に見すてられたようにみえる中であって、キリストは人間の苦悩のさかずきを最後の一滴まで飲みほされた。その恐るべき時に、主は、ご自分が天父に受け入れられたことについて、これまで与えられていた証拠によりたのまれた。イエスは天父の性格をよく知っておられた。イエスは天父の正義、あわれみ、大きな愛をわかっておられた。父に従うことがイエスのよろこびであつたが、信仰によってイエスは父に信頼された。こうして、服従のうちにご自分をまったく神にまかせられたときに、天父の恩恵が失われたという意識はなくなった。信仰によってキリストは勝利者となられた。

このような光景は、この地上でみられたことがなかった。群衆は麻痺したように、息をこらして救い主をみつめた。ふたたび暗黒が地をおおい、重々しいかみなりのようににぶい音が聞こえた。すると激しい地震が起こった。人々はかたまりになって揺れた。激しい混乱と胆をつぶすような驚きがつづいて生じた。まわりの山で岩が真二つに割れ、音をたてて平原へなだれ落ちた。墓が口を開き、死人がその墓所から投げ出された。天地がこな

みじんになるように思えた。祭司たち、役人たち、兵士たち、執行人たち、人々は、恐怖で声も出ず、地面にうつ伏せに倒れた。

「すべてが終った」との大声がキリストの口から出たとき、祭司たちは宮で務めを行っていた。夕べのいけにえをささげる時間であった。キリストを象徴する小羊が、殺されるために連れてこられていた。深い意味のある美しい衣を着た祭司が、ちょうどアブラハムが息子を殺そうとしたときのように、ナイフをふりあげていた。人々は熱心にじっと見つめていた。しかし地が揺れ動く。主ご自身が近づかれるからである。引き裂ける音をたてて宮の内部の幕が上から下まで目に見えない手で裂かれ、かつては神のご臨在に満たされていた場所が群衆の目の前に開かれる。この場所にシカイナがとどまっていたのだ。ここで神は贖罪所の上のあたりに栄光をあらわされたのだ。宮のこの部屋とほかの部分とを仕切っている幕は、大祭司のほかはだれもあげたことはなかった。大祭司は、民の罪のあがないをなすために、一年に一度この中にはいつて行つた。ところが見よ、その幕が真二つに裂けている。地上の聖所の至聖所はもはや神聖なものではない。

すべてが恐怖であり、混乱である。祭司はまさにいけにえを殺そうとしている。しかしそのナイフは感覚を失った手から落ち、小羊は逃げ去る。神のみ子の死によって、型が本体に合ったのである。大いなるいけにえがさげられたのである。至聖所への道が開かれている。新しい、生きた道がすべての人のために備えられる。罪を悲しむ人間は、もはや大祭司が出てくるのを待つ必要はない。これからは救い主がもろもろの天の天において祭司また助け主として務めを行われるのである。あたかも生きた声が礼拝者たちに向かって、罪のためのいけにえ

と献げ物はもう全部終ったと語られたかのようにあった。「神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました」とのみことばにしたがって、神のみ子がこられたのである（ヘブル一〇ノ七）。キリストは、「ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである」（ヘブル九ノ一二）。

第 79 章

「すべてが終った」

イエスは、ご自分がするためになった働きをなしとげ、臨終の息の下から「すべてが終った」と叫ばれたときにはじめて息を引きとられた（ヨハネ一九ノ三〇）。戦いは勝利であつた。イエスの右手とその聖なる腕が勝利をもたらしたのであつた。征服者として、イエスは、その旗を永遠の高地にうちたてられた。天使たちの間によるこびがなかつただろうか。全天は救い主の勝利に凱歌をあげた。サタンは敗北し、彼の王国が失われたことを知った。

天使たちと他世界の住民たちにとって、「すべてが終った」という叫びは深い意味があつた。大いなるあがないの働きがなしとげられたのは、われわれのためばかりでなくまた彼らのためでもあつた。彼らは、われわれと共に、キリストの勝利の結果をわかち合うのである。

キリストが死なれてはじめて、サタンの性格が天使たちや他世界の住民たちにはっきりわかつた。大背信者は欺瞞の衣を着ていたので、聖者たちでさえ彼の原則を理解していなかつた。彼らは、サタンの反逆の性質をはっ

きりわかっていなかった。

神に反逆したのはすばらしい力と栄光を持った者であった。ルシファーについて、主は、「あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である」と言っておられる（エゼキエル書二八ノ一二）。ルシファーはおおうことをなす天使であった。彼は神のご臨在の光の中に立っていた。彼はすべての被造物の中で最高の者であって、神の意図が宇宙に知られるときには一番先に彼に知らされた。罪を犯してから、彼のあざむく力はますます欺瞞的になり、彼が天父とともに高い地位を保っていたためにその正体をばくろすることがますます困難となった。

神は、人が小石を地面に投げるようにたやすくサタンとその同調者たちを滅ぼすこともおできになった。しかし神はそうならなかった。反逆を暴力によって征服してはならなかった。強制的な力はサタンの統治だけにみられるものである。主の原則はこのような種類のものではなかった。主の権威は、恩恵、あわれみ、愛の上におかれている。このような原則を示すことが用いるべき手段である。神の統治は道徳的であり、真実と愛が有力な力となるのである。

物事を安全という永遠の基礎の上におくことが神の御目的だったので、天の会議では、サタンがその統治制度の基礎となっている原則を発揮する時間を与えるべきだということが決定された。サタンは自分の原則が神の原則よりもすぐれていると主張していた。そこでサタンの原則が天の宇宙に知れ渡るように、それを発揮させる時間を与えられた。

サタンが人類に罪を犯させたので、あがないの計画が実施された。四千年の間、キリストは人類を高めるため

に働かれたが、サタンは人類を墮落させ、滅ぼすために働いていた。天の宇宙はそれをすべて目に見たのであった。

イエスがこの世にこられると、サタンの力はイエスに向けられた。イエスが赤ん坊としてベツレヘムにお生れになったときから、横領者サタンはイエスを滅ぼすために働いた。サタンは、イエスが完全な子供、欠点のないおとな、聖なる公生涯、きずのないいけにえとなれないように、あらゆる手段をつくした。しかし彼は敗北した。彼はイエスに罪を犯させることができなかった。彼はイエスを落胆させたり、イエスをこの地上でなすためにおいてになった働きから追い出すことができなかった。荒野からカルバリーまで、サタンの怒りの嵐がイエスを襲ったが、嵐が容赦なく吹きつけるほど神のみ子は一層固く天父のみ手にすがって、血に染まった道を進んで行かれた。イエスを圧迫し、うち倒そうとするサタンのあらゆる努力は、イエスのきずもないご品性を一層純潔な光に照らしただけであった。

全天と他世界は、争闘の証人であった。彼らはどんなに熱心な興味をもって戦いの終りの場面を見守ったことだろう。彼らは、救い主がゲツセマネの園にはいつて行かれ、その魂が大いなる暗黒の恐怖にうなだれるのを見た。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」とのイエスの苦痛の叫びを、彼らは聞いた(マタイ二六ノ三九)。天父のご臨在がかくされたとき、彼らは、イエスが死との最後の大きな戦いにまさるはげしい悲しみに満たされるのを見た。イエスの毛あなからは血の汗が吹き出して地面にしたり落ちた。救いを求める祈りが、イエスの口から三度しほり出された。天はその光景を見ていることがで

きなくて、慰めの使者が神のみ子のもとへつかわれた。

天は、犠牲者イエスが殺人的な暴徒たちの手に売り渡され、嘲笑と暴力によって次々と裁判に追いたてられるのを見た。天は、迫害者たちが、イエスのいやしい生れを冷笑するのを聞いた。天は、イエスの最も愛された弟子のひとりぎきたないことばで主をこばむのを聞いた。天は、サタンの狂気じみた働きと、彼が人々の心に及ぼす力を見た。ああ、何という恐るべき光景だろう。救い主は真夜中にゲッセマネで捕えられ、邸から法廷へとあちらこちらへ引っぱりまわされ、祭司たちの前で二度、サンヒドリンの前で二度、ピラトの前で二度、ヘロデの前で一度訴えられ、あざけられ、おち打たれ、有罪を宣告され、十字架につけられるために連れ出され、エルサレムの娘たちの嘆きとやじ馬連の冷笑の中で、十字架という重荷を負って運ばれた。

天は、キリストが十字架にかかり、傷ついたそのこめかみから血が流れ、血の色をした汗がそのひたいにたまるのを、悲しみと驚きの思いをもってながめた。十字架をたてるために穴をあけられた岩の上に、イエスの手と足から血が一滴また一滴と落ちた。釘をうたれた傷は、からだの重みに手がひきずられるために大きな口をあけた。イエスの魂が、世の罪の重荷の下にあえぐたびに、その苦しい呼吸は早く、重くなった。恐ろしい苦難のさなかに、「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」とのキリストの祈りがささげられたとき、全天は驚嘆の思いに満たされた(ルカ二三ノ三四)。しかもそこには、神のみかたにつくられた人間たちが、神のひとり子のいのちをうちくだくために加わっているのであった。天の宇宙にとって、それは何という光景だったことだろう。

暗黒の支配と権威である悪天使たちは十字架のまわりに集まって、人々の心に不信という恐ろしい影を投げかけた。主がこれらの天使たちをみ座の前に立つ者として創造された時、彼らは美しく、栄光に輝いていた。彼らの美しさと聖潔は、その高い地位にふさわしかった。彼らは神の知恵に富み、天の美しい装いをまとっていた。彼らはエホバに仕える者であった。しかしだれの目にも、これらの墮落した天使たちが、かつては天の宮廷で奉仕した輝かしいセラピムであったとは見えない。

サタンの軍勢は悪人たちと組んで、キリストが罪人のかしらであると人々に信じさせ、キリストを憎悪のまにしようとした。十字架にかかれたキリストをあざけた者たちは、最初の大反逆者の精神を吹きこまれていた。サタンは彼らに下品でいまいしいことばをつめこんだ。彼は人々に嘲笑を吹きこんだ。しかしこうしたことをどんなにやってみても、彼は何にも得るところがなかった。

もしキリストのうちに一つの罪でもみいだされたら、またキリストが恐るべき拷問をのがれるために一点でもサタンに屈服したら、神と人類との敵は勝利したのである。キリストは頭をたれてなくなれたが、信仰と神への服従を固く保たれた。「その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、『今や、われらの神の救と力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者は、投げ落された』」（黙示録二二ノ一〇）。

サタンは自分の仮面が引きはがされたことを知った。彼の統治は墮落していない天使たちと天の宇宙の前に公開された。彼は殺人者の正体を現わした。神のみ子の血を流すことによって、彼は天の住民の同情をまったく失

ってしまった。それからの彼の働きは制限された。どんな態度を装おうと、彼はもはや天使たちが天の宮廷から出てくるのを待ち伏せて、キリストの兄弟たちが暗黒の衣と罪のけがれを着ていると彼らに訴えることができなかった。サタンと天の世界との間の同情という最後のつながりがたちきられた。

しかしサタンは、その時まで滅ぼされなかった。天使たちは、その時になってもまだ、大争闘に含まれていることをみな理解しているわけではなかった。問題となっている原則をもっとはっきり示す必要があった。人のために、サタンの存在を続けさせねばならなかった。天使はもちろん人も、光の君と暗黒の君との相違を見なければならぬ。人は自分の仕えるべきものを選ばねばならない。

大争闘の始めに、サタンは、神の律法は従うことのできないものである、義とあわれみは両立しない、もし律法を破ったら罪人がゆるされることは不可能だと宣言した。すべての罪は罰を受けねばならない、もし神が罪の罰を免除されるなら、神は真実と義の神ではないと、サタンは主張した。人類が神の律法を破り、神のみこころに反抗したとき、サタンは狂喜した。律法は従うことのできないものだということがわかった、人類はゆるしを得ることはできないのだと、サタンは断言した。サタンは、自分が反逆したあと、天から追放されたので、人類も永久に神の恩恵からしめ出されるべきであると要求した。神は義であるなら、罪人にあわれみを示すことはできないはずだと、彼は言い張った。

しかし、人は、たとえ罪人であっても、サタンの立場とは異なっていた。天におけるルシファーは神の栄光という光のうちにあって罪を犯したのである。彼には、ほかのどんな被造物に対するよりも神の愛のあらわれが与

えられていた。神のご品性を理解し、神の恵みがわかっていながら、サタンは、自分自身の利己的で勝手な意思に従うことを選んだ。この選択は決定的なものであった。彼を救うために神がおできになることはもうなかった。一方、人はだまされたのであった。人の心は、サタンの詭弁によって暗くなったのだった。人は、神の愛の高さと深さを知らなかった。神の愛を知るときに、人には望みがあった。神のご品性を見ることによって、人は神のみもとにひきもどされるかもしれないかった。

イエスを通して、神のあわれみが人類にあらわされた。だがあわれみは義を無視しない。律法は、神のご品性の特質をあらわしているのです、その一点一画も、墮落した状態にある人間に合うように変えることはできない。神は律法を変更しないで、人のあがないのためにキリストを通して犠牲を払われた。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」られた(コリント第二・五ノ一九)。

律法は義すなわち正しい生活、完全な品性を要求する。しかし人はそれを与えることができない。彼は神の聖なる律法の要求に応ずることができない。けれどもキリストは、人としてこの地上においてになって、聖なる一生を送り、完全な品性を発達させられた。これらのものを、キリストは受け入れる人にはだれにでも無料の贈り物として提供される。キリストの一生は人の一生の代りとなる。こうして人は、神の寛容によって、過去の罪をゆるされるのである。のみならずキリストは、人のうちに神の属性をうえつけてくださる。キリストは人の品性を神のご品性にかたどって、霊的な力と美しさを備えたりっぱな織物としてくださる。こうして律法の義そのものが、キリストを信ずる者のうちに成就されるのである。「神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者

を義とされるのである」(ローマ三ノ二六)。

神の愛は、あわれみのうちにばかりでなく義のうちにあらわされた。義は神のみ座の基礎であり、神の愛の実である。あわれみを真実と義から引き離そうとするのがサタンの意図であつた。彼は神の律法の義が平和の敵であることを証明しようと努力した。しかしキリストは、神のご計画のうちにあってこの両者は離すことができないほど密接に結合しており、一方がなければ他方は存在し得ないことを示しておられる。「いつくしみと、まこととは共に会い、義と平和とは互に口づけ」する(詩篇八五ノ一〇)。

キリストは、ご自分の一生と死によつて、神の義はそのあわれみを滅ぼすものではなく、罪がゆるされ、律法が正しく完全に従ふことのできるものであることを証明された。サタンの非難の誤りは明らかにされた。神はご自分の愛についてまちがうことのない証拠を人類にお与えになつた。

するとこんどは別な欺瞞が持ち出されることになつた。サタンは、あわれみが義を滅ぼし、キリストの死が天父の律法を廃止したと宣言した。しかしもし律法を変えたり、廃止したりすることが可能であつたら、キリストは死なれる必要がなかつたのである。律法を廃することは、罪とがを不滅なものにし、世をサタンの支配下におくことになる。イエスが十字架上にあげられたのは、律法が不変であつたからであり、律法の戒めに従ふこと以外に人が救われる道はなかつたからである。それなのに、キリストが律法を確立された手段そのものを、サタンは律法を廃するものであると言つた。この点について、キリストとサタンとの間の大争闘における最後の戦いが起こるのである。

神ご自身のみ声によって語られた律法には欠点がある、いくつかのある箇条は廃止されたのだというのが、サタンがいま持ち出している主張である。これはサタンが世にもちこむ最後の犬欺瞞である。彼は律法の全体を攻撃する必要はないのである。もし人々に一つの戒めを無視させることができるならば、彼の目的は達成されるのである。「なぜなら、律法をことごとく守ったとしても、その一つの点にでも落ち度があれば、全体を犯したことになるからである」(ヤコブ二ノ一〇)。一つの戒めを破ることに同意することによって、人はサタンの権力下にはいるのである。神の律法を人間の律法ととり代えることによって、サタンは世を支配しようとしている。この働きは預言の中に予告されている。サタンを代表している大きな背信的な権力について、こう宣言されている、「彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒は…彼の手になたされる」(ダニエル書七ノ二五)。

人々は神の律法に対抗するためにならず人間の律法を定めるであろう。彼らはほかの人々の良心を強制しようとし、人間の律法を励行しようとする熱心のあまり、同胞を迫害するであろう。

神の律法に対する戦いは、天に始まったが、それは世の終りまで続くであろう。どの人もみな試みられる。全世界の人々が、従うか従わないかの問題を決定しなければならない。すべての人が、神の律法か人の律法かをえらばせられるのである。この点で区別の線が引かれる。二種類の人たちしかないのである。どの人の品性も完全に明らかにされる。そして彼らはみな、忠誠の側をえらんだかそれとも反逆の側をえらんだかを示すのである。それから終りが来る。神はご自分の律法の正しさを立証し、その民を救われる。サタンと、サタンに加わった

者たちはみな断たれるのである。罪と罪人は、根も枝も滅びる（マラキ書四ノ一参照）。サタンは根であり、サタンに従う者たちは枝である。そのとき次のことが悪の君に実現するのである。「あなたは自分を神のように賢いと思っているゆえ、…守護のケルブはあなたを火の石の間から追い出した。…あなたは恐るべき終りを遂げ、永遠にうせはてる。」そのとき「悪しき者はただしばらくで、うせ去る。あなたは彼の所をつぶさに尋ねても彼はいない」。「彼らは…かつてなかったようになる」（エゼキエル書二八ノ六、一六、一九、詩篇三七ノ一〇、オバデヤ書一六）。

これは神の側における専制的な権力行為ではない。神のあわれみをこぼす人たちは、自分がmaidしたものを刈り取るのである。神は生命の泉である。しかし罪に仕えることをえらぶとき、その人は神から離れ、したがって生命から自分自身を断つのである。彼は「神のいのちから遠く離れ」る（エペソ四ノ一八）。キリストは「すべてわたしを憎む者は死を愛する者である」と言われる（箴言八ノ三六）。神は、彼らがその本性をあらわし、その原則を示すように、しばらくその存在をおゆるしになる。それがなしとげられると、彼らは自分自身の選択の結果を受けるのである。サタンとサタンに加わっている者たちはみな、反逆の生活によって、神と調和しない立場に身をおくので、神の存在は彼らにとって焼きつくす火となる。愛であられる神の栄光は彼らを滅ぼすであろう。

大争闘の始めには、天使たちはこのことを理解していなかった。もしその時に、サタンと悪天使たちが彼らの罪の十分な結果を刈り取るがままに放っておかれたら、彼らは滅びたのである。しかし彼らの滅びが罪の当然の結果であることは天の住民に明らかにならなかったであろう。神のあわれみについての疑いが悪い種のように彼

らの心に残り、それは罪とわざわいという致命的な実を生じたであろう。

しかし大争闘が終る時にはそうではない。その時には、あがないの計画が完結し、神のご品性がすべての知的被造物に明らかにされる。神の律法の戒めは完全にして不変なものであることがわかる。その時、罪はその本性を現わし、サタンはその正体をばくろしている。その時、罪の根絶は、神のみこころを行なうことをよるこび、心に律法をしるされている人々の宇宙の前で、神の愛を立証し、神の栄えを確立するのである。

だから、天使たちは、救い主の十字架をながめてよろこぶことができたはずである。なぜなら、彼らはその時全部はわからなかったけれども、罪とサタンの滅びが永久に確実となり、人類のあがないが保証され、宇宙が永遠に安全になることを知っていたからである。キリストご自身、カルバリーの上でささげられた犠牲の結果を十分に理解しておられた。キリストが十字架上で、「すべてが終った」と叫ばれたとき、彼はそつしたことのすべてを予見しておられたのであった。

ヨセフの墓の中に

ついに、イエスは休まれた。屈辱と拷問の長い日が終った。夕日の最後の光線が安息日の到来を告げたとき、神のみ子は、ヨセフの墓の静けさの中に横たわっておられた。ご自分の働きを完成し、沈黙のうちに手を組んで、イエスは、安息日の聖なる時間を休まれた。

世の始めに、天父とみ子は、創造の働きのちに安息日を休まれた。「天と地と、その万象とが完成した」とき、創造主は天のすべての住民とその輝かしい光景をながめてよろこばれた(創世記二ノ一)。「かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」のであった(ヨブ記三八ノ七)。いまイエスは、あがないの働きを休まれた。この地上でイエスを愛した人々の間には悲しみがあつたが、天にはよろこびがあつた。天の住民たちの目には、未来の約束が輝かしくうつった。回復された被造物、あがなわれた人類は、罪を征服してしまつたので、もう決して墮落することがないのである。神と天使たちは、キリストの完成された働きから生じるこの結果を喜んでゐた。キリストが休まれた日は永遠にこの光景に結ばれている。なぜなら、「そのみわざ

は全く、「すべて神がなさる事は永遠に変わることがない」からである(申命記三二ノ四、伝道の書三ノ一四)。「神が聖なる預言者たちの口をおして、昔から預言しておられた万物更新の時」になっても、創造の安息日、すなわちイエスがヨセフの墓で休まれたこの日は、やはり休息とよろこびの日となるのである(使徒行伝三ノ二一)。救われた諸国の民が「安息日ごとに」よろこびの礼拝をもって神と小羊を拝するとき、天と地は声を合わせて賛美するのである(イザヤ書六六ノ二三)。

十字架の日の最後の場面で、預言の成就について新たな証拠が与えられ、キリストの神性について新しいあかしがたてられた。十字架のまわりの暗黒が晴れ、救い主の臨終の叫びが発せられたとき、すぐに別な声が、「まことに、この人は神の子であった」というのが聞かれた(マタイ二七ノ五四)。

このことはささやくような調子で言われたのではなかった。みんなの目は、どこからこのことが聞こえてきたのかを見ようとしてふりかえった。だれがしゃべったのだろう。それはローマの軍人、百卒長であった。救い主のとうとい忍耐、主が勝利の叫びを口にされると同時に突然に死なれたことが、この異邦人を感動させたのであった。十字架にかかっている傷つき破れた肉体に、百卒長は神のみ子の姿をみとめた。彼は信仰を告白しないではいられなかった。こうして、あがない主がご自分の魂の苦しみの結果をみられるという証拠がまた与えられた。キリストが死なれたその日に、お互いにまったく異なった立場の三人、すなわちローマの警備兵を指揮していた者と、救い主の十字架をかついだ者と、キリストのかたわらで十字架上に死んだ者とが信仰を宣言したのであった。

夜が近づく、この世ならぬ静けさがカルバリーをおおった。群衆は散り、多くの者が朝とはまったく違った気持ちでエルサレムへ帰って行った。多くの者が十字架の処刑に集まったのは好奇心からであって、キリストに対する憎しみからではなかった。それでも彼らは、祭司たちの非難を信じていて、キリストを悪人とみなしていた。異常な興奮のうちに彼らは暴徒たちといっしょにキリストをののしった。しかし地が暗黒に包まれると、彼らは自分の良心にとがめられ、大変な悪事を犯したという思いに責められた。あの恐るべき暗黒のさなかにあつて、からかいやあざけりの笑い声は聞かれなかった。そして暗黒が晴れると、彼らは厳粛な沈黙のうちに家路についた。彼らは、祭司たちの非難がうそであつて、イエスは詐欺師ではないと確信した。それから数週間たつて、ペテロがペンテコステの日に説教した時、彼らはキリストへの改心者となつた幾千の人々の中に加わつた。

しかしユダヤ人の指導者たちは、そうした出来事を目撃しても変わらなかった。イエスに対する彼らの憎しみは減らなかった。祭司たちと役人たちの心をまだおおつていた暗黒は、キリストが十字架につけられたときに地をおおつた暗黒よりも深かつた。キリストの誕生の時に、星はキリストを知っていて、キリストの寝ておられるうまぶねに博士たちをみちびいた。天使の軍勢はキリストを知っていて、ベツレヘムの丘の上でキリストをたえて歌つた。海はキリストの声を知っていて、その命令に従つた。病氣と死はキリストの権威をみとめて、そのとりこをキリストに引き渡した。太陽はキリストを知っていて、その臨終の苦しみを見て光の顔をおおった。岩はキリストを知っていて、その叫びに身ぶるいしてばらばらにくだけた。自然界はキリストを知っていて、その神性についてあかしをたてた。しかしイスラエルの祭司たちと役人たちは神のみ子をしらなかった。

それでも祭司たちと役人たちは安心しなかった。彼らはキリストを死刑にする計画を実行した。だが期待していたような勝利感は味わえなかった。勝利に見えた時にさえ、こんどは何が起こるだろうかという疑いに苦しめられた。彼らは、「すべてが終った。」「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」との叫びを聞いた（ヨハネ一九ノ三〇、ルカ二三ノ四六）。彼らは岩が裂けるのを見、大きな地震を感じたので、心が落ちつかず、不安であつた。彼らは、キリストが生きておられた時には、民衆に対するキリストの勢力をねたんだが、死なれてもまだキリストをねたんでいた。彼らは、生きておられたキリストを恐れていたよりも死なれたキリストをもっと恐れた。彼らはキリストの十字架にともなう出来事に民衆の注意がこれ以上向けられるのを恐れた。彼らはその日の働きの結果を恐れた。どんなことがあつても安息日の間じゅうキリストのからだを十字架に残しておきたくなくなつた。安息日はもう近づいていた。からだは十字架上にさがったままにしておくことは安息日の神聖を犯すことになるのであつた。そこで有力なユダヤ人たちは、そのことを口実にして、犠牲者たちの死を早め、太陽が沈まないうちにそのからだを片づけさせてもらいたいと、ピラトに願ひ出た。

ピラトも彼らと同じに、イエスのからだを十字架上に残したくなかつた。ピラトの承諾が得られると、死を早めるために二人のどろぼうの足が折られたが、イエスはすでに死んでおられることがわかつた。粗暴な兵士たちは、キリストについて見たり聞いたりしたことで心を和らげられていたので、キリストの足を折ることをひかえた。こうして、神の小羊がささげられたことによって、過越節の律法が成就された。「これを少しでも朝まで残しておいてはならない。またその骨は一本でも折ってはならない。過越の祭のすべての定めにしたがってこれを

行わなければならない」(民数記九ノ一二)。

祭司たちと役人たちはキリストが死なれたことを知って驚いた。十字架による死は長びくのであった。いつ息がたえたかを決定するのは困難であった。だれでも十字架につけられて六時間以内に死ぬということは例のないことであつた。祭司たちはイエスの死を確かめたいと思つた。そこで彼らに言われて、ひとりの兵士が救い主の脇腹にやりを突きさした。するとその傷口から、血と水がおびただしいはつきりした二筋となって流れた。目撃者たちの全部がそれを見とめたが、ヨハネはこの出来事をはつきり述べてこう言っている、「ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは眞実である。その人は、自分が眞実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。これらのことが起つたのは、『その骨はくだかれないであらう』との聖書の言葉が、成就するためである。また聖書のほかのところに、『彼らは自分が刺し通した者を見るであらう』とある」(ヨハネ一九ノ三四―三七)。

キリストの復活後、祭司たちと役人たちは、キリストは十字架上で死なれたのではなく、失神されただけであつたから息を吹き返されたのだといううわさをまきちらした。もう一つのうわさは、墓におかれたのは骨と肉のある本当の肉体ではなくて、肉体に見せかけたものであつたという主張であつた。ローマの兵士たちの行為は、これらの虚偽を証明している。彼らはイエスがすでに死んでおられたので、その足を折らなかつた。祭司たちを満足させるために彼らはイエスの脇腹を突き刺した。もし生命がまだたえていなかったら、イエスはその傷で即死

されたであろう。

しかしイエスの死の原因はやりで突かれたことでもなければ、十字架の苦痛でもなかった。死の瞬間にイエスが「大声」で叫ばれたことと、その脇腹から血と水が流れ出たことは、イエスが心臓の破裂でなくなれたことを物語っていた(マタイ二七ノ五〇、ルカ二三ノ四六)。イエスの心臓は精神的な苦悩のために破裂したのである。彼は世の罪によって殺されたのであった。

キリストの死とともに弟子たちの望みは滅びた。彼らはキリストのとじられたまぶたとつなだれた頭、血のからみついた髪の毛、刺し通された手と足を見たとき、その苦痛は言い表わしようがなかった。最後まで、彼らは、イエスが死なれるとは信じていなかった。彼らはイエスが本当に死なれるとは信じていることができなかった。悲しみに圧倒されてしまって、彼らは、この光景を予告されたイエスのみことばを思い出さなかった。イエスの言われたことがいまは何一つ彼らの慰めにならなかった。彼らは、十字架と、血を流しておられる犠牲者しか見なかった。前途は絶望で暗くみえた。イエスに対する彼らの信仰は滅びた。しかし彼らは、いまほど主を愛したことはなかった。いまほどイエスの価値、イエスにいていただく必要を感じたことはなかった。

死んでおられても、キリストのおからだは弟子たちにとって非常に大切だった。彼らはイエスを手厚く葬りたいと願ったが、どうしたらそれを実現できるかわからなかった。ローマ政府に対する反逆というのがイエスに対する有罪の宣告であって、この罪科のために処刑された者は、このような犯罪人のために特に設けられている埋葬場に引き渡されるのだった。弟子のヨハネは、ガリラヤの女たちと十字架のそばに残っていた。彼らは、主の

おからだが冷酷な兵士たちの手で扱われ、不名誉な墓に葬られるままにしておくことができなかった。そうかといつて、それを防止することもできなかった。彼らはユダヤ当局の好意にすぎること、ピラトに便宜をはかってもらうこともできなかった。

この危急に、アリマタヤのヨセフとニコデモが弟子たちの助けに現われた。この人たちはふたりともサンヒドリンの議員でピラトを知っていた。ふたりとも富裕で勢力のある人たちだった。彼らはイエスのおからだをりっぱに埋葬しようと決心していた。

ヨセフは大胆にピラトのところへ行つて、イエスのからだを引き渡してもらいたいとたのんだ。初めてピラトは、イエスが本当に死なれたことを知った。十字架の処刑に伴ういろいろな出来事についてつじつまの合わない知らせが彼の耳にはいつていたが、キリストの死の真相はわざと彼にかくしてあった。ピラトは、キリストのからだについて弟子たちからだまされないようにと祭司たちや役人たちから注意を受けていた。ヨセフのたのみを聞くと、ピラトはさっそく十字架の責任を持っていた百卒長を迎えにやり、はっきりイエスの死を知った。彼はまた百卒長からカルバリーの模様を聞き出し、ヨセフの証言を確認した。

ヨセフの願いは許された。ヨハネが主の埋葬について心配していると、ヨセフがキリストのからだについてのピラトの命令をもって帰ってきた。またニコデモは、キリストのおからだの防腐処置のために、「没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた」(ヨハネ一九ノ三九)。エルサレムじゅうのどんなえらい人でも、死んでこれほどの尊敬を受けることはできなかったであろう。弟子たちは、こうした富裕な役人たちが、主の埋葬に自分

たちと同じように関心をもっているのを見て驚いた。

ヨセフもニコデモも、救い主の在世中には、公然と主を受け入れなかった。もしそのようなことをすれば、サンヒドリンから除名されることがわかっていた。彼らは会議のときに自分たちの勢力によってイエスを守ろうと望んでいたのだった。しばらくはそれがうまくいっているようにみえた。しかし陰險な祭司たちは、キリストに対する彼らの好意をみて、その計画を妨害した。彼らがいないところで、イエスは有罪を宣告され、十字架につけるために引き渡された。キリストがなくなれたからには、彼らはもうキリストへの愛着をかくさなかった。弟子たちがキリストに従う者であることを公然と示すことを恐れたときに、ヨセフとニコデモは大胆に彼らを助けにやってきた。このような富裕で高貴な身分の人たちの助けがこの時非常に必要だった。彼らは、死なれた主のために、貧しい弟子たちができないことをすることができた。それに彼らの富と勢力は、祭司たちと役人たちの悪意から彼らを守るのに非常に役立った。

ていねいに、うやうやしく彼らは、自分たちの手でイエスのおからだを十字架からおろした。傷つき破れた主のおからだを見たとき、同情の涙が走り落ちた。ヨセフは、岩に堀られた新しい墓を持っていた。これは自分のためにとっておいたものであったが、カルバリーの近くにあったので、いま彼はその墓をイエスのために準備した。主のおからだは、ニコデモが持ってきた香料といっしょに念入りに亜麻布でまかれ、あがない主は墓にはこばれた。そこで三人の弟子たちは、傷ついた主の足をまっすぐにのばし、破れたその両手を息のたえた胸の上に組み合わせた。ガリラヤの女たちがやってきて、愛する師のなきがらの処置に手落ちがないように気をくばった。



弟子たちはイエスのなきがらをていねいに十字架からおろして、ヨセフの墓へはこんだ。主の死を目の前に見て、メシヤの王国に対する彼らの望みは消えたように見えた。

それから彼らは、重い石が墓の入口にころがされて、救い主が休まれたままにおいておかれるのを見た。女たちは最後まで十字架の下に残り、最後までキリストの墓に残った。たそがれの影が濃くなってきた、マグダラのマリヤとほかのマリヤたちは、主の休まれた場所のあたりを立ち去りかねて、愛するおかたの運命に悲しみの涙を流した。「そして帰って、…それからおきてに従って安息日を休んだ」(ルカ二三ノ五六)。

それは、悲しみの弟子たちにとって、また祭司たち、役人たち、律法学者たち、民にとって、忘れることのできない安息日であった。備え日の夕暮れの太陽が沈むと、ラッパが吹き鳴らされて安息日が始まったことを告げた。過越節はキリストをさし示しているのであるが、当のキリストが悪人どもの手で殺され、ヨセフの墓に横たわっておられるのに、それはこれまでの何百年と同じように守られた。安息日に、宮の庭は礼拝者でいっぱいだった。ゴルゴタから帰ってきた大祭司は、美しい祭司服をつけて、そこにいた。白い帽子をつけて祭司たちは活発に彼らの務めを行なった。しかしそこにいた人々の中には、牛や小羊の血が罪のためにささげられても、心が休まらない人たちがいた。彼らは、型が本体に合い、世の罪のために無限の犠牲がささげられたことに気がついていなかった。彼らは儀式を行なうことにはや価値がないことを知っていなかった。しかしこの儀式がこんなちぐはぐな気持で見られたことはなかった。ラッパと楽器と歌手たちの声は、いつものように高くはつきりしていた。しかしどれにも奇妙な感じがみなぎっていた。そこに起こったふしぎな出来事についてだれもが口々にたずねた。これまでに至聖所は人々がいりこまないように神聖に守護されていた。ところがいまそれはだれの目にもまる見えであった。純粹の亜麻で作られ、金色、赤、紫の美しいししゅうの施された厚いつづれにしきの幕が

てっぺんから下まで裂けていた。エホバが大祭司とお会いになって、その栄光を伝えられた場所、神の聖なる謁見室がだれの目にもむき出しにされていた。それはもはや主によって定められた場所ではなかった。祭司たちは暗い予感がしながら祭壇の前で奉仕した。至聖所の聖なる神秘がむき出しになったことが、彼らの心にきたるべきわざわいについての恐れを満たした。

多くの人々の心はカルバリーの光景によってひき起こされた思いに忙しかった。十字架の処刑から復活までの間、その時自分たちが祝っていた祭の意味を十分に知ろうとして、あるいはイエスが主張された通りのおかたではないという証拠をみつけようとして、多くの油断のない目がたえず預言を調べていた。またほかの人たちは後悔の思いをもって、イエスが真のメシヤであるという証拠を調べていた。異なった目的を頭にもって調べてはいたが、どの人も同じ事実を確信した。すなわちそれは、過ぐる数日間の出来事を通して預言が成就したということ、また十字架につけられたおかたは世のあがない主であるということであつた。その時儀式に加わっていた多くの者は決してふたたび過越の儀式にあずからなかった。多くの者が、祭司たちでさえ、イエスの真の性格をさとした。彼らが預言を調べたことはむだではなく、キリストの復活後、彼らはイエスを神のみ子としてみとめた。ニコデモは、イエスが十字架にあげられるのを見た時、オリブ山で夜語られたイエスのみことばを思い出した。「ちようどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」(ヨハネ三ノ一四、一五)。キリストが墓に横たわっておられたその安息日に、ニコデモは反省の機会があつた。いまもつとはつきりしたひとつの光が彼の思いを照らし、イエスが彼に

語られたことはもはや神秘的ではなかった。彼は、救い主の在世中に主と結合しなかったことによって多くのものを失ったことを感じた。いま彼はカルバリーの出来事を思い起こした。殺人者たちのためのキリストの祈りと、死にかけているどろぼうの嘆願に対するキリストの答が、学識のあるこの議員の心に語りかけた。ふたたび彼は苦悶のうちにあられる救い主を見あげた。ふたたび彼は揺れる大地と、暗くなった空と、裂けた幕と、ふるえる岩を終った」という最後の叫びを聞いた。ふたたび彼は滅ぼしたその出来事が、ヨセフとニコデモにイエスの神性を見、彼の信仰は永久に定まった。弟子たちの望みを滅ぼしたその出来事が、ヨセフとニコデモにイエスの神性を確信させた。彼らの恐れは、固い、ゆるがない信仰の勇氣によって征服された。

キリストは、墓に横たわっておられるいまほど群衆の注意をひかれたことはなかった。いつもの習慣通り、人は病人や苦しんでいる者たちを宮の庭に連れてきて、「ナザレのイエスはどつなさったのか」とたずねた。多くの者が、病人をいやし死人をよみがえらせられたイエスをみつけ出そうと遠くからやってきていた。医者のカリストに会わせてくれとの叫びがいたるところで聞かれた。祭司たちはこの機会をのがさず、らい病の徴候があるとされる人たちを検査した。多くの人たちが、自分の夫、妻あるいは子供らがい病と断定され、家庭の保護と友人たちの見守りから離れて、「汚れた者、汚れた者」との悲しい叫び声で知らない人を避ける運命を宣告されるのを聞かねばならなかった。恐ろしいらい病人にいやしのみ手でさわることを決してこばまれたことのないナザレのイエスのやさしい手はその胸の上に組み合わされていた。らい病人の嘆願に、「そうしてあげよう、きよくなれ」との慰めのことををもって答えられたくちびるはいまとざされていた(マタイ八ノ三)。多くの

人たちが、祭司長たちと役人たちに同情と救いを求めたがむなしかった。彼らは生きておられるキリストにもう一度きていただくとうと決心しているようだった。根気よく熱心に、彼らはキリストを求めた。彼らは引き返そうとしなかったが、結局宮の庭から追い払われた。死にかけている病人たちをつれて中へ入れてくれと要求する群衆をおし返すために、どの門にも兵士たちが配置された。

救い主にいやしていただくとうとやってきた病人たちは失望の底に沈んだ。街路は悲嘆の声に満ちた。イエスのいやしのみ手にふれていただくことができなくて、病人は死にかけていた。医者たちに見てもらってもだめだった。ヨセフの墓に横たわっておられるイエスのような手腕はなかった。

苦しんでいる者たちの悲嘆の叫び声は、大いなる光がこの世から消えたことを多くの人々の心に確信させた。キリストがあらねなければ、この世は暗やみであった。「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」との叫び声をあげた多くの人々が、いまやわざわいが彼らの上にふりかかったことに気づき、キリストがまだ生きておられるら、「われらにイエスを与えよ」と叫んだであろう。

イエスが祭司たちから死刑にされたことがわかると、人々はイエスの死についてたずねた。イエスの裁判の詳細はできるだけ内密にされていた。しかしイエスが墓におられる間に、その名は幾千の人々の口にのぼり、イエスが不正な裁判を受けられたことや、祭司たちと役人たちの非人間ぶりについて、うわさがいたるところにひろまった。祭司たちと役人たちは、知識人たちから、メシヤに関する旧約の預言について説明を求められた。答えをつつそで固めようとしているうちに、彼らは正気ではない人間のようになった。彼らはキリストの苦難と死をさ

し示している預言を、説明できなかった。こうして多くの質問者たちは、聖書が成就されたことを確信した。

祭司たちが快感を予期していた復讐はすでに彼らにとつてにがいものとなった。彼らは人々の激しい非難に当面していることを知った。イエスに反対するように圧力をかけられた人たちが、自分たちの恥ずべき行為にいまやにがにがしい思いを味わっていることを彼らは知った。これらの祭司たちはイエスが詐欺師であると信じようとしたのだった。しかしそれはむだだった。彼らのうちのある人たちはラザロの墓のそばに立ち、死人がいのちによみがえらされるのを見たのだった。彼らはイエスが自ら死からよみがえって、ふたたび彼らの前に現われるのではないかとの恐れにうちふるえた。彼らはイエスがわたしには自分のいのちを捨てる力があり、またそれを受ける力があると宣言されるのを聞いたことがあった(ヨハネ一〇ノ一八参照)。彼らはイエスが、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」と言われたのをおぼえていた(ヨハネ二ノ一九)。ユダは、イエスがエルサレムへの最後の旅の道中で、弟子たちに次のように言われたことばを彼らに語ったことがあった。「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に渡されるであろう。彼らは彼に死刑を宣告し、そして彼をあざけり、おち打ち、十字架につけさせるために、異邦人に引きわたすであろう。そして彼は三日目によみかえるであろう」(マタイ二〇ノ一八、一九)。このことばを聞いたとき、彼らは嘲笑した。しかしいま彼らは、キリストの予告がここまで実現したことを思い出した。あの人は三日目によみがえると言ったが、それが実現しないとはだれも言いきれない。彼らは、そうした思いを払いのけたいと思ったが、払いのけることができなかった。彼らの父、悪魔と同じように、彼らは信じておののいた。

いま狂気のような興奮がすぎ去ってみると、キリストの面影が彼らの心に浮かびあがってくるのだった。彼らはキリストが、一言のつぶやきもなく彼らの嘲笑と虐待に耐えながら、平静に文句も言わず敵の前に立っておられるのを見た。イエスの裁判と十字架のすべての出来事が、彼は神のみ子であるという圧倒的な確信を伴って彼らにもどってきた。彼らはイエスがいまにも彼らの前に現われて、訴えられた者が訴える者となり、有罪を宣告された者が有罪を宣告する者となり、殺された者が殺人者たちの死刑を法に照らして要求されるのではないかと恐れた。

その安息日、彼らはじっとしていることができなかった。彼らは、けがれを恐れて異邦人のしきいをまたごとくとはしなかったが、キリストのからだについて相談した。彼らが十字架につけたキリストを、死と墓がとどめていなくてはならない。「祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、『長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。ですから、三日目まで墓の番をするように、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み出し、『イエスは死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふらすかも知れません。そうすると、みんなが前よりも、もっとひどくだまされることになりましょう。』」ピラトは彼らに言った、『番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい』（マタイ二七ノ六二―六五）。

祭司たちは、墓場を守るように指示を与えた。入口の前に大きな石がおかれていた。彼らはこの石の上にひもを張り渡して両端を岩に固定し、ローマの印で封印した。封印を破らなければその石を動かすことができなかった

た。それから墓をこじあげられないように、周囲に百人の番兵が配置された。祭司たちは、キリストのからだを、その置かれたところにおいておくためにあらゆる手を尽くした。キリストは、永遠に墓の中にとどめておかれるかのように、厳重にそこに封印されていた。

このように、弱い人間たちは相談し、計画した。殺人者たちは、自分たちの努力のおなしさに気がつかなかった。しかし、彼らの行為によって神があがめられた。キリストの復活を予防するためにとられた手段そのものが、キリストの復活の証拠について最も有力な議論である。墓の周囲におかれた番兵の数が多ければ多いほど、キリストがよみがえられたというあかしは一層強力になる。キリストの死の何百年も前に、聖霊は詩篇記者を通してこう宣言された。「なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたち、もろもろの民はむなしい事をたくらむのか。地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者とに逆らって言う：「天に座する者は笑い、主は彼らをあざけられるであろう」（詩篇二ノ一―四）。生命の主を墓の中にとじこめておくには、ローマの番兵もローマの軍隊も無力であった。キリストがとき放たれる時が迫っていた。

「主はよみがえられた」

本章はマタイ二八ノ二―四、一―一五にもとづく

週の初めの日の夜がゆつくりと過ぎて行つた。夜明け前の一番暗い時間がきていた。キリストはまだ囚人としてそのせまい墓の中におられた。大きな石はもとの場所にあつて、ローマの封印は破れていなかった。ローマ人の番兵たちが見張りをつづけていた。そこにはまた、目に見えない見張りたちもいた。悪天使の軍勢がそのあたりに集まっていた。もしできることなら、暗黒の君は、その背信の軍勢をもつて神のみ子のとじこめられた墓を永久に封印したであろう。しかし、天の軍勢が墓所をかこんだ。力のすぐれた天使たちが墓を守り、生命の君を迎えようと待っていた。

「すると、大きな地震が起つた。それは主の使が天から下つたのであつた(マタイ二八ノ二)。神の武具をまつて、この天使は、天の宮廷を出発した。神の栄光の輝かしい光が彼の前にあつて、その行く手を照らした。「その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であつた。見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがつて、死人のようになった」(マタイ二八ノ三、四)。

さあ、祭司たちと役人たちよ、あなたがたの防備力はどこにあるのか。人の力を決して恐れたことのなかった勇敢な兵士たちが、いまは剣ややりもなしにとらえられた捕虜のようである。彼らが見あげる顔は人間の戦士の顔ではない。それは主の軍勢の中の一番強い戦士の顔である。この使者は、サタンが落ちたあとの地位を占めている者である。それはベツレヘムの丘でキリストの誕生を宣告した者である。彼が近づいて地が震動し、暗黒の軍勢が逃げ去り、彼が石をころがし去ると、天が地においてくるようにみえる。兵士たちは、彼がその石をあたかも小石のようにとりのぞくの見、彼が、神のみ子よ、姿を現してください、父があなたを呼んでおられますと叫ぶのを聞く。彼らはイエスがよみから現われて、開かれた墓のあたりで、「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言されるのを聞く(ヨハネ一ノ二五)。イエスが威光と栄光のうちに姿を現わされると、天使の万軍は、あがない主をあがめて、その前に低く頭をたれ、賛美の歌でイエスを迎える。

キリストがいのを捨てられた時刻が地震によって示されたが、勝利のうちにいのちをおとりになった瞬間がもう一度地震によってあかしされた。死とよみを征服されたキリストは、地の震動と、いなくまのひらめきと雷のとどろきの中を勝利者の歩調で墓から出てこられた。イエスがふたたびこの地上にこられるとき、彼は「地ばかりでなく天をも震わ」れるのである。「地は酔いどれのようによめき、仮小屋のようにゆり動く。」「もろもろの天は巻物のように巻かれ、」「天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。」「しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりである」(ヘブル一ノ二六、イザヤ書二四ノ二〇、三四ノ四、ペテロ第二・三ノ一〇、ヨエル書三ノ一六)。



イエスは、見張り番のついている墓から、死に対する勝利者として、栄化された肉体をもって出てこられた。よみがえられた主の輝かしい光景に、ローマの兵士たちは失神して死人のようになった。

イエスが死なれたときに、兵士たちは、真昼に地が暗黒につつまれたのを見た。しかし、よみがえりのときに彼らは天使たちの輝きが夜を照らすのを見、天の住民が大きなるこびと勝利のうちに、あなたはサタンと暗黒の勢力を征服されました、あなたは死を勝利のうちに吞まれましたと歌うのを聞いた。

キリストは栄化されて墓から姿を現わされ、ローマ人の番兵たちは彼を見た。彼らはいく先日、自分たちがあざけり、嘲笑したおかたの顔に目をこらした。この栄化されたおかたのうちに、彼らが法廷で見た囚人、いばらの冠を編んでかぶせた人を見た。これが、残酷なむち打ちでからだを傷つけられて、ピラトとヘロデの前に無抵抗のまま立っていた人であった。これが、十字架につけられ、満足しきった祭司たちと役人たちから軽蔑したように、彼は、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない」と言われた人であった（マタイ二七ノ四二）。これがヨセフの新しい墓に横たえられたおかたであった。天の布告は、このとりこを解放した。彼の墓に山また山を積みあげたとしても、イエスが出てこられるのをとめることはできなかった。

天使たちと栄化された救い主を見ると、ローマ人の番兵たちは、氣を失って死人のようになった。天の余光が視界からかくれると、彼らは起きあがり、ふるえる手足をできるだけ早く動かしながら園の門の方へ進んで行った。酒に酔ったもののようによるめきながら、彼らは都へ急ぎ、出会う人たちにふしぎな知らせを告げた。彼らは、ピラトのところへ向かっていたが、彼らの知らせはすでにユダヤ当局に伝えられていたので、祭司長たちと役人たちが彼らをまず自分たちの前につれてくるように迎えを出した。兵士たちは異様な姿を現わした。彼らは、恐怖にふるえ、顔色を失って、キリストの復活を証言した。兵士たちは、自分が見たとおりのことをのこらず語

った。事実以外のことを考えたり話したりする時間はなかった。彼らは、苦痛に満ちた口調で、十字架につけられたのは神のみ子でした、わたしたちは天使がイエスを天の大君、栄光の王として宣言するのを聞いたのですと言った。

祭司たちの顔は死人のようであった。カヤパがしゃべろうとした。彼の唇は動いたが声にならなかった。兵士たちが会議室から出ようとすると、一つの声が彼らをとどめた。カヤパがやっと口をきいたのだ。待て、待てと彼は言った。おまえたちの見たことをだれにも言ってはならないぞ。

それから、いつもの知らせが兵士たちにさずけられた。『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え」と祭司たちは言った(マタイ二八ノ一二)。ここで彼らは自ら策略につまずいた。兵士たちは、自分たちが眠っている間に弟子たちがイエスのからだを盗んだと、どうして言うことができよう。もし、眠っていたらどうしてそれがわかるうか。そして、もし弟子たちがキリストのからだを盗んだという証拠があったのだしたら、祭司たちはまっさきに弟子たちの罪を鳴らしたのではないだろうか。あるいはまた、番兵たちが墓で眠ったのだしたら、祭司たちはまっさきにこの番兵たちをピラトに訴えたのではないだろうか。

兵士たちは、勤務中に眠ったという告発を受けることを思っただけで身ぶるいした。これは死刑の罰に相当する犯罪だった。いつもの証言をして民をあざむき、自分たちの生命を危険にさらしてよいものだろうか。彼らは不寝番までやって、疲れる見張りをしたではないか。たとえ金のためではあっても、偽証をするなら、裁判で自分たちの立場はないではないか。

祭司たちは、自分たちの恐れている証言を沈黙させるために、ピラトだってわれわれ同様こんなうわさが言いふらされるのを好まないのだと言って、番兵たちの身の安全を保証することを約束した。ローマ人の兵士たちは、金のために正直をユダヤ人に売った。彼らは事実についてまことに驚くべき知らせを背負って祭司たちの前にはいつてきたが、祭司たちが彼らのために作ってやったいつわりのうわさを舌にのせ、金を背負って出て行った。

こうしているうちにも、キリスト復活のうわさはピラトに伝わっていた。ピラトはキリストを死刑に引き渡した責任があつたが、比較的に無関心だった。彼は不本意ながらキリストに有罪の宣告をくだし、気の毒には思っていたが、いままでほんとうに良心の責めを感じていなかった。彼はいま恐怖のあまり家にとじこもって、だれにも会つまいと心にきめた。しかし祭司たちが彼の前にやってきて、彼らがつくりあげた話を語り、番兵たちの義務怠慢をみのがしてもらいたいと主張した。ピラトはこれを承諾する前に、自ら個人的に番兵に質問した。彼らは、身の安全をおそれて、何事もかくそうとしなかつたので、ピラトは彼らから出来事の一部しじゅうについて報告を聞き出した。そして、この問題をそれ以上追求しなかつたが、その時から彼に平安はなかつた。

イエスが墓の中に横たえられたとき、サタンは勝ち誇った。彼は救い主がふたたびよみがえられないようにとさえ望んだ。彼は主のからだを要求し、墓のまわりに番兵を配置し、キリストをとりことしてとじこめておこうとした。彼は、悪天使たちが天の使者の接近とともに逃げ出したとき、激しく怒った。彼は、キリストが勝利のうちに姿を現わされたとき、自分の王国が終わり、自分はついに死なねばならないことを知った。

祭司たちは、キリストを死刑にしたことによって、自らサタンの道具となった。いま彼らは完全にサタンの権

力下にあった。彼らはわなにかかり、キリストとの戦いを続ける以外にそのわなからのがれる道がなかった。キリストがよみがえられたとの知らせを聞いたとき、彼らは民衆の怒りを恐れた。彼らは、彼ら自身の生命が危険であると思った。彼らにとって唯一の望みは、キリストがよみがえられたことを否定することによって、彼が詐欺師であることを証明することだった。彼らは兵士たちを買収し、ピラトを沈黙させた。彼らはいつわりのうわさを遠近にひろめた。しかし沈黙させることのできない証人たちがいた。多くの人々が、キリストのよみがえりについて兵士たちのあかしを聞いていた。またある死者たちはキリストと共によみがえって、多くの人々に現われ、キリストがよみがえられたことを告げた。よみがえったこれらの人たちを見、そのあかしを聞いた人々について、うわさが祭司たちの耳にはいつてきた。祭司たちと役人たちは、通りを歩いていても、自分の家にひっこんでいても、キリストにはばったり出会うのではないかしじゅう恐れていた。自分たちにとって安全策がないことを彼らは感じた。神のみ子を防ぐには、かんぬきもとめ金もたよりにならなかった。法廷で彼らが「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と叫んだときの、あの恐ろしい場面が昼も夜も彼らの前にあった(マタイ二七ノ二五)。その場面の記憶は決して彼らの心から消えないであろう。彼らのまくらもとに平和な眠りはもう決してないであろう。

キリストの墓で、父があなたを呼んでおられますという強い天使の声が聞かれたとき、救い主は、ご自身のうちにある生命によってよみから出てこられた。「わたしは…命を捨てるのは、それを再び得るためである。：わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある」と言われたキリストのことばが事実であっ

たことがいま証明された(ヨハネ一〇ノ一七、一八)。キリストが祭司たちと役人たちに、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」と語られた預言がいま成就した(ヨハネ二ノ一九)。

ヨセフの開かれた墓のほとりで、キリストは勝利のうちに、「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言された(ヨハネ一一ノ二五)。このことを言うことができるのは神のみである。すべての被造物は神のみこころと力によって生きている。彼らは神に依存してその生命を受ける。最高のセラフから最もいやしい生物にいたるまで、すべてのものは生命のみなもとである神から力を補充されるのである。神と一つであられるおかただけが、わたしはいのちを捨てる力があり、またそれを受ける力があると言うことがおできになった。キリストはその神性のうちに死のなわめをたちきる力を持っておられた。

キリストは眠った者の初穂として死人の中からよみがえられた。彼は揺祭のたばの本体であって、そのよみがえりは揺祭のたばが主の前にささげられる日に起った。千年以上のあいだ、この象徴的な儀式が行なわれてきた。収穫の畑から、熟した穀物の初穂が集められ、人々が過越節のためにエルサレムに行ったとき、その初穂のたばは主の前に感謝のささげ物としてふられた。これがささげられるまでは、作物にかまを入れ、それを集めてたばにしてはならなかった。神にささげられたたばは収穫を象徴していた。そのように、初穂なるキリストは、神の王国に集められる霊的大収穫の象徴であった。キリストのよみがえりはすべての死せる義人のよみがえりの型であり保証である。「わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう」(テサロニケ第一・四ノ一四)。

キリストは、よみがえられたとき、多くのとりこをよみからおつれになった。キリストがなくなるとき、地震で墓が口を開き、キリストがよみがえられると、彼らはキリストといっしょに出てきた。彼らは神と共に働いた者、生命を犠牲にして真理のためにあかしをたてた者たちであった。いま彼らは、彼らを死人の中からよみがえらせてくださったキリストの証人となるのであった。

キリストは、その公生涯の間に、死人をいのちによみがえらせられた。彼はナインのやもめの子と、会堂司の娘とラザロをよみがえらせられた。しかし、彼らは不死を着せられなかった。彼らはよみがえってから、やはり死ぬべきからだであった。しかし、キリストの復活のときによみから出て来た者たちは永遠の生命によみがえったのであった。彼らは、死とよみに対するキリストの勝利を記念する者として、キリストと共に昇天した。この人たちはもはやサタンのとりこではない、わたしは彼らをあがなつたのだとキリストは言われた。彼らがわたしのいるところに共にいて、決して死を見たり、悲しみを経験することがないように、わたしは彼らをわたしの力の初穂として、よみからつれ出したのだ。

これらの人たちは都へ行って、多くの人に現われ、キリストが死人の中からよみがえられ、われわれはキリストと共によみがえつたのだと宣言した。こうしてよみがえりについての聖なる事実が不滅のものとなった。よみがえつた聖徒たちは、「あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる」ということが事実であることをあかしした（イザヤ書二六ノ一九）。彼らのよみがえりは、「ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であつて、それを亡霊の国の上に降らされるからである」という預言の成就についての一つの例であつた（イザ

や書二六ノ一九)。

信じる者にとって、キリストはよみがえりであり、いのちである。罪のために失われたいのちは、われらの救い主とおして回復される。なぜなら、キリストはご自身のうちにいのちをもっており、みこころのままに人をよみがえらせるからである。主は不死を与える権利を受けておられる。キリストは人性のうちにあってお捨てになったいのちを、ふたたびとりあげて人類にお与えになる。キリストはこう言われた、「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであらう。」「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであらう」(ヨハネ一〇ノ一〇、四ノ一四、六ノ五四)。

信じる者には、死は小事にすぎない。キリストは、それをたいしたことではないかのように語っておられる。「もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであらう。…わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであらう」(ヨハネ八ノ五一、五二)。クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、「キリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであらう」(コロサイ三ノ四)。

キリストが十字架から「すべてが終わった」と叫ばれた声は死者の中にも聞こえた。その声は墓の壁をつらぬいて、眠っている者たちに起きよと呼びかけた。キリストの声が天から聞こえるときもこれと同じである。その声

は墓所をつらぬき、墓を開き、キリストのうちにある死人は起きあがるのである。救い主のよみがえりのときには少数の墓が開いたが、再臨の時にはすべての死せるとい人々がキリストの声を聞いて、輝かしい永遠の生命にはいるのである。キリストを死人の中からよみがえらせたのと同じ力が、教会をよみがえらせ、これに「すべての支配、権威、権力、権勢…また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名」にまさって、キリストと共に栄光をささげるのである（エペソー二二）。

第 82 章

「なぜ泣いているのか」

本章はマタイ二八ノ一、五―八、マルコ二六ノ一―八、ルカ二四ノ一―二二、ヨハネ二〇ノ一―八にもとづく。

キリストの十字架のそばに立った女たちは、安息日の時間が過ぎ去るのを見守りながら待った。週の初めの日の朝早く、女たちは救い主のおからだに塗る高価な香料を持って、墓へやってきた。彼女たちはイエスが死人の中からよみがえられるとは思っていなかった。望みの太陽は沈み、夜が彼女たちの心をおおっていた。女たちは歩きながらキリストの恵みのみわざと慰めのみことを語り合った。しかし、「わたしは再びあなたがたと会つであろう」と言われたキリストのみことをおぼえていなかった(ヨハネ一六ノ二二)。

そのときすでに起こっていたことを何も知らないで、女たちは、「だれが、わたしたちのために、墓の入口から石をころがしてくれるのでしょうか」と言いながら、園へ近づいた(マルコ一六ノ三)。彼女たちは石をとりのけることができないことを知っていたが、それでも道を進んで行った。すると見よ、昇る太陽の光とちがった栄光で急に天が明るくなった。地がゆれた。女たちは大きな石がとりのけてあるのを見た。墓はからっぽであった。女たちはみな同じ方向から墓へやってきたのではなかった。マグダラのマリヤは一番先にその場に着いた。彼

女は石がとりのけられているのを見ると、弟子たちに知らせるために急いで立ち去った。そのうちにほかの女たちもやってきた。光が墓のあたりに輝いていたが、イエスのおからだはそこになかった。女たちがそのあたりでうろうろしていると、突然彼女たちはそこにいるのが自分たちだけではないことがわかった。輝く衣を着た若者が墓のそばに腰をおろしていた。それは石をころがした天使であつた。彼は、イエスの友だちを驚かさないうちに、人間の姿をとっていた。しかし彼のまわりには、まだ天の栄光の光が輝いていたので、女たちは恐れた。彼女たちは向きを変えて逃げようとしたが、天使のことは彼女たちの足をとどめた。「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかつているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおり、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をあらわさない。そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた』(マタイ二八ノ五一七)。もう一度女たちは墓の中をのぞきこみ、ふたたびすばらしい知らせを聞く。人間の姿をしたほかの天使がそこにいて、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえり、と仰せられたではないか」と言う(ルカ二四ノ五一七)。

主はよみがえられた、主はよみがえられたのだ。女たちはそのことを何度も何度もくりかえす。香料を塗る必要はもうないのだ。救い主は死んでおられるのではなく、生きておられるのだ。イエスがご自分の死について

語られたとき、ふたたびよみがえると言われたことを、女たちは思い出す。きょうは世界にとって何という日だろう。「そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った」(マタイ二八ノ八)。

マリヤはよい知らせを聞いていなかった。彼女はペテロとヨハネのところへ行つて、「だれかが、主を墓から取り去りました。どこへ置いたのか、わかりません」と悲しいことばを伝えた(ヨハネ二〇ノ二)。弟子たちは墓へ急いで行つて、マリヤが言ったとおりであることを知った。彼らはきょうかたびらと布を見たが、主はおられなかった。しかしここにさえ主がよみがえられた証拠があつた。きょうかたびらは無頓着に放り出してはなくて、念入りにたたまれ、それぞれの場所におかれていた。ヨハネは「これを見て信じた」(ヨハネ二〇ノ八)。彼は、キリストは死人の中からよみがえられねばならないという聖句をまだ理解しなかった。しかしいま彼は、ご自分のよみがえりを預言された救い主のことばを思い出した。

きょうかたびらをこのように念入りに置いたのはキリストご自身であつた。強い天使が墓へやってくると、それまで仲間の天使と主のおからだを守っていたほかの天使が加わつた。天からきた天使が石をころがしてどけると、もうひとりの天使が墓にはいつて、イエスのおからだに巻かれていた布をほどいた。しかし、それをたたんでその場に置いたのは救い主のみ手であつた。星も原子もみちびかれるイエスの御目には、重要でないものは何もなかった。秩序と完全が主のすべてのみわざに見られた。

マリヤは、ヨハネとペテロについて墓へ行つた。ふたりがエルサレムへ帰つても、マリヤは残つた。からっぽ

の墓をのぞきこむと、悲しみが彼女の心を満たした。のぞきこんでいると、ふたりの天使が、ひとりはいエスの横たわっておられた場所のあたりのあたりに、もうひとり足あたりにいるのが見えた。彼らはマリヤに「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と彼女は答えた(ヨハネ二〇ノ一二)。

マリヤは、イエスのおからだがどうなったのか教えてくれる人を見つけなければならぬと考えて、天使たちからも離れた。するともう一つの声が彼女に「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」と話しかけた(ヨハネ二〇ノ一五)。涙にくもった目で、マリヤは人の姿を見たが、園の番人だと思って、「もしあなたが、あのかたを移したのでしたら、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」と言った(ヨハネ二〇ノ一五)。もし、この富める人の墓が、イエスにとってあまりにりっぱすぎる埋葬所と考えられるなら、わたしがイエスのために場所を提供しよう。キリストご自身の声によってからになった墓、すなわち、ラザロが横たわっていた墓があった。そこを主の埋葬所としたらどうだろう。十字架につけられた主のとうといおからだをお世話できるなら、悲しみのうちにある自分にとって大きな慰めになると彼女は思った。

しかしいまイエスは、そのなつかしいお声で、「マリヤよ」と、彼女に言われた。いまマリヤは自分に話しかけているのが見知らない人ではないことがわかり、ふり向いて、生きておられるキリストを目のあたりに見た。彼女は、よろこびのあまり、イエスが十字架につけられたことを忘れた。イエスの足をかきいだこうとするかのよう、マリヤはいエスにかけよって、「ラボニ」と言った。しかしイエスは手をあげて、わたしを引きとめて

はいけない、「わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行つて、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であつて、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上つて行く』と、彼らに伝えなさい」と言われた(ヨハネ二〇ノ一七)。そこでマリヤはそのよろこばしい知らせをもつて弟子たちのもとへ急いだ。

イエスは、ご自分の犠牲が天父によつて受け入れられたとの確証が与えられるまではご自分の民から尊敬を受けようとされなかった。イエスは天の宮廷へのほり、その血によつてすべての人が永遠の生命を得られるように、イエスが人類のために払われたあがないは充分であつたとの保証を神ご自身から聞かれた。天父はキリストとの間の契約、すなわち悔い改めて従う者たちを受け入れ、み子を愛されるように、彼らを愛されるという契約を批准された。キリストはそのみわざを完結して、「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする。(英訳・とうといものとする)」この誓いを果たされるのであつた(イザヤ書一三ノ一二)。天と地のいつさいの権力はいのちの君に与えられたので、イエスは、ご自分の権力と栄光をわけ与えるために、罪の世にある弟子たちのもとへお帰りになつた。

救い主が神のみ前にあつて、教会のための賜物を受けておられるときに、弟子たちは、イエスのからつぽの墓のことを思つて嘆き悲しんでいた。全天にとつてよろこびの日であつたその日は、弟子たちにとっては不安と混乱と困惑の日であつた。女たちの証言に対する彼らの不信は、彼らの信仰が衰えていたことの証拠である。キリスト復活の知らせは、彼らが予期していたこととちがっていたので、彼らはそれを信じることができなかった。



マリヤはよい知らせを聞いていなかったなので、園の中でイエスにお会いしたとき、名を呼ばれるまでイエスに気がつかなかった。それから彼女はひれふしてイエスをおがんだ。

話がうますぎてほんとうではあるまいと彼らは考えた。サドカイ人の教えや、彼らのいわゆる科学的理論をあまりに聞かされていたので、彼らが心に受けたよみがえりについての印象はほんやりしていた。死人の中からよみがえるということがどういふことかほとんどわかっていなかった。彼らはこの大きな問題を理解することができなかった。

天使たちは女たちに、「今から弟子たちとペテロとの所へ行つて、こゝう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであらう」と言った（マルコ一六ノ七）。この天使たちは、キリストの地上生涯のあいだ、ずっと守護天使としてキリストと共にいたのだった。彼らは、キリストの裁判と十字架の処刑を目撃したのだった。彼らは弟子たちへのキリストのことばを聞いたのだった。このことは、弟子たちに対する天使たちのことばからわかるのであつて、弟子たちはそのことを確信すべきだったのである。このようなことは、よみがえられた主の使者たちしか語ることのできないものだった。

「弟子たちとペテロとの所へ行つてこゝう伝えなさい」と天使たちは言った（マルコ一六ノ七）。キリストがなくなつてから、ペテロは後悔にうちひしがれていた。主をこぼんだ彼の恥ずべき行為と救い主の愛と苦悩のまなざしが、たえず彼につきまとつた。弟子たち全部の中で、彼が最もきびしい苦しみを味わつたのだった。その彼に、彼の悔い改めが受け入れられ、彼の罪がゆるされたという保証が与えられている。彼の名前が呼ばれているのである。

「弟子たちとペテロとの所へ行つて、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。…
 そこでお会いできるであろう、と」(マルコ一六ノ七)。弟子たちの全部がイエスを捨てたのに、ふたたびイエスに
 お会いするようにとの呼びかけに彼らの全部が含まれている。イエスは彼らをお捨てにならなかった。マグダ
 ラのマリヤが、主にお会いしたことを彼らに告げたとき、彼女はガリラヤで会うようにとの召しを伝えた。しかも
 この伝言は三度彼らに伝えられたのである。イエスは天父のもとにのぼられたあとで、ほかの女たちに現われて
 『平安あれ』と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。そのとき、イエスは彼らに言われ
 た、『恐れることはない。行つて兄弟たちに、ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい』
 (マタイ二八ノ九、一〇)。

キリストの復活後、地上における主の最初の働きは、弟子たちに対する変わらない愛とやさしい思いやりを彼ら
 に確信させることであつた。イエスは、ご自分が彼らの生ける救い主であるということ、墓の束縛をたちきられ
 たということ、もはや死という敵の手にとらわれないということについて、彼らに証拠を示すため、また彼らの
 愛する教師として共にあられたときと変わらない愛の心を持つておられることをあらわすために、何度も何度も
 彼らに現われたもつた。イエスは彼らを愛のきずなで、いっそう固くおすばうと望まれた。行つて兄弟たちに、
 ガリラヤでわたしに会うように告げなさいと、主は言われた。

このようなはっきりした約束を聞いたとき、弟子たちは、ご自分のよみがえりについて彼らに予告されたキリ
 ストのことばについて考え始めた。しかしそれでもなお彼らはよろこばなかつた。彼らは疑いと困惑を捨て去る

ことができなかった。女たちが主を見たと言ったときさえ、弟子たちは信じようとしなかった。彼らはそれを、女たちの幻影だと思った。

困難に困難が加わりつつあるように思えた。週の六日めに、彼らは主が死なれるのを見た。翌週の第一日に、彼らは主のおからだがなくなったことを知り、民衆をあざむくためにそれを盗み去ったのだという罪をきせられた。彼らを不利な立場におとし入れつつあるいつわりの印象をたえず打ち消すのに彼らは絶望した。彼らは祭司たちの敵意と民衆の怒りを恐れた。彼らは困ったときにはいつも助けてくださったイエスがいてくださったらと心から願った。

「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました」ということばを、彼らはしばしばくりかえした(ルカ二四ノ二一)。さびしい、悲観した気持ちで、彼らは、「もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」と言われたキリストのことばを思い出した(ルカ二三ノ三二)。彼らは二階の部屋に集まり、愛する師の運命がいつ自分たちの運命となるかも知れないことを思って、戸口を固く閉ざした。

ところがその間じゅう、ずっと彼らは、救い主がよみがえられたことを知ってよろこんでいられたはずである。園では、イエスがそば近くにあられたとき、マリヤは泣いていた。彼女の目は涙にくもっていたので、イエスがわからなかった。また、弟子たちの心は悲しみでいっぱいだったので、彼らは天使たちのことばも、キリストご自身のことも信じなかった。

いまでもこれらの弟子たちと同じことをしている者がどんなに多いことだろう。「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」というマリヤの絶望的な叫びをくりかえす者がどんなに多いことだろう(ヨハネ二〇ノ一二)。どんなに多くの人々に、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」という救い主のことばが語られることだろう(ヨハネ二〇ノ一五)。イエスは彼らのそば近くにおられるのに、彼らのくもった目にはイエスがわからないのである。イエスは彼らに話しかけられるが、彼らは理解しないのである。

ああ、うなだれた頭をあげ、目を開いてイエスを見、耳にイエスの声を聞くことができるように。「急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは…よみがえられた』」(マタイ二八ノ七)。大きな石でとざされ、ローマの封印をされたヨセフの新しい墓を見るなと彼らに告げなさい。キリストはそこにおられない。からっぽの墓を見るな。望みなく、助けなき者のように嘆くな。イエスは生きておられ、彼が生きておられるがゆえにわれわれも生きるのである。感謝の心で、聖なる火にふれたくちびるで、キリストはよみがえられたとよるこばしい歌をひびかせなさい。主は生きてわれらのとりなしをしてくださる。この望みをとらえなさい。そうすれば、それはたしかに、あてになる錨(いかり)のようにわれらの魂をつなぎとめるであろう。信じなさい、そうすればあなたは神の栄光を見るであろう。

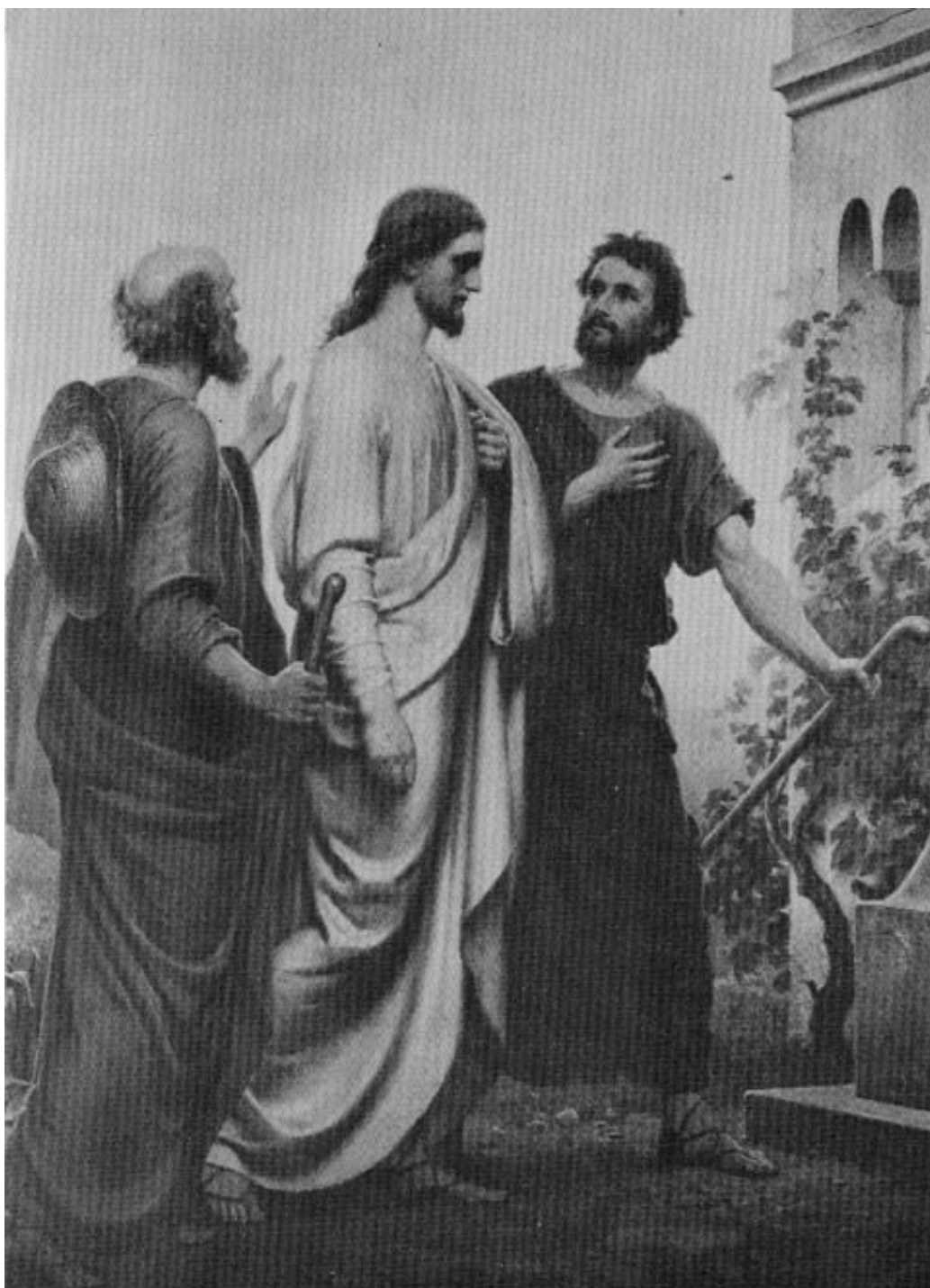
第 83 章

エマオへの道

本章はルカ二四ノ一三―三三にもとづく

主が復活された日の午後遅く、ふたりの弟子たちが、エルサレムから八マイルはなれたエマオという小さな町へ向かっていた。この弟子たちは、キリストの働きに目だった立場を占めたことはなかったが、キリストの熱心な信者であった。彼らは過越節を守るために都へきたのであったが、最近起こったできごとにひどく困惑していた。彼らは、キリストのおからだ墓からはこび去られたというその朝の知らせを聞き、また天使たちを見、イエスに会った女たちの報告も聞いていた。いま彼らは、瞑想と祈りのために家へ帰るところだった。彼らは裁判と十字架の処刑の場面について語り合いながら、悲しい気持ちで夕暮れの道をたどっていた。こんなにまったく落胆したことはなかった。望みもなく信仰もなく、彼らは十字架の影の中を歩いていた。

道をまだあまり遠くまで進まないうちに、ひとりの見知らぬ人がいっしょになった。しかし彼らは憂うつと失望に心を奪われていたので、その人をはっきり観察しなかった。彼らは心の中の思いをうちあけながら、話をつづけていた。彼らは、キリストがお与えになった教訓について議論していたが、それは理解できないように思え



エマオの村への途中、イエスは悲しんでいる弟子たちに、旧約聖書のメシヤについての多くの預言について語り、それらの預言がすべてイエスの一生と死によって成就されたことを示された。

るのだった。彼らが、起こったできごとについて話していると、イエスは彼らを慰めたいと熱望された。イエスは、彼らの悲しみをぐらんになっていた。あんな屈辱を受けたこの人が果たしてキリストだろうかという思いを彼らの心に起こさせる矛盾と困惑に満ちた考え方を、イエスは理解された。彼らは悲しみをおさえることができないで、泣いた。イエスは、彼らの心が愛によって主につながっていることをお知りになり、彼らの涙をふいて、よろこびに満たされるようにしたいと望まれた。しかし主は、まず第一に、決して忘れることのできない教訓を彼らにお与えにならねばならない。

「イエスは彼らに言われた、『歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか』。彼らは悲しそつな顔をして立ちどまった。そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、『あなたはエルサレムに泊まっているが、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか』(ルカ二四ノ一七、一八)。彼らは、主について自分たちの失望をイエスに語った。「あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです」と彼は言った(ルカ二四ノ一九、二〇)。失望に痛む心と、ふるえる唇で、彼らはつけ加えて言った、「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです」(ルカ二四ノ二一)。

ふしぎなことに、この弟子たちは、キリストのことを思い出して、キリストが予告された通りのことが起こったのだということに気がつかなかった。彼らは、キリストがうちあけられた話のあとの部分、すなわち三日目

にキリストがよみがえられるということが、はじめの部分と同じように成就するということに気がつかなかった。これは彼らがおぼえていなければならなかった部分であった。祭司たちと役人たちはこのことを忘れていなかった。「あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、『長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、「三日の後に自分はよみがえる」と言ったのを、思い出しました』（マタイ二七ノ六二、六三）。しかしこの弟子たちは、そうしたことをおぼえていなかった。

「そこでイエスが言われた、『ああ、愚かで心のにぶいたため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか』（ルカ二四ノ二五、二六）。ふたりは、自分たちの心の奥底を見通して、このように熱心に、やさしく、しかも同情と望みにあふれた話し方をするとは、いったいこの見知らぬ人はだれだろうとあやしんだ。キリストが売り渡されて以来、初めて彼らは心に望みがわいてきた。たびたび彼らは道連れの人を熱心にみつめて、そのことばをキリストがお語りになりそうなことばだと思った。彼らは驚きに満たされ、その心臓はよろこばしい期待に脈うち始めた。

キリストは、聖書の歴史のアルファであるモーセの書から始めて、聖書全体を通じて、ご自身に関する事柄を解説された。もしキリストが最初にご自分を彼らにお知らせになったら、彼らの心は満足してしまっただろう。よろこびのあまり、彼らはもう何も求めなかったであろう。彼らは、旧約の型と預言を通して、キリストについてたてられているあかしを理解する必要があった。これらのものの上に彼らの信仰が築かれなければならない。キリストは、彼らをさとらせるのに奇跡を行なわず、聖書を説明することがその最初の働きであった。彼らは、キ

リストの死を彼らのすべての望みの消滅とみなしていた。ところがイエスは、ご自分の死こそ、彼らの信仰の最も強力な証拠であることを預言者の書からお示しになった。

この弟子たちを教えるにあたって、イエスは、ご自分の使命の証拠として旧約聖書的重要性を示された。クリスチャンと称する人々の多くは、旧約聖書はもう役に立たないと主張して、いまでは旧約聖書を捨てている。しかし、リストはそういうことを教えておられない。リストは旧約聖書を非常に尊重されて、ある時こう言われたことがある。「もし彼らがモーセと預言者にとりて耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」(ルカ一六ノ三二)。

アダムの時代から世の終わりにいたるまで、父祖たちと預言者たちを通して語られるのは、リストのみ声である。救い主は、新約聖書と同じようにはっきり旧約聖書の中にあらわされている。リストの生涯と新約聖書の教えをはっきりと美しく浮き出させるのは、預言時代から出ている光である。リストの奇跡は、その神性の証拠である。しかし、イエスが世のあがない主であるというもっと強力な証拠は、旧約の預言を新約の歴史に照らしあわせることの中に見いだされる。

預言から論じて、リストは弟子たちにご自分が人としてどういうおかたであるべきかについて正しい概念をお与えになった。人々の希望通りに王位と王権をとられるメシヤを、彼らが期待していたことから誤解が生じていた。それは、最高の地位から最低の地位までリストがあくだりになったことについての正しい見解と矛盾するのであった。リストは、弟子たちの考え方がこまかい点にいたるまで純粹であり、また真実であるように望

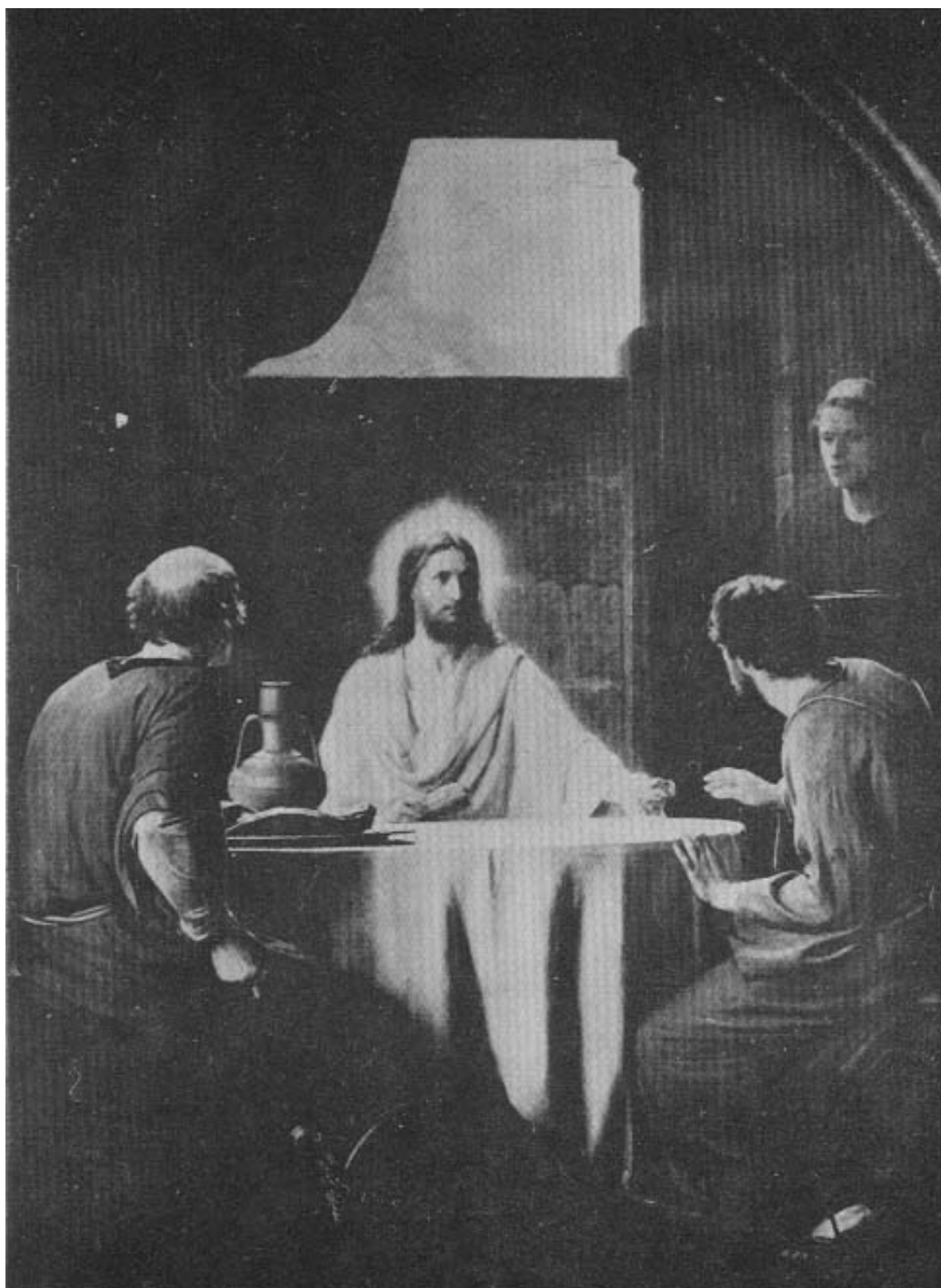
まれた。彼らは、キリストに割りあてられた苦難のさかずきについて、できるだけ深く理解しなければならない。彼らがまだ理解できない恐るべき戦いは、世の基がおかれる前からたてられた契約の成就であることをキリストは示された。律法を犯す者は、だれでも罪をつづけるかぎり死なねばならないように、キリストは死なねばならない。このことはすべて起こらねばないのであるが、それは、敗北のうちに終わるのではなくて、栄光と永遠の勝利のうちに終わるのであった。世を罪から救うために、あらゆる努力をつくさねばならないと、イエスは彼らに語られた。イエスに従う者たちは、熱心な辛抱強い努力をもって、イエスが生活されたように生活し、イエスが働かれたように働かねばならない。

このように、キリストは弟子たちに説き聞かせて、彼らが聖書を理解するようにその心を開かれた。弟子たちは疲れていたが、話はおとろえなかった。いのちと保証の言葉が救い主の口から語られた。しかし、それでも彼らの目はふさがれていた。イエスがエルサレムの滅亡のことを話されると、彼らは滅ぶべき都を泣きながらながめた。しかし、彼らはまだ旅の道連れがだれであるかをあやしなかった。キリストは、ご自分のことを別人のように言ってあられたので、彼らは話題のぬしであるおかたが自分たちのそばを歩いておられるとは思わなかった。彼らは、この人は大祭に出かけていま家へ帰る途中の人だと思った。イエスは、彼らと同じように、ごつごつした石の上を注意深く歩き、時々いっしょに立ちどまってはしばらく休息された。こうして彼らは山道を進んで行ったが、まもなく神の右に座を占めて、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」と言うことのできるおかたが彼らのそばを歩いておられるのであった（マタイ二八ノ一八）。

道を歩いている間に、太陽は沈み、旅人たちがいいこの場所に到着する前に、畑に働いている人たちは仕事をやめていた。弟子たちが家にはいるうとすると、その見知らぬ人は旅を続けるようにみえた。しかし、弟子たちは彼に心をひかれていた。彼らの魂は、この人からもっと多くのことを聞きたいとあこがれた。そこで彼らは、「わたしたちと一緒に泊まり下さい」と言った(ルカ二四ノ二九)。彼は、その招待を受けそうにみえなかった。で、彼らはしいて引きとめ、「もう夕暮になっており、日もはや傾いています」とすすめた。キリストは、その願いをきき入れて、「彼らと共に泊まるために、家にはいられた」(ルカ二四ノ二九)。

もし、弟子たちがしいて招待しなかったら、彼らは、旅の道連れがよみがえられた主であることを知らなかったであろう。キリストはだれにも交際を強制されない。彼は、ご自分が必要とする者と交際される。彼はどんな貧しい家にもよろこんではいりになり、どんないやしい心も励まされる。しかし、もし人が無関心で、天の客のことを考えなかったり、いっしょにいていただきたいと願ったりしなければ、イエスは通り過ぎておしまいになる。こうして、多くの者が大きな損失をこうむるのである。キリストが、途中いっしょに歩いておられたのに、弟子たちがイエスに気がつかなかったように、彼らもまた、キリストに気がつかないのである。

簡単な夕食のパンがすぐに用意される。それは、食卓の正面に席をとったお客の前におかれる。すると彼は、食物を祝福するために手をさし出される。弟子たちは驚きのあまり、あとずさりする。道連れの人は、主がいっしょにされていたのと同じように手をさし出している。もう一度よく見ると、見よ、その手には釘のあとが見える。ふたりは同時に、主イエスだ、死からよみがえられたのだと叫ぶ。



お客として招かれた質素な夕食の席で、イエスは、食物を祝福するために手をさし出された。その時弟子たちはこのお客が愛する主であることに気がついた。

彼らは立ち上がって主の足下にひれふし、主を拝する。しかし、主のお姿は目の前から消えてしまった。彼らは、最近までおからだを墓に横たえておられたおかたが席を占めておられたあたりを見て、互いに言う、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」(ルカ二四ノ三二)。

しかし、彼らはこのすばらしい知らせを伝えなくてはならないと思うと、すわって語っていることができない。彼らの疲れと空腹はどこかへいつてしまった。彼らは、食事に手もつけないで、よろこびのあまり、すぐにもう一度さつきやってきた道を出かけ、都の弟子たちにこの知らせを伝えるために急ぐ。道は安全でないところもあったが、彼らは、つるつるする岩にすべりながら、けわしい場所を越えて行く。彼らは、自分たちといっしょに道を歩かれたおかたの保護があることを見もしなければ、知りもしない。旅のつえを手にして、彼らはもっと早くもっと早くお願いながら道を急ぐ。彼らは道を見失ってはまた発見する。時には走りながら、時にはつまずきながら、彼らは目に見えない道連れイエスに途中ずっとそば近くにつきそわれながら、前進する。

夜は暗いが、義の太陽が彼らを照らしている。彼らの心はよろこびにおどる。彼らは新しい世界にいるような気がする。キリストは生きておられる救い主である。彼らは、もはやキリストが死んでおられるといって嘆かない。キリストはよみがえられたのだと、彼らは何度も何度もくりかえす。この知らせを、彼らは悲しんでいる者たちに伝えるのだ。彼らは、エマオへの道中のふしぎな話を弟子たちに語らねばならない。彼らは、途中でだれといっしょになったかを語らねばならない。彼らは、世に与えられた最高のメッセージ、今も永遠までも、人類家族の望みがかかっているうれしいおとずれをたずさえているのだ。

「安かれ」

本章はルカ二四ノ三三―四八、ヨハネ二〇ノ一九―二九にもとづく

エルサレムに着くと、ふたりの弟子は東門からはいって行く。この門は、祭りの時には夜も開いているのである。家々は暗くひっそりしているが、ふたりの旅人はのぼる月の光をたよりに狭い通りを進んで行く。彼らは、イエスがなくなれる前の最後の一晚を過ごされた二階の広間に行く。ここに兄弟たちがいることを彼らは知っているのである。時刻は遅かったが、彼らは、主のおからだがどうなったかはっきりわかるまでは弟子たちが寝ないことを知っている。へやのとびらは、固くとざされている。案内を求めて戸をたたくが、応答はない。すべてが静まりかえっている。そこで彼らは名前を名のる。とびらが注意深く開かれ、彼らはいって行く。そのとき目に見えないもうひとりのおかたが彼らといっしょにおはいりになる。するととびらはふたたび固くとざされて、スパイを防ぐ。

旅人たちは、みんなが驚いて興奮しているのに気がつく。へやの中の人々がいつせいに感謝と賛美の声をあげて、「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなされた」と言う(ルカ二四ノ三四)。するとふたりの旅人

は、道を急いだためにあえぎながら、イエスが自分たちに現われたもうたふしぎな話を語る。彼らがちょうど語り終わり、ある者たちが事実にしてはうますぎるから信じられないと言っていると、見よ、もうひとりのおかたが彼らの前に立たれる。どの目もその見知らないおかたにくぎづけにされる。案内を求めて戸口をたたいた者はなかった。足音もきこえなかった。弟子たちはびっくりして、何事かとあやしむ。そのとき、彼らはほかならぬ主の声を聞く。「安かれ」ということばが、はつきりと明らかに主の口から語られる。

「彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。そこでイエスが言われた、『なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ』。(こう言って、手と足とお見せになった)」(ルカ二四ノ三七―四〇)。

彼らは、残酷な釘で傷つけられたその手と足を見た。彼らは、かつて聞いた声にはかならない主の声をみとめた。「彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが『ここに何か食物があるか』と言われた。彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた」。「弟子たちは主を見て喜んだ」(ルカ二四ノ四一、四二、ヨハネ二〇ノ二〇)。信仰とよろこびが不信にとって代わり、ことばでは言いあらわしようのない思いをもって、彼らはよみがえられた救い主をみとめた。

イエスの誕生の時、天使が「地の上では、み心になう人々に平和があるように」と布告した(ルカ二ノ一四)。そしていま、救い主はよみがえられてからはじめて弟子たちに現われたもうたとき、「安かれ」という祝福のこ

とばで彼らに話しかけられた。イエスは、疑いと恐れに悩んでいる魂にいつでも平安を語られる。主は、われわれが心の戸を開いて、「わたしたちと一緒に泊まり下さい」と言うのを待っておられる(ルカ二四ノ二九)。主は言われる、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはそこにはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」(黙示録三ノ二〇)。

イエスのよみがえりは、主にあって眠るすべての人の最後のよみがえりの型であった。よみがえられた救い主の顔つき、態度、ことはみな弟子たちのよく知っているものであった。イエスが死人の中からよみがえられたように、イエスにあって眠る者はふたたびよみがえるのである。弟子たちがイエスを知っていたように、われわれは友人たちがわかるのである。彼らは、この世では不具だったり、病気だったり、みにくかったりしたかもしれないが、完全な健康と均整のとれた肉体をもってよみがえる。しかし、その栄化されたからだにあっても、彼らの正体は完全に保存される。「その時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(コリント第一・一三ノ一二)。われわれはイエスのお顔から輝き出る光によって輝く、愛する者たちの顔かたちをみとめるのである。

イエスは弟子たちにお会いになった時、なくなられる前に語られたことは、すなわち、「モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いて書いてあることは、必ずことごとく成就する」と言われたことばを彼らに思い出させられた(ルカ二四ノ四四)。「そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて言われた、『こつ、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆ

るしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である」(ルカ二四ノ四五―四八)。

弟子たちは、自分たちの働きの性質と範囲を理解しはじめた。彼らは、キリストが彼らにゆだねられたすばらしい真理を世にのべ伝えるのであった。キリストの一生のできごと、キリストの死とよみがえり、それらのできごとをさし示している預言、神の律法の神聖さ、救いの計画の奥義、罪のゆるしのためのイエスの力——こうしたすべてのことについて、彼らは証人であって、それらを世に知らせるのであった。彼らは、悔い改めと救い主の力を通して与えられる平安と救いの福音をのべ伝えるのであった。

「そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ。あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され、あなたがたが許さずにおく罪は、そのまま残るであろう』」(ヨハネ二〇ノ二三)。聖霊は、まだ十分にあらわされていなかった。キリストがまだ栄光をお受けになっていなかったからである。もっと豊かな聖霊の降下は、キリストの昇天後まで起こらなかった。聖霊を受けるまでは、弟子たちは世に福音をのべ伝える任務を果たすことができないのであった。しかし、いま特別な目的のために聖霊が与えられた。弟子たちが教会に関連した正式の義務を果たすことができる前に、キリストはご自分の霊を彼らに吹きかけられた。キリストは、非常に神聖な責任を彼らに委託しようとしておられたので、聖霊なしにはこの働きは達成されないということを彼らに印象づけようと望まれた。

聖霊は、魂の中の霊的生命の呼吸である。みたまを与えることはキリストのいのちを与えることである。それ

は、受ける者にキリストの属性を吹き込む。このように神から教えられる人たち、心のうちにみたまの働いている人たち、その生活にキリストのような生活をあらわす人たちだけが、教会を代表する者として立ち、教会に代わってその任務を行なうのである。

「あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され、あなたがたが許さずにおく罪は、そのまま残るであろう」とキリストは言われた(ヨハネ二〇・ノ一二)。キリストはここで、他人をさばく自由をお与えになっているのではない。山上の垂訓で、イエスはこのことを禁じられた。それは神の大権である。しかし、組織された教会に、キリストは、教会員個人に対する責任を負わせておられる。罪におちいる人たちに対して、教会は警告し、教え、できるなら回復する義務がある。「あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい」と主は言われる(テモテ第二・四ノ二)。まちがった行為に対して正しい態度をとりなさい。危険のうちにあるひとりびとりの魂に警告なさい。自分をごまかしているのをそのままにしておいてはならない。罪を罪と呼びなさい。うそをつくこと、安息日を破ること、盗むこと、偶像をおがむこと、そのほかあらゆる悪について神が言っておられることを告げなさい。「このようなことを行つ者は、神の国をつぐことがない」(ガラテヤ五ノ一二)。もし彼らがあくまで罪を離れないならば、あなたがたが神のみことばによって宣告したさばきは、天で彼らの上にくだるのである。罪を犯すことをえらぶことによって、彼らはキリストを否認するのである。教会は、彼らの行為を承認しないということを示さねばならない。さもなければ、教会自身が主をはずかしめることになる。教会は、神が罪について言っておられることを言わねばならない。教会は、神が指示しておられるとおり罪を処理しなければならない。

そうするとき教会の行動は天で批准される。教会の権威をあなどる者はキリストご自身の権威をあなどるのである。

しかし、この問題には明るい一面がある。「あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され」る(ヨハネ二〇ノ二三)。この考え方を第一にしよう。まちがいを犯している人々のために働くときに、どの目もキリストに向けさせよう。牧者は、主の牧場の群れにやさしい心づかいを持とう。まちがいを犯している人たちに救い主のゆるしとあわれみについて語ろう。罪人が悔い改めるように、そしてゆるすことがおできになるキリストを信ずるように励まそう。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」ということを、神のみことばの権威にもとづいて宣言しよう(ヨハネ第一・一ノ九)。神は、「再びわれわれをあわれみ、われわれの不義を足で踏みつけられる。あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ」られるとの保証が、悔い改める者にはだれにでも与えられている(ミカ書七ノ一九)。

教会は、罪人の悔い改めを感謝の心をもって受け入れよう。悔い改める者を不信の暗黒からみちびき出して、信仰と義の光へ入れよう。彼のふるえる手をイエスの愛に置こう。このようなゆるしは天において批准される。

この意味においてのみ、教会は罪人をゆるす権威がある。罪のゆるしはキリストの功績によってのみ得られる。だれにも、また人間のどんな団体にも、魂を不義からゆるす権威は与えられていない。キリストは、弟子たちに、万国へ行ってキリストの名により罪のゆるしを説くようにお命じになった。しかし、彼ら自身にはひとつの罪の

けがれさえとり除く力は与えられていなかった。イエスの名だけが、「わたしたちを救いうる名」で、「これを別にしては、天下のだれにも与えられていない」のである(使徒行伝四ノ一二)。

イエスが初めて弟子たちに二階の広間で会われたとき、トマスはいっしょにいなかった。トマスはほかの人たちのうわさを聞き、イエスがよみがえられたという十分な証拠を示されたが、憂うつと不信が彼の心を満たしていた。弟子たちがよみがえられた救い主のふしぎな出現について語るのを聞くと、彼はますます深い絶望に沈んだ。もしイエスが実際に死人の中からよみがえられたとしても、字義通りの地上の王国についてもう望みはあり得ないのだった。また、主が自分を除いてほかのすべての弟子たちにあらわれたもうたと考えることは、彼の虚栄心を傷つけた。彼は信じないことを決心した。そして、一週の間じゅう自分のみじめさを思いつづけた。それは、兄弟たちの望みと信仰とは対照的にいつそう暗くみえた。

その間彼は、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」とくりかえし断言した(ヨハネ二〇ノ二五)。彼は、兄弟たちの目で見ようとも、彼らのあかしにもとづいた信仰を働かせようとしなかった。彼は熱烈に主を愛していたが、彼の心と思いはねたみと不信に占領されていた。

幾人かの弟子たちは、いまあのなつかしい二階の広間を一時の住居とし、夜になるとトマス以外の全部がそこに集まった。ある晩、トマスはほかの弟子たちに会おうと決心した。彼は、信じていないにもかかわらず、あのよい知らせがほんとうであるようにというかすかな望みをいだいていた。弟子たちは夕食をしながら、キリスト

が預言を通して彼らにお与えになった証拠について語った。「戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って『安かれ』と言われた」(ヨハネ二〇ノ二六)。

イエスはトマスをふりかえって、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と言われた(ヨハネ二〇ノ二七)。このことは、イエスがトマスの思いとことばを知っておられる証拠であつた。この疑い深い弟子は、仲間のだれも一週間イエスに会っていないことを知っていた。彼らが自分の不信を主に告げたはずがない。彼は、目の前のおかたが主であることに気づいた。彼はそれ以上の証拠を望まなかつた。彼の心はよろこびでおどつた。彼はイエスの足下に身を投げて、「わが主よ、わが神よ」と叫んだ(ヨハネ二〇ノ二八)。

イエスは、彼が主を認めたことを受け入れられたが、やさしく彼の不信を譴責された。「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」(ヨハネ二〇ノ二九)。もしトマスが兄弟たちのあかしを聞いて信ずる気持ちがあつたら、彼の信仰はもっとキリストによるこばれたのであつた。もし世の人々が、いまトマスの例に従うなら、信じて救いにいたる人はいないだろう。キリストを受け入れる者はみな、ほかの人のあかしによらねばならないからである。

疑いにおちいつている多くの人は、もし、トマスが仲間から与えられたような証拠を自分たちにも与えられるなら、自分たちは信ずるのだと言いわけをする。彼らは、その証拠が与えられているだけでなく、もっと多くが与えられていることをみとめない。トマスのように、疑いの原因が全部のぞかれるのを待っている人々の多く



疑い深いトマスは、キリストの手に釘の跡を見、わき腹の傷にさわった。信仰にめざめた彼は、よろこびにあふれてひざまずき、「わが主よ、わが神よ」と叫んだ。

は、その願いが決して実現されないであろう。彼らの不信はだんだん固まってしまうのである。暗い面を見たり、つぶやいたり、不平を言ったりするように自分自身を教育する人たちは、自分のやっていることがわからないのである。彼らは、疑いの種をまいているのであって、疑いの収穫をかりとることになる。こうして多くの人たちは、信仰と確信が最も必要な時に、望むことも信じることができない無力な自分に気がつくのである。

トマスのとり扱いにおいて、イエスは弟子たちに一つの教訓をお与えになった。イエスの模範は、信仰が弱くて、疑いをはっきり示す人々をどのように扱わねばならないかを教えている。イエスはトマスをしっかりとつて、おさえつけてしまったり、彼と議論したりなどなさらなかった。イエスは疑う者にこそ自身をお示しになった。トマスは、不当にも自分の信仰の条件を規定したが、イエスは、その寛大な愛と思いやりによって、すべての障壁を打破された。不信は、議論によってはめつたに征服されない。それはむしろ、自己を固く守り、新しいささと口実を見いだす。しかしイエスが、十字架につけられた救い主として、その愛とあわれみのうちにあらわされるとき、かつては固かった多くの口から、「わが主よ、わが神よ」とのトマスの告白が聞かれるであろう。

もう一度海辺で

本章はヨハネ二ノ一二にもとづく

イエスは弟子たちにガリラヤで会う約束をされた。そこで過越の週が終わるとすぐ、彼らはそこへ足を向けた。もし祭の間エルサレムにいなかったら、彼らは不誠意や異端として解釈されたであろう。そこで彼らは祭が終わるまで残っていた。しかし祭が終わると、彼らは救い主に会うために指示されたとおりによるこんで故郷へ向かった。

七人の弟子たちがいっしょだった。彼らはいやしい漁夫の身なりをしていた。彼らは世俗的な財産にはとぼしかったが、真理を知り、これを実行することに富んでいた。そのために彼らは、天の神の目には、教師として最高であった。彼らは預言者の学校の生徒だったことはなかったが、世に知られるかぎり最高の教育者によって三年間教えられていた。キリストの教えによって、彼らは高められ、賢明になり、洗練されて、人々を真理の知識にみちびくうつわとなっていた。

キリストは、公生涯の時間の多くをガリラヤの海辺ですごされた。弟子たちが人々から邪魔されないような場

所に集まると、彼らは、イエスとその偉大なみわざを思い出させるものにかまれていることに気がついた。この海の上で、彼らの心が恐怖に満たされ、激しい嵐が彼らを破滅に追いやろうとした時、イエスが波の上を歩いて彼らの救助にこられたのだった。ここで嵐がイエスのみことばによって静められたのだった。すこしの小さなパンと魚で一万人以上の人々が養われた海辺は目のとどくところにあつた。多くの奇跡の舞台となつた力ペナムは遠くになつた。あたりの風景をながめていると、弟子たちの心は救い主のことばと行為でいっぱいになつた。気持ちのよい夜だった。するとペテロは、舟で魚とりに出ていくことにまだ以前の愛着を多分に持っていて、海へ出て行って網をうとうと提案した。この計画に彼らはすぐに加わつた。彼らは食物と衣類が必要だった。うまくいけば一晩の魚獲によってこの必要が満たされるのであつた。そこで彼らは舟にのつて出かけたが、何もとれなかつた。一晩中働いたが効果はなかつた。退屈な時間の間じゅう、彼らはそこにおられない主のことを語り合い、海辺でのイエスの伝道で目に見たふしぎなできごとを思い起こした。彼らは自分たちの将来についてたずね合い、前途を悲観する気持ちが高まつた。

その間じゅうずっと、イエスは、ただひとり岸辺で彼らのあとを目であつておられたが、その姿は彼らの目に見えなかつた。ついに夜が明けた。舟は岸からすこししか離れていなかったので、弟子たちは見知らない人が波打ち際に立っているのをみとめた。するとその人は近づいてきて、「子たちよ、何か食べるものがあるか」と言つた。「彼らは『ありません』と答えた。すると、イエスは彼らに言われた、『舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう』。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることがで



イエスは、浜辺のたき火のまわりで弟子たちとまるくなつてすわつておられるとき、ペテロの忠誠を三度試みられた。イエスはペテロに、羊と子羊とを養いなさいと言われた。

きなかつた」(ヨハネ二一ノ五、六)。

ヨハネは、その見知らない人がだれであるかわかつて、ペテロに「あれは主だ」と叫んだ。ペテロはすっかりよこんで元氣になり、じっとしていらなくなつて、水の中にとびこんで行き、すぐに主のそばに立つた。ほかの弟子たちは、魚のはいった網をひきながら、舟にのつたままやつてきた。「彼らが陸に上つて見ると、炭火があおしてあつて、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあつた」(ヨハネ二一ノ九)。

彼らはあまり驚いたので、その火と食物をどこから持つてこられたのかたずねなかつた。「イエスは彼らに言われた、『今とつた魚を少し持つてきなさい』」(ヨハネ二一ノ一〇)。ペテロはさっき手離した網のところへ走つて行つて、兄弟たちがそれを岸へ引きあげるのを手伝つた。働きが終わ

り、用意ができると、イエスは弟子たちに食事に来るように命じられた。イエスは食物をさき、それを彼らにわけられたが、七人の者たちはみなそれがイエスであることを知って認めた。山の上で五千人を養われた奇跡がいま彼らの、心によみがえってきた。しかしふしぎなおそれに満たされて、彼らは、黙ったまま救い主をみつめた。

イエスがわたしに従ってきなさいと彼らに言われた時の海辺の光景がまざまざと思い出された。彼らは、イエスの命令で、深いところへこぎ出して、網をおろしたら、網が破けそうになるほど網にいっぱいたくさんの魚がとれたことを思い出した。その時イエスは、魚とりの舟を捨てるようにと言われ、彼らに人をすなどる者としようと約束されたのだった。イエスがふたたび奇跡を行なわれたのは、その時の場面を思い出させ、その印象を深いものとするためだった。イエスの行為は、弟子たちの任命の更新であつた。それは、主が死なれても、彼らがイエスから指定された働きをなす義務は軽減されていないことを示した。主との直接のまじわりはなくなり、また以前の職業による生計の道はなくなるのであつたが、よみがえられた救い主はなお彼らのことを心にかけてくださるのであつた。そして彼らが主の働きをしているかぎり、主は彼らの必要に備えてくださるのであつた。またイエスが彼らに網を舟の右側におろすように命じられたことには目的があつた。右側には、イエスが岸に立つてあられた。それは信仰の側であつた。もし彼らがイエスとつながって働くなら、すなわちイエスの神としての力が彼らの人間的努力と結合するとき、彼らはかならず成功するのであつた。

キリストはもう一つの教訓をお与えにならねばならなかったが、それは特にペテロに関してであつた。ペテロが主をこばんだことは、彼が以前に告白した忠誠心と恥ずかしい対照をなしていた。彼は主を恥ずかしめ、兄弟

たちの不信を招いた。彼らはペテロが彼らの間で以前のような立場を占めることはゆるされないと考え、また彼自身も信頼を裏切ったものと思っていた。使徒としての働きにふたたび召される前に、彼は、兄弟たち全部の前で悔い改めの証拠を示さねばならない。そうしなければ悔い改めたとはいっても、彼の罪は、キリストの牧師としての彼の感化力を失わせたかもしれない。救い主は、ペテロが兄弟たちの信頼をとりもどし、彼が福音の上に招いた非難をできるだけとりのぞく機会を彼にお与えになった。

ここに、キリストに従うすべての者に対する教訓がある。福音は悪と妥協しない。それは罪をみのがすことができない。ひそかな罪はひそかに神に告白すべきである。しかし公然の罪には公然の告白が必要である。弟子たちの罪に対する非難はキリストにあびせられる。それはサタンを勝利させ、動揺する魂をつまずかせる。悔い改めの証拠を示すことによって、この弟子は、力のおよぶかぎり、この非難をとりのぞくのである。

キリストが海辺で弟子たちといっしょに食事をしてあられるとき、救い主は、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」とペテロに言われた(ヨハネ二一ノ一五)。この人たちとは兄弟たちのことである。ペテロはかつて、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と断言したことがあった(マタイ二六ノ三三)。しかしこんどは、彼はもっと真実に自分自身を評価していた。ペテロは、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」と言った(ヨハネ二一ノ一五)。わたしの愛は兄弟たちの愛よりも大きいのですという誇大な保証はない。彼は自分の献身について自分自身意見を表明しない。心のすべての動機を読まれるおかたに、彼は、「わたしがあなたを愛することは、

あなたがご存じです」と言って、彼の真心について判断してくださいるようにお願いする。するとイエスは、「わたしの小羊を養いなさい」と命じられる(ヨハネ二一ノ一五)。

ふたたびイエスは、ペテロに質問して、前のことをくりかえされる、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」(ヨハネ二一ノ一六)。こんどはイエスは、ペテロが兄弟たちよりもイエスを愛するかどうかをおたずねにならなかった。二度めの答えも初めと同じに、誇張した保証はなく、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」であった。イエスは「わたしの羊を飼いなさい」と彼に言われた(ヨハネ二一ノ一六)。もう一度イエスは、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」と試みの質問をされた。ペテロは悲しんだ。彼はイエスが自分の愛を疑ってられると思った。主が自分を信頼されない理由があることを知っていたので、彼は、心をいためて、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」と答えた。するともう一度イエスは、「わたしの羊を養いなさい」と言われた(ヨハネ二一ノ一七)。

三度ペテロは公然と主を知らないと言った。そこでイエスは三度ペテロから愛と忠誠心の保証を引き出し、その鋭い質問を、ちようどさかとげのある矢のように、彼の傷ついた心につきつけられた。弟子たちの集まっている前で、イエスは、ペテロの悔い改めの深さを明らかにし、かつては威張っていた弟子がどんなに徹底的にへりくだった者になったかを告示になった。

ペテロは、生まれつき出しゃばりで衝動的だったので、サタンは彼を倒すためにそうした特性につけこんだ。

ペテロがつまづく直前に、イエスは、「サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と彼に言われたのであった（ルカ二二ノ三一、三二）。その時がいまきていた。そしてペテロの生まれ変わりは明らかだった。主が、綿密な、試みの質問をされても、出すぎた、自己満足の答えは一つも出てこなかった。そしてそのけんそんと悔い改めのゆえに、ペテロは、群れの牧者として行動する前に、これまでになかったほどよい準備ができた。

ペテロを伝道に復帰させるとすぐにキリストが彼にまかされた最初の働きは、小羊を飼うことであつた。これはペテロにとってほとんど経験のない働きだった。それには非常な注意とやさしさ、また非常な忍耐と辛抱が必要だった。それは、信仰の若い人たちに奉仕し、無知な人たちに教え、彼らの前に聖書を開き、彼らをキリストの奉仕に役立つように教育する働きであつた。これまでペテロはそのような働きをするのにふさわしくなかったし、またその重要さを理解してもいなかった。しかしこれこそイエスがいまペテロを召された働きだった。この働きのために、彼自身の苦難と悔い改めの経験が準備となっていた。

ペテロはつまづく前には、いつも瞬間的な衝動から不用意にしゃべっていた。彼は自分自身について、あるいは自分が言わねばならないことについてはつきりした自覚をもたないうちに、いつもすぐ人を矯正したり、自分の思っていることを口に出したりした。しかし悔い改めたペテロはまったくかわった。彼の以前の激しさは残っていたが、キリストの恵みがその熱心さを調節した。彼はもう激越でもなければ、自己を過信することも威張る

こともなく、冷静で、落ち着いていて、教えを受け入れた。その時彼はキリストの羊の群ればかりでなく小羊も飼うことができた。

ペテロに対するキリストの態度は本人にとっても、兄弟たちにとっても教訓となった。それは、罪を犯した者に忍耐と同情とゆるしの愛をもって対するようになるということを彼らに教えた。ペテロは主を知らないと言ったけれども、彼をがまんされたイエスの愛は決してゆるがなかった。キリストの牧者は、自分の手に世話をまかされた羊と小羊にこれとちょうど同じ愛を感じなければならない。ペテロは、自分自身の弱さと失敗を忘れないで、キリストが彼を扱われたようにやさしく羊の群れを扱うのであった。

キリストがペテロにされた質問には深い意味があった。キリストは、弟子であることと奉仕とについてたった一つの条件を述べられた。「わたしを愛するか」と、主は言われた。これが必要欠くことのできない資格である。ペテロがほかのあらゆる資格をそなえていても、キリストの愛がなければ、彼は主の羊の群れを飼う忠実な牧者となることはできない。知識、慈悲心、雄弁、感謝、熱意はすべてよい働きの助けとなる。しかしイエスの愛が心のうちになれば、キリスト教の牧師の働きは失敗である。

イエスは、ペテロにだけ知らせておきたいと望まれたことがあったので、ペテロとふたりだけで歩かれた。イエスは死なれる前、ペテロに、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになるう」と言われた。するとペテロは、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」と言った(ヨハネ一三ノ三六、三七)。こう言っ

たとき、彼は、キリストの足がどんなに高いところ、どんなに深いところへ進んで行かれるのかすこしも知っていなかった。ペテロは試練がやってきたとき失敗したが、ふたたびキリストに対する彼の愛を証明する機会を与えられることになった。ペテロが最後の信仰の試練のために力づけられるように、救い主は、彼の将来をお示しになった。有用な人生を送って、老齢が体力に影響を及ぼしはじめたとき、ペテロはほんとうに主のあとに従うのであった。「イエスは彼に言われた、『…あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになるう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう』。これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すためにお話しになったのである」(ヨハネ二一ノ一八、一九)。

このようにイエスは、ペテロがどんな死に方をするかをお知らせになった。イエスはペテロが十字架上で手をひろげることまで予告された。そしてふたたびイエスは、この弟子に、「わたしに従ってきなさい」と言われた(ヨハネ二一ノ一九)。ペテロはこのように示されたことによって落胆しなかった。彼は主のためにどんな死でもよるこんで受けたいと思った。

いま多くの人々がそうであるように、ペテロはそれまで肉体をとられたキリストしか知らなかった。しかしいまはもうこのような限られた見方はしなかった。彼は、人性をとられたキリストとまじわっていた時のような見方はもうしなかった。彼はイエスをひとりの人、天からつかわされた教師として愛していたが、いまはイエスを神として愛した。彼は、キリストが自分にとって何ものにもかえがたいおかたであるという教訓を学んできた。

いま彼は、主の犠牲の使命にあずかる用意ができた。ついに十字架の前につれてこられたとき、彼は、自分からたのんで、さかさまにはりつけられた。彼は主と同じ方法で苦難を受けることはあまりに名誉すぎると考えたのであった。

ペテロにとって、「わたしに従ってきなさい」ということは教訓に満ちていた（ヨハネ二一ノ一九）。この教訓は、彼の死についてばかりでなく、彼の人生の一步一步について与えられた。それまでペテロは自分勝手に行動する傾向があった。彼は、神の計画を実行するために待とうとしないで、自分が神の働きのために計画しようとした。しかし、主よりも先に突進しても、何も得るところがなかった。イエスは彼に、「わたしに従ってきなさい」と命じられる。わたしより先に走ってはならない。そうしたら、あなたはひとりでサタンの軍勢に対抗しなくてもよいのだ。わたしをあなたより先に行かせなさい。そうしたら、あなたは敵にうち負かされることがないであろう。

ペテロがイエスのそばを歩いていると、彼はヨハネがついてくるのに気がついた。するとこんどはヨハネの将来について知りたいという願いが起こったので、彼は「主よ、この人はどうなのですか」とイエスに言った。「イエスは彼に言われた、『たとえ、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい』（ヨハネ二一ノ二一、二二）。ペテロが知った方がよいことはみな主が彼に明らかにしてくださるということ。彼は考えるべきであった。他人にわりあてられた働きについて余計な心配をしないで、キリストに従うことが各人の義務である。ヨハネについて、「たと

い、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても」と言われたことによって、イエスは、この弟子が主の再臨まで生きるという保証をお与えになったのではなかった(ヨハネ二一・二二)。イエスはご自身の最高権力を主張され、そしてたといそうなるように望まれたとしてもそれは何もペテロの働きに影響を与えるものではないということを言われたにすぎなかった。ヨハネとペテロの将来は主のみ手にあった。イエスに従順に従うことがふたりに要求される義務であった。

今日ペテロのような人がなんと多いことだろう。彼らは、人のことに関心を持ち、自分自身の義務をおろそかにする危険があるのに、他人の義務を知りたがる。キリストをながめ、キリストに従うことがわれわれのわざである。他人の生活にまちがいが、他人の品性に欠点が見えるであろう。人性は弱さを負っている。しかしキリストのうちには完全さがある。キリストを仰ぎ見ることによって、生まれ変わった者となるであろう。

ヨハネは非常に長生きした。彼はエルサレムの滅亡と、広大な神殿の破壊を目に見たが、それは世界の最後の滅亡を象徴していた。ヨハネは最後の日まで、親しく主に従った。教会に対するヨハネのあかしの主旨は、「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか」「愛のうちにいる者は、神にあり、神も彼にいます」ということであつた(ヨハネ第一・四ノ七、一六)。

ペテロは使徒の任務に復帰させられたが、キリストから栄誉と権威を受けたことは、彼が兄弟たちよりも優越した地位を与えられたことを意味しなかった。「主よ、この人はどうなのですか」とのペテロの問いに答えて、主が「あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」と言われたときに、キリストは

この点をはっきり示された(ヨハネ二ノ二二、二三)。ペテロは教会のかしらとしての栄誉を与えられたのではなかった。ペテロの背信をゆるし、羊の群れを養うことをゆだねられることによってキリストが彼に示された恵みと、ペテロ自身が忠実にキリストに従ったことによって、彼は兄弟たちの信頼を勝ち得た。彼は教会の中で大きな影響力を持っていた。しかしペテロは、ガリラヤの海辺でキリストから教えられた教訓を一生の間忘れなかった。聖霊によって彼は教会にあててこう書いた、「そこで、あなたがたのうちの長老たちに勧める。わたしも、長老のひとりで、キリストの苦難についての証人であり、また、やがて現れようとする栄光にあずかる者である。あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。そうすれば、大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう」(ペテロ第一・五ノ一―四)。

行ってすべての国民に教えよ

本章はマタイ二八ノ一六―二〇にもとづく

天のみ座からほんの一步のところに立つて、キリストは、弟子たちに任命をお与えになった。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」とキリストは言われた。「それゆえにあなたがたは行って、すべての国民を……教えよ」「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マタイ二八ノ一六―二〇、マルコ一六ノ一五)。このことは、弟子たちがその意義を把握するように、何度も何度もくりかえされた。天の光は、身分の高い者にも低い者にも、富める者にも貧しい者にも、地のすべての住民の上に、明るい強い光線となって輝くのであった。弟子たちは世を救う働きにあがない主と共に働く者となるのであった。

この任命は、キリストが十二人の弟子たちと二階の広間で会合されたときに与えられたのであったが、いまはもっと多数の者に与えられることになった。ガリラヤの山での集まりに、呼び集められるかぎりすべての信者が集められた。この集まりについては、キリストご自身が、なくなられる前に、時と場所を指定しておかれた。墓

場の天使は、ガリラヤで会うというキリストの約束を弟子たちに思い出させた。この約束は、過越節の週の間エルサレムに集まっていた信者たちにくりかえされ、彼らを通して、キリストの死を嘆き悲しんでいた多くのさびしい人たちの耳にはいった。すべての人たちが熱烈な関心をもってこの会見を待望した。ねたみ深いユダヤ人の疑いを避けるために、彼らは、回り道をして四方から集会の場所へやってきた。キリストについて自分たちが聞いた知らせを熱心に語り合いながら、彼らはふしぎな思いをもってやってきた。

定められた時間になると、およそ五百人の信者たちが山の上にくつかの小さなかたまりになって集まり、キリストがよみがえられてからお会いした人たちから聞けるだけのことを聞こうと熱心に待った。弟子たちはこの群れからあの群れへと歩きまわって、自分たちがイエスについて見たり聞いたりしたことを語り、またイエスが自分たちにそうされたように、聖書から説き聞かせた。トマスは自分が不信仰だった話を物語り、彼の疑いが一掃されたことを語った。突然イエスが彼らの間に立たれた。どこから、どうやってこられたのかだれにもわからなかった。集まっていた人々の多くは、これまでイエスにお会いしたことがなかったが、その手と足に十字架につけられた傷跡を見た。イエスのお顔は神のお顔のようだったので、彼らはイエスを見て、おがんだ。

しかしある人たちは疑った。いつでもそういう人はいるものである。信仰を働かせるのに困難を感じる人たちがいて、彼らは自分自身を疑問の側に置く。こういう人たちは不信のために多くのものを失うのである。

復活後イエスが多くの人々たちと会見されたのはこの時だけであった。イエスは彼らのところへおいでになって語り、「わたしは天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」と言われた(マタイ二八ノ一八)。



イエス・キリストは弟子たちをまわりにしたがえて山の上に立ち、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」との任務をお与えになった。これこそ今日のわれわれの任務である。

弟子たちはすでにイエスが語られる前におがんでいたが、死にとじられていたくちびるから出るイエスのことには特別な力があって彼らを感動させた。イエスはいまやよみがえられた救い主であった。彼らの多くは、イエスが力をあらわして病人たちをいやし、サタンの力を支配されるのを見たのであった。彼らは、イエスがエルサレムに王国を建てられる権力を、すべての反対をおさえる力を、また自然界を支配する力を持つてあられると信じた。イエスは荒れ狂う波を静め、泡立つ波の上を歩き、死人をいのちによみがえらせられた。いま主は「いっさいの権威」がご自分に与えられたと宣言された。イエスのことは、聞く者の心をこの地上の一時的なものから天上の永遠なるものへ向けた。彼らはキリストの威厳と栄光について最高の概念にまで高められた。

山の上でのキリストのことは、人類のためのキリストの犠牲が十分にしておけるといことを告げていた。あがないの条件は果たされた。イエスがそのためにこの世にこられた働きは達成された。イエスは、天使たちと支配と権威からあがめられるために神のみ座のもとへ行かれる途中であつた。イエスは仲保者としての働きにおはいりになったのだつた。無限の権威を帯びて、キリストは、弟子たちに任命をお与えになった。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ二八ノ一九、二〇)。

ユダヤ国民は聖なる真理の保管者とされたが、パリサイ主義のために全人類の中で最も排他的で最も頑迷な者となった。祭司たちと役人たちについてのすべて、すなわちその衣服、風習、儀式、言い伝えは、彼らを世の光

とするのにふさわしくなかった。彼らは自分自身すなわちユダヤ国民を世界とみなした。しかしキリストは、階級制度や国の差別をまったく含まない信仰と礼拝、すなわちすべての民族、すべての国民、すべての階級の人々に適応する信仰をのべ伝えるために弟子たちを任命されたのである。

弟子たちと別れる前に、キリストはみ国の性質をはっきり述べられた。主は、み国について、前に弟子たちにお語りになったことを思い起こさせられた。この世に現世的な王国ではなくて、霊的王国を建てることをご自分の目的であると、主は宣言された。キリストは、ダビデの位につかれた地上の王として統治されるのではなかった。ふたたびイエスは、彼らに聖書を開いて、ご自分が経験されたすべてのことは天においてご自身と天父との協議によって定められたものであることを示された。すべてのことは聖霊の感動を受けた人々によって預言されていた。イエスは言われた、わたしがメシヤとして受け入れられないことについてあなたがたに打ち明けたことが何もかも起こったのだ。わたしが耐えねばならない屈辱、わたしが死なねばならない死についてわたしが言ったことはすべて実証された。三日めにわたしはふたたびよみがえった。聖書をもっと熱心に調べなさい、そうすればこれらのすべてのことの中にわたしに関する詳細な預言が成就したことがわかるであろう。

キリストは、弟子たちの手に残された働きをエルサレムから始めるように委任された。エルサレムは、人類のためのキリストの驚くべきへりくだりの場面であった。ここで彼は苦難を受け、捨てられ、罪に定められた。ユダヤの国はイエスの誕生の地であった。ここでイエスは、人性という衣を着て、人々と共に歩まれたが、彼が人の中におられたときどんなに天が地に近づいたかをみとめた者はほとんどなかった。エルサレムで、弟子たち

の働きが開始されねばならない。

キリストがエルサレムで苦難を受けられ、骨折って働かれてもみとめられなかったことを考えて、弟子たちはもっと有望な伝道地をキリストにお願いできたかもしれないが、彼らはそのような願いをしなかった。キリストが真理の種をまかれた土地を弟子たちはたがやすのであった。種は芽を出して豊かな収穫を生ずるであろう。その働きにおいて、弟子たちは、ユダヤ人のねたみと憎しみから迫害に会わねばならないであろう。しかし主はこれに耐えられたのであるから、彼らはそれから逃げ出すべきではなかった。あわれみの最初の提供は、救い主の殺害者たちに向けられねばならない。

またエルサレムには、これまでひそかにイエスを信じていた人々、祭司たちと役人たちにだまされていた人々がたくさんいた。この人たちにも福音が示されるのであった。彼らに悔い改めが呼びかけられるのであった。キリストを通してのみ罪のゆるしが得られるというすばらしい真理が明らかにされるのであった。過ぐる数週間の感動的な事件のためにエルサレムじゅうがわきたっているとき、福音の宣伝は最も深い印象を与えるであろう。

しかしこの働きはエルサレムにとどまるのではなかった。それは地の果てまでひろがるのであった。キリストは弟子たちに言われた、あなたがたはわたしに世のために送った自己犠牲の生活を目に見た。あなたがたはイスラエルのためのわたしの努力を目に見た。彼らはいのちを受けるためにわたしのもとにこようとせず、また祭司たちと役人たちはわたしに対して好き勝手なことをし、聖書に預言されていたとおりわたしを捨てたが、それでも彼らは神のみ子を受け入れる機会がもう一度あるのだ。わたしのもとにきて罪を告白する者をみなわたしは

受け入れることをあなたがたは見てきた。わたしに来る者をわたしは決してこばみはしない。望む者はだれでも、神とやわらぎ、永遠の生命を受ける。弟子たちよ、あなたがたにわたしはこのあわれみのメッセージをゆだねる。それはまずイスラエルに与えられ、次に諸国、諸国語、諸民族に与えられるのである。それはユダヤ人にも異邦人にも与えられるのである。信じる者はすべて一つの教会に集められるのである。

聖霊の賜物を通して、弟子たちは驚くべき力を受けるのであった。彼らのあかしはしるしとふしぎなわざによって確認されるのであった。使徒たちばかりでなく、そのメッセージを受け入れた者たちによって、奇跡が行なわれるのであった。イエスはこう言われた、「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追いつし、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をあければ、いやされる」(マルコ一六ノ一七、一八)。

当時毒殺がしばしば行なわれた。無法な人々は、自分の野心のさまたげとなる人間をこの方法で除くことをちゅうちよしなかった。イエスは弟子たちの生命がこのような危険にさらされることを知っておられた。多くの人は、イエスの証人たちを殺すことを神への奉仕だと思うだろう。そこでイエスは彼らをこの危険から守ることを約束された。

弟子たちは、イエスが「民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをいやしになった」と同じ力を持つのであった(マタイ四ノ一二)。キリストの名によって肉体の病気をいやすことによって、彼らの魂をいやしてくださるキリストの力をあかしするのであった(マタイ九ノ六参照)。そこでいま新しい賜物が約束された。弟子たち

は、他の国民にも福音を説くことになるので、他の国語を話す力を受けるのであった。使徒たちとその仲間は無学な人たちだったが、ペンテコステの日に聖霊の降下を受けることによって、彼らのことは、自国語であろうと外国語であろうと、語句においてもアクセントにおいても純粹で、単純で、正確なものとなった。

こうしてキリストは、弟子たちに任務をお与えになった。働きの遂行にイエスは十分な道を備え、その成功の責任を自身に負われた。彼らがイエスのことばに従い、イエスにつながって働くかぎり、失敗することはないのであった。すべての国民に行きなさいと、イエスは彼らにお命じになった。人の住むかぎりどんな地球の果てまで行っても、わたしにそこにいることを知りなさい。信仰と確信をもって働きなさい。わたしにあなたがたを捨てる時は決していないのだから。

救い主が弟子たちにお与えになった任務には信者の全部が含まれていた。これには世の終わりにいたるまですべてのキリスト信者が含まれている。救霊の働きが牧師だけに負わされていると考えるのは重大な誤りである。天の靈感を受けた者はすべて福音をのべ伝える責任が負わされる。キリストの生命を受ける者はみな同胞の救いのために働くように任命される。教会はこの働きのために設立されているのであって、聖なる誓約によって教会に加わるものはみなそのことによってキリストと共に働く者となることを誓ったのである。

「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録二二ノ一七)。聞く者はだれでもこの招きをくりかえすのである。この世における職業がなんであろうと、第一の関心事は魂をキリストにみ

ちびくことでなければならぬ。会衆に話すことはできないかもしれないが、個人のために働くことができる。自分が主から受けた教えを個人個人に伝えることができる。伝道は説教だけではない。病氣と苦しみの中にいる人々をやわらげ、困っている人々を助け、落胆している人々や信仰の弱い人々に慰めのことを語る者は伝道しているのである。近いところにも遠いところにも、罪の意識にうちひしがれた魂がいる。人間を墮落させるのは困難や骨折り仕事や貧乏ではない。不義が、悪をなすことが人を墮落させるのである。それが不安と不満を生じさせるのである。キリストはご自分のしもべたちが、罪に悩む魂のために奉仕するように望まれる。

弟子たちは自分たちのいるところから働きを始めるのであった。最も困難で、最も見込みのない働き場をみすごしてはならなかった。同じように、キリストの働き人のひとりびとりは、自分のいるところから働きを始めるのである。われわれ自身の家族の中には、同情にかわき、生命のパンに飢えた魂がいるかもしれない。キリストのために教育すべき子供たちがいるかもしれない。われわれ自身の門口に異邦人がいる。一番近くにある働きを忠実にしよう。それから、われわれの努力を神のみ手がみちびかれるままに遠くへひろげよう。多くの人々の働きは環境に制限されているようにみえるかもしれない。しかしどこであろうと忠実に、勤勉に働くならば、それは地の隅々にまで知られるのである。地上におけるキリストの働きはせまい場所に限られているようにみえたが、全地からやってきた多くの人々がキリストのメッセージを聞いた。神はしばしば最も単純な方法を用いて最大の結果をなしとげられる。神の働きのどの部分も、車輪の内部の輪のように、ほかの部分と互いに依存し合い、一致して働くことが神のご計画である。どんなにやしい働き人も、聖霊に動かされて目に見えない弦をかきならす

ときに、その振動する音は地の果てまでひびき、永遠の時代にわたってメロディーをかなでるのである。

しかし、全世界に出て行けとの命令をみすごしてはならない(マルコ一六ノ一五参照)。われわれの目をかなたの国々に向けるようにと訴えられている。キリストはへだての壁すなわち国籍というへだての偏見を打破し、全人類家族への愛を教えておられる。主は、人間の利己心が定めたせまい社会から人々を高められる。主は、地域的な境界線と人間のつくった社会的な差別を廃止される。キリストは隣人と他人、友人と敵の区別をされない。困っている魂をみな兄弟とみなし、世界を働き場とみなすようにと、主は教えておられる。

救い主は、行って、すべての国民に教えよと言われたとき、またこう言われた、「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をあけば、いやされる」(マルコ一六ノ一七、一八)。この約束は、任命と同じように遠大なものである。全部の賜物が信者のひとりびとりに与えられるというのではない。

「御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである」(コリント第一・一二ノ一二)。しかしみたまの賜物は、主の働きのためその必要に応じて、どの信者にも約束されている。この約束は使徒たちの時代と同様に今日も固く、信頼に値するものである。「信じる者には、このようなしるしが伴う」(マルコ一六ノ一七)。これは神の子らの特権であって、信仰の証拠としてもつことのできるすべてのことを把握すべきである。

「彼らは……病人に手をあけば、いやされる」(マルコ一六ノ一八)。この世界は大きな病院であるが、キリストは病人をいやし、サタンのとりこに救いを告げるためにこられた。イエスご自身は健康で元気だった。イエ

スはご自分の生命を、病人や、苦しんでいる者や、悪鬼にとりつかれている者にわけ与えられた。主は、いやしの力を受けるためにやってくる者をひとりも追いかえされなかった。主は助けを懇願する者たちが自分で病気を招いたことをご存じだった。それでもイエスは彼らをいやすことをこばまれなかった。これらのあわれな魂にキリストのいやしの力が及ぼされるときに、彼らは罪を自覚し、多くの者が、肉体の病気はもちろん、霊的な病気もいやされた。福音にはいまでも同じ力があるのだから、今日同じ結果が見られないはずがない。

キリストは苦しんでいるひとりびとりの魂の不幸をお感じになる。悪霊が人間の肉体を破滅させるときに、そのわざわざいをお感じになる。高熱に生命の流れが焼きつくされるときに、イエスはその苦悩をお感じになる。そして主はご自分がこの地上におられたときと同じに、いまでもよろこんで病人をいやされる。キリストのしもべたちはキリストの代表者であって、キリストの働きのうつわである。主は彼らを通していやしの力を働かそうと望まれる。

救い主のいやしの方法には弟子たちにとって教訓があつた。ある時、主は盲人の目にどろを塗って、「シロアム…の池に行つて洗いなさい」とお命じになった。「そこで彼は行つて洗つた。そして見えるようになって、帰つて行つた」(ヨハネ九ノ七)。病気は、大医師イエスの力だけでなおすことができるのであるが、それでもキリストは単純な自然の力をお用いになった。キリストは薬物療法に賛成なさらなかったが、単純な自然療法を是認された。

苦しみをいやしてもらつた多くの人々に、キリストは、「もう罪を犯してはいけけない。何かもつと悪いことが、

あなたの身に起るかも知れないから」と言われた(ヨハネ五ノ一四)。こうしてイエスは病気が神の定められた自然と霊的な法則を犯した結果であることを教えられた。人が創造主の計画に調和した生活を送りさえすれば、この世の大きな不幸は存在しないであろう。

キリストは、古代イスラエルの指導者また教師であられたが、健康は神の律法に従った報いであると、彼らにお教えになった。パレスチナで病人たちをいやされた大医師イエスは、古代イスラエルの民に雲の柱から語って、彼らのしなければならぬことと神が彼らのためになされることについてお告げになった。「あなたが、もしあなだの神、主の声によく聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプト人に下した病を一つもあなたに下さないであろう。わたしは主であつて、あなたをいやすものである」と、主は言われた(出エジプト記一五ノ二六)。キリストは、彼らの生活習慣についてはっきりした教えをイスラエルに与え、「主はまたすべての病をあなたから取り去ら……れるであろう」と保証された(申命記七ノ一五)。彼らが条件を果たしたときに、この約束は立証された。「その部族のうちに、ひとりの倒れる者もなかった」(詩篇一〇五ノ三七)。

この教訓はわれわれのためである。健康を保ちなければだれでも守らねばならない条件がある。だれでもみなこれらの条件がなんであるかを知らねばならない。主は、自然の法則であつても霊的な法則であつても、主の律法について人が無知であることをおよぼひにならない。われわれは、霊的な面ばかりでなく、肉体的な面においても、健康を回復するために神と共に働く者となるのである。

そこでわれわれは、どのように健康を維持し、回復するかについて人々に教えねばならない。病気の人たちのためには、神が自然のうちにお備えになった療法を用い、健康を回復することがおできになるただひとりのおかたである神を彼らに指し示さねばならない。病人や悩める者たちを信仰の腕によってキリストにつれて行くことがわれわれの働きである。彼らが大医師イエスを信じるように教えねばならない。イエスの約束をとらえて、主の力のあらわれを祈らねばならない。福音の本質は回復であって、救い主は、われわれが病人や望みなき者や苦しんでいる者たちにイエスの力にすぎるようにすすめることを望んでおられる。

キリストのすべてのいやしのわざには愛の力があつた。信仰によってその愛にあずかることによってのみキリストのみわざのうつわとなることができるのである。もしキリストとの聖なるつながりをおろそかにするならば、生命を与える力の流れが豊かな流れとなってわれわれから人々にながれることができない。人々の不信仰のために、救い主ご自身でも多くの大いなるみわざをなすことがおできにならなかつたところがあつた。同じようにいまも、不信仰が教会を聖なる助け手であるイエスから引き離している。教会は永遠の現実をしっかりとらえていない。教会に信仰が欠けているために神は失望され、神の栄光が失われている。

キリストが共にいてくださると教会に約束されているのは、そのみわざをなすことによつてである。行ってすべての国民に教えなさい、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と、キリストは言われた(マタイ二八ノ二〇)。キリストのくびきを負うことが、キリストの力を受ける第一の条件である。教会の生命そのものは、教会が主の任命を忠実に果たすことにかかっている。この働きをおろそかにすれば、そこに

はかならず靈的な弱さと衰えが生じる。人々のための活動的な働きがないところでは愛は衰え、信仰は弱くなる。

キリストは、福音の働きにおいて、牧師たちが教会の教育者になるように望んでおられる。彼らは、失われた者をたずね求めて救う方法を教会員に教えるのである。しかし彼らはこの働きをしているだろうか。悲しいことに、いまにも消えそうな教会内のいのちの火花をかきたてるのにどれほど多くの者が骨折らねばならないことだろう。失われた羊をさがし求めていなくてはならないはずの者から病める小羊のように世話をしてもらわなくてはならない教会がどんなに多いことだろう。しかもそのあいだに、幾百万の人々が、キリストを知らずに滅びつつあるのである。

神の愛は人類のためにはかり知ることのできないほど深く動かされたのに、これほど大きな愛を受けている者たちに表面的な感謝しかないのを見て、天使たちは驚く。天使たちは、神の愛に対する人々の浅薄な認識に驚き、天は、魂に対する人々の無関心さに憤慨している。そのことについてキリストがどう思っておられるか知りたいだろうか。父母は、自分の子供が寒さと雪の中に行き暮れているのに、それを救えたはずの人たちからみすごしにされ、死ぬがままにほうっておかれたことを知ったらどう思うだろうか。彼らはひどく悲しみ、狂気のように憤慨しないだろうか。彼らはその涙のように熱く、その愛のようにげいしい怒りをもって、そうした殺人者たちを攻撃しないであろうか。ひとりびとりの人間の苦難は神の子の苦難であって、滅びつつある同胞に助けの手をさし出さない人々は神の正義の怒りをひき起こすのである。これが小羊イエスの怒りである。キリストとのまじわりを公言しながら、同胞の必要に無関心だった人たちに向かって、キリストは、大いなるさばきの日に、「あ

なたがたがどこからきた人なのか、わたしは知らない。悪事を働く者どもよ、みんな行ってしまえ」と宣告されるであろう(ルカ一三ノ二七)。

弟子たちにお与えになった任務の中に、キリストは、彼らの働きのあらましを述べられたばかりでなく、彼らのメッセージもお与えになった。「あなたがたに命じておきたいことを守るように教えよ」とキリストは言われた(マタイ二八ノ二〇)。弟子たちはキリストがお教えになったことを教えるのであった。キリストがご自身の口を通してばかりでなく、旧約のすべての預言者たちと教師たちを通して語られたことがここに含まれている。人間の教えは除外されている。言い伝えや、人間の理論や結論、あるいは教会の律法がはいる余地はない。教会の権威によって定められたおきては、この任務の中に含まれていない。キリストのしもべたちは、そうしたものを教えるのではなかった。キリストご自身のことばと行為についての記録とともに、「律法と預言者」が世に与えるように弟子たちに委託された宝である。キリストのみ名は、彼らの合いことばであり、彼らを世人と區別する記章であり、彼らの一致のきずなであり、彼らの行動の権威であり、彼らの成功のみなもとである。キリストのみ国では、キリストのみ名がぎざまれていないものはどんなものでも認められないのである。

福音を、生命のない理論としてではなくて、生活をかえる生きた力として示さねばならない。神は、ご自分の恩恵を受ける者たちをその力の証人にならせようと望んでおられる。神のみこころを痛めるような生活を送っていた人たちでも神は心よく受け入れてくださる。彼らが悔い改めるときに、神は、ご自分の聖なるみたまをさずけ、彼らを高い責任の地位に置き、神の限らないあわれみをのべ伝えるために彼らを不忠実な者たちの陣営につ

かわされる。神の恵みによって人はキリストのような品性を持つことができ、神の大なる愛の保証をよるこぶことができるということについて、神はご自分のしもべたちがあかしをたてるよう望まれる。人類が神のむすこ、むすめとしてその聖なる特権を回復し、復帰するまで神は満足することがおできにならないということについて、われわれにあかしをたてさせたいと神は望まれる。

キリストのうちには、牧者のやさしさ、親の愛情、あわれみ深い救い主の比類のない恵みがある。キリストは、最も魅力のあることばで祝福をお与えになる。主はそうした祝福を宣言されるだけでは満足されない。主は、それらの祝福を、自分のものにしたいという願いを起こさせるように、最も魅力的な方法で提供される。キリストのしもべたちも同じように、言いあらわしようなない賜物であるキリストの栄光の富を紹介するのである。教理の単なるくりかえしでは何一つできないときに、キリストのすばらしい愛は心をとかし、これを従えるのである。「あなたがたの神は言われる、『慰めよ、わが民を慰めよ』。」「よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え、『あなたがたの神を見よ』と。…主は牧者のようにその群れを養い、そのかいなに小羊をいだき、そのふところに入れて携えゆ…かれる」(イザヤ書四〇ノ一、九―一二)。「万人にぬきんで…はなはだ美しい」おかたについて人々に告げ知らせなさい(雅歌五ノ一〇、一六)。ことばだけではそれを語ることができない。それを品性に反映し、生活にあらわそう。キリストは弟子たちひとりびとりのうちにご自分が再現されるのを待っており。神はひとりびとりを「御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めて下さった」(□

「マハノ二九」。ひとりびとりを通して、キリストの寛容と愛、聖潔、柔和、あわれみ、まことが世にあらわされるのである。

最初の弟子たちは出て行ってみことばをのべ伝えた。彼らはその生活にキリストをあらわした。そこで主は彼らと共に働き、「御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった」(マルコ一六ノ二〇)。これらの弟子たちは働きのために備えをした。ペンテコステの日の前に、彼らは共に集まって、すべての不和をすて去った。彼らは一つになった。彼らは祝福が与えられるとのキリストの約束を信じ、信仰をもって祈った。彼らは自分たちのためだけに祝福を求めなかった。彼らは霊の救いのために重荷を負った。福音を地の果てまで伝えることになったので、彼らは、キリストの約束された力がさずけられるように求めた。そのとき聖霊がそがれ、一日に幾千の人々が悔い改めた。

いまもこれと同じである。人間の空論ではなく、神のみことばをのべ伝えよう。クリスチャンは不和をとり除き、失われた者を救うために神に献身しよう。信仰をもって祝福を求めるときに、それは与えられるのである。使徒時代の聖霊の降下は、「秋の雨」であつたが、その結果はすばしかなかった。しかし「春の雨」はもつと豊かなものとなるであろう(ヨエル書二ノ二三参照)。

心とからだと魂を神にささげる者はだれでも体力と知力の新しい賜物をたえず受けるであろう。天の尽きることのない補給は彼らの思いのままに与えられる。キリストは彼らにご自身の霊の息吹き、すなわちご自身のいのちをお与えになる。聖霊は心と思いと働くためにその最高の能力をそそがれる。神の恵みは彼らの能力を幾倍に

も大きくし、神の性質のあらゆる完全さが救霊の働きにおいて彼らの助けとして与えられる。キリストとの協力によって、彼らはキリストのうちにあって完全であり、人間的な弱さのうちにあっても全能者の行為をなすことができる。

救い主は、全世界の人々に恩恵をあらわし、ご自身の品性を印象づけようと熱望される。世界はキリストが買われた所有物であって、主は人々を自由にし、純潔にし、聖にしようと望まれる。サタンはこの目的を妨害しようとして働くが、世の人々のために流された血によって、神と小羊に栄光をもたらす勝利がなしとげられるのである。キリストは、勝利が完全になるまでは満足されない。「彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足」されるのである(イザヤ書五三ノ一一)。地のすべての国民は、キリストの恩恵の福音を聞くであろう。全部の者がキリストの恩恵を受け入れるわけではないが、「子々、孫々、主に仕え、人々は主のことをきたるべき代まで語り伝え」るのである(詩篇二二ノ三〇)。「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられ」、「水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちる」(ダニエル書七ノ二七、イザヤ書一一ノ九)。「こうして、人々は西の方から主の名を恐れ、日の出る方からその栄光を恐れる」(イザヤ書五九ノ一九)。「よきおとずれを伝え、平和を告げ、よきおとずれを伝え、救を告げ、シオンにおかかって『あなたの神は王となられた』と言う者の足は山の上にあって、なんと麗しいことだろう。…荒れすたれた所よ、声を放って共に歌え。主はその民を慰め、…主はその聖なるかいなを、もろもろの国びとの前にあらわされた。地のすべての果は、われわれの神の救いを見る」(イザヤ書五二ノ七―一〇)。

第 87 章

「わたしの神またあなたがたの神で

あられるかたのみもとへ」

本章はルカ二四ノ五〇―五三、使徒行伝一ノ九―一二にもとづく

キリストが天父のみ座へのぼられる時がきた。天来の勝利者として、イエスは勝利の記念品をたずさえて天の宮廷へ帰ろうとしてあられた。イエスは、なくなられる前に、「わたしは、わたしにさせるためにお授けになつたわざをなし遂げ……ました」と天父に言明された(ヨハネ一七ノ四)。よみがえつて栄光を受けられたあからだの主を弟子たちが親しく知ることができるよう、イエスは、よみがえられたのちしばらく地上にとどまられた。いまイエスは別れを告げようとしてあられた。主はご自分が生ける救い主であるという事実を証明された。弟子たちはもうイエスを墓とむすびつけて考える必要はなかった。彼らはイエスを天の宇宙の前で栄光を受けられたおかたとして考えることができた。

イエスは、昇天の場所として、在世中そのご臨在によつて幾度もきよいところとされた場所をえらばれた。このような栄光を受けることになったのは、ダビデの都のあつた場所シオンの山でもなければ、神殿のあつた場所モリヤの山でもなかった。そこでは、キリストがあげられ、捨てられたのであつた。そこでは、もっと強い愛

の潮流となつてもどつて行くあわれみの波が、岩のようにかたくなな心によつて打ち返されたのであった。そこからイエスは、心に重荷を負い、疲れはててオリブ山へ休みに行かれたのだった。聖なるシカイナは、最初の神殿を離れるときに、えらばれた都を捨てるのをいやがるかのように東の山にとどまった。同じようにキリストは、燃える思いをもつてエルサレムを見わたしながらオリブ山に立たれた。山の森や谷はイエスの祈りと涙でぎよめられたのだった。そのけわしい坂はイエスを王として宣言した群集の勝利の叫びをこだましたのだった。その下り坂にあるベタニヤにはイエスがよく行かれたラザロの家があつた。山のふもとのゲッセマネの園で、主はただひとり祈り、苦しまれたのだった。この山から、イエスは天へのぼろうとしておられた。ふたたびイエスがこられるとき、その足はこの山のいただきをふまれるであらう。悲しみの人としてではなく、輝かしい勝利の王として、イエスはオリブ山に立たれるであらう。その時ユダヤ人のハレルヤと異邦人のホサナとが入りまじり、あがなわれた人々の声が、大いなる軍勢のようにな、「すべての者の主なるキリストに王冠を」との歓呼となつて高まるであらう。

いまイエスは十一人の弟子たちとこの山の方へ向かつて行かれた。彼らがエルサレムの門を通りぬけると、多くの人々が、数週間前に役人たちによつて有罪を宣告され、十字架につけられた人にひきいられたこの小さな一団をふしぎな目つきで見た。弟子たちはこれが主との最後の面会になるとは知らなかった。イエスは、彼らと語り、前にお教えになったことをくりかえすことに時間をついやされた。彼らがゲッセマネに近づくと、イエスは、あの非常な苦悩の夜お与えになった教訓を彼らに思い出させるために、立ちどまられた。もう一度イエスは、教

会とご自分と天父との結合を象徴されたことのあるぶどうの木をごらんになった。ふたたびイエスは、その時お示しになった真理をくりかえされた。イエスの周囲のあらゆるものが、報いられなかったイエスの愛を思い出させた。イエスのお心にとってあれほど親しかった弟子たちさえ、イエスの屈辱の時に、彼を責め捨てたのだった。キリストはこの世に三十三年間とどまられた。主はこの世のあざけり、侮辱、嘲笑に耐えられた。主は捨てられ、十字架につけられた。いま栄光のみ座にのぼろうとされるとき――、ご自分が救うためにおいでになった民の恩知らずをかえりみて――、イエスは、彼らに対する同情と愛を引っこめておしまいになるのではないだろうか。イエスが高く評価され、罪なき天使たちがその命令を実行しようと待っている王国に、イエスの愛情が集中されるのではないだろうか。そうではない。イエスが地上に残される愛する者たちへの約束は、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」である(マタイ二八ノ二〇)。

オリブ山にお着きになると、イエスは先頭に立って山の頂上を越え、ベタニヤの近所へ行かれた。ここでイエスは立ちどまられたので、弟子たちはそのまわりに集まった。イエスがやさしく彼らを見わたされると、そのお顔から光線が輝き出ているように見えた。イエスは彼らの欠点や失敗を責められなかった。彼らの耳に聞こえた主の唇からの最後のことは、最も深いやさしさに溢れたことばであつた。祝福のうちに、そしてあたかも主の守りを保証するかのよう、両手をひろげて、イエスはゆっくり彼らを離れて上昇され、地上のどんな引力よりも強い力によって天の方へ引きあげられた。イエスが上の方へのぼって行かれると、畏敬の念にうたれた弟子たちは、昇天される主の最後の面影を目をこらしてみつめた。栄光の雲がイエスを彼らの目からかくした。そして

雲のような天使たちの戦車がイエスを受けると、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」ということは弟子たちのもとに返ってきた(マタイ二八ノ二〇)。同時に天使の合唱隊から最高の美しさによるこびに満ちた音楽の調べがただよってきた。

弟子たちがまだ上の方を見つめていると、すばらしい音楽のようなひびきをもった声が彼らに語りかけた。ふり向くとそこには人のかたちをしたふたりの天使の姿が見られた。天使は弟子たちに、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」と言った(使徒行伝一ノ一一)。

この天使たちは、イエスを天の家へ送りとどけるために光り輝く雲の中に待っていた天使の群れの中の者であった。天使の群れの中で最も高い地位にあるこのふたりの天使たちは、キリストの復活の時に墓にやってきた天使たちであり、またこの地上におけるキリストの一生のあいだつきそっていた天使たちであった。全天は、罪のろいに傷つけられたこの世におけるキリストの滞在が終わるのを非常な期待をもって待っていた。いまや天の宇宙が王なるイエスを受け入れる時がきたのだった。このふたりの天使たちはイエスを歓迎する群れに加わりたいと願わなかっただろうか。しかしイエスがあとに残された人々に対する同情と愛から、彼らは慰めを与えるために待った。「御使たちはすべて仕える霊であつて、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか」(ヘブル一ノ一四)。

キリストは人の姿をして天へのほられた。弟子たちは雲がイエスを受けるのを目に見た。彼らと共にあゆみ、

語り、祈られたおかた、彼らと共にパンをさかれたおかた、湖の上で彼らの舟にいっしょにおられたおかた、その日彼らと共にオリブ山の登り道を苦勞されたおかた、その同じイエスが天父と同じみ座につくためにいま行っておしまいになったのである。ところが天使たちは、天にのぼられるのを弟子たちが見たそのおかたが、のぼって行かれたのと同じにふたたびこられることを保証したのであった。「彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目…彼を仰ぎ見るであろう」「主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初にのみがえり」「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう」（黙示録一ノ七、テサロニケ第一・四ノ一六、マタイ二五ノ三一）。こうして弟子たちに対する主ご自身の約束、「行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」とのみことばが成就するのである（ヨハネ一四ノ三）。主がふたたびこられるとの望みに弟子たちがよろこんだのも当然であった。

弟子たちがエルサレムへ帰ると、人々は驚いて彼らを見た。キリストの裁判と十字架のあと、彼らは、落胆し恥じているだろうと思われていた。反対者たちは彼らの顔に悲しみと敗北の表情が見られるものと予期していた。ところが予想に反して、よろこびと勝利だけがみられた。彼らの顔はこの世のものではない幸福に輝いていた。彼らは望みが裏切られたことを嘆かないで、神への賛美と感謝に満たされていた。彼らは大よろこびで、キリストの復活と昇天についてのすばらしい話を語ったが、そのあかしは多くの人々に信じられた。

弟子たちは将来についてもはやなんの不安もなかった。イエスが天にあられ、イエスの思いはいまも彼らと共にあることがわかっていた。彼らは神のみ座に友なるイエスがあられることを知り、イエスのみ名によって熱心に天父に願いごとをささげた。彼らは厳肅な畏敬の念をもって祈り、「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」との約束をくりかえした(ヨハネ一六ノ二三、二四)。彼らは、「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」とのすばらしい論証をもって、信仰の手をますます高くさしのべた(ローマ八ノ三四)。こうして、ペンテコステの時には、キリストが約束されたとおりに、助け主の臨在によってあふれるばかりのよろこびが与えられたのであった。

全天は救い主を天の宮廷に歓迎しようとしていた。キリストは、のぼって行かれるとき先頭に立たれ、主の復活のときに解放された多くのとりこが続いた。天の軍勢は、賛美と歓呼の叫びと天の歌をもって、よろこびの行列につきそった。

彼らが神の都に近づくと、護衛の天使たちが呼びかける。――

「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。

栄光の王がはいられる」。

すると待っていた見張りの天使たちがよろこびの声をあげて応じる。――

「栄光の王とはだれか」。

彼らがこう言うのは、王がだれかを知っていないからではなく、称賛と賛美の答えを聞きたいからである。――

「強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である。」

門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。

栄光の王がはいられる」。

ふたたび、「この栄光の王とはだれか」との呼びかけの声が聞かれるが、それは天使たちが主のみ名があがめられるのを聞くのにあきることがないからである。護衛の天使たちは答える。――

「万軍の主、これこそ栄光の王である」。

(詩篇二四ノ七一〇)、

そのとき神の都の門があげ放たれ、天使の群れは、歓喜の音楽でわきたつ中を、門を通りすぎる。

神のみ座があつて、そのまわりに約束のにじがかかっている。ケルビムとセラピムがいる。天使の軍勢の指揮者たち、神の子ら、他世界の代表者たちが集まっている。ルシファーが神とみ子を訴えた天の会議、サタンが自分の主権をうちたてようと考えた罪のない世界の代表者たち、――すべての者たちがあがない主を歓迎するためにそこにいる。彼らはキリストの勝利を祝い、彼らの王をあがめようと熱心に待ちかまえている。

しかしキリストは彼らをおしとどめられる。まだなのだ。キリストはまだ栄光の王冠と王衣をお受けになることができない。彼は天父の前に出られる。主はご自分の傷ついた頭と、刺し通された脇腹と、傷ついた足とを指

さし、釘あとのついている両手を挙げられる。主はご自分の勝利のしるしである人々を指さされる。彼は、揺祭のたば、すなわち再臨の時に墓から現われる大群集を代表する者としてキリストと共にみがえった人たちを神に紹介される。主は天父に近づかれる。天父は悔い改めるひとりの罪人をおよるこびになり、歌をもってこれによるこばれるおかたである。地の基が置かれる前から、天父とみ子は、人がもしサタンに征服されたらこれをあがなうという契約に一致しておられた。キリストが人類の保証人になられるという厳粛な誓約をおふたりはかわしておられた。この誓約をキリストは果たされたのである。十字架上でキリストが、「すべてが終った」と叫ばれたとき、彼は天父に向かって話しかけられたのであった(ヨハネ一九ノ三〇)。契約は完全に果たされた。そしていまイエスは、こう宣言される。父よ、すべてが終わりました。わが神よ、わたしはあなたのみこころをなしました。わたしはあがないのわざを完結しました。もしあなたの正義が満足させられましたならば、「あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」(ヨハネ一七ノ二四)。

正義は満足させられたと宣告される神のみ声が聞こえる。サタンは征服された。地上にあつて苦勞し、戦っている人々は「愛する御子によって」受け入れられる(エペソーノ六)。天のみ使いたちと他世界の代表者たちの前で、彼らが義とされたことが宣告される。キリストのあられるところに、その教会もある。「いつくしみと、まこととは共に会い、義と平和とは互に口づけし」た(詩篇八五ノ一〇)。天父はみ子をだきかかえ、「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」とのみことばが発せられる(ヘブル一ノ六)。

言いあらわすことのできないよろこびをもって、主権者も支配も権威も生命の君の主権を承認する。天使の万

軍がキリストの前にひれ伏すと、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」とのよろこびの叫びが、天のすべての宮廷を満たす(黙示録五ノ一二)。

勝利の歌は天使たちのたてごとの調べとまじり、ついに天はよろこびと賛美に満ちあふれているようにみえる。愛は勝利したのだ。失われたものはみいだされたのだ。「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」とのべつたえる高らかな歌声が天にひびきわたる(黙示録五ノ一三)。

この天のよろこびの光景から、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であつて、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上つて行く」とのキリストご自身のすばらしいみことばの反響が地上のわれわれのもとに返ってくる(ヨハネ二〇ノ一七)。天の家族と地の家族は一つである。われわれのために主はのぼり、われわれのために主は生きておられる。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル七ノ二五)。

(エペソ人への手紙)	
2 : 7	1 12, 309
: 21	1 187
: 22	1 187, 255
3 : 6	2 548
: 10, 11	1 12
: 16	1 241
: 18, 19	3 938
: 20	1 241 2 579
4 : 11—13参	2 485
: 18	3 1075
5 : 2	2 773
: 14	2 421
6 : 12	2 470, 590, 700
ピリピ人への手紙	
1 : 20, 21	2 754
: 29	1 282
2 : 6	1 5
: 7	1 5, 7
: 6—8	2 598
: 8	1 10
: 13	3 942
3 : 8	1 346
: 10	1 257
: 21	1 7, 208
コロサイ人への手紙	
1 : 13	2 421
: 19	2 390
: 23	3 885
2 : 3	2 639
: 9, 10	1 214
: 15	1 193
3 : 3	1 281
: 4	3 1102
: 11	2 680
テサロニケ人への 第一の手紙	
4 : 14	3 1100
: 16	2 422 3 1167
: 17	2 422
5 : 3	3 888
: 4, 5, 6	1 290
テサロニケ人への 第二の手紙	
2 : 8	1 110
: 14	2 454

テモテへの 第一の手紙	
3 : 16	1 10
4 : 1	1 322
5 : 10	2 776

テモテへの 第二の手紙	
1 : 7	3 454
4 : 2	3 1127
: 6—8	2 754
: 16, 17	2 474

テトスへの手紙	
3 : 5	2 416
ヘブル人への手紙	
1 : 3	1 42
: 6	3 1170
: 9	1 214 3 1030
	1032
: 14	3 1166

2 : 11	1 12
: 14, 15	2 421
: 17	1 9
4 : 15	1 9
: 14—16	1 195
5 : 2	1 384 2 689
7 : 24	1 42
: 25	1 194 3 1171
: 25参	3 1056
: 26	1 12
8 : 2	1 193
: 5	1 255
9 : 8—12	1 194
: 12	3 1065
: 28	2 579
10 : 5—7	1 6
: 7	3 1065
: 21	1 42
11 : 6	1 141
: 8	1 49
: 38	3 878
12 : 2	2 562, 719
: 24	1 194
: 26	3 1094
: 29	1 110
13 : 12	3 1041

ヤコブの手紙	
1 : 5	2 410, 487
2 : 10	3 1074
: 12	2 642
4 : 7, 8	1 145
5 : 20	2 607

ペテロの 第一の手紙	
1 : 11	1 288
: 12	1 2
: 19	1 38 3 916
2 : 3—5	2 567
: 3—8	3 828

(ペテロの第一の手紙)	
2 : 7, 8	3 829
: 21	1 255
3 : 9	1 334
4 : 12, 13	2 572
5 : 1—4	3 1144

ペテロの 第二の手紙	
1 : 4	1 135
: 16	2 582
: 19	2 637
2 : 9	2 729
3 : 4	3 888
: 10	3 1094

ヨハネの 第一の手紙	
1 : 1	2 452
: 2	1 311 2 452
: 9	1 336 3 1128
2 : 3	2 537, 560
: 6	2 560, 693
3 : 2	1 119
: 8	1 341
: 11, 16	2 756
: 22	3 936
4 : 7	1 157 3 892
	1143
: 11, 12, 20	2 695
: 16	3 1143
5 : 11	2 521
: 12	2 521, 732

ユダの手紙	
: 9 参	2 579
: 24	3 882

ヨハネの黙示録	
1 : 1	1 97
: 3 参	1 288
: 7	3 1167
: 18	2 421, 666
	3 938
2 : 4, 5	1 358
3 : 3	3 888
: 7, 8	1 119
: 12, 21	2 753
: 17, 18	1 358
: 20	1 187 2 677
	3 1125
5 : 5	1 302
: 12	1 146 3 1171
: 13	3 1171
6 : 16, 17	3 1040
7 : 15	2 393
: 15—17	2 440
12 : 10	3 1070

(ヨハネの黙示録)	
12 : 17	2 541
13 : 11—17参	1 133
14 : 6	3 885
15 : 3, 4	1 47
16 : 15	3 888
19 : 6	1 34, 176
: 7, 9	1 176
: 16	3 1040
21 : 3	1 13
22 : 9	1 97
: 17	2 621 3 1152

(ヨハネによる福音書)
13 : 6, 7 3 905
: 8 3 905, 906
: 9 3 906
: 10 3 906, 908
: 11 3 916, 920, 922
: 12—16 3 909
: 12—17 3 911
: 15 3 910, 913
: 17 3 913
: 18 3 917, 920
: 19 3 919
: 25 3 917
: 27 3 918, 1001
: 30 3 918
: 31, 33 3 927
: 34 2 693 3 951
: 35 3 951
: 36 3 1140
: 37 3 944, 1140
14 : 1—4 3 928
: 3 3 1167
: 5—7, 8 3 929
: 5—8 1 378
: 6 1 10
: 9, 11 3 930
: 12 3 931, 932
: 14 3 933
: 15 3 934
: 16—18 3 936
: 17 2 682
: 21 3 937
: 21 参 3 938
: 26 3 938, 939
: 27 3 923, 942
: 30 1 135 3 953
15 : 1 3 946, 949
: 2 3 949
: 4 3 948
: 5 3 947, 949
: 6 3 949
: 7, 8 3 950
: 10 1 371
: 12 3 898
: 17 2 693 3 951
: 18—21 3 952
16 : 8 3 941
: 11 3 953
: 12 2 698
: 12—14 3 939
: 13 3 940
: 14 3 941
: 19, 20 1 352
: 22 3 1104
: 23 3 1168
: 24 3 932, 1168
: 31 3 1118
: 32 3 973

(ヨハネによる福音書)
16 : 33 1 134 3 954
17 : 1—3 3 955
: 4 3 1163
: 10, 11, 20, 21, 23
..... 3 956
: 24 3 1170
: 26 1 1
18 : 4, 5 3 969
: 7, 8 3 970
: 11 3 972
: 17 3 990
: 20, 21 3 977
: 22, 23 3 978
: 26 3 992
: 29, 30 3 1014
: 31 3 1015
: 33, 34, 35 3 1018
: 36 2 701 3 1019
: 37, 38 3 1019
: 40 3 1038
19 : 4 3 1032, 1052
: 5 3 1032
: 6, 7 3 1027, 1034
: 9 3 1034
: 10, 11 3 1035
: 12, 14 3 1036
: 15 3 1037, 1047
: 18 3 1056
: 19 3 1047
: 21, 22 3 1048
: 24 3 1049
: 26, 27 3 1057
: 28 1 134 3 1061
: 30 2 678 3 953
..... 3 1063, 1066
..... 1080, 1170
: 34—37 3 1081
: 39 3 1083
20 : 2, 8 3 1106
: 13, 15 3 1107
..... 1113
: 17 3 1056, 1108
..... 1171
: 20 3 1124
: 22 3 1126
: 23 3 1127, 1128
: 25 3 1129
: 26, 27, 28, 29
..... 3 1130
: 31 2 549
21 : 5, 6, 9, 10 3 1135
: 15 3 1137, 1138
: 16, 17 3 1138
: 18 3 1141
: 19 3 1141, 1142
: 21 3 1142, 1144
: 22 3 1142, 1143

(ヨハネによる福音書)
21 : 22 3 1144
使徒行伝
1 : 11 3 1166
3 : 21 3 1078
: 22 1 24, 40
4 : 12 1 207 3 1129
: 13 2 473
: 32, 33, 34 3 757
5 : 28 3 942
: 31 1 207
: 41 2 699
6 : 7 1 335
: 10, 15 2 473
8 : 4 1 288
10 : 43 1 260
17 : 26 2 550
: 27 1 60 2 550
: 31 3 885
ローマ人への手紙
1 : 4 3 829
: 20 1 360
3 : 26 3 1073
5 : 1 2 447
7 : 12 2 401
: 24 1 246
8 : 2 1 257 2 641
: 3 1 123, 206
..... 2 407
: 7 1 201
: 11 2 422
: 15 2 566
: 29 2 454 3 1161
: 33 2 783
: 34 2 783 3 1168
10 : 6—9 1 221
: 11, 13 2 550
: 12 1 308 2 550
: 20, 21 参 2 628
11 : 1 2 604
: 33 1 35
14 : 5, 12 2 756
: 19 2 475
15 : 1 2 606
16 : 25 1 5
コリント人への
第一の手紙
1 : 4 2 702
2 : 2 2 702
: 9, 10 2 566
: 14 2 528, 700
: 14 参 1 201
3 : 11 2 567
: 16, 17 1 187
: 22, 23 1 371

(コリント人への
第一の手紙)
5 : 11 参 3 920
6 : 11 2 702
9 : 6—11 2 501
: 19 2 756
10 : 11 1 108
: 13 1 142
: 24 2 605
: 33 2 756
11 : 3 2 568
: 23—26 3 914
: 26 1 173 3 924
: 27, 28, 29 3 920
: 31 2 411
12 : 11 3 1154
13 : 4 2 754
: 5 1 2 2 754
: 12 3 1125
15 : 45 1 342
: 51, 53 2 579
: 52 3 882
コリント人への
第二の手紙
2 : 16 2 568
3 : 18 1 80
4 : 6 1 1, 361 2 638
: 7 1 384
: 15 1 371 2 755
: 18 2 564 3 928
5 : 19 3 1072
: 20 2 608, 702
6 : 16 1 187 2 407
7 : 1 1 100
8 : 9 1 86
10 : 5 1 151
12 : 10 2 680
13 : 5 2 410
ガラテヤ人への手紙
1 : 4 1 336
2 : 19, 20 2 527, 702
3 : 7 2 765
: 13 3 1041
: 28 2 550
4 : 4 1 21, 22
: 5 1 21
5 : 21 3 1127
6 : 1 2 607, 694
: 14 3 926
エペソ人への手紙
1 : 6 1 118 3 1170
: 19 1 241
: 21 3 1103
: 22, 23 2 568
2 : 1 1 246, 256

(ヨハネによる福音書)

1 : 45…1 159, 167, 377
 : 46…………1 64, 159
 : 46—48, 49 …1 159
 : 50…………1 163, 172
 : 51…………1 163
 2 : 3 ……………1 168
 : 4 …1 168, 170 2 671
 : 5, 8, 10……1 171
 : 16……1 185 3 816
 : 18, 20 ……1 191
 : 19…1 191, 192, 193
 ……3 983, 1090
 ……1100
 : 21…………3 983
 3 : 2 ……………1 199
 : 3 ……………1 199, 224
 : 4 ……………1 201 2 523
 : 5, 6 ……………1 201
 : 8 ……………1 202
 : 9 ……………1 203, 207
 : 10…………1 203
 : 12……1 180, 204
 : 13…………1 180
 : 14……1 207 2 670
 : 14, 15 …1 205, 209
 2 570 3 924, 1087
 : 16……1 5, 11 2 679
 : 17…………1 258
 : 26, 27—29 …1 212
 : 29……1 213, 351
 : 30…1 213, 215, 216
 : 31, 32, 33, 34 ……
 ……1 214
 : 36……1 215 2 537
 4 : 9 ……………1 219
 : 10, 11, 12……1 220
 : 13…………1 221
 : 14……1 221 2 621
 ……3 1102
 : 15……1 222 2 620
 : 17, 18, 19……1 222
 : 20…………1 223
 : 21, 22, 23, 24 ……
 ……1 224
 : 25…………1 226
 : 26……1 226, 233
 : 29, 30, 35……1 228
 : 32, 34 ……1 227
 : 36, 37, 38……1 229
 : 42…………1 230
 : 48……1 236 2 412
 : 49, 50 ……1 239
 : 52…………1 240
 5 : 2, 3 ……………1 242
 : 6 ……………1 244
 : 7, 8 ……………1 245
 : 11…………1 247

(ヨハネによる福音書)

5 : 14……1 248, 336
 : 16…………1 248
 : 17…………1 251
 : 18……1 248, 253
 : 19……1 254, 256
 : 21, 25 ……1 256
 : 22, 23, 26……1 257
 : 24…………1 258
 : 27……1 257, 258
 : 28, 29 ……1 259
 : 30……1 214 2 446
 ……3 946
 : 38, 39, 40……1 260
 : 41, 43 ……1 261
 : 46, 47 ……1 262
 6 : 5…1 377 2 491, 500
 : 7 ……………1 377
 : 9 ……………2 491, 497
 : 10…………2 500
 : 12……2 495, 507
 : 14…………2 502
 : 17…………2 506
 : 21…………2 512
 : 25…………2 514
 : 26, 27, 28, 29 ……
 ……2 515
 : 30……2 517 3 873
 : 31…………2 517
 : 32, 33, 34……2 518
 : 35……2 518, 519
 : 36…………2 519
 : 37……2 519, 586
 : 38…………2 436
 : 40……2 519, 521
 : 42…………2 520
 : 44…………2 521
 : 45……2 521, 566
 : 47…………2 521
 : 48—51……2 522
 : 51……1 10 2 522
 : 52…………2 523
 : 53……3 952, 1003
 : 55…………3 925
 : 53—56……2 524
 : 54……3 925, 1102
 : 56…………3 925
 : 57……1 3 2 524
 ……3 925
 : 60……2 525, 529
 : 61—63……2 525
 : 64, 65 ……2 528
 : 67, 68, 69……2 531
 : 70……3 943, 1005
 7 : 3, 4 ……………2 615
 : 6 ……………2 669
 : 6—9, 7……2 616
 : 15……1 61 2 619

(ヨハネによる福音書)

7 : 16…………2 623
 : 17……1 323 2 623
 ……629
 : 18……1 3 2 624
 : 19, 20, 22……2 625
 : 23, 24, 25, 26, 27……
 ……3 626
 : 28, 31, 33, 34 ……
 ……2 627
 : 35…………2 628
 : 37…2 619, 620, 621
 : 38…………2 619
 : 45…………2 629
 : 46……1 312 2 629
 : 47—49……2 630
 : 51……2 631 3 976
 : 52, 53 ……2 631
 8 : 1 ……………2 631
 : 5 ……………2 632
 : 7 ……………2 633
 : 10…………2 634
 : 11……2 634, 636
 : 12…2 636, 637, 639
 : 25…………2 640
 : 28……1 3 2 640
 : 29……2 640, 644
 ……3 957
 : 31…………2 640
 : 32……1 323 2 640
 ……642
 : 33, 34, 36……2 641
 : 41, 42, 44, 45 ……
 ……2 643
 : 46……1 371 2 644
 : 47…………2 645
 : 50…………1 3
 : 51, 52 ……3 1102
 : 56…………2 645
 : 57, 58 ……2 647
 : 59…………2 648
 9 : 1—7……2 648
 : 4 ……………1 66
 : 5 ……………2 650
 : 7 ……………3 1155
 : 8, 9, 12, 15 …2 651
 : 16……2 651, 652
 : 17, 19, 22……2 652
 : 20, 21 ……2 653
 : 24, 25, 26, 27—29 …
 ……2 654
 : 30—33, 34 …2 655
 : 35, 36, 37, 39 ……
 ……2 656
 : 40, 41 ……2 657
 10 : 1 ……………2 660
 : 2 ……………2 660, 661
 : 3 ……………2 662, 664

(ヨハネによる福音書)

10 : 4 …2 662, 664, 665
 : 9 ……………2 660
 : 10……1 342 2 660
 ……3 1102
 : 11……1 10 2 658
 : 14, 15 …2 658, 667
 : 16…………2 667
 : 17, 18 ……2 668
 ……3 1099
 : 18参……3 1090
 : 27…………2 664
 : 28…………2 666
 : 33…………2 648
 : 41…………1 274
 11 : 3 ……………2 722, 724
 : 4 ……………2 724
 : 7, 8, 9 ……2 725
 : 9, 10, 11 ……2 726
 : 12, 13, 14, 16 ……
 ……2 727
 : 15……2 727, 729
 : 21……2 731 3 977
 : 22, 23, 24……2 731
 : 25…2 729, 731, 732
 ……3 1094, 1100
 : 26, 27, 28……2 732
 : 32, 33, 34……2 733
 : 35, 36, 37……2 734
 : 38…………2 735
 : 39……2 735, 737
 : 40…………2 736
 : 41……2 737, 738
 : 42, 43 ……2 738
 : 44…………2 740
 : 49, 50 ……2 745
 : 52…………2 746
 : 56…………2 767
 12 : 5, 6 ……………2 771
 : 8 ……………3 896
 : 19…………3 789
 : 20—22……3 863
 : 20—22参……1 378
 : 23…………3 866
 : 24…………3 867
 : 25……3 869, 873
 : 26…………3 869
 : 27…………3 870
 : 28…2 560 3 870
 ……871
 : 29…………3 871
 : 30, 31—33 …3 872
 : 31…………3 953
 : 34—36, 37, 42……
 ……3 873
 : 48…………3 874
 13 : 1 ……………3 900
 : 3, 5 ……………3 903

(マルコによる福音書)	
14 : 3	2 770
: 6	2 771
: 6—8	2 772
: 29	3 944, 963
: 30	3 944, 992
: 31	3 944
: 34	3 960
: 37	3 964
: 38	1 141 3 964
: 40	3 966
: 50	3 973
: 62	3 989
15 : 2, 4	3 1017
: 9	3 1028
: 16	3 1029
: 30, 31, 32	3 1050
: 34	3 1061
16 : 3	3 1104
: 7	3 1110, 1111
: 15	3 1145
: 15参	3 1154
: 17, 18	3 1151
	1154
: 20	3 1161

ルカによる福音書

1 : 6, 8, 9	1 95
: 11, 13—18	1 96
: 15	1 99, 273
: 17	1 100
: 19	1 97
: 20, 22, 23, 64, 66	1 98
	1 98
: 32, 33	1 77
: 38	1 96
: 53	1 338
: 68, 69 参	1 158
: 72—75	1 104
: 76	1 95
: 76—79, 80	1 99
2 : 9—11, 12	1 33
: 14	1 33 2 400
	3 1124
: 15, 16, 18—20	1 34
: 25, 26	1 42
: 29—32	1 43
: 32	2 639
: 34	1 43
: 35	1 43, 45, 166
: 40	1 59
: 48	1 76
: 49	1 169 2 671
: 52	1 59
3 : 10, 11	1 109
: 13	2 759
4 : 1, 2	1 120
: 6, 7	1 143

(ルカによる福音書)	
4 : 16, 17	1 292
: 18	2 479, 586, 689
: 18—22	1 292
: 19	2 479
: 21	1 293, 300
: 23—27	1 295
: 32	1314 2 475, 618
: 34, 35	1 319
: 43	1 326
5 : 5	1 306
: 8	1 307
: 10	1 308
: 12	1 335
: 15, 16	2 486
: 17	1 338
: 26	1 342
: 27, 28	1 345
: 34	1 351
: 35	1 352
: 36, 37	1 354
: 39	1 356
6 : 3, 4	1 366
: 12	2 486
: 18, 19	2 388
: 35	2 405
: 38	1308 2 501
: 4, 5, 6	2 414
: 7, 9	2 415
: 13	2 418
: 14	2 418, 420
7 : 16, 17	2 420
: 23	1 270
: 24	1 271
: 25	1 272
: 26—28	1 273
: 26, 28	1 274
: 30	2 822
: 39	2 778
: 40—43	2 779
: 44, 45	2 780
: 47	2 781
8 : 45, 46, 48	2 459
: 50	2 456
9 : 16, 17	2 491
: 43	2 588
: 51	2 671
: 52	2 672
: 54, 55 英	2 673
: 56 英	3 805
: 59	1 177
10 : 1	2 674
: 3	2 472
: 5	2 469
: 10, 11	2 675
: 12, 13—15	2 676
: 17, 18	2 677
: 19	2 679

(ルカによる福音書)	
10 : 20	2 680
: 21, 22	2 681
: 25	2 685, 693
: 26	2 685
: 27	2 686
: 28	2 686, 693
: 29	2 687
: 30—32	2 688
: 35, 36	2 692
: 37	2 692, 693
: 40	2 721
: 41, 42	2 722
11 : 9	2 683
12 : 1	2 558, 560
: 32—34	2 684
: 37	3 886
: 42, 45, 46	3 887
: 56	2 554
13 : 8, 9	3 808
: 27	3 1159
: 35	1 300
14 : 24	2 683, 684
15 : 32	2 684
16 : 17	2 401
: 31	2 557
17 : 20, 21	2 696
: 22	2 697
18 : 7, 8, 11, 13	2 683
: 21	2 713
: 27	2 762
: 31—34	2 749
19 : 1	2 758
: 5	2 760
: 7, 8	2 762
: 9	2 762, 764
: 39, 40	3 792
: 42	3 796
: 42参	3 811
: 42—44	3 797
20 : 20	3 831
: 22—25	3 1016
21 : 20—22	3 879
: 28	3 884
: 31	1 289 3 886
: 34	1 289 3 890
: 36	1 289 3 886, 890
22 : 15—18	3 900
: 24	3 901
: 31, 32	3 994, 1139
: 35	1 345
: 44	3 965
: 48	3 971
: 51	3 972
: 53	3 973
: 67, 68, 69, 70, 71	3 996
23 : 2	3 1016

(ルカによる福音書)	
23 : 5	3 1020
: 8	3 1021
: 11	3 1025
: 16	3 1026
: 18	3 1028
: 22	3 1029
: 28, 30	3 1044
: 31	3 1044, 1112
: 33	3 1041
: 34	3 1046, 1047
	1069
: 35	3 1050
: 39, 40, 41	3 1052
: 42	3 1054
: 46	3 1063, 1080
	1082
: 56	3 1086
24 : 5—7	3 1105
: 17, 18, 19, 20	3 1116
	3 1116
: 21	3 1054, 1112
	1116
: 25, 26	3 1117
: 27	1 288
: 29	3 1120, 1125
: 32	3 1122
: 34	3 1123
: 37—40, 41, 42	3 1124
	3 1124
: 44	3 1125
: 45—48	3 1126

ヨハネによる福音書

1 : 1—3	1 361
: 3	1 372
: 4	1 342 2 637, 639
: 5	1 75 2 637
: 5 文	2 648
: 9	2 417, 637, 638
: 11	1 14
: 12	2 638, 701
: 13	2 701
: 14	1 7, 157 2 520
	697
: 16	1 311
: 18	2 638
: 19—23参	1 150
: 25	1 151
: 26	1 153
: 27	1 153, 269
: 29	1 117, 207, 269
	2 515, 605, 660
	3 800, 819, 866
	912
: 29—34	1 154
: 38, 39	1 157
: 41, 42, 43	1 158

(マタイによる福音書)

12 : 12..... 1 370
 : 20..... 1 380
 : 21..... 2 675
 : 34, 37..... 2 426
 : 40, 41..... 2 555
 : 43—45..... 2 427
 : 45..... 2 428
 : 48—50..... 2 429
 13 : 54..... 1 299
 : 55..... 1 291
 14 : 2..... 2 483 3 1021
 : 12..... 2 483
 : 23..... 2 505
 : 27, 28, 29..... 2 509
 : 30..... 2 510 3 945
 : 31..... 2 510
 : 33..... 2 512
 15 : 2..... 2 536
 : 7—9..... 2 539
 : 9..... 2 541
 : 12..... 2 540
 : 13..... 2 540, 541
 : 19..... 1 201
 : 22..... 2 542 3 843
 : 22参..... 2 706
 : 24..... 2 545, 548
 : 25, 26, 27..... 2 546
 : 28..... 2 547
 : 33..... 2 552
 16 : 4..... 2 555
 : 6..... 2 557
 : 13, 15..... 2 563
 : 16..... 2 563, 570
 : 17..... 2 564, 566
 : 18..... 2 566, 567
 : 19..... 2 567
 : 21..... 2 570
 : 22..... 2 571
 : 23..... 2 571, 572
 : 24..... 2 573
 : 26, 27, 28..... 2 574
 17 : 2..... 2 578
 : 4..... 2 580
 : 5, 7..... 2 582
 : 9..... 2 583
 : 19..... 2 589
 : 20..... 2 590, 591
 : 21..... 2 590
 : 24..... 2 593
 : 25, 26..... 2 594
 : 27..... 2 595
 18 : 1..... 2 597
 : 3..... 2 599
 : 6, 7, 11..... 2 603
 : 12—14..... 2 606
 : 15, 16..... 2 607
 : 17..... 2 608
 : 18, 19..... 2 609
 19 : 14..... 2 711
 : 20..... 2 713
 : 21..... 2 714
 : 22..... 2 717

(マタイによる福音書)

20 : 18, 19..... 3 1090
 : 21..... 2 752
 : 22..... 3 964
 : 25, 26..... 2 755
 : 26, 27..... 3 910
 : 28..... 3 899
 21 : 3..... 3 786
 : 9..... 3 790, 817, 843
 : 16..... 3 817
 : 23..... 3 818
 : 25, 27..... 3 819
 : 28—31, 32..... 3 821
 : 33—40..... 3 823
 : 38, 40..... 3 825
 : 41..... 3 823
 : 42—44..... 3 824
 : 44..... 3 829
 : 46..... 3 825
 22 : 22..... 3 834
 : 30..... 3 838
 : 31, 32..... 3 839
 : 40..... 3 841
 : 42..... 3 843
 : 43—46..... 3 844
 23 : 2, 3, 4..... 3 847
 : 5—10..... 3 848
 : 8..... 2 568, 569
 : 10..... 2 568 3 849
 : 11, 12..... 3 849
 : 13, 14..... 3 850
 : 16—19..... 3 855
 : 23..... 1 87 3 855, 856
 : 24, 29—31..... 3 857
 : 34..... 3 860
 : 35, 36..... 3 859
 : 37..... 3 861
 : 38..... 3 862
 : 39..... 3 801, 862
 24 : 2, 3..... 3 876
 : 4, 5, 6—8..... 3 877
 : 9, 10..... 3 878
 : 12—14..... 3 855
 : 15..... 1 288
 : 20..... 3 879
 : 21, 22, 23—27..... 3 880
 : 26, 27, 29—31..... 3 881
 : 32, 33, 34, 35..... 3 882
 : 37—39..... 3 884
 : 50, 51..... 3 888
 25 : 23..... 2 719
 : 31..... 3 891, 1167
 : 34—36..... 3 892
 : 40..... 3 892, 893
 26 : 8, 9..... 2 771
 : 12, 13..... 2 773
 : 21, 22..... 3 917
 : 23, 24, 25..... 3 918
 : 26—29..... 3 916
 : 27—29..... 3 923

(マタイによる福音書)

26 : 29..... 1 173
 : 31..... 3 943, 963, 1045
 : 32..... 3 945
 : 33..... 3 1137
 : 38..... 3 958
 : 39..... 3 962, 1068
 : 40..... 3 963
 : 41..... 3 963, 964, 995
 : 42..... 3 965, 966, 967
 : 45, 46..... 3 969
 : 48..... 3 971, 1008
 : 49, 50..... 3 971
 : 52, 53, 54..... 3 972
 : 61..... 3 983
 : 62, 63..... 3 984
 : 64..... 3 985
 : 65, 66..... 3 986
 : 68..... 3 998
 : 72..... 3 991
 : 73, 74..... 3 992
 27 : 4..... 3 1009
 : 17..... 3 1028
 : 19..... 3 1027
 : 22..... 3 866, 1028
 : 24..... 3 1037
 : 25..... 3 1038, 1039
 : 42..... 3 1096, 1099
 : 43..... 3 1051
 : 45..... 3 1059
 : 47, 49..... 3 1062
 : 50..... 3 1082
 : 54..... 3 1078
 : 62, 63..... 3 1117
 : 62—65..... 3 1091
 28 : 2, 3, 4..... 3 1093
 : 5—7..... 3 1105
 : 7..... 3 1113
 : 8..... 3 1106
 : 9, 10..... 3 1111
 : 13..... 3 1097
 : 18..... 1 10 2 420
 : 3 1119, 1146
 : 18—20..... 3 1145
 : 19..... 3 1148
 : 20..... 1 194, 282
 : 3 1148, 1157, 1159
 : 1165, 1166
 マルコによる福音書
 1 : 12, 13..... 1 120
 : 14..... 1 283
 : 15..... 1 283, 286
 : 24..... 2 644 3 800
 : 27..... 1 320
 : 35..... 1 325 2 486
 : 43, 44..... 1 332
 2 : 7..... 1 340
 : 10..... 1 341
 : 12..... 1 340
 : 27..... 1 366
 : 28..... 1 366, 372
 3 : 4, 5..... 1 368, 369

(マルコによる福音書)

3 : 8..... 2 388
 : 13, 14..... 1 374
 4 : 28..... 2 494
 : 38..... 2 444
 : 40..... 2 445
 5 : 7, 9..... 2 448
 : 13..... 3 912
 : 19..... 2 454
 : 23..... 2 455
 : 31..... 2 459
 : 39..... 2 456, 736
 : 41..... 2 456
 6 : 16..... 3 1021
 : 20..... 1 265
 : 25..... 1 276
 : 30..... 2 480
 : 31..... 2 480, 481, 487
 : 34..... 2 490
 : 37..... 2 491, 497, 500
 : 55..... 2 514, 600
 7 : 1..... 2 534
 : 9—12..... 2 537
 : 31..... 2 551
 8 : 12..... 2 555, 557
 : 29..... 2 532
 : 35..... 2 574
 : 38..... 2 579
 9 : 3..... 3 1040
 : 16, 17, 18..... 2 585
 : 19, 21..... 2 586
 : 22..... 2 586, 588
 : 23..... 2 586, 588
 : 24..... 2 586, 589
 : 25..... 2 588
 : 33..... 2 596
 : 35..... 2 597
 : 38, 39..... 2 602
 : 43, 45..... 2 603
 : 49元, 50..... 2 604
 10 : 1..... 2 674
 : 14..... 2 705, 706
 : 17, 18..... 2 712
 : 20..... 2 713
 : 21..... 2 713, 714
 : 23, 26..... 2 762
 : 32..... 2 749
 : 38..... 2 752
 : 39..... 2 752, 753
 : 40..... 2 753
 : 45..... 2 755
 11 : 13..... 3 804, 806
 : 14..... 3 805
 : 17..... 3 814
 : 21..... 3 805
 12 : 14, 15, 16, 17..... 3 833
 : 24..... 3 838
 : 28, 29..... 3 840
 : 31..... 3 841
 : 32, 33, 34..... 3 842
 : 43..... 3 853
 13 : 13..... 2 474

(イザヤ書)

40 : 4 参…………… 1 266
 : 5 …………… 1 103
 : 9—11 …… 2 659
 : 18—29 …… 1 363
 41 : 10 …………… 1 363
 42 : 1 …………… 1 69, 250
 : 2—4 …… 1 327
 : 4 …………… 1 24
 : 21 …………… 1 250
 43 : 1 …………… 2 664
 : 1—3 …… 2 510
 : 1, 4 …… 2 432
 : 12, 13 …… 2 461
 44 : 3 …………… 1 32
 45 : 22 …………… 1 363
 48 : 18 …………… 2 438
 49 : 4, 5 …… 3 953
 : 6 …… 1 55 2 639
 : 7—10 …… 3 953
 : 16 …… 2 664
 : 24, 25 …… 1 324
 50 : 4 …………… 1 317
 : 7—10 …… 1 135
 51 : 1 参…………… 1 108
 52 : 7—10 …… 3 1162
 : 14 …… 1 126 3 966
 53 : 2 …………… 1 14
 : 3 …… 1 170 2 531
 …………… 3 829
 : 4 …………… 2 650
 : 4—6 …… 2 668
 : 5 …………… 1 10
 : 6 …… 1 118 2 434
 : 7 …… 1 118, 153 3 984
 : 11 …… 3 1162
 : 12 …… 3 957, 1056
 54 : 10 …… 2 667
 : 13 …… 2 521
 55 : 13 …… 2 395
 56 : 6, 7 …… 1 372
 : 7 …… 1 15
 : 12 …… 3 888
 57 : 15 …… 1 213 2 390
 : 18 …… 2 392
 : 20, 21 …… 2 447
 58 : 4, 5, 6, 10 …… 1 353
 : 7—10 …… 2 497
 : 8, 8 参 …… 2 467
 : 8—11 参 …… 2 462
 : 13 参 …… 1 247
 : 13, 14 …… 1 373
 59 : 1 …… 3 1055
 : 14, 15 …… 1 278
 : 19 …… 3 1162
 60 : 3 …… 1 24
 61 : 1, 2 …… 1 24, 270
 : 2 …… 1 297
 : 3 …… 2 391
 62 : 4 …… 1 103
 : 5, 4 …… 1 176
 63 : 3 参…………… 3 1060
 64 : 6 …… 1 205

(イザヤ書)

65 : 8 …… 1 173
 66 : 1, 2 …… 2 600
 : 23 …… 1 363 3 1078

エレミヤ書

3 : 13, 12 …… 2 391
 6 : 16 …… 2 438
 : 19 …… 3 811
 13 : 20, 21 英 …… 3 898
 15 : 16 …… 2 518
 17 : 5 …… 2 569
 : 6 …… 2 462
 23 : 6 …… 3 799
 29 : 11 …… 1 46
 31 : 3 …… 2 665
 : 13 …… 2 392
 : 33—37 …… 1 107

エゼキエル書

4 : 6 参…………… 1 287
 12 : 22 …… 1 21
 20 : 12 …… 1 373
 : 20 …… 1 363
 28 : 6, 16, 19 …… 3 1075
 : 12 …… 3 1067
 33 : 11 …… 3 805
 : 15, 16 …… 2 764
 34 : 4 …… 2 661
 : 23, 16, 25, 28 2 659
 : 26 …… 1 162, 163
 : 31 …… 2 664
 : 26 …… 2 556
 36 : 26, 27 …… 1 205

ダニエル書

2 : 44 …… 1 25
 4 : 17 …… 1 144
 7 : 25 …… 3 1074
 : 27 …… 3 1162
 8 : 2, 3 …… 1 130
 9 : 24, 25, 27 …… 1 287
 10 : 8 …… 1 307
 : 21 …… 1 97
 12 : 4, 10 …… 1 289

ホセア書

6 : 3 …… 1 327
 11 : 4 …… 2 665
 12 : 5 …… 3 799
 13 : 9 英 …… 3 807, 811

ヨエル書

2 : 23 参…………… 3 1161
 3 : 16 …… 3 1094

アモス書

3 : 7 …… 1 288

オバデヤ書

16 …… 3 1075

ミカ書

5 : 2 …… 1 32 2 647

(ミカ書)

5 : 7 …… 1 15
 6 : 6, 7 …… 2 646
 7 : 18 …… 1 298 3 805
 : 19 …… 1 187 3 1128

ハバクク書

3 : 17, 18 …… 1 133

ゼパニヤ書

3 : 17 …… 1 176

ハガイ書

2 : 7 文…………… 1 221

ゼカリヤ書

6 : 12, 13 …… 1 194
 9 : 9 …… 3 785, 792, 817
 : 16, 17 …… 1 12
 12 : 10 …… 3 801
 13 : 7 …… 2 667 3 960

マラキ書

3 : 1—3 …… 1 186
 4 : 1 参…………… 3 1075
 : 2 …… 1 5, 327

マタイによる福音書

1 : 23 …… 1 1
 2 : 1 …… 1 48
 : 2 …… 1 48, 54
 : 5, 6, 8 …… 1 53
 : 11, 13 …… 1 55
 : 18 …… 1 23, 57
 : 23 …… 1 58
 3 : 2 …… 1 105 2 696
 : 3 …… 1 280
 : 7—9 …… 1 170
 : 10 …… 1 109
 : 11 …… 1 110
 : 12 …… 1 267 2 529
 : 14, 15, 16 …… 1 114
 : 17 …… 1 117, 118, 127
 …………… 3 800
 4 : 2—4 …… 1 125
 : 3 …… 1 126, 128
 …………… 3 1050
 4 : 4 …… 1 130, 132, 135
 : 2 526, 527 3 950
 : 5 …… 1 137
 : 6 …… 1 137, 139
 …………… 3 1056
 : 7 …… 1 139
 : 10 …… 1 144
 : 15 …… 1 305
 : 16 …… 1 23, 305
 : 19 …… 1 308, 309
 : 23 …… 3 1151
 5 : 4 …… 2 390
 : 5 …… 2 392
 : 6 …… 2 393, 394
 : 9 …… 2 394
 : 10—12 …… 2 396

(マタイによる福音書)

5 : 13 …… 2 397, 604
 : 14 …… 2 397
 : 17 …… 2 399
 : 18 …… 1 363 2 400
 : 23, 24 …… 2 405
 : 44 …… 1 334 2 405
 : 45 …… 2 405 3 910
 : 48 …… 2 406, 407
 6 : 4 …… 2 408
 : 22 参…………… 1 67
 : 22, 23, 24 …… 2 408
 : 26 …… 2 409
 : 33 …… 1 132
 : 34 …… 2 410
 7 : 1 …… 2 410
 : 12 …… 3 896
 : 24, 25 …… 2 411
 : 29 …… 1 314
 8 : 2, 3 …… 1 330, 336
 : 3 …… 3 1088
 : 8 …… 2 412, 415
 : 9 …… 2 415
 : 10 …… 1 55
 : 11 …… 2 417 3 865
 : 12 …… 2 417
 : 13 …… 2 415
 : 19 …… 1 379
 : 20 …… 1 379 2 513
 : 25 …… 2 444
 : 27 …… 2 445
 9 : 1 参…………… 1 313
 : 2 …… 1 339
 : 4—6 …… 1 340
 : 6 参…………… 3 1151
 : 11 …… 1 348
 : 12, 13 …… 1 348, 349
 : 14 …… 1 351
 : 21 …… 2 458
 : 34 …… 2 424
 : 38 …… 2 485
 10 : 6 …… 2 468
 : 8 …… 2 467, 694
 : 14, 15, 16 …… 2 470
 : 17, 18 …… 2 472
 : 19, 20 …… 2 473
 : 23 …… 2 747
 : 27 …… 2 475
 : 28 …… 2 476
 : 31 …… 2 477
 : 32 …… 3 985
 : 33, 34, 37, 38 …… 2 478
 : 40, 42 …… 2 479
 11 : 3 …… 1 268
 : 6 …… 1 271
 : 14 …… 1 152
 : 28 …… 1 373 2 433
 : 29 …… 2 434, 437
 : 30 …… 2 434, 436
 12 : 2 …… 1 365
 : 5, 6 …… 1 366
 : 7 …… 1 368
 : 10—12 …… 1 369

聖句索引

注・太字は巻数をあらわす。二、三巻は各ページの内側下の()内にある通しページ数を記載した。索引中にある略号は次の通り、参=参照 英=英訳聖書 英注=英訳聖書注 文=文語訳 元=文語元訳。

創世記	民数記	詩篇	箴言
1 : 31..... 1 360	3 : 13..... 1 39	2 : 1—4..... 3 1092	3 : 1—4..... 1 89
2 : 1 3 1077	9 : 12..... 3 1081	: 12..... 2 569	8 : 36..... 3 1075
: 3 1 360	14 : 34参..... 1 287	17 : 4 1 136	11 : 25..... 1 163
3 : 1 1 127	24 : 17..... 1 49	18 : 35..... 2 600	14 : 12..... 3 1038
: 15..... 1 121	申命記	19 : 7 2 400, 695	18 : 10..... 1 146
6 : 5 3 884	3 : 25..... 2 579	22 : 16—18..... 3 1049	20 : 1 1 173, 278
7 : 1 3 886	4 : 6 1 15	: 30..... 3 1162	22 : 2 2 550
12 : 2, 3 1 15	6 : 8 3 847	23 : 1 2 659	24 : 11, 12 3 898
14 : 18..... 3 799	: 24..... 1 372	24 : 7—10 3 1169	伝道の書
15 : 14..... 1 22	7 : 15..... 3 1156	25 : 14英..... 2 566	3 : 14..... 3 1078
19 : 2 2 690	8 : 3 2 518	33 : 9 1 341	9 : 5, 6 2 767
: 14..... 3 886	10 : 9 2 593	37 : 10..... 3 1075	12 : 14..... 2 540
22 : 2, 12..... 2 646	: 17, 18 2 690	: 19..... 1 133	雅歌
: 7, 8 1 118	18 : 15..... 1 226	40 : 7, 8 2 561	5 : 10, 16 3 1160
: 8 2 647	23 : 24, 25 参..... 1 365	: 8 1 9, 208, 255	イザヤ書
31 : 40..... 2 662	26 : 19..... 1 15 2 436	1 : 5, 6 1 335
32 : 26..... 1 239	28 : 10..... 1 15	46 : 10..... 2 488	: 10—12, 16, 17 3 814
: 30..... 1 110	: 65—67..... 1 279	48 : 2 3 796	: 25..... 1 110
49 : 10..... 1 25, 249	29 : 29..... 1 288	50 : 10—12..... 2 595 3 786	4 : 4 1 110
出エジプト記	32 : 4 参..... 2 566	: 14, 15 1 142	5 : 4 3 823
3 : 12..... 3 897	: 4 2 569 3 1078	51 : 10..... 1 205	6 : 5 1 307
: 14..... 1 10	ヨシュア記	: 17..... 1 358	7 : 14..... 3 799
4 : 22, 23 1 38	24 : 15..... 2 716	62 : 7 2 566	8 : 13—15..... 3 827
5 : 2 1 38	ルツ記	65 : 6 1 2	9 : 2—6..... 1 44
12 : 11, 31 1 72	2 : 20参..... 2 432	: 11参..... 2 612	: 6 1 11, 12 2 487
: 26, 27 1 72	サムエル記 上	69 : 9 1 185 3 799
: 41..... 1 22	15 : 22..... 3 813	: 20, 21 3 1049	11 : 1—5..... 1 44
13 : 2 1 39	サムエル記 下	72 : 8 2 628	: 4 1 103
15 : 26..... 3 1156	23 : 4 1 103	77 : 20..... 2 665	: 9 3 1162
16 : 28..... 1 363	列王紀 上	85 : 10..... 3 1073, 1170	12 : 2, 3 2 614
17 : 7 1 139	19 : 11, 12 1 270	91 : 6 2 462	13 : 12..... 3 1108
19 : 12, 13 1 182	歴代志 下	: 11..... 1 139	: 12英..... 1 370
20 : 8, 31..... 1 364	34章参..... 1 267	92 : 4, 5 1 361	14 : 12..... 2 597
: 12..... 1 168	エズラ記	95 : 5 1 2	: 13, 14 1 5
23 : 4, 5 2 689	6 : 14参..... 1 287	100 : 2—4..... 1 372	: 14..... 2 597
: 21..... 3 988	7 : 11英注, 9参..... 1 287	103 : 3 1 342	24 : 20..... 3 1094
25 : 8 1 7	ネヘミヤ記	105 : 37..... 3 1156	: 23..... 2 628
28 : 36..... 2 763	8章 9章参..... 1 268	106 : 1 2 612	26 : 3 2 439
30 : 12—16参..... 1 181	ヨブ記	107 : 29, 30 2 447	: 19..... 3 1101
32 : 32..... 2 581	11 : 8 2 566	109 : 5 1 334	: 21..... 3 876
33 : 13, 14 2 438	14 : 4 1 201	111 : 4 1 360	27 : 5 文..... 1 324
: 14..... 3 897	28 : 28..... 1 88	: 9 3 849	28 : 16..... 2 566 3 827
34 : 6 1 2, 255 2 394	31 : 32..... 2 690	112 : 4 1 32	: 21..... 3 805
: 7 1 255	38 : 7 3 1077	116 : 12—14..... 2 463	32 : 2 1 103
レビ記	: 11..... 2 627	117篇..... 3 943	: 17..... 2 447
10 : 6 参..... 3 987	ヨブ記	118 : 26..... 3 817	33 : 16..... 1 133
19 : 17..... 2 608	11 : 8 2 566	119 : 1—3, 9, 11 1 88	: 17..... 3 882
: 34..... 2 690	14 : 4 1 201	: 11..... 1 136	34 : 4 3 1094
23 : 40..... 1 375	28 : 28..... 1 88	: 14—16..... 1 89	: 17..... 2 395
25 : 17, 35—37 2 763	31 : 32..... 2 690	: 99, 100..... 2 541	40 : 1—5..... 1 151
: 25参..... 2 432	38 : 7 3 1077	: 165 2 394	: 1, 9—11 3 1160
: 49参..... 2 432	: 11..... 2 627	122 : 2 2 613	: 4 1 151
		: 2—7..... 1 71	
		138 : 6 2 393	
		147 : 4, 3 2 435	

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)**
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

N D C 194/394P/22cm

転載複製を禁ず

1977年8月1日 発行

著者	エレン・G・ホワイト
訳者	左近充公
発行者	岡藤米蔵
印刷所	福音社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発行所 福音社
電話 (045) 921-1414 振替横浜 599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発売所 三育協会
電話 (045) 921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN

☆ご愛読下さいましてありがとうございます。当社出版物は直販制
です。書店には出しておりません。お問合せ、ご用命、出版目
録のご請求等は、直接発売所へお申し越し頂きたく存じます。